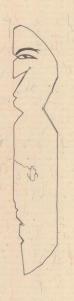
# 大宰府史跡

昭和59年度発掘調査概報



昭和60年3月

九州歷史資料館

# 大宰府史跡

昭和59年度発掘調査概報

昭和60年3月

九州歷史資料館

昭和59年度は第三次五ヶ年計画の折り返し点にあたる。この計画では条坊制の解明に主眼をおいているが、これまでの調査結果によると政庁前面には広範囲にわたって官衙が配されていたことが明らかにされ、大宰府研究に新たな一石を投じた。今年度も引き続き県道南側の地域について調査を行ったが、今回は大宰府官人の居住跡と推定される遺構が検出され、また新たな資料を追加することができた。このことは大宰府研究をさらに前進させるとともに、まだ明らかにされていない条坊制を解明するための有力な資料にもなると考えられ、今後さらに広範囲の調査を行うことが必要であるう。

なお、これまで大宰府史跡の発掘調査については竹内理三先生を委員長とする「大宰府史跡発掘調査指導委員会」の指導のもとに進めてきたが、今年度から「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改称し、新たに13名の先生方に指導をお願いすることになった。昭和43年発掘調査開始以来永年にわたってご指導をいただいてきた旧委員の先生方に心から深甚の謝意を表する次第である。

また、大宰府研究の先駆者として常にご指導をいただいてきた前館長鏡山猛先生は 昭和59年10月薬石効なくついに不帰の人となられた。誠に残念でならない。末筆では あるが、これまでの学恩に感謝し、先生のご冥福をお祈り申し上げる。

昭和60年3月31日

九州歷史資料館長 田 村 圓 澄

# 例 言

- 1. 本概報は昭和59年度に福岡県が国庫補助金を受けて九州歴史資料館が実施した大 宰府史跡の発掘調査概報である。ただし第14・87・88次調査は昭和58年度に行った 調査であるが未報告であるので併せて報告する。また第14次調査については昭和46 年度に一部試掘を行い簡略な報告を行っているが、今回全面について再調査を行っ たので併せて報告する。なお第89・91・93次調査については調査面積も僅少であり 顕著な遺構は検出されなかったので、その報告については割愛した。さらに第94次 調査については現在調査継続中であるので、その報告については次回にゆずる。
- 2. 検出遺構については、大宰府史跡調査研究指導委員の指導を受けた。
- 3. 第14・87・90次調査出土の木簡については岸俊男指導委員の教示を得た。
- 4. 遺構・遺物の写真は学芸第一課石丸洋の撮影による。
- 5. 本概報の執筆、編集は調査課の石松好雄、倉住靖彦、高倉洋彰、横田賢次郎、森田勉、高橋章が行った。また遺物の整理については田崎道子、大田千賀子、小西恵子の協力を得た。

# 目 次

	序				
Ι	i	間査計画		<u></u>	1
11	訓	間査経過			2
	1.	概	要		2
	2.	第14次記	開査		4
		検出過	貴構		4
		出土道	貴物		7
		小	結		36
	3.	第87・9	0次記	調査	37
		検出過	貴構		37
		出土道	貴物		44
		小	結		80
	4.	第88次記	周査		87
		検出過			87
•		出土道	貴物	·····	95
		小	結		12
	5.	第92次記	調査	1	14
		検出過	貴構		14
		出土流	貴物		2
		.t.	44	,	4

# 挿図目次

第1図	大宰府史跡発掘調査地域図 折り込	7.
第2図	第14次調査遺構配置図 折り込	
	第14次嗣宜退悔印直区       折りむ         S D 320土層図	
第3図		
第4図	S E 2502・2503・2504実測図 ······	
第5図	S K 2501実測図	
第6図	S D 320出土土器・陶磁器実測図(1) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第7図	S D 320出土土器・陶磁器実測図(2)	
第8図	S D 320出土土器・陶磁器実測図(3) ······	
第9図	S D 320出土土器・陶磁器実測図(4) ······	11
第10図	S D 320出土土器・陶磁器実測図(5) ······	14
第11図	S D 320出土土器・陶磁器実測図(6) ······	15
第12図	S D 320出土土器・陶磁器実測図(7) ······	16
第13図	S D 320出土土器・陶磁器実測図(8) ····· 折り込	いみ
第14図	S D 320出土土器・陶磁器実測図(9) ······	18
第15図	S D 320出土土器・陶磁器実測図(10) ······	20
第16図	S D 320出土土器・陶磁器実測図(11) ······	22
第17図	S D 320出土土器・陶磁器実測図(12) ······	24
第18図	S D 320出土瓦製品・坩堝実測図	25
第19図	S X 2507出土土器実測図	
第20図	S X 2508出土土器実測図	26
第21図	S D 320出土軒丸瓦拓影・実測図	27
第22図	S D 320出土軒平瓦拓影・実測図	
第23図	S D 320出土木製品実測図 ······	
第24図	S D 320出土木製品実測図 ······	
第25図	S D320出土鉄製品実測図 ······	
第26図	S D 320出土石鍋実測図 ·····	
第27図	第87・90次調査遺構配置図	
第28図	掘立柱建物柱掘形断面図	
第29図	S D2340土層図 ····································	
第30図	S E 2510実測図 ····································	
~ , ~ ~ ~ <del>K _</del> 3	~ ~ · · · · · · · · · · · · · ·	

SB2530·2540·2528、SE2510、SK2524出土土器実測図	45
S D 2340出土土器実測図(1)	47
S D 2340出土土器実測図(2) ·····	48
S D 2340出土土器実測図(3)	49
S D 2340出土土器実測図(4)	50
S D 2340出土土器実測図(5)	51
S D 2340出土土器実測図(6) ·····	52
S D 2340出土土器実測図(7) ·····	53
S D 2340出土土器実測図(8)	54
S D 2340出土土器実測図(9) ·····	56
S D 2340出土土製品実測図	57
S X 2514・2532出土土器・陶磁器実測図	57
S X 2529、茶褐色土層出土墨書土器・硯実測図	57
軒丸瓦拓影・実測図	58
軒平瓦拓影・実測図	60
S D 2340出土木製品実測図(1)	77
S D 2340出土木製品実測図(2) ······	78
S E 2510井戸側拓影・実測図	79
石製品実測図	79
第88次調査遺構配置図	88
SB2550柱掘形出土スサ入り炉壁片(写真)	89
掘立柱建物柱掘形断面図	91
SE2511・2552・2553・2554・2556・2557・2558・2561・2562・2563実測図	•
折り込	込み
S X 2600実測図	95
S B 2555出土硯実測図	95
SB2550・2555、SD2572・2573・2582出土土器・陶磁器実測図	96
SE2551・2552出土土器・陶磁器実測図	98
SE2553・2554出土土器・陶磁器実測図	99
SE2556・2557・2558・2559出土土器・陶磁器実測図	102
S K 2593・2602・2603、S X 2617出土土器・陶磁器実測図	105
S X 2600出土土器・鉄器・鉛玉実測図	106
	S D 2340出土土器実測図(3) S D 2340出土土器実測図(4) S D 2340出土土器実測図(5) S D 2340出土土器実測図(6) S D 2340出土土器実測図(7) S D 2340出土土器実測図(8) S D 2340出土土器実測図(9) S D 2340出土土器実測図 S X 2514・2532出土土器・陶磁器実測図 S X 2514・2532出土土器・陶磁器実測図 S X 2529、茶褐色土層出土墨書土器・硯実測図 軒丸瓦拓影・実測図 軒丸瓦拓影・実測図 S D 2340出土木製品実測図(1) S D 2340出土木製品実測図(2) S E 2510井戸側拓影・実測図 石製品実測図 第88次調査遺構配置図 S B 2550柱掘形出土スサ入り炉壁片(写真) 掘立柱建物柱掘形断面図

第63図	黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)	108
第64図	黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(2)	109
第65図	S E 2557・2561出土木製品実測図	110
第66図	石带実測図	111
第67図	滑石製品実測図	111
第68図	滑石製品実測図	111
第69図	第92次調査遺構配置図 … 折り	込み
第70図	掘立柱建物柱掘形断面図	117
第71図	S D 2350 A · B 土層図 ···································	118
第72図	SE2621・2622・2623・2624実測図	119
第73図	S K 2641実測図	120
第74図	S K 2670実測図	121
第75図	SB2620・2645、SD2350A・B、SD2680出土土器・陶磁器実測図	122
第76図	S E 2621出土土器実測図	124
第77図	S E 2622・2624出土土器実測図	126
第78図	S E 2622出土紡錘車実測図 ······	126
第79図	SK2641・2642・2643・2644・2646出土土器実測図	128
第80図	S K 2649出土土器実測図	130
第81図	SK2652・2656・2661・2664、SX2678・2684・2686出土土器・陶磁器実測図	132
第82図	S X 2670出土土器実測図	134
第83図	S X 2690出土土器実測図	135
第84図	暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)	137
第85図	暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図(2)	138
第86図	暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図(3)	139
第87図	軒先瓦拓影・実測図	142
第88図	S E 2622出土木製品実測図	142
第89図	S E 2621井戸側実測図	143
第90図	暗褐色土層・SE2623出土石鍋実測図	144
第91図	第92次調査時期別遺構配置概念図	145

# 図版目次

図版1	(上)第14次調査区全景
	(下) 柵SA2505
図版 2	(上) 井戸SE2502
	(中) 井戸SE2503
	(下) 井戸SE2504
図版 3	瓦敷遺構 S X 2501
図版 4	第87次調査区全景
図版 5	第90次調査区全景
図版 6	(上)掘立柱建物SB2355
	(下) 掘立柱建物 S B 2515
図版 7	掘立柱建物SB2520・柵SA2522
図版 8	掘立柱建物 S B 2525・2530
図版 9	(上)掘立柱建物SB2535
	(下) 掘立柱建物 S B 2540
図版10	掘立柱建物SB2355・2525・2530・2535柱掘形
図版11	(上) 溝SD2335
	(下) 溝SD2335・瓦敷SX2523
図版12	(上)第87次調査溝SD2340
	(下) 第87次調査溝SD2340土層
図版13	(上) 第90次調査溝SD2340
	(下) 第90次調査溝SD2340土層
図版14	井戸SE2510
図版15	第88次調査区全景
図版16	掘立柱建物 S B 2550・2565
図版17	(上) 掘立柱建物 S B 2555・2560・2595
	(下)掘立柱建物SB2550
図版18	(上) 掘立柱建物 S B 2555・2595
	(下)掘立柱建物SB2560
図版19	(上) 掘立柱建物 S B 2565

(下)掘立柱建物SB2575

- 図版20 (上)掘立柱建物SB2580・2585・2590
  - (下) 掘立柱建物SB2550柱掘形
- - (下) 井戸SE2551
- 図版22 (上) 井戸SE2552
  - (下) 井戸SE2553
- 図版23 (上) 井戸SE2554
  - (下) 井戸SE2556
- 図版24 (上) 井戸SE2557
  - (下) 井戸SE2558
- 図版25 (上) 井戸SE2561
  - (下) 井戸SE2563
- 図版26 木棺墓S X 2600
- 図版27 第92次調査区と大宰府政庁
- 図版28 第92次調查区全景
- 図版29 (上) 第92次調査区南半部全景
  - (下) 第92次調査区北半部全景
- 図版30 (上) 掘立柱建物SB2620・土壙SK2641・溝SD2627
  - (下) 掘立柱建物 S B 2620
- 図版31 掘立柱建物SB2625
- 図版32 堀立柱建物 S B 2630
- 図版33 (上) 掘立柱建物 S B 2635 · 2640
  - (下)掘立柱建物SB2635
- 図版34 (上) 掘立柱建物 S B 2645
  - (下)掘立柱建物SB2650
- 図版35 堀立柱建物 S B 2655
- 図版36 (上)掘立柱建物SB2660・2665
  - (下)掘立柱建物SB2660
- 図版37 (上) 掘立柱建物 S B 2620 · 2660柱掘形
  - (下) 溝SD2350·2632
- 図版38 井戸SE2621
- 図版39 (上) 井戸SE2622
  - (下) 井戸SE2623

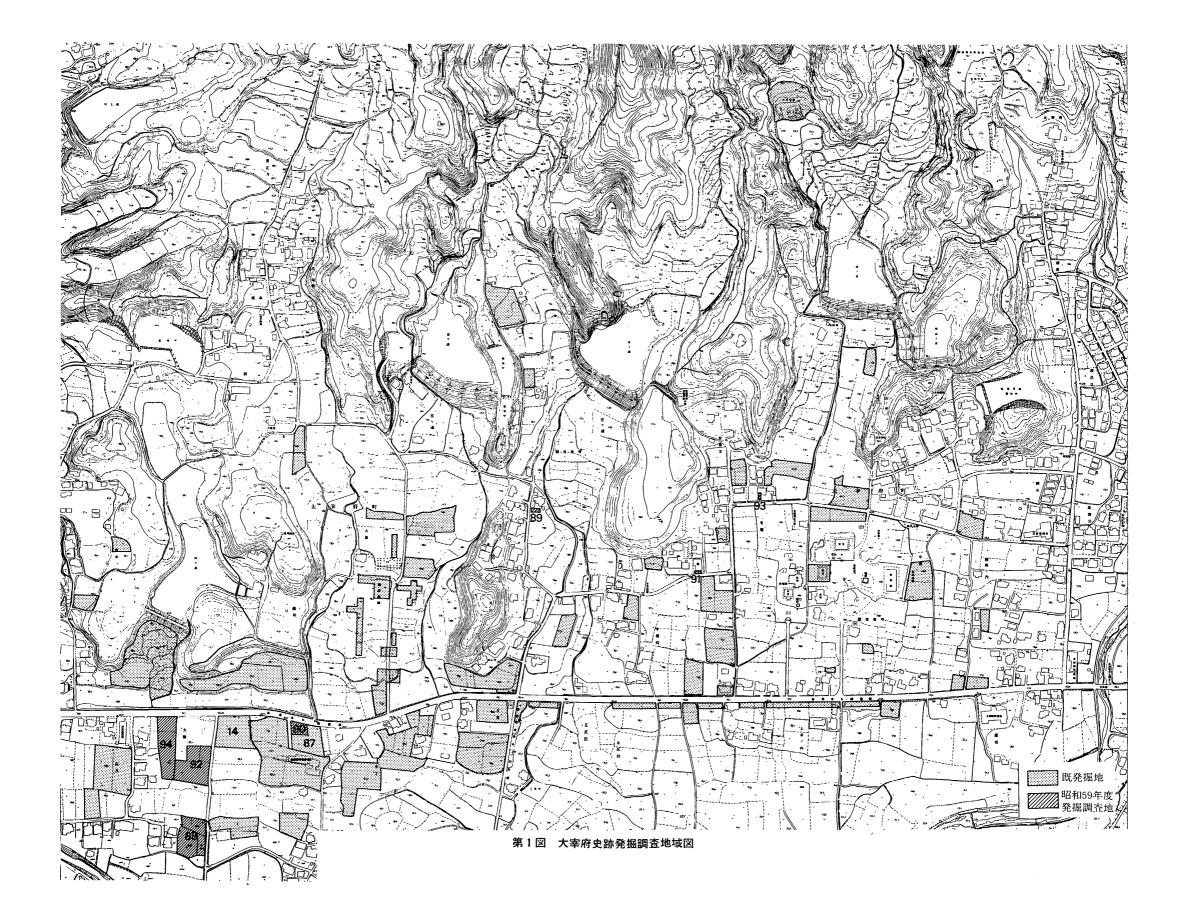
#### 図版40 (上) 井戸SE2624

(下)土壙SK2641

- 図版41 地鎮遺構 S X 2670
- 図版42 第14次調査 SD 320出土土器
- 図版43 第14次調査 SD 320出土土器
- 図版44 第14次調査 SD 320出土土器
- 図版45 第14次調査 SD 320出土土器
- 図版46 第14次調査 SD 320出土土器
- 図版47 第14次調査 SD 320出土土器・硯
- 図版48 第14次調査 SD 320出土陶磁器・墨書土器
- 図版49 第87·90次調査 SD 2340出土土器
- 図版50 第87·90次調査 SD 2340出土土器
- 図版51 第87·90次調査 SD 2340出土土器
- 図版52 第87・90次調査 SD 2340出土土器
- 図版53 第87·90次調査 SD 2340出土土器
- 図版54 第87·90次調査 SD 2340出土土器
- 図版55 第87·90次調査 SD 2340出土土器
- 図版56 第87·90次調査 SD 2335·SE 2510·SK 2524出土土器
- 図版57 第87·90次調查 SX 2514·2529·2532·茶褐色土層出土陶磁器·硯
- 図版58 第88次調査 SB2555·SE2551出土土器·陶磁器
- 図版59 第88次調査 SB2554・2556・2558・2559出土土器・陶磁器
- 図版60 第88次調査 SE2561・SX2600出土土器・陶磁器・金属器
- 図版61 第88次調査 SK2602・2603・黒褐色土層出土土器・陶磁器
- 図版62 第92次調査 SD2350A·B·SE2621出土土器·陶磁器
- 図版63 第92次調査 SE2622·2624出土土器
- 図版64 第92次調査 SK2641·2642·2643·2644·2646出土土器
- 図版65 第92次調査 S K 2649·2652出土土器·陶磁器
- 図版66 第92次調査 SK2656・2664・SX2678・2684・2670出土土器
- 図版67 第92次調査 S X 2690出土土器
- 図版68 第92次調査 S X 2690出土土器
- 図版69 第92次調査 暗褐色土層出土土器・土製品
- 図版70 第92次調査 暗褐色土層出土土器
- 図版71 第92次調査 暗褐色土層出土陶磁器

```
図版72 第14次調査 SD320出土木簡実測図
```

- 図版73 第14次調査 SD320出土木簡
- 図版74 第87次調査 S D 2340出土木簡実測図
- 図版75 第87次調査 SD2340出土木簡
- 図版76 第87次調査 SD2340出土木簡実測図
- 図版77 第87次調査 S D 2340出土木簡
- 図版78 第90次調査 S D 2340出土木簡実測図
- 図版79 第90次調査 S D 2340出土木簡
- 図版80 第87次調査 SD2340出土木簡
- 図版81 第90次調査 S D 2340出土木簡
- 図版82 第14次調査 SD320出土木製品
- 図版83 第87·90次調査 S D 2340出土木製品
- 図版84 第87·90次調査 SE2510井戸側
- 図版85 第88次調査 SE2557・2561、第92次調査 SE2622・SK2649出土木製品
- 図版86 第92次調査 SE2621井戸側
- 図版87 第14次調査 SD320出土軒丸瓦
- 図版88 第14次調査 SD320出土軒平瓦
- 図版89 第87・90次調査 SD2340・SE2510・茶褐色土層出土軒先瓦
- 図版90 第92次調査 出土軒先瓦・石製品・鉄鏃
- 図版91 第14次調査 SD320·SE2503出土鉄製品·石製品
- 図版92 第87・90次調査 SD2340・茶褐色土層出土土製品・石製品・草履
- 図版93 第88次調査 出土硯・石帯・石製品



# I 調査計画

本年度の発掘調査は昭和57年度を初年度とする第三次五ヶ年計画の第三年次にあたる。 この計画では現在進行中の観世音寺地区土地区画整理事業に伴う遺構確認のための事前調査も 兼ねて、未だにその実態が明らかにされていない条坊制の遺構についての知見を得ることに主 眼をおいている。この土地区画整理事業の対象地域は政庁跡前面を東西に走る県道山家〜関屋 線とその南をほぼ西流する御笠川とによってはさまれた地域で、面積にしておよそ80ヘクター ルである。この地域は故鏡山猛氏の大宰府条坊復原案によると南北は五条から九条にかけて、 また東西は左郭八坊から右郭八坊にあたるが、これまで発掘調査はほとんど行われていない。 ただ左右両郭の五条一・二坊地域については昭和46・48年度に行った住宅建設に伴う事前の発 掘調査によって礎石建物および掘立柱建物の遺構が確認されている。このような状況のもとで 第三次五ヶ年計画の立案にあたっては、この遺構が確認されている政庁跡前面地域、すなわち 字日吉、不丁、大楠を発掘調査の主な対象地域とした。このような第三次五ヶ年計画のうち、 これまでに行った二ヶ年の調査によって掘立柱建物をはじめ溝、井戸など多数の遺構が検出さ れ政庁跡前面地域における遺構の様相をほぼ明らかにすることができた。すなわちこの地域に は広場とみられる空間地を間において東・西対称に建物群が配置されており、遺構の配置およ び出土遺物などからみて、すでに八世紀前半代から官衙が配されていたものと推定される。そ の範囲は東西384メートル、南北196メートル以上におよんでおり、その西限は幅14メートルほ どの南北大溝によって画されていたものとみられる。

以上のような調査結果をもとに昭和59年度は土地区画整理事業計画をも勘案して、南北大溝の西側、すなわち右郭五条二・三・四坊および同六条三坊について発掘調査を行うよう計画した。

この昭和59年度の発掘調査計画については昭和59年5月21日、22日の両日に開催した大宰府 史跡調査研究指導委員会議において了承されたため計画どおり実施することとした。

調査次数	調査地区	調査面積(㎡)	調査期間	備考
88	6 A Y M —C	1,300	4月~7月	右郭六条三坊
89	6 A Y M —C	1,500	8月~10月	右郭五条三坊
90	6 A Y M — C	1,700	11月~2月	右郭五条四坊

# Ⅱ 調査経過

### 1 概要

昭和59年度の発掘調査は当初の計画どおり第88次調査から開始した。調査地は政庁南門の西南約350メートルのところで、その南約80メートルのところを御笠川が蛇行しながら流れており、したがって氾濫原がすぐ近くまで迫っている。このためこれより以南では遺構が保存されている可能性はきわめて薄い。条坊復原案のうえでは右郭六条三坊にあたる。耕作土の除去および一部についてはすでに遺構検出を終了しており、また遺構面が浅かったこともあって4月16日には遺構検出を終了した。検出した主な遺構は掘立柱建物10棟、井戸11基のほか土壙墓、溝などである。掘立柱建物はSB2550を除いてはすべて平安時代に属するものであり柱掘形も小さく不揃いである。発掘区東辺部で検出したSB2550は東西に廂のつく南北棟で奈良時代後半に属するものであるが、他の建物同様に柱掘形や柱穴が小さい。また調査区域内からの瓦の出土量がきわめて少ないことや、さらに土器類では甕および越州窯青磁が多いことなどから、これらの遺構は官衙に関するものではなく、大宰府官人の居宅跡ではないかと推定するにいたった。この調査は5月8日にはすべてを終了した。なお、この第88次調査期間中に学校院西辺部において住宅建設に伴う事前調査を第89次調査として実施した。

第88次調査終了に引き続き5月9日から第90次調査として右郭五条二坊推定地の調査を開始した。調査地は政庁南門の西南約150メートルのところで昭和58年度に行った第87次調査地の北側隣接地である。第87次調査では掘立柱建物5棟および南北溝(SD2340)を検出しているが、このうち調査区北辺部で検出した2棟の建物(SB2525・2530)は南妻の柱列を検出したのみであり、またSD2340もさらに北へ延びている。したがって第90次調査ではこれらの遺構の延長部について調査を行った。調査の結果SB2525については桁行9間分をSB2530については8間分を検出したが、いずれもさらに北へ延びている。またSD2340については15メートル分を検出し、新たに47点の木簡が出土した。この結果SD2340から出土した木簡は合計160点となった。調査結果の詳細については第87・90次調査を合せて報告する。またこの期間中、学校院北辺部において現状変更に伴う調査を第91次調査として実施した。

次に7月から第92次調査として第88次調査地の北方約100メートルの地点、条坊復原案の上では右郭五条三坊推定地について調査を開始した。この調査は当初計画では第89次調査として予定したものであるが、これまで述べてきたような調査の経過から調査次数を繰り下げたものである。調査は排土置き場が確保できないことから二回に分けて行った。したがって調査期間が若干長くなり11月末に終了した。検出した主な遺構は掘立柱建物9棟、井戸4基、柵列など

である。検出した建物はいずれも官衙域の建物と比較して柱間寸法が不揃いであり、また地域的にみても第88次調査地と同様に官人の居宅跡と考えられる。またここでは建物の振れや柱筋の通り、さらに柱掘形から出土した遺物などから八世紀前半代にほぼ時期を同じくして建てられたと見られる数棟の建物があり、当時の建物配置の一端を窺うことができた。このように第88・92次調査によって官人の居宅跡と推定される遺構が検出されたことから第14次調査の項で報告する南北大溝SD320は政庁前面における官衙域の西を画するものである可能性はきわめて大きくなった。この第92次調査期間中に観世音寺北辺部において現状変更に伴う事前調査を第93次調査として行った。

第92次調査地の埋め戻し終了後12月10日から当初計画で第90次調査として予定していた地域を第94次調査として開始した。調査地は第92次調査地の西側隣接地で、条坊復原案では右郭五条三・四坊にあたる。調査対象地は南北に細長く、また排土置き場が確保できないため二回に分けて調査を行うこととした。昭和60年3月末現在南半部について調査を終了し、北半部についてお調査継続中である。

以上59年度に行った発掘調査地を地区別に記すと下記の表のとおりである。

調査次数	調査地区	調査面積 (m²)	調査期間	備考
88	6 A Y M —C	1,200	840306~840508	右郭六条三坊
89	6 Z G K	90	840420~840424 850108~850111	学校院西辺部
90	6 A Y M -B	420	840509~840706	右郭五条二坊
91	6 Z G K	12	840514~850517	学校院北辺部
92	6 A Y M -C	1,915	840702~841130	右郭五条二・三坊
93	6 K K Z -A	14	840817~840824	観世音寺北辺部
94	6 A Y M -C		841210	右郭五条四坊

## 2 第14次調查

本次調査は太宰府市の土地区画整理事業に伴う事前の調査である。本調査地域は昭和46年度に住宅建設の発掘届が出されたため、部分的であるが発掘調査を実施している。この時の調査結果については調査区域が部分的であったこともあり、調査終了後に概略的な報告は行っていたものの、十分とは言えなかった。しかし今年度になって区画整理事業が当調査地周辺部に及び、調査の結果新たに判明した点もあるので、今回、以前の調査分を合せ報告することにする。昭和46年度調査では調査対象地域に北(3 m×12m)・東(3 m×13m)・南(3 m×15m)に「コ」字型にトレンチを設定し調査した。調査の結果、今回報告するSD320溝の北端と南端部それに東側溝肩を南北に13m分検出している。この時点では幅13mの溝であることが判明し、また昭和56年度に実施した第76次調査検出の南北方向の溝と連続することが、ほぼ明らかとなっていた。そして、溝の部分的な発掘ではあったが、溝中からはその時点ではきわめて数少ない出土例であった木簡が5点出土し、最下層からは奈良期の土器が多量に出土するなどの貴重な成果を得ることができた。

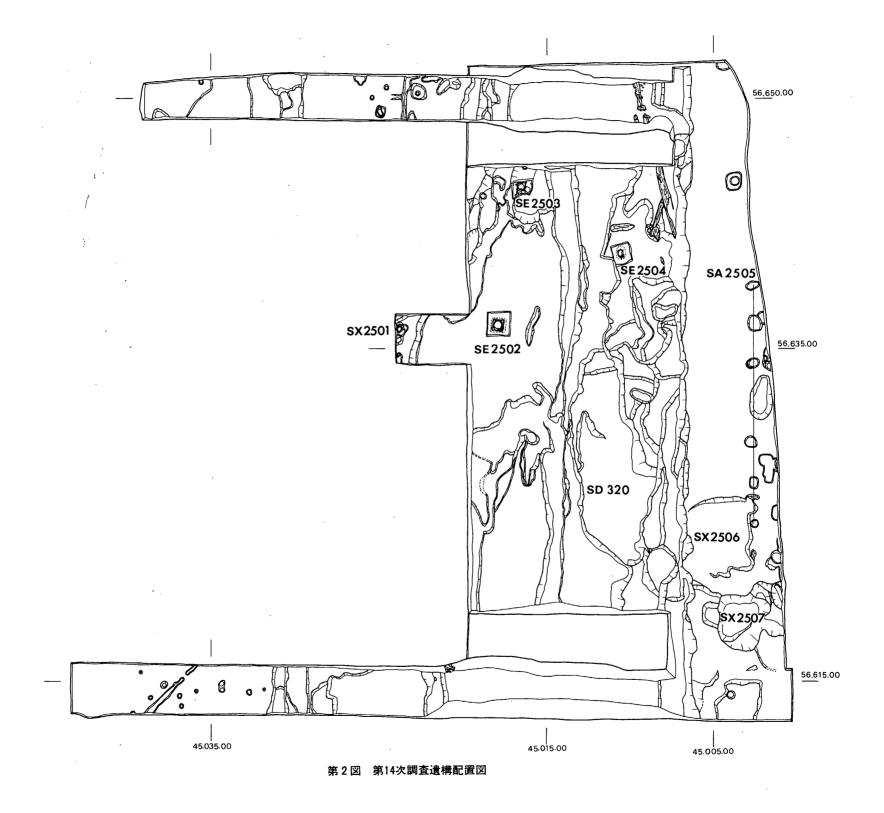
今回の調査の主たる目的は前回の調査で一部検出したSD320を全面的に発掘し、その詳細について知見を得、第76次調査検出の溝と連続することの確証を得ることにあった。発掘調査は対象地域の東半部について行い、前回調査分の一部についても再調査した。また西半部については数個所にトレンチを設定し調査した結果、床土直下で遺構面となったが、顕著な遺構は検出されなかった。調査は昭和58年11月21日に開始し翌年1月24日に終了した。地番は太宰府市大字観世音寺字大楠333番地である。

#### 検出遺構

検出した主要な遺構は柵1条、溝1条、井戸3基、瓦組み遺構1基、土壙状遺構2などである。遺構面は全体に浅く、床土直下で遺構面となるが、南側では若干深くなる。発掘区の大部分は溝遺構(SD320)で占められ、東側部分の幅3m~5mの範囲でわずかに柵SA2505および落ち込みの土壙状遺構SX2506・2507を検出し、また西側の溝肩確認のため設定した拡張区で瓦組み遺構SX2501を検出しただけである。そして、溝底に近い部分で、溝の埋没後に構築された井戸3基を検出した。

#### 柵

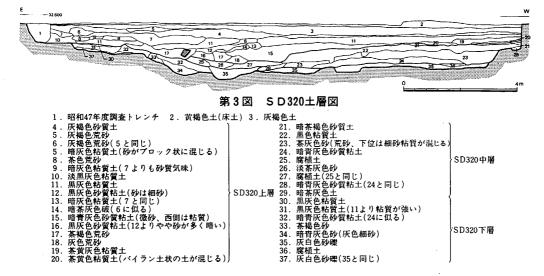
. **S A 2505** 発掘区東端近くで検出した南北方向に並んだ柱穴列である。柱間は5間あり、中央の柱間が広くなっている。中央柱間寸法は4.8m(16尺)で他は2.4m(8尺)である。柱掘形をみるとプラン的に一定しておらず、また深さも南から第1・5番目を除いて他が50cm~60cmあるのに対して20cmと浅い点など柵としてまとめるにはやや疑問があり、また2間の梁行を有



し、東側へのびる2棟の東西棟建物を想定するとしても前にのべた二・三の点から確認し得ないが、ここでは柵遺構として報告する。

#### 溝

S D320 発掘区の大部分を占める南北方向の溝である。東側溝肩はほぼ真南北方向をとり明 瞭に検出したが、西側溝肩については発掘地域外へさらに拡がるため今回は明らかに出来な かった。しかしながら先の昭和46年度の調査では既に南・北で西側溝肩を一部確認していた。 両調査の結果からみると溝は北端部で幅13.5m、深さ1.4mであり、南端部では幅16.0m、深 さ1.9mを測る。溝底は北端部と南端部では約50cmの高低差があり、北から南へ流れている。 溝の底部はなだらかに傾斜し中央部ではほぼ平坦な状態となっている。溝の埋土は大きく上層 (灰褐色荒砂層・灰褐色砂質土層・黒灰色粘質土層・暗青灰色砂質粘土層など)、中層(黒色 粘質土層・茶灰色砂層・暗青灰色砂質粘土層・腐植土層など)、下層(灰白色砂礫層・暗青灰 色砂層・茶褐砂色層)からなり、そして中層の埋没時に形成された整地層がある。溝埋没後の 堆積である②③を除去すると南北方向の小溝⑤が検出される。この小溝は溝埋土の上層を流れ る溝でSD320最終末期の流れである。上層埋土と中層埋土の境をなすのは20の黒色粘土層で、 その期の流れを示すものとして۞の淡茶灰色砂層があり、その時の溜りである⑩⑰は犓植土層 である。この腐植土層は比較的厚くとくに溝中央部の南北に厚く堆積している。この中層腐植 土層中から題籤1点と「烏賊」などの文字を記した木簡1点が出土した。下層は20の灰白色砂 礫層が大部分を占め、東側で⑳㉑の茶褐色砂層・暗青灰色細砂層が見られ、所々に㉑の腐植土 層の溜りがみられる。この腐植土層は中層腐植土⑩⑰のように厚くなく、堆積状況も連続的み られるのではなく部分的である。とくに北端部付近と南側部分に多く堆積がみられる。この腐 植土層からは「日置マカ良」など計6点の木簡が出土している。下層の大部分を占める灰白色 砂礫層はこぶし大のものを含む荒砂層であり、流れが強かったことを物語っている。この灰白 色砂礫層からは木簡1点が出土している。下層の最終期の流れを示す@は溝底のほぼ中央部を



やや蛇行しながら南北にのびる幅1.5m~2.0mの小溝で、溝底を抉るように流路をとっている。 井戸

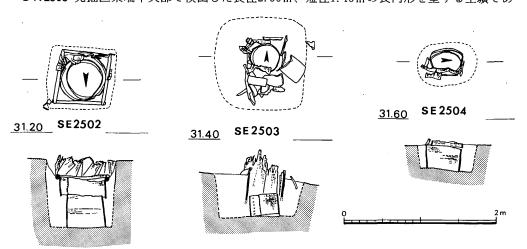
SE2502 大宰府井戸分類の II-B・bに属する。溝SD320に切込んでつくられた井戸で、掘形は井戸側検出面で確認され、東西 $0.9 \, m$ 、南北 $0.8 \, m$ の方形プランである。掘形底面までの深さ約 $0.9 \, m$ である。井戸側は東方に若干歪んでおり、上部は方形縦板、下部は曲物による構造である。上部の縦板材は幅約 $10 \, cm \sim 12 \, cm$ 、厚さ約 $1.5 \, cm$ のもので南辺と東、西辺の一部に残存し、板材を二重ないし三重にあてがって立てられている。上部と下部の接合部分には径 $5 \, cm$ の桜の丸太材を横桟にわたしている。下部は曲物 $2 \, pm$ 0秒は径約 $40 \, cm$ 0元。下段は径約 $40 \, cm$ 0元。下段は径約 $40 \, cm$ 0元。

SE2503 SE2502の北側で検出し、SD320に切込んでいる。大宰府井戸分類のⅡ—B・bに属する。掘形は明らかでない。井戸側上端から底面までの深さ約0.6mである。上部は幅20cm~25cm、厚さ2cmの板材を縦に立てているが、すべて東方に傾いている。東側は板材でなく、格子目叩きの平瓦を立て側板としている。南側には縄目・格子目叩きの丸・平瓦が乱積みされていた。下部は径38cm、高さ27cmの曲物が据えられている。

S E 2504 発掘区西北隅部で検出し、S E 2503の東側に位置する。保存状態が悪く、井戸側検出面から底面までの深さが0.35 mである。井戸側は曲物 2 段を検出したが、上段は残存高がわずか10cmで残りが悪く、下段は若干歪んではいるが上端部で径46cm、下端部で径40cmを測る。井戸側検出面で曲物周辺から板材が検出されたことから大宰府井戸分類のⅡ—B・bに属すると考えられる。

#### 土壙

SK2508 発掘区東端中央部で検出した長径2.50m、短径1.40mの長円形を呈する土壙であ

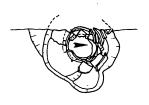


第4図 SE2502・2503・2504実測図

る。床土直下で検出された。深さは15cm~25cmあり、底部は摺鉢状を呈する。

#### 不明遺構

S X 2501 発掘区のほぼ中央拡張区の西端で検出した瓦組みの遺構である。直径80cmの掘形を有し、下部に一木を抉った桶様のものを置き、その上に瓦を縦に円形に並べて組合せ、井筒状にしている。下部の桶様のものは内径約30cm、深さ約45cmあり、内底は腐植のため凹凸がみられる。確認できた口縁部は2cm前後の厚さであるが、下方に向って肥厚しており下部は比較的厚味を持ったものとみられる。上部の瓦組みは下部の桶様の口縁に沿って平瓦を縦位(一部構位)に2段ないし3段に並べ組んでいる。最上段の内径は30cm前後で桶様のそれとほぼ同じである。最上端からの深さは約85cmであるが、検出時には平瓦が倒れた状態で上面を覆っていたので、本来はさらに2段ないし3段組まれていたものとみられる。



31.70



0 1m 第 5 図 S X 2501実測図

S X 2506 発掘区の東南隅部近くにあり、溝 S D 320の東肩部に接する浅い土壙状の落ち込みである。プランとして明瞭な輪郭はみられず、不整形で、深さ 5 cm 前後で浅い。

**S X 2507** S X 2506の南に接する土壙状の落ち込みで、プランは不整形であり、深さは50cm 前後で S X 2506より深い。

#### 出土遺物

S D 320出土土器・陶磁器 (第6~16図、図版42~48)

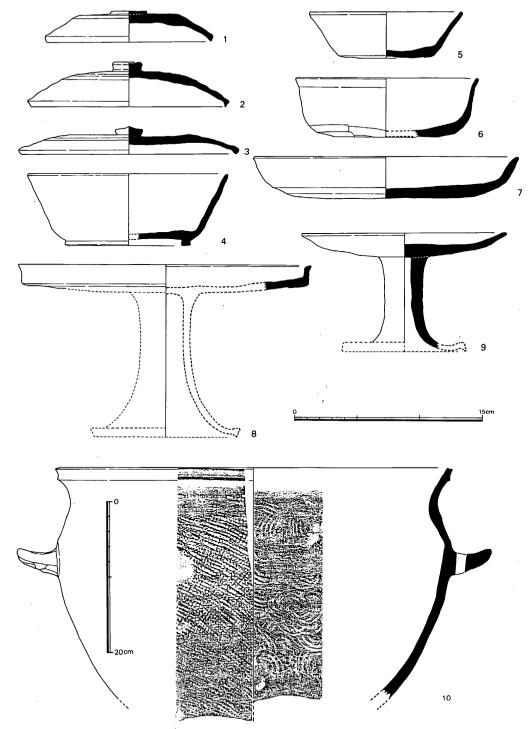
溝から出土した土器・陶磁器はかなりの量にのぼる。土器には須恵器・土師器があり、陶磁器には緑釉・灰釉などの日本製施釉陶器と中国製陶磁器の青磁・白磁などがある。記述にあたっては、大きく須恵器・土師器・日本製施釉陶器・中国製陶磁器の4つの項に分け、さらにそれを溝埋土の層序に従って、上層・中層・下層の3つに分けて報告することにする。

#### 須恵器

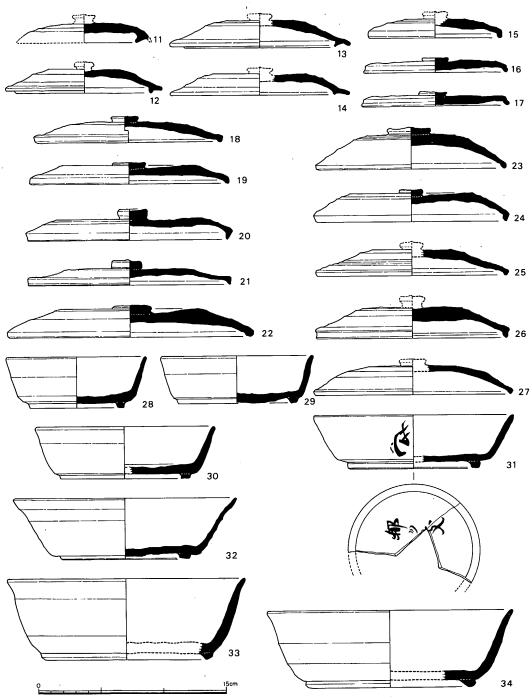
上層出土の須恵器はきわめて少なく、ここでは中・下層出土のものについて記述する。 中層

蓋 $(1 \sim 3)$  口縁部の断面がやゝ不明瞭な三角形となる $1 \cdot 3$  と明瞭な三角形を呈し、端部をわずかに外反させる2 がある。いずれも天井部は回転ヘラケズリ調整し、焼成も堅緻で、全体の調整も丁寧である。

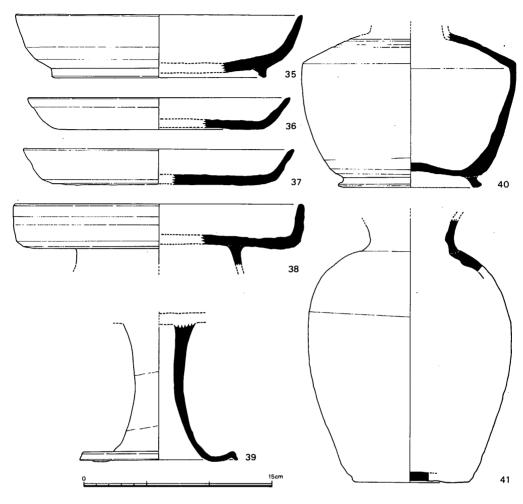
杯(4~6)4は断面四角の低い高台を底部端に貼付している。体部は体部下位から斜め外方に直に立ち上がる。体部はヨコナデ、内底はナデ調整している。5・6は無高台で、5の体



第6図 SD320出土土器・陶磁器実測図(1)



第7図 SD320出土土器・陶磁器実測図(2)



第8図 SD320出土土器・陶磁器実測図(3)

部はヨコナデ、内底はナデ調整し、外底はヘラ切りである。5の底部と体部は境が不明瞭で、体部下位は丸味を有し、口縁部上位で若干外反させ、内面はわずかに凹状になり、端部は丸くしている。外底および体部下位は手持ちヘラケズリし、体部はヨコナデで、内底はナデ調整である。

皿(7)大形の皿で、底部と体部の境は不明瞭で丸味を持つ。口縁端近くでわずかに外反させる。

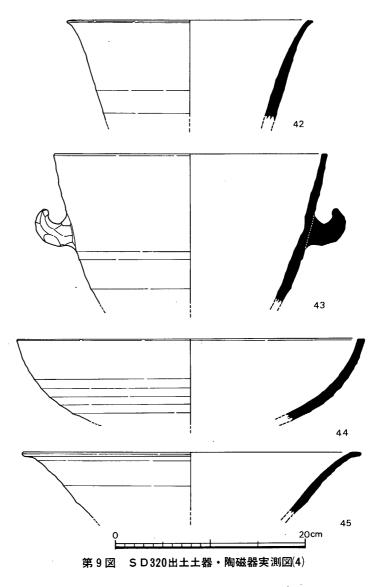
須恵器 SD 320 中層出土

	口径	器高	底径·高台径
1	13.2	2.5	
2	15.6	3.6	
3	17.3	2.2	
4	16.0	5.8	10.1
5	12.2	3.7	7.6
6	14.7	4.8	8.4
7	21.1	3.4	15.9
8	23,2		
9	16.3		

外底は体部下位まで丁寧なへラ削り調整し、体部はヨコナデ、内底は一部ナデ調整している。胎土には若干砂粒を含み焼成はやや軟質である。

高杯(8・9) 8は杯 部の小片で、体部は直に 立ち上がる。口縁部は 「く」字状に外反させ、 端部は平らにする。外底 は回転ヘラ削りしている。 9の杯部は浅く、底部と 体部には明瞭な境がなく 丸味がある。杯部から脚 部はヨコナデ調整してい るが、内底中心部付近は ナデ調整している。胎土 には砂粒の混入は少なく、 焼成も堅緻である。口縁 部に一部煤の付着がみら れる。

甕(10) 復原口径約52.4 cmを測り、胴部最大径は 上位にあり、口径とほぼ 同じでありその部分に把



手を貼付している。外面に細格子、内面に同心円の叩き目を有する。内底付近はナデ調整している。

#### 下層

蓋( $11\sim27$ )  $11\sim14$ は返りを有し、 $11\cdot12$ の小形と $13\cdot14$ の大形がある。身受け部と撮みを欠く他は完存しており、身受け部は意識的に打ち欠かれたようである。12の内面には漆状のものが付着している。14の返りはわずかにみられるだけで、七世紀の終末期の形状を示す。いずれも天井部の外面は回転へラ削りし、内面はヨコナデ後ナデ調整する。 $15\sim27$ は返りを有しな、

いもので、小形の15~17と一般的にみられる18~ 下層出土 27がある。

15~16は口縁部を若干外反させ端部を丸くして いる。一般的なものでは口縁部が明瞭な断面三角 形を呈する20・24・26と口縁部をわずかに外反さ せる21がある。いずれも天井部外面はヘラ削り、 内面はヨコナデ後ナデ調整している。19の天井部 外面に墨書(判読出来ず)があり、内面に墨痕が みられる。また27は硯に転用しており、内面に墨 痕がある。

杯(30~34)やや小形で体部が直上気味に直線 的に立ち上がる28~31とやや大ぶりで深く、体部 は斜め上方にのび、口縁部を外反させ、高台を底 部端に貼付する32・33がある。底部と体部の境が 不明瞭で丸くなる大形の35がある。35は体部下位、 にヘラ削り調整をのこし、高台内面を凹状にする。 31の外底のほぼ中央に「那ツ支」、体部外面に横 方向に「也」と判読できる墨書がある。

 $\square(36\cdot37)$  いずれも底部は切り離しのままで、 内底はヨコナデ後ナデ調整している。

高杯(38・39) 杯部の一部と脚部がわずかに知

□ 径 器 高 底径・高台径  12 12.5 13 14.4 14 14.3 15 10.6 16 11.5 1.2 17 11.8 1.1 18 14.9 2.1 19 16.0 2.2 20 15.8 2.5 21 16.2 2.0 22 19.6 2.5 23 15.1 3.4 24 15.2 2.1 25 15.3 26 15.3 27 15.6 28 11.2 4.1 7.5 29 12.2 3.8 9.4 30 14.4 4.1 10.35 31 15.9 4.3 10.6 32 17.8 4.9 10.3 33 19.0 6.5 13.6 34 19.6 6.2 13.6 35 22.9 5.0 36 20.9 2.5 37 21.6 2.9					
13       14.4         14       14.3         15       10.6         16       11.5         17       11.8         18       14.9         2.1       19         19       16.0         2.2       20         21       16.2       2.0         22       19.6       2.5         23       15.1       3.4         24       15.2       2.1         25       15.3         26       15.3         27       15.6         28       11.2       4.1       7.5         29       12.2       3.8       9.4         30       14.4       4.1       10.35         31       15.9       4.3       10.6         32       17.8       4.9       10.3         33       19.0       6.5       13.6         34       19.6       6.2       13.6         35       22.9       5.0         36       20.9       2.5         37       21.6       2.9		口径	器高	底径·高台径	
14       14.3         15       10.6         16       11.5         17       11.8         18       14.9         2.1       19         19       16.0         2.2       20         21       16.2         2.5       21         21       16.2         2.5       2.5         23       15.1         3.4       24         15.2       2.1         25       15.3         26       15.3         27       15.6         28       11.2       4.1       7.5         29       12.2       3.8       9.4         30       14.4       4.1       10.35         31       15.9       4.3       10.6         32       17.8       4.9       10.3         33       19.0       6.5       13.6         34       19.6       6.2       13.6         35       22.9       5.0       36         36       20.9       2.5         37       21.6       2.9	12	12.5			
15       10.6         16       11.5       1.2         17       11.8       1.1         18       14.9       2.1         19       16.0       2.2         20       15.8       2.5         21       16.2       2.0         22       19.6       2.5         23       15.1       3.4         24       15.2       2.1         25       15.3       2         26       15.3       2         27       15.6       2         28       11.2       4.1       7.5         29       12.2       3.8       9.4         30       14.4       4.1       10.35         31       15.9       4.3       10.6         32       17.8       4.9       10.3         33       19.0       6.5       13.6         34       19.6       6.2       13.6         35       22.9       5.0         36       20.9       2.5         37       21.6       2.9	13	14.4			
16         11.5         1.2           17         11.8         1.1           18         14.9         2.1           19         16.0         2.2           20         15.8         2.5           21         16.2         2.0           22         19.6         2.5           23         15.1         3.4           24         15.2         2.1           25         15.3         2           26         15.3         2           27         15.6         2           28         11.2         4.1         7.5           29         12.2         3.8         9.4           30         14.4         4.1         10.35           31         15.9         4.3         10.6           32         17.8         4.9         10.3           33         19.0         6.5         13.6           34         19.6         6.2         13.6           35         22.9         5.0           36         20.9         2.5           37         21.6         2.9	14	14.3			
17       11.8       1.1         18       14.9       2.1         19       16.0       2.2         20       15.8       2.5         21       16.2       2.0         22       19.6       2.5         23       15.1       3.4         24       15.2       2.1         25       15.3         26       15.3         27       15.6         28       11.2       4.1       7.5         29       12.2       3.8       9.4         30       14.4       4.1       10.35         31       15.9       4.3       10.6         32       17.8       4.9       10.3         33       19.0       6.5       13.6         34       19.6       6.2       13.6         35       22.9       5.0       36         36       20.9       2.5         37       21.6       2.9	15	10.6			
18       14.9       2.1         19       16.0       2.2         20       15.8       2.5         21       16.2       2.0         22       19.6       2.5         23       15.1       3.4         24       15.2       2.1         25       15.3       3         26       15.3       3         27       15.6       3         28       11.2       4.1       7.5         29       12.2       3.8       9.4         30       14.4       4.1       10.35         31       15.9       4.3       10.6         32       17.8       4.9       10.3         33       19.0       6.5       13.6         34       19.6       6.2       13.6         35       22.9       5.0       36         36       20.9       2.5       37         37       21.6       2.9	16	11.5	1.2		
19       16.0       2.2         20       15.8       2.5         21       16.2       2.0         22       19.6       2.5         23       15.1       3.4         24       15.2       2.1         25       15.3         26       15.3         27       15.6         28       11.2       4.1       7.5         29       12.2       3.8       9.4         30       14.4       4.1       10.35         31       15.9       4.3       10.6         32       17.8       4.9       10.3         33       19.0       6.5       13.6         34       19.6       6.2       13.6         35       22.9       5.0       36         36       20.9       2.5         37       21.6       2.9	17	11.8	1.1		
20     15.8     2.5       21     16.2     2.0       22     19.6     2.5       23     15.1     3.4       24     15.2     2.1       25     15.3       26     15.3       27     15.6       28     11.2     4.1     7.5       29     12.2     3.8     9.4       30     14.4     4.1     10.35       31     15.9     4.3     10.6       32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	18	14.9	2.1		
21     16.2     2.0       22     19.6     2.5       23     15.1     3.4       24     15.2     2.1       25     15.3        26     15.3        27     15.6        28     11.2     4.1     7.5       29     12.2     3.8     9.4       30     14.4     4.1     10.35       31     15.9     4.3     10.6       32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	19	16.0	2.2		
22     19.6     2.5       23     15.1     3.4       24     15.2     2.1       25     15.3        26     15.3        27     15.6        28     11.2     4.1     7.5       29     12.2     3.8     9.4       30     14.4     4.1     10.35       31     15.9     4.3     10.6       32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	20	15.8	2.5		
23     15.1     3.4       24     15.2     2.1       25     15.3        26     15.3        27     15.6        28     11.2     4.1     7.5       29     12.2     3.8     9.4       30     14.4     4.1     10.35       31     15.9     4.3     10.6       32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	21	16.2	2.0		
24     15.2     2.1       25     15.3        26     15.3        27     15.6        28     11.2     4.1     7.5       29     12.2     3.8     9.4       30     14.4     4.1     10.35       31     15.9     4.3     10.6       32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	22	19.6	2.5		
25     15.3       26     15.3       27     15.6       28     11.2     4.1     7.5       29     12.2     3.8     9.4       30     14.4     4.1     10.35       31     15.9     4.3     10.6       32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	23	15.1	3.4		
26     15.3       27     15.6       28     11.2     4.1     7.5       29     12.2     3.8     9.4       30     14.4     4.1     10.35       31     15.9     4.3     10.6       32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	24	15.2	2.1		
27     15.6       28     11.2     4.1     7.5       29     12.2     3.8     9.4       30     14.4     4.1     10.35       31     15.9     4.3     10.6       32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	25	15.3			
28     11.2     4.1     7.5       29     12.2     3.8     9.4       30     14.4     4.1     10.35       31     15.9     4.3     10.6       32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	26	15.3			
29     12.2     3.8     9.4       30     14.4     4.1     10.35       31     15.9     4.3     10.6       32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	27.	15.6			
30     14.4     4.1     10.35       31     15.9     4.3     10.6       32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	28		4.1	7.5	
31     15.9     4.3     10.6       32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	29	12.2	3.8	9.4	
32     17.8     4.9     10.3       33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	30	14.4	4.1	10.35	
33     19.0     6.5     13.6       34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	31	15.9	4.3	10:6	
34     19.6     6.2     13.6       35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	32	17.8	4.9	10.3	
35     22.9     5.0       36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	33	19.0	6.5	13.6	
36     20.9     2.5       37     21.6     2.9	34	19.6	6.2	13.6	
37 21.6 2.9	35	22.9	5.0		
	36	20.9	2.5		
38 22 2	37	21.6	2.9		
30 23,2	38	23.2			

れる小片である。厚手の体部は底部からほぼ直角に立ち上がる。杯部の底面はヘラ削りし、他 はヨコナデないしナデ調整している。脚部の径が大きく、この形状のものは類例がなくやや特 異なものと言える。小片であるため復原にやや疑問もあり、若干変る可能性もある。39は杯部 を欠失した脚部片で、端部を断面三角形にしている。

壺(40・41) 40は長頸壺の頸部を欠く。体部の傾きは少なく、下位はヘラ削り調整している。 肩部に2条の浅い沈線が巡る。胎土には砂粒を比較的多く含む。胴部最大径17.0cm、高台径 11.4cm。41は長胴の壺で、口縁部を欠失する他は完存する。体部中位よりやや上位まで回転へ ラ削りし、中位以上から頸部にかけてはヨコナデで、外底部はナデ調整している。胎土中には 砂粒が多く、目立っている。胴部最大径は中位よりやや上にあり、16.2cmを測る。底部径は9.0cm である。

鉢(42~45) 42は直線的な体部で口縁部はわずかに外反する。口縁端は平坦にしている。外 面の体部中位まで回転ヘラ削りし、他はヨコナデ調整している。胎土中には砂粒は少なく精良 なものである。復原口径26cm。43は把手付きの鉢で、体部から口縁部にかけてわずかに内彎する。把手貼付位置から下位は回転へラ削りし、他はヨコナデ調整している。把手は指押えによる成形である。復原口径28.8cm。44は丸底の鉢で、外面は口縁部付近までヘラ削りし、他はヨコナデ調整している。内底は使用されたのか磨滅している。復原口径36.6cm。45は朝顔形に大きく開く鉢で、口縁部を「く」字状に外反させ、上面は平坦にしている。口縁部近くまで回転へラ削りし、他はヨコナデ調整している。復原口径35.6cm。

#### 十師器

#### 上層

杯(46~57) 口径10.8cm~11.6cm、器高2.1cm~3.3cmを測る46~53と器高が高くなる口径11.2cm~11.8cm、器高3.0cm~3.5cmを測る54~57の2つに大別される。全て、底部はヘラ切り、体部はヨコナデで、内底は49の他はナデ調整している。51・54~56を除いた他は板状圧痕を有する。

高台付皿(58・59) 底部はヘラ切り、体部はヨコナデし、内底はナデ調整している。

椀(60~66) 器高が高く、直線的な体部を有する60・61と器高が低く、体部下位に丸味を有する62・63、それに口縁部をわずかに外反させる64~66の3つに分けられる。全て底部はヘラ切りで、62・63・65・66には板状圧痕を残す。体部はヨコナデで、内底はナデ調整している。

土師器 SD 320 上層

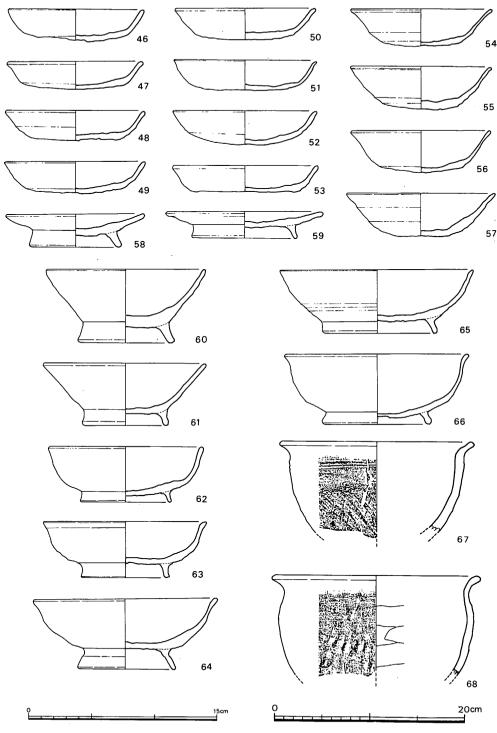
	口径	器高	底径·高台径
46	10.8	2.5	7.2
47	.10.9	2.2	8.0
48	11.1	2.4	7.0
49	11.2	2.5	7.5
50	11.2	2.5	7.8
51	11.4	3.3	
52	11.5	2.7	
53	11.6	2.1	8.8
54	11.2	3.0	6.4
55	11.2	3.4	6.4
56	11.2	3.4	6.6
57	11.8	3.5	6.6
58	11.1	2.7	7.3
59	12.6	2.1	8.4
60	12.8	5.9	7.8
61	13.0	5.0	6.8
62	12.4	4.4	7.2
63	13.0	4.5	7.1
64	14.8	5.6	7.8
65	15.4	5.1	9.1
66	14.7	5.6	8.7

**甕**(67・68) 口径24cmの67と口径21.8cmの68がある。いずれも外面には煤が付着し、内面には炭化物が付着している。67の体部外面中位以下は粗い平行(一部斜格子)の叩き目を有し、68にも粗い平行(一部正格子)の叩き目が施されている。

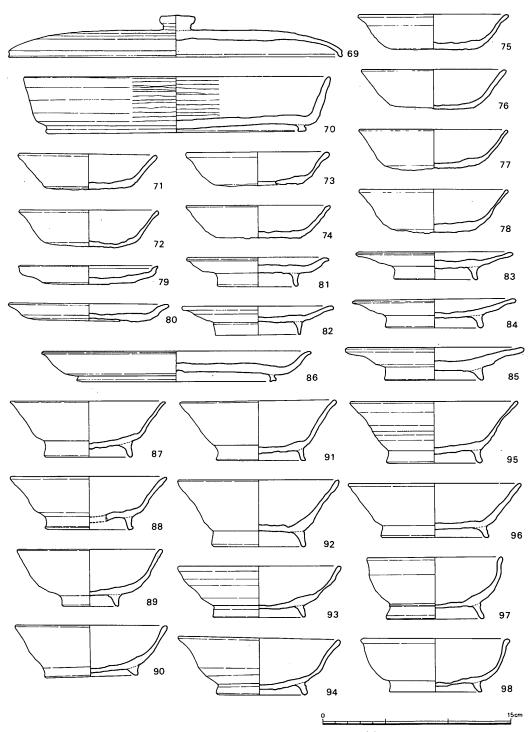
#### 中層

蓋(69) 口径26.7cmを測る大形の蓋である。口縁端部はわずかに外反させる。天井部外面は 丁寧に回転へラ削りし、口縁部付近はヨコナデ、内面はナデ調整している。胎土中には砂粒の 混入はきわめて少なく精良で、焼成も良好である。

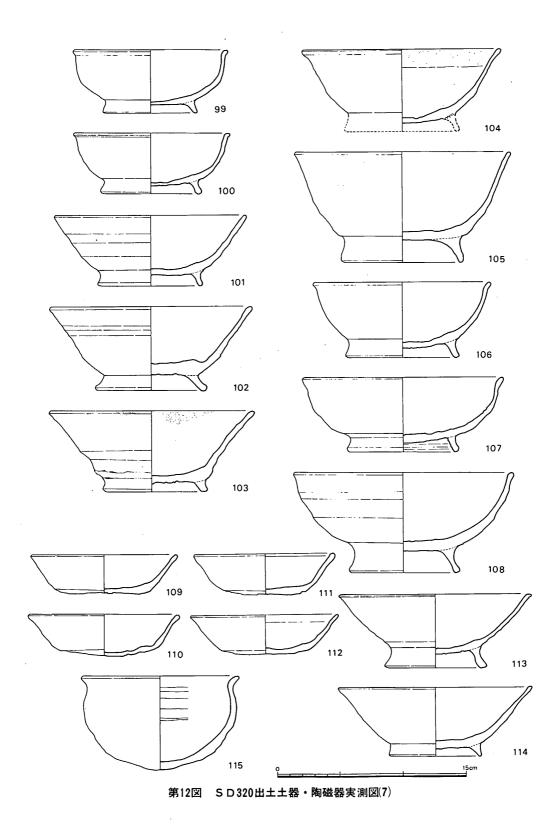
杯(70~78) 70は高台付杯で、口径24.5cmの大形で、69の蓋に見合う法量をもつ。体部の内外面から内底を丁寧なヘラミガキを施し、外底部はヘラ削り調整している。胎土はほとんど砂粒を含まず精良で、焼成も良好である。71~78の杯は口径11.1cm~11.5cm、器高2.6cm~2.9cmの71~74と口径11.6cm~12.0cm、器高2.8cm~3.5cmの75~78の2つに大別できる。全て底部はヘ



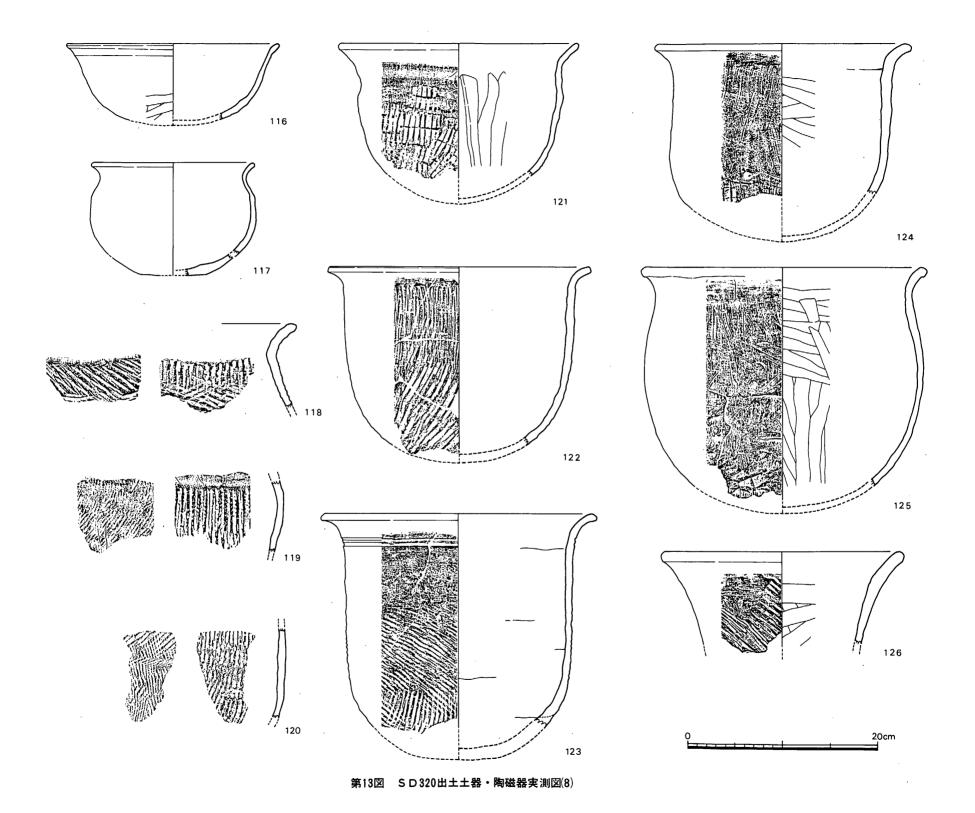
第10図 SD320出土土器・陶磁器実測図(5)



第11図 SD320出土土器・陶磁器実測図(6)



- 16 -



土師器 SD 320 中層

ラ切りで、体部はヨコナデするが、内底部は73を除いて他はナデ調整する。73・75以外は板状圧痕を有する。77の内面にはわずかに煤の付着がみられる。

皿(79・80) 底部はヘラ切り、体部はヨコナデ、 内底はナデである。79は体部上位で直上に屈曲させ口縁部を外反させる。79の外底には板状圧痕を 有する。

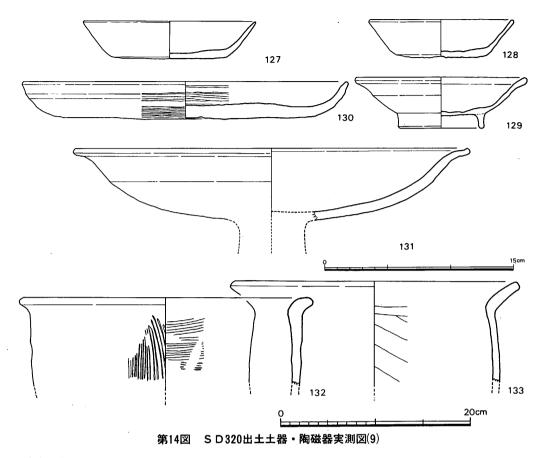
高台付皿(81~85) 口径11.4cm~12.1cmの81・82と口径12.5cm~14.2cmの83~85がある。体部はヨコナデで内底はヨコナデないしナデである。底部にヘラ切り痕を残す。

椀(87~96) 口径10.4cm~12.5cm、器高4.1cm~5.4cmの87~100と口径14.1cm~17.5cm、器高5.6cm~8.8cmの大形の101~108がある。87~96は体部下位に若干丸味を有し、体部から口縁部はほぼ直線的で斜め外方にのびるのを特徴とするAタイプと97~100のように体部が内彎し、口縁部を外反させるBイプがある。101~105は前者のAに対応するもので、106~108は後者Bに対応する。全て体部、口縁部はヨコナデで調整し、内底はナデである。但し、108は内面にミガキを施し、コテあて痕を有する。底部はヘラ切りで、半数以上に板状圧痕が残る。89・90・101・103には煤が付着している。

### 整地層

椀(113~114) いずれも直線的な体部を有するが、113は口縁部をわずかに外反させる。体部・口縁部はヨコナデで、内底はナデである。113の口縁部外面には一部煤の付着がみられる。

	口径	品 品	底径·高台径
69	26.6	3.4	
70	24.5	4.5	21.0
71	11.1	2.9	7.2
72	11.1	2.9	7.2
73	11.4	2.7	7.0
74	11.5	2.6	6.8
75	12.0	2.8	6.9
76	11.6	3.2	6.8
77	11.8	3.2	6.8
78	11.8	3.5	6.6
79	11.1	1.5	7.3
80	12.8	1.5	9.8
81	11.4	2.4	6.4
82	12.1	2.4	6.3
83	12.5	2.2	6.7
84	13.0	2.3	7.8
85	14.2	7.9	2.6
86	21.5	2.4	15.9
87	10.4	4.5	7.1
88	12.5	4.3	7.1
89	11.6	4.5	4.8
90	12.2	4.1	7.5
91	12.5	4.8	7.1
92	12.8	5.4	7.4
93	13.1	4.1	7.4
94	13.0	4.6	7.2
95	13.4	5.0	7.7
96	13.8	4.4	8.5
97	10.8	4.9	7.8
98	11.9	4.3	7.4
99	12.3	5.1	7.6
100	12.5	4.9	8.1
101	15.3	5.6	8.3
102	16.2	6.7	8.9
103	16.4	6.5	8.3
104	15.8	6.6	9.2
105	17.2	8.8	9.6
106	14.1	6.1	9.0
107	15.9	6.0	8.8
108	17.5	8.7	8.0
109	11.8	3.1	7.6
110	12.1	3.4	7.8
111	11.3	3.3	6.5
112	11.8	3.2	6.9
113	15.3	5.9	8.1
114	15.4	5.5	7.3



壺(115) 口径12.6cmで、外面はヨコナデで、内面は横方向の削りである。外面には煤が付着している。

鉢(116) 口径22.4cmの底を丸くする鉢で、鍋として使用している。口縁部は外反し肥厚させる。外底部は手持ちヘラ削りし、他はヨコナデで、内面は刷毛目調整する。外面には煤が付着し、内面には炭化物が付着している。焼成は良好である。

要(117~125) 口径17.2cm、復原高は約12cm位に考えられる。底部は平底気味で、底部がナデ以外はヨコナデにより調整している。外面に煤付着がみられる。胎土中には砂粒をほとんど含まず、焼成も良好である。118~120は玄界灘式製塩土器である。いずれも小片で、119と120は胴部片である。平面は細かい平行叩き目、外面は木目に直交する粗い平行叩き目を伴う。製塩土器特有の胎土で、淡茶色を呈している。121は口径25.2cmで、外面には粗い格子の叩き目があり、内面は縦方向にヘラ削りする。胎土中の砂粒は比較的少なく、焼成も良好である。外面には煤の付着がある。112~124は胴部が直に近い形状を持つ。122は口径27.6cmで体部外面の上位は刷毛目と平行叩き目が重複し、中位以下は平行叩き目を有する。口縁部付近の内外面

土師器 SD 320 下層

はヨコナデで、内面の口縁部以下はナデである。 また内面には指頭圧痕が著しく、赤色物および炭 化物が付着している。123は口径29.0cmで、体部 外面は平行叩き目を有するが上位はヨコナデで叩

	口径	器高	底径·高台径
127	13.8	3.0	9.2
128	11.5	3.0	7.1
129	13.7	4.1	6.3
130	2.6	3.0	18.9

き目を消している。口縁部付近はヨコナデで、内面は下から上へナデ上げ、下位は指押えと当 具痕が顕著に認められる。外面には煤が付着する。124は口径27.0cmで、体部外面は刷毛目調整を施しているが、体部下位は粗い格子の叩き目がみられる。口縁部内外面はヨコナデで、他はヘラ削りする。外面には煤が付着する。125は胴部が丸くなる特徴を有する。口径30cmで、胴部最大径は上位にあり29.8cmを測る。体部外面は乱雑な刷毛目調整を施し、体部下位は粗い格子の叩きがみられる。口縁部内外面はヨコナデで、内面はヘラ削りである。126は外反する体部と口縁部の小片である。口縁部は肥厚している。口径25.6cmで、体部外面は平行叩き目を有し、口縁部はヨコナデで、内面はヘラ削りする。小片であるため全形は知り得ないが、類例もなくきわめて特異な形態の土器(ここでは叩き目などから甕類として報告する)と言える。

#### 下層

杯(127・128) 127は底部をヘラ削りする。体部などの調整は磨滅して不明である。胎土は精良である。128は底部をヘラ切り、体部をヨコナデ、内底はナデである。板状圧痕を有す。

椀(129) 直線的な体部は高台部から斜め外方にのび、肥厚気味の口縁部はわずかに外反させる。体部はヨコナデ、内底はナデである。

皿(130) 口径26cmを測る大形の皿である。底部と体部の境が不明瞭で、体部は内彎気味となる。体部の内外面と内底は丁寧なヘラミガキを施す。

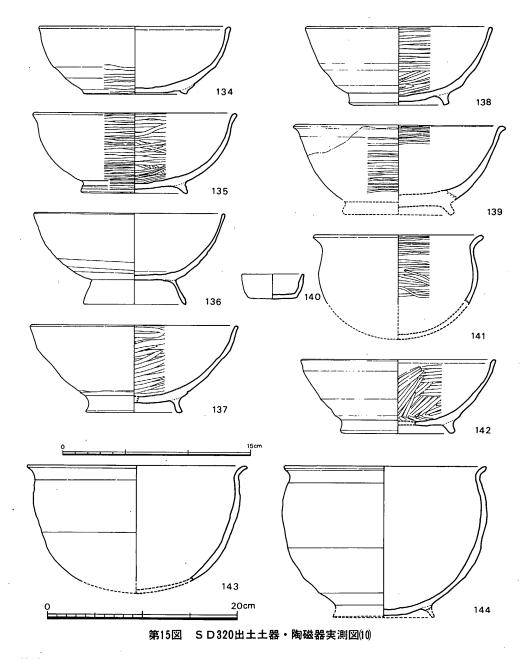
高杯(131) 杯部のみの小片で、復原口径31.6cmを測る大形のものである。杯部の底部と体部は丸くなり、境はない。外反させた口縁部は上方へつまみ上げ不明瞭な断面三角形となる。底部から体部中位は回転へラ削りし、口縁部はヨコナデである。胎土はきわめて精良で、淡赤茶色を呈する。

甕(132・133) 口縁部を短く「く」字状に外反させる甕で、体部外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目調整を施す。口縁部はヨコナデである。復原径は31.0cm。133はやや胴のふくらむ甕で、体部外面はナデで内面はヘラ削りする。外面には煤が付着する。復原口径30.4cm。

#### 黒色土器

#### 上層

椀(134・135) 内外面を燻したB類がある。いずれも内外面に粗いヘラミガキを施す。134は 軟質なため、とくに内面のミガキは不明瞭であり、体部下位は回転ヘラ削りされている。135 の底部には板状圧痕を有する。



## 整地層

椀(136・137) いずれも内面のみを燻した A 類で、136は内面にヘラミガキを施しているものの、軟質なため不明瞭である。外面の体部下位は回転ヘラ削りし、底部には板状圧痕がみられる。137も内面に粗いヘラミガキを施し、比較的明瞭に残る。

## 中層

椀(138・139) いずれも内面のみを燻したA類で、138は内面を粗いヘラミガキし、139は内外面の全面をヘラミガキする。138は板状圧痕を有する。

皿(140) 内外面を燻すB類である。内外面の全面をヘラミガキする。体部はヨコ方向のミガキを施す。

黒色土器 上層、整地層、中層、下層

	口径	器高	底径·高台径
134	15.3	5.4	8.9
135	16.3	6.45	8.1
136	14.3	7.3	8.2
137	16.6	7.1	7.7
138	15.0	6.3	8.0
139	16.9		
140	5.0	2.0	4.3
142	15.5	6.0	9.1

甕(141・143・144) いずれも内面のみを黒色に燻したA類である。141は口径13.6cmで、内面をヨコ方向にヘラミガキする。外面は淡茶色を呈し煤が厚く付着する。143は口径23.2cmを測り、内面をジグザクにヘラミガキし深黒色の光沢を持つ。外面は口縁部から体部中位までヨコナデで、中位以下はヘラ削りする。144は高台付の甕で、口径21.3cmを測る。外面の口縁部から体部中位は回転ヘラ削りし、中位以下は回転による荒いヘラ削りを施す。内面の中位以上は回転ヘラミガキし、中位以下は横方向のジグザクのミガキを施す。

#### 下層

椀(142) 内面のみを燻したA類で、内面は粗いヘラミガキを施す。体部外面はヨコナデである。

#### 灰釉陶器

皿 (145) 高台付の皿の底部片である。内面には淡黄緑色の釉が施され、外面は露胎となる。 外面の体部下位と底部は回転へラ削りしている。上層出土。

#### 緑釉陶器

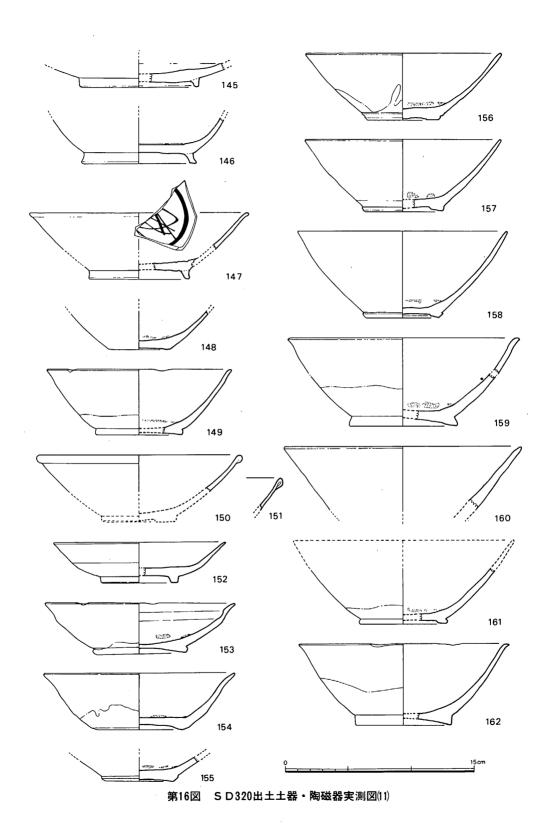
椀(146・147) 146は淡茶色ないし暗灰色の精良な胎土に濃緑色の釉を全面に施す。内底見込みに沈線を巡らし、また高台畳付部に凹線を入れる。残存部の見込みに白色粘土の目跡1個が残存しており、位置的に3足になると考えられる。147は底部と口縁部片であり、直接には接合しないが、同一個体と考えられ図上復原した。内底見込みに暗文状のミガキを施す。体部の外面はヘラ削りしている。

#### 上層

#### 青磁

椀(148・149) いずれも越州窯系で、148は平底となり、全面に黄茶色の釉をかけている。内面の見込みと外底部周縁には白色を呈する目跡が5個ある。149は輪花を有する平底の椀で、外面の体部下位と底部は露胎となっており、外底部はヘラナデを施している。釉下には白化粧土を施こす。

#### 中層



## 白磁

椀(150・151) 口縁部を折り曲げて小さな玉縁をつくる椀の小片である。淡黄白色の釉を全面にうすく施す。邢州窯系白磁と考えられる。

## 青磁

皿(152) 復原口径は13.8cm、器高6.2cmで、深草色の釉を全面に施す。体部下位はヘラ削りしている。

杯(13・154) 輪花を有し、口縁部を外反させる。口径15.2cm、器高4.1cmで外面の体部下位 および底部は露胎である。白土の目跡 6 個がある。154の外面体部以下と底部は露胎で、釉は 黄緑色を呈する。口縁部に褐斑がある。

椀(155~159) 155は淡緑黄色の釉を全面に施している。外底は回転へラ削りし、高台風の周縁部はヘラナデし、9個の目跡が残る。156は口径15.6cm、器高5.4cmで、濁黄緑色の釉を施し、外面体部下位と底部は露胎となっている。内底見込みと高台畳付にそれぞれ7個の目跡がある。157は口径15.6cmで淡緑黄色の釉が全面施釉され、内底見込みと高台畳付部に目跡がある。158 は底部を除いて淡黄緑色の釉が施される。釉下に白化粧土がある。内底見込みに目跡7個がある。口径16.6cm、器高6.5cm。159は2個の破片を図上復原したもので、体部中位以下を露胎とし、釉は淡黄緑色の釉を施す。釉下に化粧土がみられる。外底はナデている。155~159はいずれも越州窯系である。

## 整地層

## 青磁

椀(160) 口縁部片で、復原口径18.9cmである。輪高台か円盤高台のものであろう。

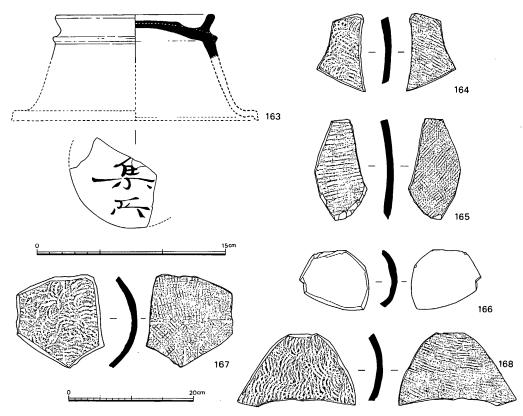
## 下層

## 青磁

椀(161・162) 161の体部下位と底部は露胎で、淡黄白色釉を施す。釉下に化粧土があり、内底見込みに目跡を有す。162は輪花を有し、外底を除いて淡黄緑ないし暗茶色の釉を施す。外面の口縁部から体部中位には釉下に化粧土がある。底部に糸切り痕を残す。

## 墨書土器(図版48)

小破片であるため作図できなかった墨書土器についてまとめて報告する。これらは全てSD320出土のものである。Aは須恵器皿の底部に書かれており、「主典」と判読できるが、「主」についてはやや疑問が残る。中層出土。Bは須恵器杯蓋の内面の口縁部近くに書かれている。これで一字を成すか不明であるが現状では「家」と判読できる。中層出土。Cは須恵器杯蓋の天井部に書かれ、「家」と判読できるが、熟語を成すものかは不明である。中層出土。Dは須恵器杯蓋の内面口縁部付近に墨書されているが、上部が欠失しているため判読できない。下層出土。Eは須恵器の杯蓋と思われるが小片であるため器形は判然とせず、墨書についても偏の



第17図 SD320出土土器・陶磁器実測図(12)

「彳」がかろうじて読める程度である。中層出土。Fは須恵器皿の底部に墨書されており、文字左半分が欠失しているため不明である。下層出土。Gは須恵器皿の外底部のほぼ中心部に墨書されているが、文字の上半分が欠失して判読できない。中層出土。Hは土師器杯の外底部の全面に墨書されているが、かろうじて「息」の2字が判読できるだけで他については明らかでない。中層出土。

## 硯(第17図)

円面硯(163) 円面硯の硯部と圏台の一部が残存する。硯部と圏台は連続して成形する。硯部と圏台の境に外堤と断面三角形の凸帯を貼付する。硯部には粘土板を貼付し、陸と海を作る。圏台には透しが2個所残るが部分的であるため復原できない。硯部の裏面に「集□」の墨書がある。また硯部には使用痕と墨痕がみられる。

猿面硯( $164\sim168$ ) 甕の胴部を硯に転用したものである。いずれも端部は研るなどの再調整はしていない。164の外面は円弧状叩き目で、使用のため滑らかとなり、墨痕が認められる。 外面は平行叩き目を有す。165の内面は平行叩き目で、器面は滑らかになり墨が付着する。外 面は細格子の叩き目を有する。下端部は打ち欠いて成形か。166は内外面ヨコナデで内面は滑らかで墨痕が付着する。167は青海波叩き目と一部ナデで器面は滑らかとなり墨痕が付着している。外面は細格子の叩き目を有する。168は内面に青海波の叩き目を有し、調整はしていない。164の外面は円弧状叩き目、外面には平行叩き目を有する。165の内面は平行叩き目で、外面は細格子の叩き目を有する。下端部は打ち欠いて成形か。166は内外面ヨコナデである。167

は青海波叩き目と一部ナデ調整で、外面は細格子の叩き目を有する。168は内面に青海波の叩き目を有し、外面は平行叩き目を有する。いずれも内面は使用のため、器面は滑らかとなり、 墨が付着している。

## 土製品(第18図)

円盤状土製品(1) 平瓦片を打ち欠き、円盤状に成形したものである。器面は磨滅が著しく、明瞭でないが、縄目状のものが認められる。

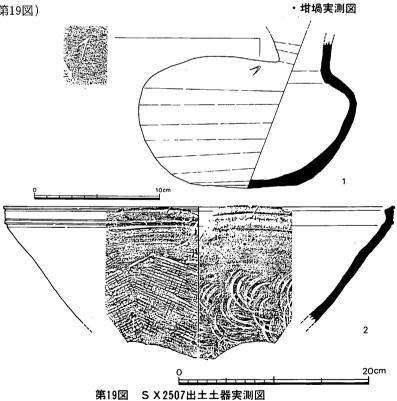
坩鍋(2) 小片のため明瞭でないが、復原口径11.0cmを測る。 内面には固形物の付着が認められる。

# S X 2507出土土器 (第19図)

## 須恵器

平瓶(1) 肩部から頸部にかけてははすで、胴部はは外になりし、外ではまずのみでほとよけずのみである。肩部に「イ」のへき記します。

鉢(2)口縁部を 直上にひき上げ、端 部を内傾させ平坦に する。直立する口縁 部外面には上・下に 深い沈線を巡らし、 その間に沈線による 波状文を入れる。口



S D 320出土瓦製品

第18図

縁部はヨコナデで体部外面は細格子の叩き目を、内面 には青海波の叩き目を有する。復原口径41.4cmを測る。

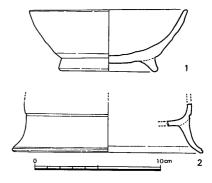
## S X 2508出土土器・陶磁器(第20図)

## 土師器

椀(1) 体部がやや内彎する椀で、底部に板状圧痕 を有する。口径12.6cm、器高4.9cmである

## 緑釉陶器

香爐(2)香爐身の小片である。淡茶色の精良な胎 土に淡緑色の釉がかかっている。脚部と体部の境に沈 線を巡らす。

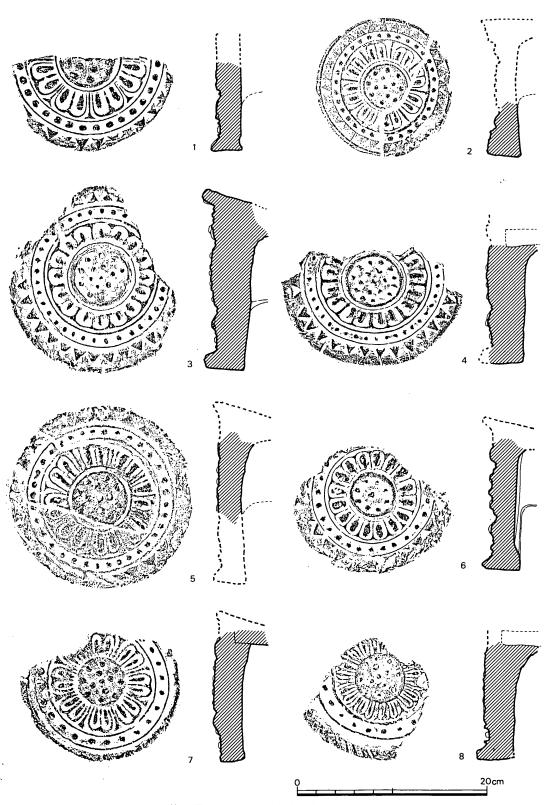


第20図 S X 2508出土土器実測図

## **瓦** 類(第21·22図、図版87·88)

この調査で出土した瓦類は軒丸瓦149点、軒平瓦160点および文字瓦、文様博1点、鬼瓦片5点、面戸瓦1点である。これらは溝SD320の上層、中層、下層から出土したが、上層、中層出土瓦と下層出土瓦の間には若干の混入はあるにせよ前者が平安時代、後者が奈良時代を主体に出土している傾向を見い出せる。ここでは昭和46年度の発掘調査で出土した瓦を合せて報告すると共に下層出土瓦を中心に述べることとする。軒丸・軒平瓦の出土量と内訳については巻末の別表に示した。

軒丸瓦は19型式に分類できる。第21図-1は老司Ⅱ式と呼ばれているもので9点出土した。 約2分の1の残存であるが、中房に1+5+9の円圏を伴う蓮子を配し、蓮弁は端正で複弁八 弁蓮華文をなす。外区内縁は珠文、外縁には正三角形に近い凸鋸歯文を配している。瓦当裏面 は刷毛目によって調整されており、下半部には周縁に沿って幅1cm前後の凹みが認められ、指 ナデ調整を行っている。2は1点出土した。1にくらべ瓦当径は一回り小さくなり、完存する 例から中房は1+4+8の蓮子を配する複弁八弁蓮華文である。外区は内区より一段高く平坦 で、珠文と鋸歯文が同一面上にある。黒色に焼成され軟質である。3は21点出土し、総数の 14%を占める。中房内に1+6+10の蓮子を配する複弁八弁蓮華文である。弁区幅が狭いため 弁は幅に対し長さが短くなり、子葉は盛上りが大きく円形に近い形をなす。珠文36個、凸鋸歯 文33個を配している。瓦当裏面はナデによって仕上げているが、下半部に凸帯を設ける例もあ る。4は12点出土した。3と比較的類似しているが、中房蓮子は、1+6+12で、外区珠文38 個、凸鋸歯文30個である。蓮弁は3より若干長くなる。瓦当裏面はナデによって丁寧に仕上げ ており、下半部に凸帯を設けるものとそうでないものがある。5は3点出土した。小片ではあ るが完存する例から中房は1+4+8の蓮子を配する複弁八弁蓮華文である。外区内縁には珠 文34個、外縁に29個を配している。瓦当面は平坦で蓮弁の盛上りはない。6は3点出土した。 この瓦についての瓦当文様、技法の説明は第87図-1の説明を参照されたい。7は54点出土し、



第21図 SD320出土軒丸瓦拓影·実測図

軒丸瓦総数の36%を占め、今回出土した中で最も多い。鴻臚館式で中房に1+4+8の蓮子を配する複弁八弁蓮華文で、外区内縁に珠文24個を配している。黒色に焼成されたものが9割を占めており、これらは鴻臚館式軒丸瓦の特徴といえよう。8は11点の出土である。第87・90次調査でも出土しており、複弁九弁蓮華文で中房に1+4+8の蓮子を配している。瓦当裏面は丁寧にナデ調整を行っている。

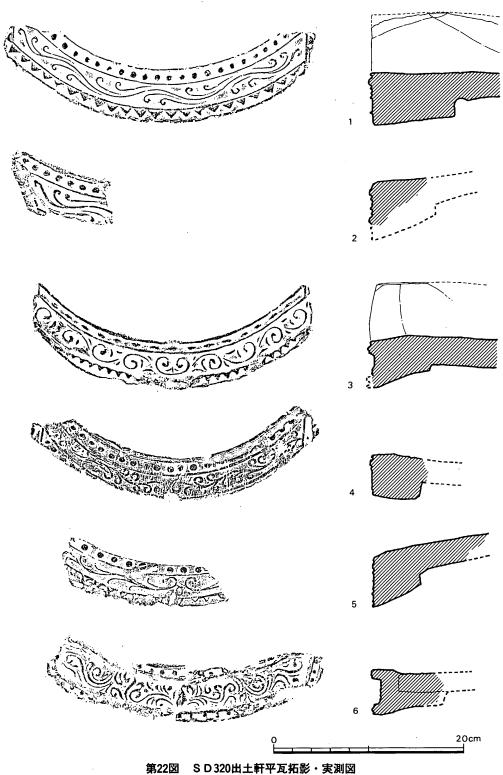
軒平瓦は12型式に分類でき、このうち下層出土のものは6型式である。第22図-1は老司Ⅱ 式で41点が出土し総数の26%を占める。第21図-1の軒丸瓦と組合うものである。内区は右か ら左へ流れる扁行唐草文であるが、右端蔓草は他の蔓草に比べ逆向きになる。上外区は珠文25 個、両脇区と下外区には凸鋸歯文を配する。粘土紐の巻上げによる成形で、顎部は粘土板を張 り付けたものと一部粘土を継ぎたしたものがある。2は、これまでの調査でも数点検出してい るが、完存するものはなく文様構成は定かでない。左端の蔓草の流れからすると1の右端蔓草 の逆向きになり、左から右へ流れる扁行唐草文と考えられる。3は鴻臚館式で74点が出土し、 軒平瓦総数の約半数近い46%を占めている。中層、下層からの出土が多い。中心に「小」字形 の子葉をおき、曲線文からなる中心飾を配し、左右に4回反転する均整唐草文である。上外区 は杏仁様の珠文15個、下外区は下向凸鋸歯文を密に配している。平瓦凸部は縄目と平行線の叩 き2種がある。 4 は14点出土。内区は中心に向って左右から蔓草が派生する均整唐草文である。 上・下外区はボタン状の珠文を配するが、4の下外区は削り取られている。また上外区には布 目痕が認められる。顎は段顎で縄目の叩きである。5は10点出土した。曲線文の中心飾を配し、 左右に4回反転する均整唐草文である。文様の彫りが浅く、蔓草は細い線で表現されている。 顎は5㎝の段顎でヘラ削り調整を行っている。6は下層から1点出土した。桃実様の中心飾を おき左右に変化に富んだ蔓草を配する均整唐草文である。上・下外区および両脇区は珠文であ る。顎は段顎から曲線顎に変化する過渡期に属し、貼付けによっている。平瓦凸面は細い正格 子目の叩きで「大国」銘が認められる。

文字瓦は総数336点が出土し、叩き、書体などから「平井」銘10種、「佐」銘8種、「賀茂」銘5種に細分される。なかでも10点以上を超えるものに「平井瓦屋」、陰刻の「平井瓦」、陽刻の「平井瓦」、「平井」、「佐」、「小 1 瓦」、「八年」銘などがあり、前三者が10%~15%前後の出土率を占めている。しかも中層、下層に集中して出土しており、上層は数点のみである。また「小 1 瓦」銘も同様の出土傾向を示している。

## 木簡(図版72・73)

本次調査では、昭和46年度に5点、本年度に10点、合わせて15点の木簡を検出したが、いずれもSD320から出土したものである。はじめにそれらについて概括的に見ておこう。

すべてに墨痕が見られるわけではないが、それらを形態的に分類してみると、まず何らかの 原因によって損傷を受けているためにその原形を特定できないもの(081型式、以下の型式分



ALLE COCCETTIVATE XINE

類および各種の記号は木簡学会のそれによる)が12点もあるが、これは出土遺構が溝であることとも無関係ではないと考えられる。残りの3点は、長方形の材の上端近くの左右両辺に切り込みをいれたもの(032型式)および題籤と笹塔婆の一種と推定されるもの各1点であるが、後二者は061型式に分類できるだろう。

次にそれらに墨書された文字について見てみると、1字以上を判読ないし推読できるものは 6点にすぎない。このほかに墨痕を確認できるものが5点見られるが、いずれも腐蝕などのた めに断片的にしか残存しておらず、具体的な文字を想定することはできない。そして残りの4 点はその形状からして木簡ないし木簡の一部とみなしうるものであるが、現状では墨痕は全く 認められない。

以下、出土木簡のうち代表的なものについて概要を報告し、合わせて若干の所見を述べる。 (1)

061型式。柾目。中層出土。軸部の大部分を欠失しているが、題籤の頂部であり、表面および各辺はきれいに整形されている。その法量は、長さ4.9cm、幅2.1cm、厚さ0.5cmである。また残存軸部の断面は方形を呈し、幅は0.4cmである。裏面には縦方向の凹みが見られるが、これは腐蝕による二次的なものと考えられる。表裏両面ともに墨痕は全く認められないが、墨書面が削り取られたのか、あるいは整形されただけで、結局は墨書されなかったのかは明らかでない。表面の状況から推せば、後者の可能性が大きいように思われる。

# (2) 日置マカ良

081型式。板目。下層出土。左右両辺については確認できないが、上下両端ともに折損している。現存法量は、長さ10.7cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm。各文字の大きさは必ずしも一定しておらず、とくに「置」字は大きい。第4字は現状から「力」字と判断したが、人名であることを考慮すれば、本来は「刀」字のつもりであったと解した方が妥当と考えられる。この日置部刀良がいかなる人物であったかは明らかでないが、西海道における日置部に関しては、『和名抄』に肥後国玉名郡日置郷、薩摩国日置郡、同じく薩摩郡日置郷などが見える。

# 

032型式。板目。下層出土。若干の損傷は見られるが、ほぼ完形とみなしてもよいだろう。その法量は、長さ27.2cm、幅2.0cm、厚さ0.6cmである。表面はとくに上半部が腐蝕しており、断片的な墨痕が見られる程度にすぎない。第1字は示偏の文字であるが、旁部の墨痕は認められない。以下の中部にかけての墨痕はいずれも字形をなさない。下半部は、第1字との位置関係からして、いわゆる割注式に記されていると考えられるが、その左側には墨痕を確認できない。下半の「□□」は「十一年」が続くことから年号と考えられ、それは前述のようなSD320の時期から推して九世紀初頭前後のものであろうし、十一年が存することからして、宝亀、延暦、弘仁などが該当する。とくにその残存字形を考慮すれば、延暦が最もふさわしいように

思われ、延暦十一年は792年に当たるが、墨がうすいため断定するには躊躇せざるをえない。

• □□□□□東賴舲賴舲舲

081型式。柾目。下層出土。上下 2 片に折れている。文字の位置から見て左辺は二次的に切断されており、右辺および上下両端も原状を保つかどうか明らかでない。現存法量は、長さ 26.2 cm、幅1.9 cm、厚さ0.3 cm である。内容的には習書であろう。第 $1 \sim 4$  字は墨がかなりうすく、また断片的であるが、形状的には下半部の「類」字によく似ており、同字と推定される。第 $7 \cdot 9$  字に見える「頼」字の字義は「頭がかしいで正しくない」であるが(『大漢和辞典』)、その習書がいかなる意味をもつのかは明らかでない。第5 字および「輪」と判別される第8 字などの字義も明らかではない。裏面右行の「ロ」字はいずれも墨がうすい。左行については第5 字以下の左側に墨痕が見え、表面の文字から推せば、「頼」字のくりかえしであろう。

(5)	×
	忌頓首絡絡 絡□絡[]
	• ×□正正月月月月月月月月月 ×
	1再14年14年14年14年14年14年14年14年14年14年14年14年14年1
	頓頓頓頓 □□净净净

081型式。柾目。上下両端は折損している。現存法量は、長さ20.4cm、幅3.7cm、厚さ0.4cmである。昭和46年度に検出したもので、『大宰府史跡出土木簡概報(一)』では木簡6として報告したが、その後の知見を加え、釈文を上記のように訂正する。内容的には習書であり、「狢」字は「啓」字の異体字である。

(6) • ×□五 九斤二両二分四<sup>(株2)</sup>× □ 烏 賊 □ □ · (☆\*) • ×□ □ 荒□七□ ×

081型式。柾目。中層出土。右辺は上半部の欠損を除いて原形をとどめているようであるが、左辺は二次的に切断され、上下両端は欠損している。現存法量は、長さ $9.6\,\mathrm{cm}$ 、幅 $2.0\,\mathrm{cm}$ 、厚さ $0.3\,\mathrm{cm}$ である。表面は第1行が第2行の右半に重なっており、また両行の筆跡も異なっているが、その関係は明らかでない。第2行目最下端の文字は貝偏であり、習書の可能性も考えられるが、原形も明らかでないし、断定はできない。第1行目を習書とはみなしがたいので、少なくとも2度の異なった機会に墨書されたとも考えられる。裏面の「荒□」は腐蝕のため判読できない。

# (7) • □ 上□ □

081型式。板目。各辺とも損傷している。現存法量は、長さ15.1cm、幅1.1cm、厚さ0.6cmである。腐蝕および損傷のため断片的な墨痕が見られるのみで、判読しがたく、具体的なことは明らかでない。

以上、出土木簡のうち代表的なもの 7 点について概要を報告し、若干の所見を述べたが、最後に一言しておこう。点数も少なく、しかも溝からの出土でもあるので、あるいは単なる偶然かもしれないが、いわゆる習書木簡が目立つように思われる。(4)と(5)は明らかにそうであり、(6)にもその可能性が考えられる。また、断片的な墨痕のみであるため報告を省略したものの中にも習書と推定できるものがあった。さらに、昭和56年度の第76次調査においても、同じSD320の南方から習書木簡を 1 点検出している。現時点でこのような習書木簡の出土の意味を明らかにすることはできないが、これらはこの溝の近辺に位置した施設において書かれたものであろうし、遺構の性格を考えるための一つの手がかりとなるように思う。

## 木製品(第23・24図、図版82)

木製品は主に南北大溝SD320の中層腐植土および下層の腐植土、砂土から出土した。

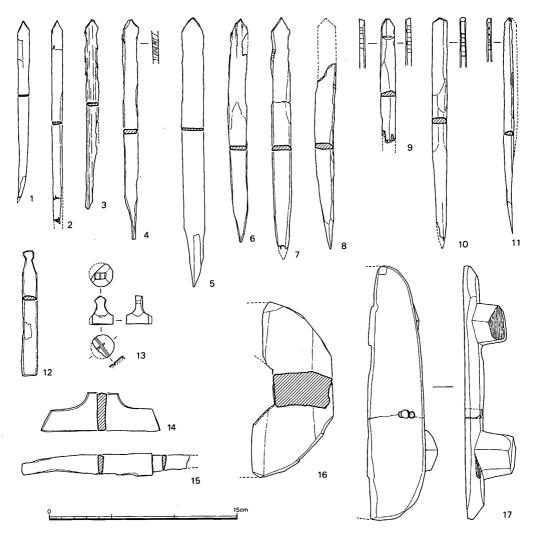
削掛け( $1\sim11$ ) いずれも薄板の頭部を圭頭状にし、下端を尖らせたもの。側面の加工の有無により3種類に分類できる。 $1\cdot2$  は厚さ $1\sim3$  mmの極く薄い板を加工したもので、側面の切込みはない。両面とも割載のままである。いずれも下端部を欠失している。 $3\sim8$  は側面に上・下から切込みをいれている。ただし5 は加工痕跡が明確に観察できない。表面は割載のままのものと一部に荒い削りを加えるものとがある。 $9\sim11$ は通常の削掛けのように深く切込みを入れるのではなく、両側面の肩部に主軸とは直角方向に5 ないし7 個の刄形を入れる。9 は片面にやや丸みを持たせ頭部に切込みを入れる。10、11 は両面を荒く削り丸味を持たせている。

簪形木製品(12) 断面が長円形の板材の一端を両側面から V 字形の切込みを入れて人頭形に作り出す。長さ10cm、厚さ0.4cm、板目材。

木印(13) 木目の細かな材を加工したもの。印面は直径1.8cmの円形であるが一部を欠失している。印面中央には鈕とは斜交する方向にV字形の切込みを一本入れる。さらにそれに直交する方向にも同じ切込みを入れるが片側は周縁にまでは達していない。鈕は4方向から削りを加えて分銅形につくり出している。全高2.3cm

琴柱形木製品(14) 厚さ0.8cmほどの板材を凸字形に加工したもの。下半部両端は斜めに切り落す。上半部も同様に斜めに削るが、下半部の境付近はゆるくカーブを描く。上・下端は直に削る。長さ9.5cm、幅3.1cm、板目材。

刀子形木製品(15) 杉と思われる板材を加工したもの。把を着装した状態に作っているが、 刀身部分はわずかに2.5cm位を残すのみで大部分が欠失している。把は幅2cm位であるが、把

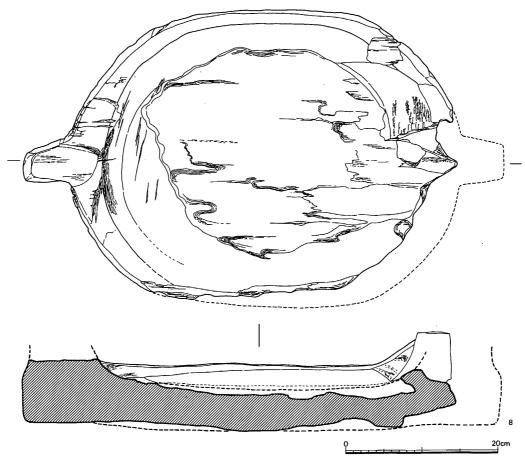


第23図 SD320出土木製品実測図

尻付近はやや狭く「く」字形にしている。板目材。

輪状木製品(16) 厚い板材を手斧で荒くはつって加工している。2分の1を欠失しているが、外周は円形に作ることを意図したものと思われる。中心部に孔を穿っているが、残存部からみて六角形になるものと思われる。表面は荒く削り、裏面は割断のまま。板目材。

下駄(17) 広葉樹と思われる材を加工した 2 枚歯の下駄。 2 分の 1 を欠失しているが、形状は隅丸長方形を呈する。歯は鋸びきでつくる。後方の鼻緒孔は直径0.6cmで錐で穿っている。孔の両脇に径0.4cmの三ツ目錐によると思われる円の痕跡が残っている。歯は前後とも磨滅しているが、前歯の方が著しい。



第24図 S D 320出土木製品実測図

把手付大盤(18) 長径52cm、短径39cmの長円形で、長径の両端に把手が付く。火を受けているため全面が炭化しており加工痕跡を観察することができない。内面はやや舟底形を呈し、底部外面は平坦である。全体的に器壁が厚く底部では約6cmの厚さを有する。口縁部はほとんど欠失しているため詳細は不明である。

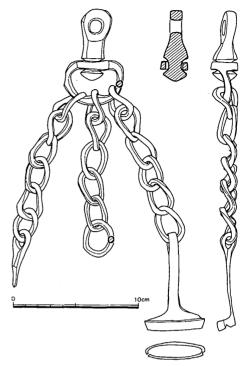
# **鉄製品**(第25図、図版91)

鉄製鎖製品 上部に0.9 cmの孔を有する軸に自在に回転する環を付け、その環に3条の鎖を垂下させる。そして、2条には下端に平面T字形を呈する金具を取り付けているが、うち1条は中途で欠失している。金具の先端は長円形の輪となっている。3条の鎖は46 mmの輪を45 字状に若干ひねり45 個繋いでいる。用途不明。45 D320中層出土である。

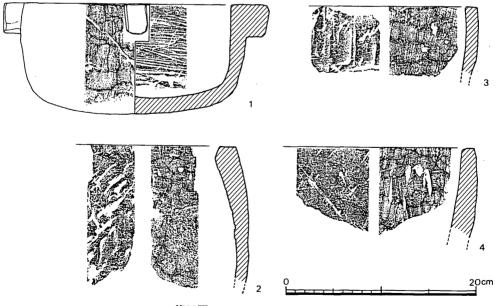
鉄鏃 鉄鏃が十数本ないし数十本が銹着した塊が7個出土している。最大の塊は53本銹着している。尖根式鏃で、茎は円形で基部は0.3cm、篦被中位で0.6cmを測る。身長は1.2cm、身幅

0.6cm、身厚さ0.2cmである。井戸SE2503から2個、SD320中層から5個出土している。 石製品(第26図、図版91)

石鍋(1~4)1は全体の3分の2が残存する。口縁部の平面形が円形に近い隅丸方形を呈し、対応する4個所に断面四角の把手を削り出している。底部はやや丸味を帯びた平底となる。外面の体部と底部の一部は平ノミよる横方向の削りで、底部は横と縦方向の削りを行っている。内面は横方向の乱雑な削りで仕上げる。復原径約23.5cm、器高11.5cm。中層出土。2は体部から口縁部が内彎し、口縁部に向ってしだいに器肉が厚くなる。口縁部に向ってしだいに器肉が厚くなる。口縁部から口縁部にかけて、ほぼ直立し、器肉が均一なものである。口縁端を若干面取りする。上層出土。4は体部から口縁部がやや外傾し、口縁端に向って器肉が薄くなる。口縁



第25図 SD320出土鉄製品実測図



第26図 SD320出土石鍋実測図

部内面を若干面取りする。上層出土。  $2 \sim 4$  はいずれも外面は平ノミによる横方向の削りで、 2 の内面は斜め方向の削りがあり、 3 には縦に打ち込んだノミの痕跡がある。 1 と 2 の外面には煤が付着している。

## 小結

今回検出した主な遺構である南北溝SD320は昭和46年度の第14次調査と昭和56年度の第76 次調査を含め前後3次にわたって発掘調査を実施している。先に第76次調査報告時に検討を試 みているが、若干の相違もみられるので再度SD320について検討を行い結びとしたい。

まず溝の位置関係についてみると、SD320の確認できた最北端は政庁南門の心から南へ約58mあり、最南端は211mある。このことから未発掘部を含め長さ約153m分を確認したことになる。今回検出の溝心と第76次調査時の溝心とは約2.0mのずれがあり方位的には約1.0mのずれがあり方位的には約1.0mのずれがあり若干東偏している。政庁の軸線が真北よりやや東偏していることからすると、それに合せたと考えることができる。溝心は政庁軸線より約192m(1.0mの所に位置している。

次に年代についてであるが、溝の最下層の流れを示す砂層中から、多量の須恵器・土師器等が出土した。これらは八世紀代のもの(八世紀後半代が多い)を中心として、若干七世紀後半代と十世紀代のものを含む。このことから、溝が掘られた年代は必ずしも断定できないが、遅くとも八世紀後半代には確実に存在し、最下層の流れは十世紀代に及ぶと考えられる。中層の埋土中には十世紀中頃、後半代のものを含み、若干十一世紀前後のものを含む。また上層埋土中からは十一世紀前後の時期までが認められる。溝の廃絶については第76次調査ではSD320廃絶後の流れであるSD2010があり、それは十一世紀後半代~十二世紀前半代であった。そのことから、SD320の廃絶は遅くとも十一世紀後半代であろうとの結論を得ていたが、今回の調査ではこのSD2010は検出されず、北方においては削平されたことも考えられる。以上のことからするとSD320の廃絶を十一世紀前後の時期に求めることは可能であろう。

# 3 第87・90次調査

本次調査はいずれも土地区画整理事業に伴う事前の調査である。調査地域は昭和58年度に実施した第83次調査地の北側に接し、県道山家一関屋線に隣接している。昭和58年度に実施した第83・84・85次調査では掘立柱建物17棟や「天平六年」の紀年を有する木簡等が出土した南北溝SD2340などを検出するなど官衙に関する新たな知見を多数得ることが出来た。したがって本調査地の南に接する第83次調査地までは確実に建物の拡がりがあり、また南北溝SD2340も伸びている。これらの調査結果をもとに今回は北側地域における建物群の拡がりと南北溝SD2340の北方における状況の確認などを主たる目的とした。

調査は区画整理事業の進行との関連から2回に分けて実施した。調査対象地の南半分を第87次調査とし、残り北半分を第90次調査として実施した。第87次調査は昭和59年1月15日に開始し、2月25日に写真撮影、実測を含め一応終了した。その後掘立柱柱穴の確認と上層遺構の南北溝SD2335やSX2523が存在するために発掘できなかった南北溝SD2340の発掘作業を行い、3月5日に全作業を終了した。地番は太宰府市大字観世音寺字不丁288-2・6・7・9番地である。第90次調査は昭和59年5月9日に開始し、6月14日に写真撮影、その後実測を行い、掘立柱柱穴の確認などの補足調査を含め7月5日に全作業を終了した。地番は太宰府市大字観世音寺字不丁288-8・15・16番地である。

ここでは両調査を合わせ報告する。

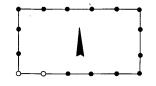
## 検出遺構

今回検出した主要な遺構は掘立柱建物 7 棟、柵 3 条、溝 2 条、土壙 5 基、井戸 1 基、瓦敷遺構 1、それに粘土採掘穴などである。

遺構面は全体に浅く北側地域では床土直下で遺構面となるが、南側では若干の灰褐色土層が みられる。遺構面は北端部と南端部では約50cmの高低差があり、南が低く、ゆるやかに傾斜し ている。遺構が検出される地山の多くは黄色の粘質土層で部分的に茶灰色の砂質土層のところ もある。

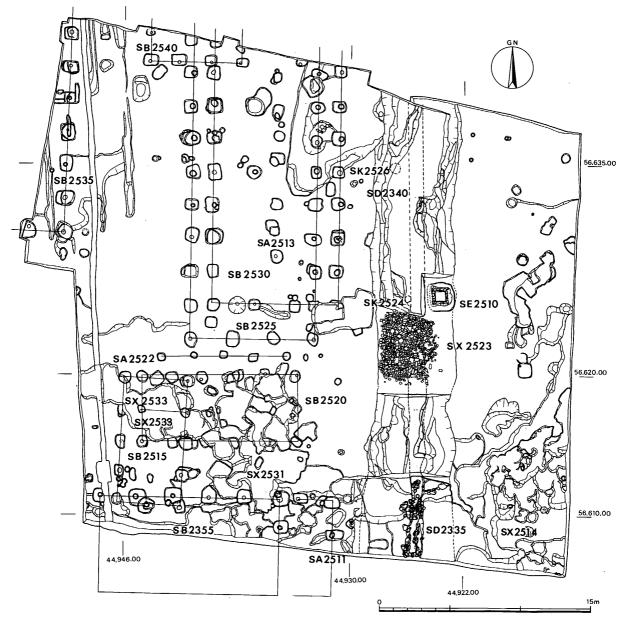
## 掘立柱建物

SB2355 発掘区西南隅部で検出した5間×3間の東西棟建物である。この建物は昭和58年



度に行った第83次調査で南側半分を検出しており、既にその概略は報告しているが、改めてここで報告する。桁行12.75m(42.5尺)、梁行は6.90m(23尺)である。柱間寸法は桁行で2.55m(8.5尺)等間であり、梁行は中央間が2.70m(9尺)で広く、脇

間が、210m(7尺)である。柱掘形は一辺1m前後の隅丸方形を呈し、柱の痕跡が全てに見ら



第27図 第87・90次調査遺構配置図

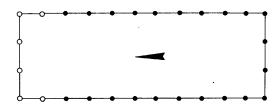
れた。柱穴内の上位で縄目の瓦片がみられたことは注意される。建物方位はN $1^\circ$ 5′W である。 SB2515 発掘区の西南隅部で、SB2355の柱掘形を切る4間×2間の南北棟建物を検出し

た。柱掘形のいくつかはS X 2533で切られており、全くその痕跡を止めないものもある。柱掘形はS B 2355のそれよりも一回り小さく、その形状も円形に近いものや長方形など一定していない。柱痕跡が残っているものもあり、それからすると桁行9.0 m (30尺)、梁行4.5 m (15尺)である。柱間寸法は桁行で、

中央 2 間が2.1 m(7尺)、両脇間が2.4 m(8尺)であり、梁行は2.25 m(7.5尺)等間である。建物方位はN3°25′Wである。柱掘形の切り合い関係からSB2355より新しく、SX2531・2533より古い。

SB2520 SB2515と一部重複する5間×2間の東西棟建物である。柱掘形の多くはSX 2531・2533によって切られているため明確でなく、柱痕跡を止めるのは3個所だけである。正確とは言えないが、東北隅と西南隅に残る柱痕跡から復原すると、桁行10.95m(36.5尺)、梁行4.80m(16尺)である。柱間寸法は桁行で、中央間3間が2.25m(7.5尺)等間、脇間2.1m(7尺)である。梁行は2.40m(8尺)等間である。建物相互の切り合い関係はないが、SX2531・2533より切られており、これよりも古い。建物方位はN0°45′Eである。

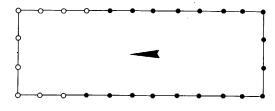
SB2525 発掘区のほぼ中央部で検出した9間以上×3間の南北棟建物で、桁行で9間分を



確認したが、さらに北方の発掘地域外へ延びており、桁行規模については明らかにすることができなかった。柱掘形は一辺1 m 前後の隅丸方形を呈し、そのほとんどに柱痕跡がみられ、東側柱列の南から3番目と

7番目の柱掘形には柱根が残存していた。桁行の総寸法は不明であるが、梁行は8.85 m (29.5 尺)である。梁行柱間寸法は中央間がやや狭く2.85 m (9.5尺)で脇間が3.0 m (10尺)である。桁行については柱痕跡が知られる南から第4柱間と第8柱間までの各柱間の計測値(東・西側の柱列の対応する柱間はそれぞれ若干異なるのでその平均値)は2.41 m・2.35 m・2.24 m・2.40 m・2.37 mであり、第6柱間が2.24 mとやや狭くなっている。また、東側柱列に残存していた柱根間の距離は9.45 m (31.25尺)で第6柱間を計測値に近い整数値2.25 m (7.5尺)をとると残りの3柱間は2.4 m (8尺)の等間になり、柱痕跡の計測値とも余り矛盾がみられない。この建物の桁行は9間以上の規模を有するもので、仮に桁行11間と考えた場合、第6柱間が中央になる。このことから中央柱間のみやや狭く2.25 m (7.5尺)とし他の柱間は2.40 m (8尺)等間のものとして計画されたと考えられる。建物方位は $N1^{\circ}$ 7 Wで、SB2355と同一方位をとる。東側柱列の最北端(南から第9番目)の柱掘形を切って、 $1m\times0.8m$ 大の花崗岩の自然石が斜めに落し込まれている。平らな面があり、礎石の可能性も考えられる。

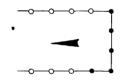
SB2530 SB2525とほぼ同じ位置にあって重複する7間以上×3間の南北棟建物で、桁行



方向で7間分を確認したが、さらに北方の 発掘地域外へ延びており、桁行規模につい ては明らかにすることができなかった。柱 掘形もSB2525と類似しており、柱痕跡も 比較的残存状況は良好であった。桁行の総 寸法は不明であるが、梁行については、 $8.85\,\mathrm{m}(29.5\mathrm{R})$ 、柱間寸法は中央間がやや狭く $2.85\,\mathrm{m}(9.5\mathrm{R})$  で脇間が $3.0\,\mathrm{m}(10\mathrm{R})$  であった。梁行については $8.85\,\mathrm{m}(29.5\mathrm{R})$  をはかる総長、中、央間・脇間の柱間寸法ともに $\mathrm{S}$  B 2525と同じ規模である。桁行については柱痕跡が知られる南から第 3 柱間と第 7 柱間までの各柱間の計測値(東・西側柱列の対応する柱間はそれぞれ若干異なるので、その平均値) は $2.41\,\mathrm{m} \cdot 2.28\,\mathrm{m} \cdot 2.45\,\mathrm{m} \cdot 2.35\,\mathrm{m} \cdot 2.39\,\mathrm{m}$ で、 $\mathrm{S}$  B 2525と近似した数値である。この建物は 7 間以上の規模を有するもので、また  $\mathrm{S}$  B 2525と梁行規模が同一であり、桁行柱間寸法も近似する数値をとること、また建物方位も  $\mathrm{N}$  1°7′W で同一方位であることなどを考慮すると、桁行 9 間以上を有し、柱間寸法も第 4 柱間が7.5  $\mathrm{R}$  で他は $\mathrm{R}$  尺等間を有する同一規模の建物と考えられる。 $\mathrm{S}$  B 2525との先後関係は不明であるが柱穴中に縄目の瓦片が混入している点、 $\mathrm{S}$  B 2355と類似している。

SB2535 発掘区西北端にあり、SB2525・2530の西側で検出した6間以上×1間以上の南北棟建物で、さらに北・西方の発掘地域外へ延びている。柱掘形は一辺1m前後で柱痕跡も残存状況が良好である。桁行は6間分を検出したが、各柱間の計測値は南から2.46m・2.34m・2.34m・2.34m・2.46(?) m・2.30m・2.41mで若干のバラつきがみられるが、その平均値を求めると約2.4mとなり、計画柱間寸法は8尺等間と考えられる。梁行については柱掘形の半分を確認できただけで、柱痕跡も明らかでないため柱間寸法は不明であるが、8尺前後のものであったと考えられる。東側柱列の南から第1番目の柱掘形には自然石を礎板として使用していた。建物方位はN 2°10′W である。

SB2540 発掘区北端にあり、SB2525・SB2530と重複する1間以上×3間の南北棟建物

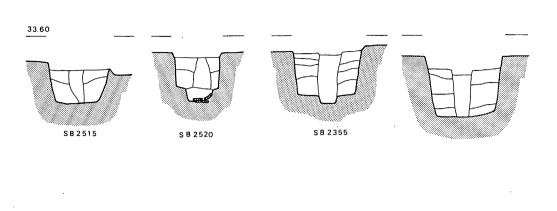


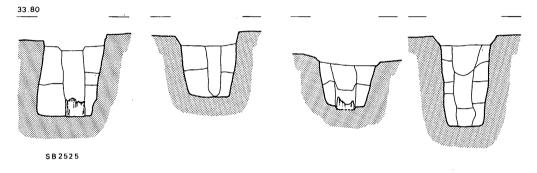
で、さらに北方の発掘地域外へ延びている。柱掘形は長方形を呈し先述のSB2525・2530に比べやや小さく、深さも若干浅い。柱痕跡は全てにみられ、その各柱間の計測値は梁行で東から2.08m・2.28m・2.08mで、中央間がやや広く7.5尺、脇間が7尺のものである。桁行

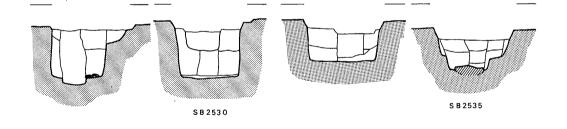
は1間分のみであるが $2.06\,\mathrm{m}$ (7尺)の数値が得られた。建物方位は梁行方向で余り正確とは言えないが、SB2525・2530と同一方位をとっている。

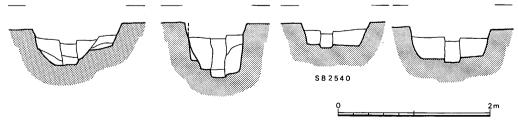
## 柵

**S A 2511** S B 2355の東側で検出した「コ」字形をなす柵である(南側半分は既に昭和58年度の第83次調査で検出している)。東西方向は1間でSB 2355の北・南側柱列に柱筋を通し、南北方向は3間でSB 2355の東側柱列から約4.35 m(14.5尺)の距離でそれに平行である。東西方向はSB 2355の隅柱から約1.8 m(6尺)の間隔をおいて始まる。柱間寸法は2.55 m(8.5尺)である。南北方向は南から2.25 m(7.5尺)・2.40 m(8尺)・2.25 m(7.5尺)の柱間寸法を有する。SB 2355に柱筋を通しており、方位的にも同じであることから、SB 2355に付属する施設と考えられる。









第28図 掘立柱建物柱掘形断面図

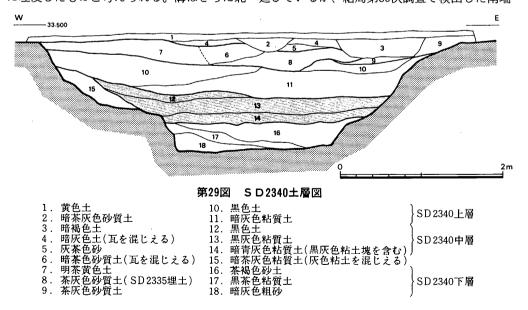
SA2522 SB2520 & SB2525 o間にある東西方向の柵である。柱掘形は50cm前後のものでプランも一定しておらず、深さも浅い。柱痕跡がないので明確ではないが、柱間寸法は東から2.4m(8尺)、2.1m(7尺)、2.1m(7尺)、2.4m(8尺)である。方位としては若干西へ振っており、SB2520の建物方位に近似している。このことから考慮すればSB2520に付属する施設の可能性が強い。

## 溝

SD2340 発掘区の東端寄りで検出した南北溝である。前年度第83、84、85次調査で検出され、木簡、その他溝からの出土遺物の重要性が知られるにいたった。今回はその北側にあたり南北に約33mを検出したが、溝中央部に瓦敷遺構(SX2523)と南端部に石組溝(SD2335)があるため、その中間6m(南半)とSX2523の北半を完掘した。南半は幅約5.5m~6.0m、最南端部で深さ約1.93mあり、北半では幅約5.8~6.2m、深さ約1.15mである。溝底面は北端で絶対高32.360m、南端で31.980mあり、約100分の2でゆるく南へ傾斜している。

溝埋土は大きく3層に分かれる(第29図)。下層は暗灰色粗砂®と、茶褐色砂土®がかなり厚く堆積し、それに混在して黒茶色粘質土®が認められ、流れの強かったことを物語っている。中層は暗青灰色砂質土®(黒灰色粘土塊を含む)と黒灰色粘土®、黒色土が比較的厚い層をなし、木簡、土器、瓦等はこの層からかなりまとまって出土した。上層は暗灰色粘質土®と黒色土®が認められ、この層からも土器、瓦、木簡等が検出された。上層から上の層にはSD2335、SX2523等が造られるが、SD2335の埋土(茶灰色砂質土)⑧をのぞいた他の層は整地された層と考えられる。

S D 2340から出土した遺物は、先の第83、84、85次出土遺物と年代的に大差なく、早い時期 に埋没したものと考えられる。溝はさらに北へ延びているが、結局第85次調査で検出した南端

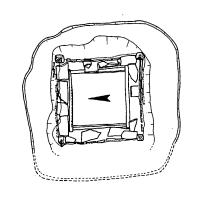


部までの総延長131.50mを確認したこととなる。

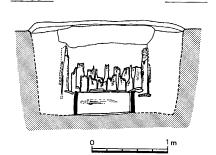
SD2335 第83次調査で検出した石組溝(SD2335)の延長で、SD2340廃絶後に造られた溝である。発掘区南端から約4.0m付近まで石組がみられるものの残存状態はきわめて悪く、側石の石組と石敷が比較的残っているのは長さ1m分くらいである。この部分での溝幅は約50cm、深さ約40cmで、第83次調査結果とほぼ同じである。北方に行くに従って溝のプランは不明瞭となり、わずかに砂の流れが認められるだけである。この溝が全てにわたって石組であったのかは抜き取りの痕跡もないので定かではない。

## 井戸

SE2510 発掘区東端にあって、検出した溝SD2340のほぼ中央部に位置し、溝埋土に切り込んで構築された井戸である。掘形はほぼ一辺約1.9mの隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さ約1.2mである。上部は四隅に一辺8.0cm前後の断面方形の角柱を配し、幅10.0cm~12.0cm、厚さ2cmの板材を縦に整然と立て並べている。最も保存が良い西北の隅柱は残存高約



33.60



第30図 S E 2510実測図

60cmである。四隅の角柱から角柱までの長さは東西94cm、南北98cmでほぼ正方形のプランを呈する。したがって縦板材は8~9枚程度並べられている。縦板は内側と外側の二重になっており、内側の板材の合せ目に外側板の中央部がくるよう配されている。下部は井籠組の井戸側が1段分(高さ約28cm)残存していた。一辺の長さは内法で69.8cm~71.2cmあり、厚さ約5.6cmである。上部縦板材と井籠組上端部との間は約1.5cm前後あり格子目叩きの平瓦、丸瓦が敷かれていた。平瓦の中には「筑前」「賀茂瓦」、「佐瓦」等の文字瓦が含まれていた。

## その他の遺構

S X 2514・2531・2532 発掘区の西南部と東南部で顕著にみられる黒色粘土の採取のための掘削穴である。これはS B 2515・2520などの柱掘形を切っており、その掘削はプランや深さも一定でなく乱雑である。これは砂質の部分にはみられず、黒色粘土部分のみ集中して掘削されている点は注意される。

S X 2533 2 個の柱掘形がS X 2532を切込んでおり、いずれも柱根がわずかに残存していた。この柱穴が個々に独立したものか、柵になるものかは不明である。

S X 2523 S D 2340の中央部に検出し、溝S D 2335が廃絶された後にできた瓦敷遺構である。

瓦敷は南北約5m、東西約4mを測り、破砕した丸・平瓦が密に検出されたが、なかには丸瓦、 平瓦が並列する個所も認められた。瓦は縄目・格子目叩きの丸・平瓦が混在し、他に無文塼、 文字瓦(平井瓦、佐瓦、賀茂瓦、筑前)がある。

# 出土遺物

## SB2530出土土器 (第31図)

# 須恵器

杯(1) 直接に接合しないが同一個体と考えられ、図上復原した。体部と内底部の大部分はヨコナデで、内底中心部はナデ調整する。胎土中に砂粒は少なく精良である。柱掘形内より出土。

# SB2540出土土器 (第31図)

## 須恵器

皿(2)底部はヘラ切りで生乾燥後に器面調整をして平滑にしている。体部との境は手持ちヘラ削りしているため境界が不明瞭となる。内底中心部はナデ調整する。口縁部に漆が付着している。復原口径18.7cm、器高3.2cm。

# S D 2335出土土器 (第31図、図版56)

# 土師器

皿(3・4) 3は復原口径14.7cm、器高1.7cm。底部はヘラ切り、体部はヨコナデである。4 の底部は丁寧に回転ヘラ削りし、体部から内底はヘラミガキを施す。胎土にはほとんど砂粒を含まない精良な土器である。復原口径20.4cm、器高2.8cm。

杯(5・6) 5 は底部をヘラ削り調整する無高 台の杯である。磨滅のため全体に不明瞭である。 6 は内外面をヘラミガキするが、内面については 不鮮明である。

椀(7)底部を除いて内外面を回転ヘラミガキ する。底部に「有」の文字を線刻する。

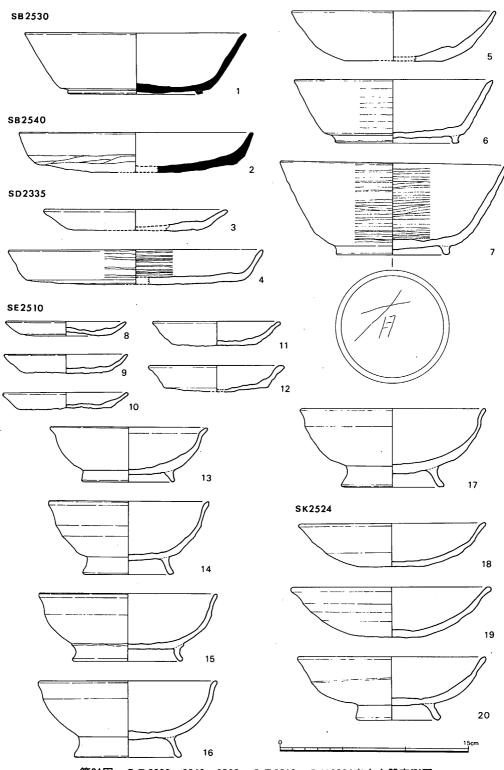
S E 2510出土土器 (第31図、図版56)

## 土師器

皿(8~12) 口径9.7cm~10.0cm、器高1.2cm~1.5cmのものと、口径10.3cm~10.9cm、器高2.0cm~2.1cmがある。いずれも底部はヘラ切りで、板状圧痕を有する。

椀(13~17) 体部中位が丸味をもち、口縁部を

	口径	器高	底径·高台径
3	14.7	1.7	9.6
4	20.4	2.8	17.5
5	16.2	4.0	7.6
6	15.8	5.1	9.8
7	18.0	7.4	9.0
8	9.7	1.2	7.2
9	9.9	1.5	6.0
10	10.0	1.3	7.5
11	10.3	2.0	6.9
12	10.9	2.1	8.2
13	12.6	4.5	7.5
14	12.8	5.9	7.3
15	14.2	5.5	8.7
16	14.3	6.2	8.6
17	14.9	6.3	8.2
18	14.9	3.5	
19	15.9	4.0	
20	15.0	5.1	6.7



第31図 SB2530・2540・2528、SE2510、SK2524出土土器実測図

外反させる椀である。全体はヨコナデにより成形し、内底はナデ調整する。

SK2524出土土器 (第31図、図版56)

## 土師器

丸底の杯(18~20) いずれも内面をミガいて器面調整する。19の内面には籾殻状の炭化物が付着している。20は $18\cdot19$ の形態のものに高台を貼付けしたものである。

S D2340出土土器 (第32~41図、図版49~55・92)

## 須恵器

蓋 $(1\sim27)$  1・2のように身受けの返りがあるものも少数ではあるが出土している。両者ともに外天井部はヘラ切りのままである。1の外天井部にヘラ記号、内天井部には墨が付着している。転用硯とすれば大宰府出土例中最古に位置付けられる。 $5\sim7\cdot11\cdot16\cdot21$ のように口縁部が小さくなったものも含まれる。昨年度に報告した第84次調査出土品にはみられなかった現象である。 $11\cdot18$ の外天井部は未調整である。 $6\cdot18$ は内天井部を硯部としている。 $11\cdot17\cdot25$ に墨書があるが、判読できるものは25の「勝万呂」だけである。11の外天井部には板状圧痕がある。

杯( $28\sim67$ )  $29\cdot30\cdot32\cdot49\cdot52\cdot65\cdot69$ の外底部には回転へラ削り調整があるが、他はへラ切り離しのままである。30のヘラ削りは丁寧で、体部中位から始まる。 $36\cdot56\cdot58$ の外底には板状圧痕がある。47の底部にはヘラによる家らしき文様がある。 $30\cdot32\cdot40\cdot48\cdot51$ は灯火器として使用されたためであろう内面に煤が付着している。46の内面には赤色顔料、68の内面には漆が付着している。 $51\cdot56\cdot60\cdot69$ には墨書があるが、判読できるのは51の「杉寺」、60の「卍」である。

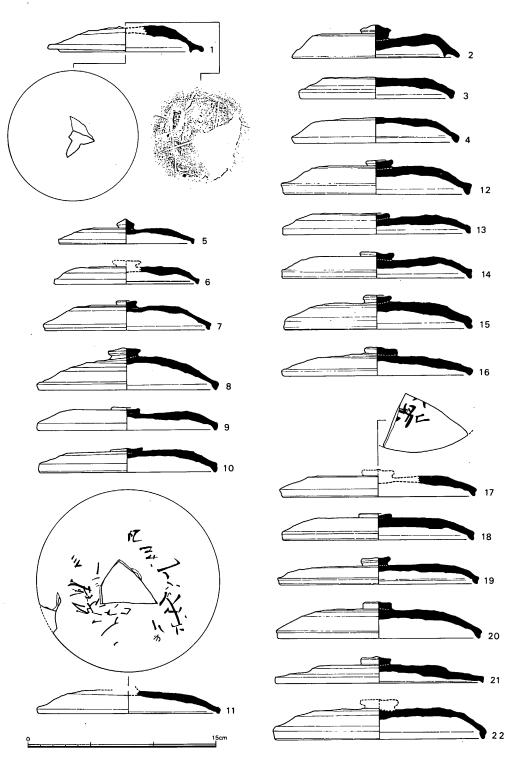
皿(70~73)全て回転へラ削り調整。70の口縁端部は平坦にし、外側を若干ひねり出している。

高杯(74~79) 深い杯部を有する74・75と浅い皿形品を杯部とする二種類が出土した。杯部底部は回転へラ削り調整である。78の脚部にはシボリ目がある。75の脚部中位に1条の沈線があるが一巡しない。74の内面には油煙が付着している。

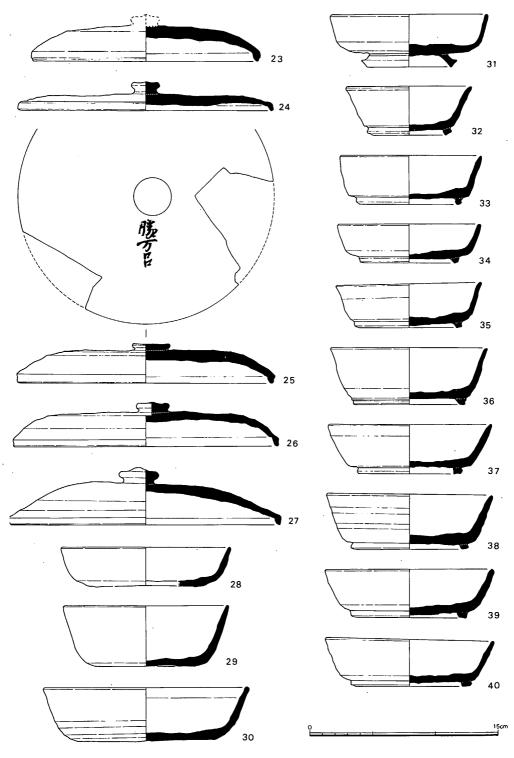
壺蓋(80~82) 天井部は回転ヘラ削り調整である。80は口縁部内面に1条の粘土紐を貼付けているため端部が内傾している。82は撮が剝離した痕跡や貼付け時のヨコナデ等はない。

壺(83~85) 83は「薬壺形」の壺である。体部下位から底部全面に回転へラ削り調整がある。 胴部最大径は中位近くにあり、20cmを測る。胴高指数は44.5、径高指数は77.5である。84は短 頸の小壺で、肩部と胴部の違いは明瞭で稜をなし、径10.4cmを測る。底部は手持へラ削り調整 を行う。85は短頸の壺に復原できる体部の破片である。肩部に1条の沈線が巡る。体部中位以 下は回転ヘラ削り調整をしている。

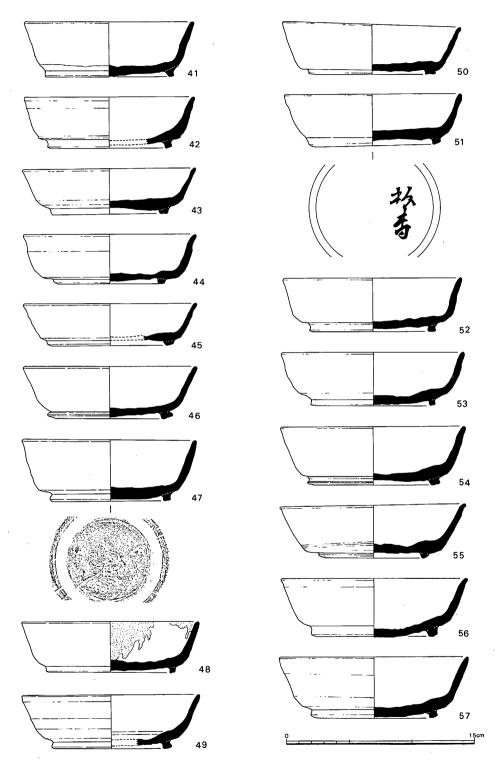
鉢(86~91) 86は平底の深鉢の残片である。残存部にはヘラ削りなどの調整はない。生乾燥



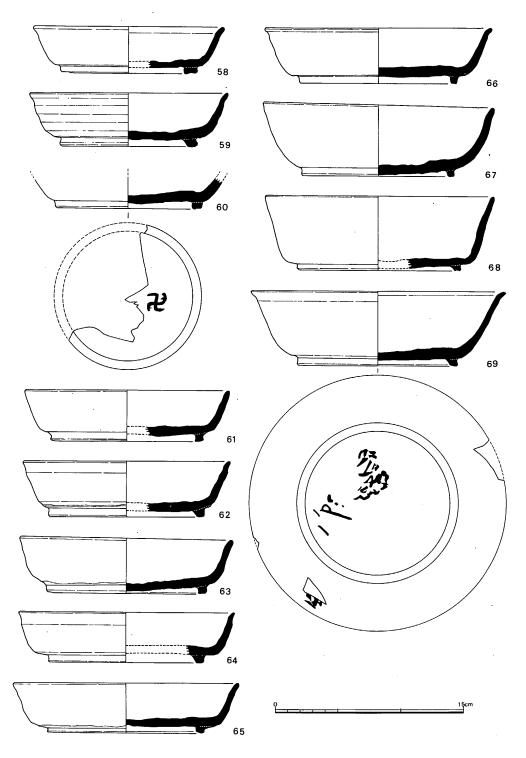
第32図 S D 2340出土土器実測図(1)



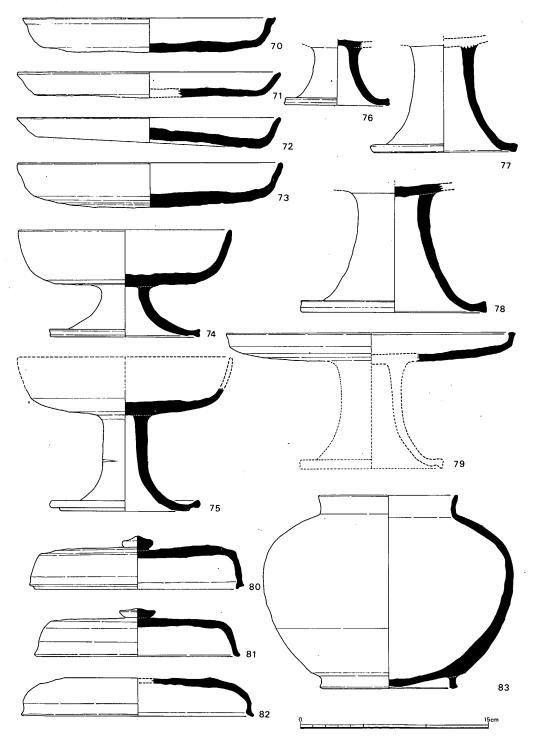
第33図 S D 2340出土土器実測図(2)



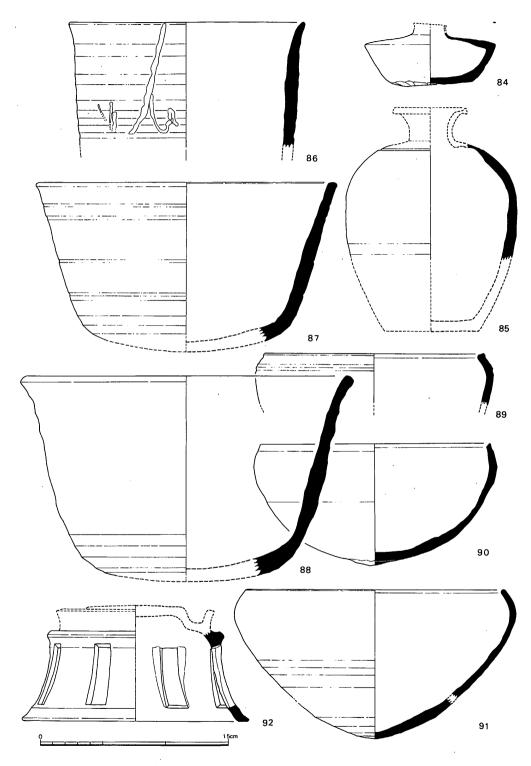
第34図 S D 2340出土土器実測図(3)



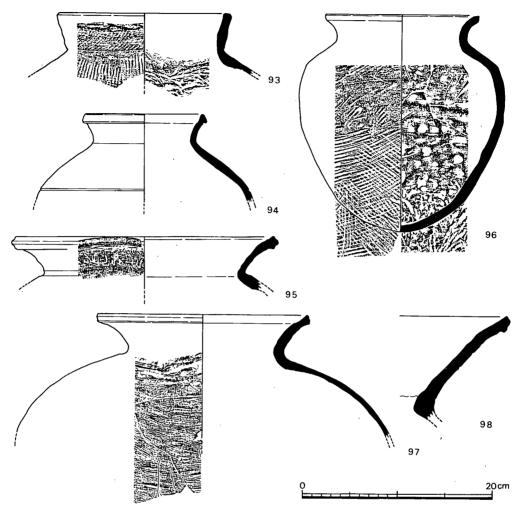
第35図 S D 2340出土土器実測図(4)



第36図 S D 2340出土土器実測図(5)



第37図 S D 2340出土土器実測図(6)

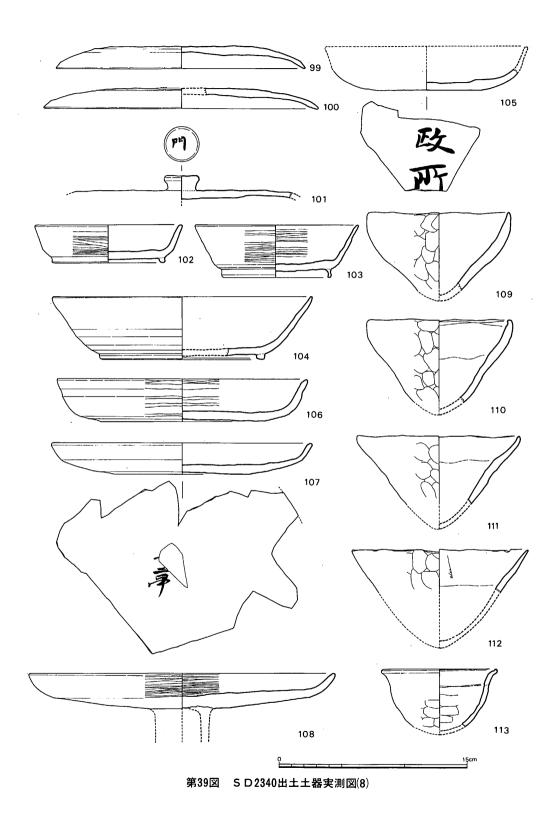


第38図 S D 2340出土土器実測図(7)

時にヘラにより文様らしきものを描いているが意味は不明である。87・88は丸底で体部下位から底部にかけて回転ヘラ削りをしている。87の沈線は意識的なものではなく、成形時に生じたものである。84は口縁端部と肩部に2条の突帯が巡る。90・91は鉄鉢形の鉢である。90は丸底にした後に粘土を貼付け、尖底風に仕上げている。両者とも体部中位以下は丁寧な回転ヘラ削り調整をしている。

硯(92) 円面硯の脚部小片である。透しの位置が 2 個所知れるだけで、その幅は明らかでないが、他の例から想定復原した。精選された粘土を用い、灰色で硬質に焼成している。

 $\mathfrak{Z}(93\sim98)$  93は頸部まで平行叩き目があり、頸部はヨコナデにより、体部上位はカキ目によって消されている。94は体部上位に 1条の沈線が巡り、残存部外面全体にカキ目があり、叩



- 54 -

	口径	器高	底径·高台径
1	12.5	2.0	
2	13.3	3.7	
3	12.1	6.6	
4	13.0	2.0	
5	10.8	2.0	
6	11.5		
7	13.2	2.4	
8	14.0	3.4	
9	14.2	1.8	
10	14.2	2.0	
11	14.4		
12	14.9	2.3	
13	15.0	1.6	
14	15.1	2.1	
15	15.0	2.7	
16	15.2	2.3	
17	15.3		
18	15.3	2.1	
19	15.7	2.1	
20	16.1	2.9	
21	16.5	2.1	
22	16.6		
23	18.0		
24	20.3	2.3	
25	20.4	3.1	
26	21.0	3.5	
27	21.6	4.6	
28	13.5	3.1	9.5
29	13.2	4.8	7.8
30	16.4	4.3	11.0
31	12.6	4.2	7.7
32	10.0	3.9	6.8
33	11.3	3.9	8.4
34	11.4	3.1	7.8
35	11.6	3,5	8.5
36	12.4	4.6	9.0
37	13.0	3.9	8.2
38	13.3	4.4	9.4
39	13.4	3.9	9.7
40	13.5	3.7	9.7
41	13.5	4.4	10.3
42	13.6	4.1	10.0
43	13.8	3.6	9.1
44	13.8	4.0	8.8
45	13.9	3.3	10.1
46	13.9	4.2	10.0
_47	13.9	4.9	9.6

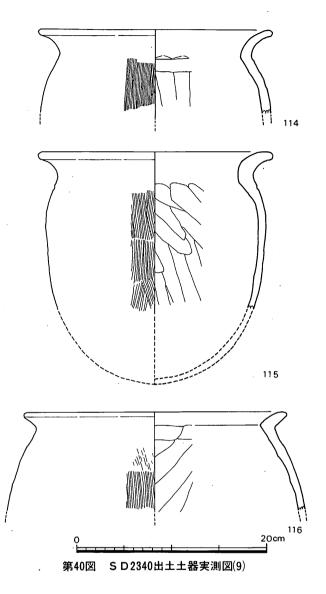
	口径	器高	底径·高台径
48	14.1	4.1	10.3
49	14.2	4.3	9.6
50	14.2	41	10.1
51	14.2	4.1	10.5
52	14.3	4.3	10.0
53	14.7	4.3	10.0
54	14.8	4.7	10.6
55	14.9	4.2	8.7
56	14.9	4.7	10.0
57	15.1	4.9	10.1
58	15.2	3.7	10.9
59	15.9	4.3	10.9
61	16.3	4.1	12.2
62	16.6	4.5	12.4
63	17.0	4.4	12.7
64	17.7	4.0	12.4
65	18.0	4.0	12.5
66	18.1	4.4	12.4
67	18.4	. 5.7	12.1
68	18.4	5.9	13.1
69	20.3	5.9	12.7
70	20.1	2.8	16.9
71	21.0	2.1	18.3
72	21.1	2.0	17.8
73	21.2	3.6	18.5
74	17.0	8.5	11.9
79	23.1		
80	16.0	4.2	
81	16.4	3.9	
82	18.4	3.0	
83	11.1	15.5	11.0
86	18.8		
87	24.0	(13.5)	
88	26.6	(16.5)	
90	18.3	9.7	
91	20.6	11.9	
96	16.2	22.8	
99	19.9	1.7	
100	21.9	1.6	
102	11.7	4.0	9.1
103	13.1	4.2	8.7
104	20.8	5.0	13.1
106	20.0	3.4	13.0
107	20.9	2.5	10.8
108	24.5		
113	9.3	(5.3)	
115	24.7	(24.5)	

きはない。95の頸部に「宇治部君」という焼成前のヘラ描文字がある。96・97は外面に平行、内面に弧状の叩き目がある。96の内面上位には成形時の指頭痕が調整されることなく残っている。この指頭痕のある外面にも平行叩き目があり、当具としての叩き目が残存していないのは理解に苦しむ。98は頸部に3条の沈線を巡らし、体部内面には弧状の叩き目がある。

# 土師器

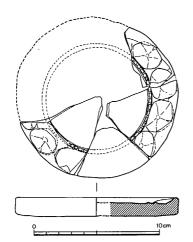
蓋(99~100) 99・100の外天井部は丁寧な回転へラ削り調整、口縁部はヘラミガキ状に器面調整している。あるいは皿形品かも知れない類例の乏しい資料である。101は撮頂部に「門」の墨書がある。外天井部は回転ヘラ削り、内面はヘラミガキしている。

杯(102~105) 102は外面、103 は内外面をヘラミガキしている。 104は体部中位以下を回転ヘラ削 りしている。3点とも胎土は精良 である。105は無高台の杯に復原 できる残片で、外底部に「政所」 と読める墨書がある。



高杯(108) 脚部を欠失し、杯部だけが残存している。杯部外底は回転へラ削り調整、体部および内底部はヘラミガキしている。

塩壺(109~112) 図示した塩壺は全て円錘形のタイプであり、圧倒的にこのタイプが占める



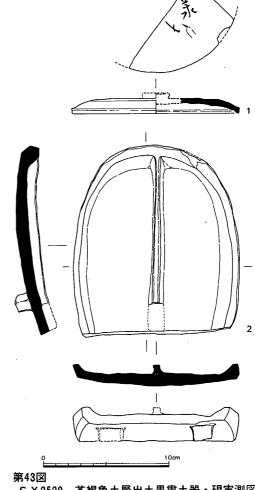
第41図 SD2340出土土製品実測図

が円筒形のものも若干出土している。外面は 指頭圧痕、内面は器面調整のため、型原体を 知る手掛りを失っている。型造り。

甕(113~116、A·B) 113は人面用土器であ り、体部中位以下には乱雑な指頭圧痕が残り、 この部分の内面は横方向のナデにより指頭圧 痕を消去している。体部上半はヨコナデ調整 である。人面土器のように溝に流すような祭 祀用を目的とした器であろう。114~116は3 点ともに相違した特徴を有している。114と 115は口縁部が外彎する特徴は一致するが、 115の方が厚く古期の特徴を示している。116 は115と同様に口縁部を厚くつくり、しかも 内面の口縁部と体部との境はヨコ方向のヘラ 削りにより明瞭な稜線をなす。図版55-A·B は玄界灘式土器である。



第42図 S X 2514 · 2532出土土器 · 陶磁器実測図



S X 2529、茶褐色土層出土墨書土器・硯実測図

用途不明土製品(第41図) 瓦質の焼成で軟質で、淡黒灰色を呈する。内面は平滑に仕上げら れている。鋳型とも考えられるが、使用された痕跡はなく、鋳型特有の真土やスサなどもない。

S X 2514・2532出土土器・陶磁器 (第42図、図版57)

## 緑釉陶器

椀(1) 口縁部の小片で、淡灰色の精良な胎土に淡黄緑色の釉がかかる。内面に毛彫り文様

がある。

#### 青磁

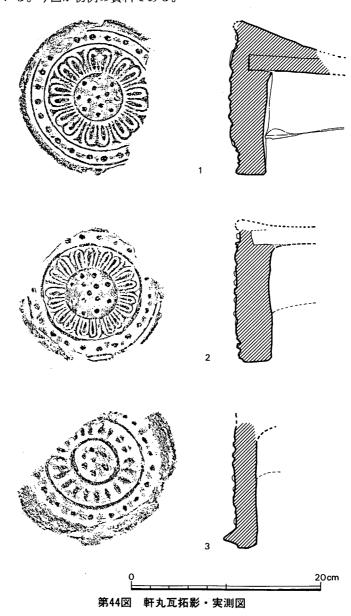
合子(2) 越州窯系の合子の身である。口縁部を欠くが、立ち上がりの部分がわずかに残る。 外面は回転へう削りし、内面はヨコナデである。灰色の胎土で、底部は露胎となっているが、 他は淡黄緑色の釉が施されている。今回が初例の資料である。

S X 2529出土土器 (第42 図、図版57)

#### 須恵器

蓋(1)復原口径13.2cm で、天井部の外面はヘラ切り後ヨコナデしている。内面は墨書と墨痕がみられ、硯として転用している。墨書は「承」の異体字である「兼」と意味不明の「ナ」がある。

暗褐色土層出土土器 (第 43図、図版57)



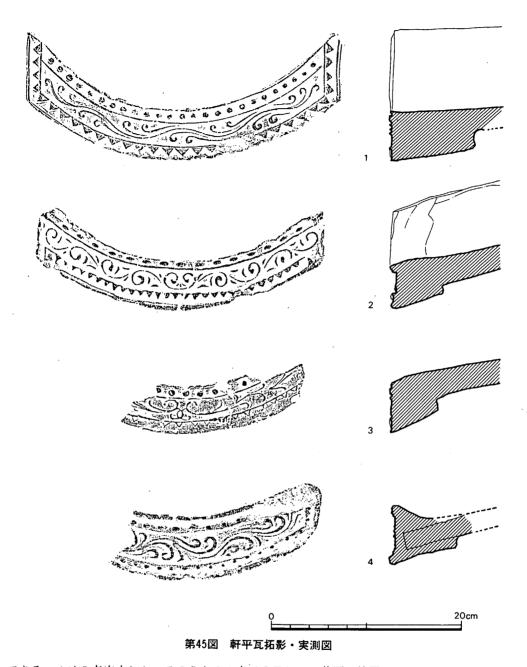
に朱墨痕がみられる。SD2335・2340埋没後に堆積した暗褐色土層出土である。

#### 瓦 類 (第44・45図、図版89・90)

この調査で出土した瓦類は軒丸瓦56点、軒平瓦82点、文字瓦、鬼瓦、熨斗瓦である。これらは主に遺構面を覆う灰褐色土、暗褐色土、茶褐色土から出土したが、特にSD2340から出土した軒先瓦、丸・平瓦は注目すべきものがある。すでに第85次調査において紀年銘のある木簡と共伴しており、今回も4例の紀年銘のある木簡と共存し、それから絶対年代を知ることが可能である。SD2340出土軒先瓦については第85次調査において報告した軒先瓦(別表1-1、3、5と別表3-1、2、3 、4)以外に新たに検出した瓦は1点である。ここではSD2340出土の軒先瓦を中心に出土量の多いものについて述べることとする。

まず軒丸瓦であるが、第44図―1 は鴻臚館式で10点出土し総数の18%を占める。S D 2340から検出した。中房に1+4+8の蓮子を配する複弁八弁蓮華文である。内区の蓮弁と外区珠文の割付けが整然と行われている。瓦当と丸瓦の接合位置は弁区付近にあり、丸瓦凸面にかなり多い支持土が充てがわれている。第44図―2は13点出土し、総数の23%を占める。瓦当面は全体に平坦で、中房に1+4+8の蓮子を配し、蓮弁は複弁九弁蓮華文である。外区内縁には珠文22個をおき、外縁は比較的平坦な素縁である。瓦当と丸瓦の接合位置は珠文帯付近にあり、1と同様サシコミ式による技法である。この瓦はS D 2340の上層(茶灰色土)から出土した。第44図―3は7点出土し、総数の12.5%を占める。中房は比較的太い圏線が巡り、1+6の蓮子を配す。弁は小さく単弁二十一弁を配し、外区内縁には23個の珠文を巡らす。外縁は素縁で断面三角形である。この瓦は文様的にはくずれた様相を示しているが、成形ないし瓦当裏面下端に凸帯を有するものもあり、製作技法には古い要素が伺える。淡茶色で胎土に砂粒が多く含まれている。

軒平瓦の出土率は鴻臚館式が圧倒的に多く総数の52.4%を占めている。第45図―1 は老司 II 式と呼ばれている瓦で10点出土した。SD2340から出土し、すでに第85次調査において木簡と共伴している。瓦当面は右から左に流れる扁行唐草文で、両端2本の支葉をのぞいた他の支葉はすべて主軸をなす波状線からはずれている。上外区に珠文25個、下外区および脇区は外向凸鋸歯文を配する。顎部は9cmを測る深い段顎で、平瓦との接合位置は強い指ナデによって調整されている。2 は鴻臚館式で43点出土した。文様は内区中央に「小」字形の小葉を配し、曲線文で囲んだ中心飾である。唐草はそれから左右に4回反転するが、接続しておらず、各々子葉を伴っている。上外区に杏仁様の珠文15個を配し、下外区は外向する凸鋸歯文28個と、内向する凸鋸歯文1個を配している。顎は5.5cmを測る段顎である。SD2340出土の鴻臚館式軒平瓦の平瓦部凸面の叩きはそのほとんどが縄目で、黒色に焼成されている。3 は20点出土し、軒平瓦出土総数の24%を占める。中心飾は交差する曲線文から成り、左右に唐草文が派生する。蔓草は細い線で表現され、蔓草の巻は弱い。上外区に珠文、下外区は線鋸歯文である。顎は段顎



である。4は5点出土した。そのうちの1点はSE2510の井戸に使用されていたものである。 内区文様は左から右に流れる扁行唐草文で、三本の蔓草を1単位とした唐草文である。上外区、 下外区、脇区は小粒の珠文を密に配している。製作技法はいわゆるサシコミ式によっており、 顎は段顎から曲線顎に変化する過渡期に属する。井戸中出土の土師器からみて十世紀後半を下

限とすると考えられる。

文字瓦は60点出土し、10型式26種に分類できる。「平井」銘瓦11種、「佐」銘6種、「賀茂」銘2種の他「大国」、「八年」、「小1瓦」などが主なものである。特に「大国」銘はSB2515建物の柱掘形から出土した。「大国」銘を伴う軒平瓦は別表3-9で中心飾に桃実様を配した均整唐草文で、これとセット関係にある軒丸瓦は別表1-14である。これらは政庁跡回廊の西南隅部の調査において、多量の焼土と共に検出されておりその出土状態から下限を十世紀前半までとすることが可能である。

この他道具瓦に鬼瓦片、熨斗瓦1点、無文塼がある。鬼瓦はSD2340から1点出土し、政庁 跡脇殿出土のものと同じものと考えられる。

#### 木簡 (図版72~81)

木簡は、第87次調査ではSD2340の中層から51点、また第90次調査ではSD2340の上層から2点、中層から41点、そして下層から4点、の合計98点を検出した。このほか、いわゆる木簡様木片がかなり見られたが、そのいずれににも墨痕は認められず、また形状的にも損傷などのために原形を推定できない小片が多く、木簡ないしその一部とみなすには決め手に欠けるので、ここではそれらをすべて除外した。このSD2340からは、すでに昨年度の概報でも報告したように、第83~85次調査において合計62点を検出しているので、最終的には総計160点の木簡を検出したことになる。なお、前述のように、この両次調査区に特記すべきほどの差異は存しないが、木簡については便宣的に両次調査を区別して報告することにしたい。また、図版番号のうち括弧つきのものは赤外線テレビの画面を撮影したものである。

はじめに、第87次調査出土の木簡について概括的に見ておこう。

墨痕の有無はともかくとして、これらを形態的に分類してみると、次のようになる。なお、 以下の型式分類は木簡学会のそれに準拠している。

まず、現状ではいわゆる短冊型を呈するもの(011型式)が1点見られるが、後述のように、これには若干の疑問が存するようにも思われる。次に、長方形の材の一端近くの左右両辺に特有の切り込みを入れたもの(032型式)が14点あり、そのほかに、それの他端を尖らせたもの(033型式)が2点、またそれらが何らかの原因によって損傷しているために他端の原状を特定できないもの(039型式)が12点ほど見られる。このように、いわゆる付札類が合計28点あり、全体の約55%を占めている点が注目されるが、SD2340出土木簡の全体を見ても、この型式のものが約三分の一強を占めており、大きな特徴をなしている。一方、損傷や腐蝕など何らかの原因によってその原形が明らかでないもの(081型式)が20点あり、そして削屑(091型式)はわずか2点にすぎない。出土点数に比して削屑が少なく、039型式や081型式などの損傷を受けているものが多いが、昨年度の概報でも述べたように、これは出土遺構が溝であることも無関係ではなく、流れているだけに損傷する機会が多かったのであろう。

次に、これらの木簡に墨書された文字について見てみると、その字数はともかくとして少なくとも1字以上を判読ないし推読できるものは31点あり、約61%を占める。また単なる墨痕や墨つきではなく、文字のかなりの部分が残存しているが、腐蝕などのために断片的であり、具体的な文字を想定できないものが7点、わずかな墨痕が見られるだけで、字形をなさないものが7点見られる。そして残りの6点は形状的には木簡ないしその一部と判断されるが、墨痕は全く認められないものである。

以下、第87次調査出土の木簡のうち代表的なものについてその概要を報告し、合わせて若干 の所見を述べるが、釈文に付した符号はいずれも木簡学会で用いられているものである。

#### (1) 「V糟屋郡紫草卅根」

032型式。柾目。上下 2 片に折れ、上端左辺などに若干の損傷は見られるが、両片はほぼ接合し、また原形をとどめているので、完形とみなしてもよいだろう。その法量は、長さ12.8cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmである。全文字の墨は完全に消失しているが、その痕跡は明瞭であり、それによって判読できる。第85次調査出土の木簡(4)よりは若干小ぶりであるが、両者は同文であるだけでなく、筆跡もきわめて近似しているので、同筆の可能性が考えられる。紫草など内容については昨年度の概報に述べているので、ここではくりかえさない。なお、頸部に見える痕跡は結えつけられた紐のものであろう。

#### (2) 「V怡土郡紫草井根」

032型式。柾目。表面に若干の腐蝕は見られるが、他に損傷はなく、ほぼ完形とみなしてよいだろう。その法量は、長さ11.0cm、幅2.1cm、厚さ0.4cmである。表面はかなり黒ずんでおり、文字はかろうじて判読できる程度である。木簡1に対比すれば、「郡」字などの筆跡が似ているので、同筆かとも考えられる。怡土郡は筑前国15郡のうちで、現在の福岡県糸島郡に当たるが、かつての伊親県(『日本書紀』仲哀八年正月壬午条)や伊都国(『魏志倭人伝』)などの故地としても知られている。

#### (3) 「V怡土郡紫草井×

039型式。柾目。腐蝕が著しく、とくに下半部を欠いているが、記載内容から推して、本来は032型式のものであろう。現存法量は、長さ10.2cm、幅2.3cm、厚さ0.3cmである。これも表面が黒ずんでおり、肉眼では部分的な墨痕が見られる程度にすぎず、判読は困難であり、赤外線テレビによった。「廾」字は図示した程度にしか判読できないが、他の例からしてこの判断に大過はないだろう。また、これの下位には「根」字が記されていたのであろうが、損傷のため確認できない。全体的な運筆は木簡(2)と似ているように考えられるが、「紫」字など明らかに異なる点も見られ、にわかには判断できない。

## (4) 「V夜須郡<sup>天平「□」</sup>年」

032型式。柾目。下半部などに損傷は見られるが、全体的には原形を保っているとみなして

よいだろう。その法量は、長さ9.8cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmである。墨はうすく、「夜」字を除けば、肉眼による判読はかなり困難である。下半部はいわゆる割注式に記されているが、その左側に墨痕は認められない。「 $\Box$ 」字は、間隔的に1字分であること、またこの位置の損傷部の下端に図示したような墨痕が見られること、などの点から推定したが、その中心部を欠いているので、断定はできない。「八」字の可能性も考えられるが、最終画の形状からしてそれは小さいだろう。内容的には釈文以外のことが記されていないので、詳細は明らかでない。なお、夜須郡は第85次調査出土の木簡(2)にも見られた。

#### (5) • 「∨岡郡全」

#### 「∨ー編<sup>+根</sup>」

032型式。柾目。上端の右辺に若干の欠損は見られるが、ほぼ原形を保っているとみなしてよいだろう。その法量は、長さ9.1cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmである。墨は比較的うすい。第1字はかなり簡略化されているが、「岡」字の異体字と考えられる。岡郡は筑前国遠賀郡すなわち現在の福岡県遠賀郡のことである。第85次調査出土木簡の中には「岡賀郡」(5~7)および「遠賀郡」(19などと記したものが見られたので、必ずしも同一の時期ではないにしても、同郡名に関する三種の表記があまり隔たっていない時期に用いられていたことになり、この点でも注目される。すでに昨年度の概報でも述べたように、これらのうち「岡」が最も古く、ついで「岡賀」に改められたが、間もなく「遠賀」に変更されたと考えられる。また郡名表記法の1字から2字への改制が和銅六年(713)前後とすれば、この木簡の下限時期をある程度比定できるだろう。「全」の意味は明らかでないが、あるいは裏面の記載に関連するのであろうか。裏面は「1編は10根からなる」という意味であろうが、それがいかなる物品の単位かは明らかでない。しかし、その一つが「根」であることや後掲の木簡(1)などを参照すれば、これも紫草に関連するものと推定される。

#### (6) • 「∨岡郡□□」

#### 「V一編+」

032型式。柾目。上端の両辺を欠損しているが、頂部は原状を保つとみなしてよいだろう。左右両辺および下端も原状を保っていると考えられる。木簡(5)と同文ではないが、内容的には同質と考えられ、材も同じようであるので、これも032型式と判断した。その法量は、長さ10.1cm、幅1.9cm、厚さ0.2cmであり、前者より一まわり大きい。墨は全体的にうすいが、かろうじて判読できる。これも「岡」字には異体字を用いているが、木簡(5)のそれとは若干異なる。また他の文字にも相異が見られるので、同筆とはみなしがたいように思う。第3字はいまだ明らかでないが、他字の大きさなどから見て、2字とみなすべきかもしれない。裏面では木簡(5)の「根」に相当する文字が見られない。この部分だけが削り取られたような痕跡は認められないので、もともと記されていなかったとも考えられ、この差異については検討を要する。

#### (7) 「三井郡庸米六斗」

011型式。板目。現状では損傷とみなすほどのものが認められないので、一応011型式と判断した。しかし記載内容からすれば、むしろ032型式の方がふさわしいようにも考えられるので、肩部が二次的に切断されている可能性を含め、この点についてはさらに検討を要する。現存法量は、長さ11.2cm、幅2.1cm、厚さ0.5cmである。墨はかなりうすく、とくに「庸」字の部分は不鮮明であるが、判読はできる。三井郡は筑後国10郡のうちで、現在の福岡県三井郡から久留米市にかけての地域に当たるが、『延喜式』民部上には「御井」郡と見える。庸は力役の代納物で、一般には布がよく知られているが、そのほかに米や塩などでも納められた。『延喜式』主計上によれば、庸米は1丁に3斗とされており、これの6斗は2人分に当たる。

#### (8) ×毛郡三斤八両

081型式。板目。上下両端ともに折損している。現存法量は、長さ16.8cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmである。第1字を上半部を欠いているが、残存字形および西海道の郡名であることなどから「毛」字と判断した。西海道において「某毛郡」と称するのは、筑後国三毛郡、豊前国上毛郡、同じ下毛郡そして多槸島(大隅国)熊毛郡の4郡であるが、これがそのいずれであるかは判断できない。物品名が見えないので、この木簡の性格などは明らかではないが、その単位名からして、何らかの調庸物に関するものであろう。

#### (9) ×紫□」

081型式。柾目。上半部を欠いている。現存法量は、長さ11.4cm、幅2.6cm、厚さ0.3cmである。墨はかなりうすく、肉眼では「紫」字以外はほとんど見えない。しかし赤外線テレビによれば、「紫」字の下位にも墨痕が見られ、あるいは「草」字の一部かとも考えられるが、断片的であるために断定はできない。いずれにしても、これも紫草に関するものと推定されるが、詳細については明らかでない。

#### (10) 更更

081型式。柾目。各辺ともに損傷している。現存法量は、長さ5.0cm、幅1.1cm、厚さ0.2cmである。現状から「更」字の習書と判断したが、左辺が二次的に切断されていることを考慮すれば、「更」を旁とする文字の可能性も考えられる。

#### (11) 「V合志郡紫草大根四百五十編」

032型式。板目。切込みを有することから032型式に分類したが、板というよりも、棒とみなした方がよいようにも思われる。その法量は、長さ39.2cm、幅3.1cm、厚さ1.6cmである。。中央部付近から上部には漆が付着しているが、それをわざわざ塗付したとは考えられないので、おそらくは木簡としての用済み後に漆を用いた何らかの作業の用具として再利用されたのであろう。このような漆の付着に加え、表面が腐蝕していることもあり、上半部では判読が容易でない。合志郡は肥後国14郡のうちで、現在の熊本県菊池郡地方に当たる。「紫」字はきわめて

断片的な墨痕しか残存していないが、その形状や「草」字に続くことなどから判断した。「紫草大根」は紫草のうちでも根の大きいものを指すのであろう。「編」という単位が用いられているが、前掲の木簡(5)を参照すれば、450編は4500根ということになる。木簡(1)などに見られるように、20根が紫草を整理する際の標準的な一単位とすれば、これはかなりの数量になる。この木簡の形状も注目されるが、それはかかる紫草の質や数量とも無関係ではないだろう。

#### (12) 「V合志」

032型式。柾目。損傷らしいものはほとんど見られないので、完形とみなしてよいだろう。その法量は、長さ7.4cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmである。墨は若干うすいが、判読は容易である。『和名抄』によれば、「合志」は肥後国の郡名および薩摩国高城郡の郷名としても見える。しかし郡名だけを記している例は他にも見られるが、国郡名を省略し、郷名だけを記したと考えるのは不自然であり、やはり前掲の木簡(1)のほかに木簡(2)や第90次調査出土の木簡(2)などにも見られるように、これは肥後国合志郡の意味と考えた方が妥当であろう。ただ、これにはこの2字しか記されていないので、いかなる性格のものであるかは明らかでない。

## (13) 「✓□□郡□□

039型式。板目。上端の左右両辺および下半部を欠損し、ほぼ全面的にかなり腐蝕しているが、頂部中央と左右両辺はなお原状をとどめている。現存法量は、長さ $8.9 \, \mathrm{cm}$ 、幅 $1.8 \, \mathrm{cm}$ 、厚さ $0.3 \, \mathrm{cm}$ である。肉眼では第 $3 \, \mathrm{字}$ が「郡」字と推定されるだけで、他はわずかな墨痕が見られる程度にすぎない。しかし、赤外線テレビによれば、「郡」字を確認できるほかに、第 $1 \cdot 2 \, \mathrm{字}$ はその残存字形から「山鹿」と推定される。また図では第 $4 \cdot 5 \, \mathrm{字}$ をあたかも「三町」と推定できるかのように示しているが、これは墨痕を確認できる部分だけを示したもので、あくまでも参考にすぎない。両字ともいまだ細部を判別しえていないが、この $2 \, \mathrm{字}$ にこの木簡のポイントがあり、この点については、後考を俟ちたい。

#### (14) 「∨大野加海マ郡」

032型式。板目。頂部にごくわずかな損傷は見られるが、ほぼ完形とみなしてよいだろう。その法量は、長さ9.6cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmである。墨は明瞭であり、「加」をいかに解するかが問題ではあるが、おそらくは「大野郡と海マ(部)郡」という意味であろう。とすれば、両郡ともに豊後国8郡のうちであり、現在の大分県大野郡および南・北海部郡に当たる。他に記載が見られず、また郡名だけでもあるので、この木簡の具体的な性格などは明らかでない。なお、郡名だけを記したものには後掲の木簡(19)、(20)などが見られる。

#### (15) 「∨大野□

039型式。柾目。上端の左右両辺および下半部を欠いている。現存法量は、長さ5.2cm、幅2.4cm、厚さ0.2cmである。肉眼では、「大」字が見える程度であるが、赤外線テレビによって「野」字を確認できた。木簡(4)と同じく、この「大野」は豊後国大野郡を指すと考えられるが、

第3字はごく小さな墨痕が見られるだけで、字形をなさないために推定もできない。他に記載 はないので、具体的なことは明らかでない。

#### (16) 「三袋並大分 大V」

032型式。板目。とくに損傷と言うほどのものは見られないので、完形と判断した。その法量は、長さ15.1cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmである。今回のものを含め、大宰府史跡出土の木簡で下端近くに切込みを入れたものはこれが初例である。原形は上下両端近くにそれぞれ切込みを入れた031型式ではないかとも考えられるが、確認はできない。第3~5字は割注式に記されているが、その左側に墨痕は認められない。これと同じ書式の木簡なりを参照すれば、「大分」は大分郡のことと推定される。しかし、「郡」字が記されるべき位置の面は削り取られており、本来は墨書されていた可能性も考えられるが、墨痕は全く認められず、もともと墨書されていたかどうかは判断できない。なお、大分郡は豊後国のうちで、現在の大分県大分郡に当たる。最下端の「大」字の位置は「三袋」および「並大分」のいずれとも対応せずにずれているが、その意味は明らかでない。物品名を記されていないが、大分郡所産のある物品が三袋あり、その規格はいずれも大であるという意味であろう。

#### (17) 「V薩麻国枯根」

032型式。板目。下端に若干の損傷は見られるが、完形である。この種の木簡としてはかなり大きいが、そのわりに字数は少ない。また右辺の切込みの入れ方は特徴的であるが、これがいかなる理由によるのかは明らかでない。その法量は、長さ25.9cm、幅4.4cm、厚さ0.6cmである。墨は比較的うすいが、十分に判読できる。「枯根」が特定の植物を指すのか、植物の根の枯れたものを指すのかは明らかでない。

#### (18) 薩麻頴娃

081型式。柾目。 2 片に折れ、上端を欠損しているが、左右両辺および下端は原状を保つと判断される。現存法量は、長さ8.8cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm. である。「薩麻頴娃」は薩摩国頴娃郡の意味であろうが、国、郡が省略されている理由は明らかでない。『続日本紀』文武四年六月庚辰条に見える「衣評」はこれの古称である。現在の鹿児島県揖宿郡に当たり、同郡に頴娃町が見える。この 4 字以外には記されていないので、この木簡の性格は明らかでないが、一種の落書の可能性も考えられる。

#### (19) 「∨大隅郡」

032型式。柾目。下端部表面に損傷は見られるが、全体的にはほぼ原形を保っている。その法量は、長さ10.5cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmである。大隅郡は大隅国の1郡であり、和銅六年(713)四月の大隅国の建置に際して他の3郡とともに日向国から分割された。したがって大隅郡そのものはそれ以前から存在していたわけであり、これには国名が記されていないので、いずれの国に属していた時期のものかは判断できない。現在、同郡は存在しないが、鹿児島県

鹿屋市から肝属郡にかけての地域がその郡域であった。これには郡名しか記されていないので、 具体的な性格などについては明らかでない。

#### (20) 「\桑原郡」

032型式。柾目。右辺に小さな損傷が見られるが、全体的にはほぼ完形とみなしてよいだろう。その法量は、長さ10.2cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmである。「桑」字は異体字を用いている。桑原郡は大隅国のうちで、現在の鹿児島県姶良郡の北部地域に当たる。桑原郡の史料的初見は『日本後記』の延暦二十三年(804)三月庚子条であるが、大隅国では天平勝宝七年(755)五月に菱苅郡が建置されているので(『続日本紀』同月丁丑条)、桑原郡もこの間に建置されたとする見解がある(『国史大辞典』桑原郡条)。しかし、桑原郡自体の建置を示す史料は見られず、また前述のようなSD2340存続時期あるいは同時に出土した木簡に天平年間の年紀が見られることなどからして、桑原郡は天平年間にはすでに存在していたと考えられる。これにも郡名しか記されていないので、その具体的な性格などは明らかではない。

### (21) ×屋郡伊賀□□□

081型式。柾目。上下両端部を欠損し、2片に折れ、腐触も著しい。完全ではないが、両片はほぼ接続するとみなしてよいだろう。他にこれと同材ではないかと推定されるものが2点あるが、それらにはわずかな墨痕が見られるにすぎず、現状ではこの3点は相互に接続しない。現存法量は、長さ14.6cm、幅2.5cm、厚さ0.2cmである。肉眼ではかすかな墨痕が見られる程度で、ほとんど判読できない。第1字は上半部を欠いているが、残存字形から「屋」字と判断した。西海道において「某屋郡」と称するのは筑前国糟屋郡だけである。「伊賀」はいかなる意味か明らかでないが、糟屋郡に続くことなどからすれば、地名の可能性も考えられる。しかし『和名抄』の同郡内郷名には見えない。下端の2字は字形から「黒米」かとも推定されるが、いまだ断定できない。あるいは「伊賀黒米」になるのかもしれないし、さらには両片が接続するとみなしたことを再検討すべきかもしれない。いずれにしてもこれについては後考を俟ちたい。

#### (22) • 「∨怡土郡□×

#### 「∨□

039型式。柾目。頂部と右辺以外を欠損しているが、本来は032型式のものであろう。現存法量は、長さ4.5cm、幅0.9cm、厚さ0.4cmである。肉眼ではほとんど判読できないが、両面に墨書が見られる。他の例を参照すれば、第4字は「紫」字の上端部かとも考えられるが、ごく小さな墨痕であるので、断定はできない。裏面の文字は「艮」を旁とする文字であり、「根」字の可能性も考えられるが、これの上位には墨痕が見られないので、問題が残る。

# 

「∨□平八□九<sup>(円)</sup>

039型式。板目。全体的に損傷がひどく、また腐触も著しい。さらに 2 片に折れているが、両片はほぼ接続する。現存法量は、長さ7.6 cm、幅2.2 cm、厚さ0.7 cmである。肉眼では両面ともかすかな墨痕が見られるのみで、ほとんど判読できない。赤外線テレビによれば、墨痕は断続的であるが、「豊前」をほば判読できる。第  $3 \sim 5$  字は、「豊前」に続くことやその残存字形などから、「國京都」かと推定されるが、決め手に欠ける。またその場合、第 6 字は「郡」字の可能性が大きいが、わずかな墨痕が見られるのみで、判断できない。豊前国京都郡とすれば、現在の福岡県京都郡に当たる。裏面では 3 字を判読できるが、「 $\Box$ 」字は下端が欠損部にかかるため「日」字のようにも見える。他の 2 字は墨痕のみで、字形をなさないが、あるいは「天平八年九月」の意味であろうか。

## (24) 「V□□郡一□"

039型式。板目。損傷がひどく、また面もかなり腐触している。現存法量は、長さ12.1cm、幅3.7cm、厚さ0.5cmである。肉眼では「郡」字の偏と「一」字が見える程度にすぎない。赤外線テレビによっても、第1・2字はそれぞれ右端にわずかな墨痕が見られるのみで、西海道の郡名であることを考慮しても、具体的な文字は想定できない。一方、第5字は竹冠の文字と推定でき、その字形から「籠」字と考えられる。とすれば、郡名と数量が記されただけで、物品名は記されていなかったことになるが、その意味は明らかでない。

#### (25) 三袋並合志郡 大」

081型式。柾目。下端は原状をとどめているが、上半部はかなり腐触している。そのため損傷がひどく、とくに上端が原状を保つかいなかは判断しがたい。前掲のように、木簡(6)はこれと同じ書式であり、それには下端近くの左右両辺に切り込みが見られたが、これではその有無を確認できない。現存法量は、 $17.8 \, \mathrm{cm}$ 、幅 $2.9 \, \mathrm{cm}$ 、厚さ $0.4 \, \mathrm{cm}$ である。最下端の「大」字を除けば、肉眼ではかすかな墨痕しか判別しえない。第1字は「二」字のようにも見えるが、その上にかすかな墨痕が認められるので、「三」字と判断した。また第2字も損傷のために判読しがたいが、木簡(6)を参照して「袋」字と推定した。合志郡およびこの木簡の性格については前述したので、ここではくりかえさない。

# (26) (六袋ヵ) 並□□

081型式。板目。上端部を欠き、かなり腐触している。現存法量は、長さ15.6cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmである。腐触のため肉眼で墨痕を判別することは容易でない。これも木簡(l6)などと同じ書式であり、第1字は左半部を残すのみであるが、その字形から「六」字と考えられる。第2字は、かすかながらも、右半部も見られ、「袋」字であろう。第3字は中心部を欠くが、前例から見て「並」字と推定される。しかし第4・5字はわずかな墨痕のみであり、判読できない。前例からすれば、郡名であろうか。

#### (27) 魔嶋六十四斗

081型式。板目。上端を欠き、2片に折れている。左右両辺は原状をとどめ、下端もその可能性があるように見えるが、にわかには判断しがたい。現存法量は、長さ18.4cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmである。墨はうすく、肉眼では第2字の偏と「四斗」が見えるにすぎない。第1・2字は若干不鮮明であるが、ほぼ判読できる。第3字は最終画が折損部にかかるために確認できないが、「六」とみなしてよいだろう。「魔嶋」は薩摩国鹿児島郡の意味であろうが、『続日本紀』天平宝字八年(764)十二月是月条には「魔嶋信尓村」と見える。地名と数量が記されているだけであるので、この木簡の具体的な性格などは明らかでない。

(28)

081型式。柾目。右辺は原状を保っていると考えられるが、他は確認できない。裏面にかなりの削り跡が見られ、とくに上下両端では厚さが異なり、下端の方が厚い。現存法量は、長さ10.2cm、幅2.5cm、厚さ0.4~0.9cmである。ほば全面的に墨痕が見られるが、面が削り取られているため、第1字を除き、いずれも字形をなさない。第1字も完存してはいないが、おそらく「豊」字であろう。とすれば、その下位の墨痕は「前」字の第4 画、さらにその下位は「國」字の第2 画の可能性が考えられ、あるいは「豊前国」云々と記されていたのかもしれないが、現状ではあくまでも一つの推測にしかすぎない。

# (29) • □ 神 ▽ 足嶋米 神 ▽ □ □ □ □ □ □ □ □ 月 卅 六 日 □ □

081型式。柾目。左右両辺は原状を保つと考えられるが、上端を欠損し、下端もその可能性が大きいようである。現存法量は、長さ9.0cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmである。表裏両面ともかなり黒ずんでおり、肉眼では墨痕をほとんど判別できず、赤外線テレビによって判読できた。表面の右行第1字はかなり明瞭であるが、欠損部にかかっているため推定するにとどめた。左行第3字以下は4文字と推定されるが、不鮮明であり、判読しがたい。裏面の第1字も欠損部にかかっているが、数字であり、その字形からは「六」ないし「九」のいずれかの文字が考えられる。下端の文字も判読できない。上部を欠損しているため、「□」」字が、「下神マ」というような氏姓の一部をなすのか、あるいは、たとえば位階の下階を示すのかは判断しがたい。かりに氏姓とすれば、下神氏については『新撰姓氏録』未定雑姓の摂津国の部に「葛木襲津彦命男、腰裾宿祢之後者」と見えるが、下神部については明らかでない。また、この場合、左行も「下神マ」の可能性が考えられる。いずれにしても、この木簡は断簡でもあるので、詳細については明らかでない。

081型式。柾目。左右 2 片に割れているが、接合する。現状では必ずしも断定できるわけではないが、墨痕の状況から見て、各辺とも二次的に切断されている可能性が考えられる。現存法量は、長さ9.2cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmである。表裏両面ともにかなり黒ずんでおり、肉眼による判読は容易でない、表面では5 文字が見られるが、いまだ判読しえていない。また裏面下端の文字は左に片寄っており、「一」字と断定するには躊躇される。

(31) • □□ 勤梨梨□□<sup>之□</sup> • □□

081型式。柾目。各辺とも損傷している。現存法量は、長さ15.5cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmである。表裏両面に墨書が見られるが、習書と考えられる。裏面は判読できない。

#### (32)

081型式。柾目。左右両辺は原状を保っているが、上下両端は損傷しているようである。現存法量は、長さ8.4cm、幅2.6cm、厚さ0.2cmである。墨はうすく、5字以上の文字が記されているが、判読できない。

次に、第90次調査出土の木簡について述べる。

前述のように、この次調査でも合計47点の木簡を検出した。それらを形態的に分類すると、次のようになる。011型式が1点、一端は方頭で他端は欠損のため原形が明らかでないもの (019型式) が3点、032型式が1点、039型式が9点、081型式が28点、そして091型式が5点である。なお、039型式のうちの1点は長方形の材の両端の左右両辺に切込みを入れたもの(031型式) と推定されるものであるが、上下2片に折れ、現状では直接に接続しないので、この型式に加えた。木質などから見て、同一個体の可能性が大きいように考えられるが、別個体とすれば、039型式のものが1点ふえることになり、総点数も48点となる。

次に、それらの文字を見ると、20点については少なくとも1字以上を判読できる。また文字のかなりの部分が残っているが、損傷などのために具体的な文字を想定できないもの、およびごくわずかな墨痕が見られるだけで、字形なさないものがそれぞれ10点ずつ見られる。そして残りの7点は形状的に木簡ないしその一部と断定できるものであるが、墨痕は全く認められないものである。このうちの4点は039型式のものであるが、いずれも腐蝕が著しく、墨が消失したのか、もともと墨書されなかったのかは判断しがたい。

それでは、代表的なものについて概要を報告し、合わせて若干の所見を述べるが、これらはいずれもSD2340の中層から出土したものである。

- (1) ・「三團兵士□□□宗形マ刀良県マ赤猪」
  - · 「□\_\\_ 」

011型式。柾目。右辺上部に若干の損傷は見られるが、完形とみなしてよいだろう。その法量は、長さ $22.8 \, \mathrm{cm}$ 、幅 $3.6 \, \mathrm{cm}$ 、厚さ $0.9 \, \mathrm{cm}$ である。面はかなり墨ずんでおり、とくに上半部の肉眼による判読は困難である。第5、6 字はかなり複雑な字画の文字であるが、墨がうすく、不鮮明でもあるため判読できない。第5 字は革偏の文字と推定され、旁部は「廢」字に似ているようにも見えるが、かかる文字は確認できず、さらに検討を要する。第7 字は「役」字であろうが、上位の2 字を判読できないので、推定にとどめる。第9 字は欠損しているが、残存字形や氏名であることなどから判断した。第13 字は「日下」の2 字かとも考えられるが、その大きさから見て、1 字とみなした方がよいだろう。

「三團」は3軍団の意味であろうが、それがどの軍団を指すのかは明らかでない。しかし第85次調査出土の木簡(1)には筑前・筑後両国の兵士のことが見え、また後述の宗形部刀良がその兵士であることから推せば、少なくとも1団は筑前国のそれと考えられる。ちなみに、筑前国には4団が置かれ、そのうちの2団はいわゆる軍団印から御笠、遠賀両団であったことが知られている。宗形部はもともと筑前国宗像郡を本拠としたのであろうが、同氏は大宝二年(702)の筑前国嶋郡川辺里や豊前国仲津郡丁里などの戸籍に見えるほか、『続日本紀』和銅二年(709)六月乙巳条には御笠郡大領宗形部堅牛の名が見えるように、かなり広く分布していたようである。また、日下部はそれ以上に広く分布しており、西海道の各国でその存在が知られている。なお、蔵司西地区における第4次調査で出土した木簡には里長日下部君牛容の名が見られた(『大宰府史跡出土木簡概報(一)』)。

裏面にもかすかな墨痕が見られるが、肉眼ではほとんど判読できない。赤外線テレビによっても、「二人」以外は判読できず、この2人が表面の2人を指すのかどうかも明らかでない。

#### (2) 「∨合志□

039型式。柾目。文字の位置から見て、左辺は二次的に切断されており、本来は左辺にも切込みが入れられていたと考えられる。下端も二次的切断の可能性が考えられるが、現状では断定しがたい。現存法量は、長さ $21.5\,\mathrm{cm}$ 、幅 $3.2\,\mathrm{cm}$ 、厚さ $0.3\,\mathrm{cm}$ である。「合志」の2字は確認できるが、第3字は不鮮明であり、判読は容易でない。偏では下部に「口」が見えるが、上部は損傷のため判別できない。旁は一見「平」のように見えるが、その上に小さな横棒が見え、「平」と断定するには問題が残るように思う。しかし「郡」字の旁ではなく、むしろかかる字形からは「評」字の可能性が想定されるが、いまだ断定はできない。かりに「評」字とすれば、この木簡が廃棄された時期はともかくとして、それ自体の年代はかなりさかのぼることになる。合志郡についてはすでに述べたので、ここでは繰り返さないが、これには3字しか記されてい

ないので、具体的な性格などはほとんど明らかでない。いずれにしても、この木簡については

さらに検討を要する点が少なくない。
(3) • □本□

□ 十一月 日田山□□人
木工□□□□□孔館仕五日 九年
□□□秦人マ遠雲館仕七日
「天平八年十一月
十一□□□□□□□□十二月

+-'[],

O19型式。柾目。5片に折れ、損傷が著しい。上端を欠き、左辺は二次的に切断されているが、下端と右辺は原状を保つと考えられるので、019型式と判断した。現存法量は、長さ11.4cm、幅3.0cm、厚さ0.4cmであるが、両面とも波うったようになっている。表裏両面に記載されているが、その天地は反対であり、おそらく両者は異筆であろう。

表面の1行目の第3字は「郡」字のようにも見えるが、左半部が2行目に重なっているために判別しがたい。かりに「郡」字とすれば、西海道において「某本郡」と称するのは筑後・肥後両国の山本郡だけであるが、第1字を「山」字とはみなしがたいように思われるので、なお問題が残る。2行目は他行と筆が異なり、むしろ裏面によく似た筆跡である。その下半部は欠損しているので、判読しがたい。3行目の第3~5字は右半部を欠失しているが、残存字形および4行目からほぼ推定できる。第5字は下位の「孔」字の大きさから見て「山」字とみなしてよいだろう。なお、「木工」の左側には墨つきが見られる。4行目の第1・2字はかすかな墨痕が残るのみであるが、その形状から見て、3行目と同じく「木工」と考えられる。また第6~8字を他字に比較すれば、かなり大きい。内容的には木工秦人部山孔と同じく秦人部遠雲の上番した日数を記したものであろうし、「九年」は天平九年(737)のことかもしれない。しかし、西海道における秦人部についてはよく知られていないし、また「館」ないし「館仕」や「並月八」の意味など、いまだ不分明な点が少なくはなく、さらに検討を要する。

裏面の文字は、表面に比較して、かなり太く大きい。2行目の第3字は「日」字と推定したが、この部分から下部は腐触しているので、断定はできない。同じように、第4字以下の3字も判読できない。3行目は左半部を欠失しており、現状では部分的な墨痕が見られる程度である。具体的な内容は明らかでないが、表面と同じく、上日に関するものであろうか。

# 

「V斗

039型式。板目。右辺の下半部を欠失し、下端も原状かどうかは判断しがたい。現存法量は、長さ9.4cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmである。表面の第2字は大半を欠損しているので、具体的な文字は想定できない。左側に墨がついているが、必ずしもこの文字を抹消しようとしたものではないだろう。第3字は残存字形から「宍」字と推定されるが、右半部を欠くので、断定はできない。いずれにしても、中心部を欠損しているので、詳細なことは明らかでない。

# (5) ×両二分二朱〇〇〇

081型式。柾目。左辺は原状をとどめていると考えられるが、他の各辺はいずれも損傷している。現存法量は、長さ10.1cm、幅2.2cm、厚さ0.2cmである。最下端の文字はいまだ判読しえていない。何かの量を示しているが、欠損のため、それが何であるかは明らかでない。

## 

081型式。板目。2片に折れている。両片はほぼ接続するようであるが、完全ではないので、必ずしも断定はできない。右辺は原状を保つと考えられるが、他辺はいずれも欠損している。現存法量は、上片が長さ7.0cm、幅1.4cm、下片が長さ2.5cm、幅1.5cm、厚さは両片とも0.2cmである。各文字は左半部を欠失しているが、十分に判読できる。しかし下片の文字はいまだ明らかでない。豊後国海部郡は第85次調査出土の木簡(4)にも見られたが、「部」字に正字を当てている点が注目される。真紫草も紫草の一種ないしその状態を示すものと推定されるが、具体的には明らかでない。この木簡の書式は他の紫草関係木簡のそれとは異なっており、木簡としての機能や性格も異なっていることを示唆している。原形が明らかでないなど、いまだ検討を要する点が少なくはないが、荷札であった可能性も考えられる。また下片の第2字を「斤」字とすれば、他の木簡に見える紫草がいまだ植物としてのそれを指していると考えられるのに対し、この真紫草はすでに染料に精製されたそれを指しているのかもしれない。

#### (7) 「V 梅美嶋×

039型式。柾目。下半部を欠いているが、頂部および左右両辺は原状をとどめている。現存法量は、長さ5.0cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmである。墨は若干にじんでいるが、明瞭であり、判読に支障はない。「権」字は「奄」に音通するので、「権美」は「あまみ」と訓読できるだろう。とすれば、この「権美嶋」は大きくは奄美諸島のこととも考えられるが、やはりその中でも奄美大島を指すとみなした方が妥当であろう。奄美島については、『日本書紀』に「海見嶋」(斉明三年七月己丑条)や「阿麻弥人」(天武十一年七月壬子条)などが見え、また『続日本紀』では、「権美」(文武三年七月辛未条)や「奄美」(和銅七年十二月戊午条)などと見える。この木簡は大宰府と奄美島などのいわゆる南島との関係を考える上で注目されるが、他の部分を欠失し、この3文字が知られるのみであるので、具体的なことは明らかでない。

#### (8) 「∨伊藍嶋□□×

039型式。柾目。頭部右辺と下半部を欠損し、さらに左右 2 片に割れているが、両片は完全に接合し、頂部と左右両辺は原状をとどめている。現存法量は、長さ $7.7\,\mathrm{cm}$ 、幅 $1.8\,\mathrm{cm}$ 、厚さ  $0.4\,\mathrm{cm}$ である。表面は若干黒ずんでいるが、第 $1 \sim 3$  字はほぼ判読できる。第4 字は木偏の文字であるが、旁部を判別できない。第5 字はわずかに上端が残存するのみである。全体的な筆跡は木簡(7)によく似ているように思われる。「伊藍嶋」については他に所見資料がなく、その訓も明らかでない。しかし「権美嶋」から推せば、これも南島の一島と考えられるが、具体的

には比定しえない。ただ、鈴木靖民氏は奄美諸島の一つである沖永良部島に比定されているが (同氏「大宰府出土の木簡」一『歴史読本』 3月号、1985年―)、いまだ確認しえていないの で、今後の検討を俟ちたい。なお、木簡(7)とこれらの出土の意味などについては後述する。

#### (9) 宅麻

081型式。柾目。下端は原状をとどめているようであるが、他辺はいずれも腐蝕しており、原状を保つかどうか確認できない」。4片に折れているが、各片は相互に完全に接続する。現存法量は、長さ13.3cm、幅1.9cm、厚さ0.2cmである。文字は明瞭で、この2文字以外には見られない。「宅麻」は肥後国託麻郡のことと考えられ、現在の熊本県飽託郡に当たる。「郡」字も省略されているが、その部分の面を削り取ったような痕跡は認められない。もともと記されていないのであろうが、その意味は明らかでなく、この木簡自体の性格なども明らかでない。

#### • ×十 十一月 二 ×

081型式。柾目。各辺とも損傷している。現存法量は、長さ6.5cm、幅2.0cm、厚さ0.3cmである。表裏両面に記されているが、その天地は逆転している。この点では木簡(3)と同じであり、両者の記載内容も類似しているように考えられる。すなわち、ともに月名を示し、またその意味は明らかでないが、「田山」という文言が見られる点も共通している。これは断簡であるので、詳細な内容についてはこれ以上明らかにできないが、上日に関する木簡である可能性の存することを指摘し、後考を俟ちたい。

#### (11) 上日六十口」

019型式。柾目。上半部を欠き、3片に折れているなどの損傷のほかに、腐蝕も著しい。しかし、左右両辺および下端はなお原状をとどめており、019型式と判断した。現存法量は、長さ14.2cm、幅3.7cm、厚さ0.5cmである。腐蝕などのために5文字しか確認できないが、本来はこれ以上に記されていたのではないだろうか。内容的には上日数を記したものであるが、いかなる職種の人物のものかは明らかではない。

# (12) 「(M<sub>2</sub>) 田ア [\_\_\_

019型式。柾目。下端部の欠損は明らかであるが、上端については確認できず、一応原状を保つと判断した。現存法量は、長さ18.4cm、幅2.5cm、厚さ0.5cmである。面はかなり黒ずみ、判読は容易でない。文字ないし墨痕が見られるのは上半部のみで、写真では下半部にも墨痕が存するように見えるが、そうではないと判断した。第1字の部首は「頁」であり、偏は「各」と推定されるので、「頟」字とみなしたが、細部が不鮮明であるので、いまだ推定にとどめた。上位2字に比して第3字の墨はきわめてうすいが、赤外線テレビによって判読した。以下はわ

ずか墨痕が見られるのみで、いずれも字形をなさない。「額」と「額」の両字は同音同意であり、「額田ア」は額田部の意味と考えられる。西海道における額田部については、大宝二年の 筑前国嶋郡川辺里戸籍に額田部乎太売らの名が見え、『和名抄』には筑前国早良郡額田郷が見 える。他の文字を判読できないので、この木簡の具体的な性格などは明らかではない。

# 

081型式。柾目。上端を欠損し、左辺も二次的に切断されているが、右辺と下端は原状をと どめているようであり、091型式に分類してよいかもしれない。左右2片に割れているが、ほ ば完全に接合する。現存法量は、長さ19.1cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmである。上半部は墨がうす く、また下半部は欠損部にかかっているため、文字の判読はともに容易でない。第5字は偏を 確認できないが、「郡」字であろう。前述したように、西海道において「某屋郡」を称するの は筑前国糟屋部だけであるが、第3字を「糟」字とみなすことはできない。その字形や「糟」 に意味が通じることなどから「滓」字と推定したが、全体的に不鮮明であるため断定はできな いし、「滓屋郡」という用例についてもいまだ確認していない。第2、3両字の間に1字分の 空白が見られるが、墨痕はなく、面を削り取ったような痕跡も認められない。下半部では2字 を推定でき、最下端は「衣」を旁とする文字であるが、判読できず、文意も明らかでない。裏 面は部分的な墨痕が見られるのみで、いずれも字形をなさない。

#### (14) • 山鹿郡紫草

#### 託口 大根

081型式。板目。各辺ともに損傷している。現存法量は、長さ23.2cm、幅1.2cm、厚さ0.6cm である。「山鹿郡」は比較的明瞭であるが、「紫草」の墨はうすく、「草」字には墨がついている。山鹿郡は肥後国に属し、現在の熊本県鹿本郡、山鹿市に当たるが、前掲の第87次調査出土の木簡(13)にも見える。裏面は、肉眼ではほとんど見えないが、赤外線テレビでは4文字を判別できる。第2字は麻垂が見えるだけであるが、第1字を考慮すれば、「麻」であろう。肥後国託麻郡を意味するのであろうが、前掲の木簡(9)では「宅麻」と記されていた。「大根」は第87次調査出土の木簡(1)に見えるそれと同意と考えられる。

#### (15) 豊口

081型式。柾目。2片に折れているが、他に損傷らしいものは見られない。しかし墨書の位置から見て、これが原形とは考えられず、あるいは用途未詳の木製品に墨書のあるもの(065型式)とみなすべきかもしれない。現存法量は、長さ32.1cm、幅2.3cm、厚さ0.3cmである。2字とも右半を削られているが、第1字はほぼ判別でき、第2字は「前」字の可能性が考えられる。他に記載がないので、詳細については明らかでない。

他に記載がないので、詳細については明らかでない。

#### (16) ×□箇ı

・081型式。柾目。上半部を欠損しているが、原形は033型式の可能性も考えられる。現存法量は、長さ9.5cm、幅2.1cm、厚さ0.3cmである。面が黒ずんでいるため判別しがたいが、2字を確認できる。第1字は欠損部にかかっているので、判読できない。具体的なことは明らかでないが、何物かの個数を示すものであろうか。

#### (17) 及充片百□第

廾 西

西口口口門

081型式。板目。横材を用いている。各辺は損傷している。現存法量は、横 $15.2\,\mathrm{m}$ 、縦 $3.7\,\mathrm{cm}$ 、厚さ $0.8\,\mathrm{cm}$ である。また界線をひいており、その間隔は右から $2.9\,\mathrm{cm}$ 、 $2.0\,\mathrm{cm}$ 、 $2.9\,\mathrm{cm}$ 、 $3.0\,\mathrm{cm}$ 、3.6 $\,\mathrm{cm}$ で、必ずしも一定していない。なお、他にこれと近似するものが $1\,\mathrm{L}$  点見られるが、現状では接続せず、筆跡も異なる。「西門」などいかにも意味がありそうであるが、詳細は明らかでない。何らかのテキストにもとづく習書の可能性も考えられる。

#### (18) 十七大□□

081型式。板目。左右両辺の上部は原状をとどめているようでもあるが、 3 片に折れ、各辺の損傷はひどい。現存法量は、長さ17.6 cm、幅2.2 cm、厚さ0.6 cm である。「十七大」は明瞭でないが、かろうじて判別できる。第 4 字以下は肉眼ではほとんど見えない。その旁は「良」であるが、偏は判別できない。上位 3 字とは異筆であろうか。詳細については明らかでない。

#### (19)

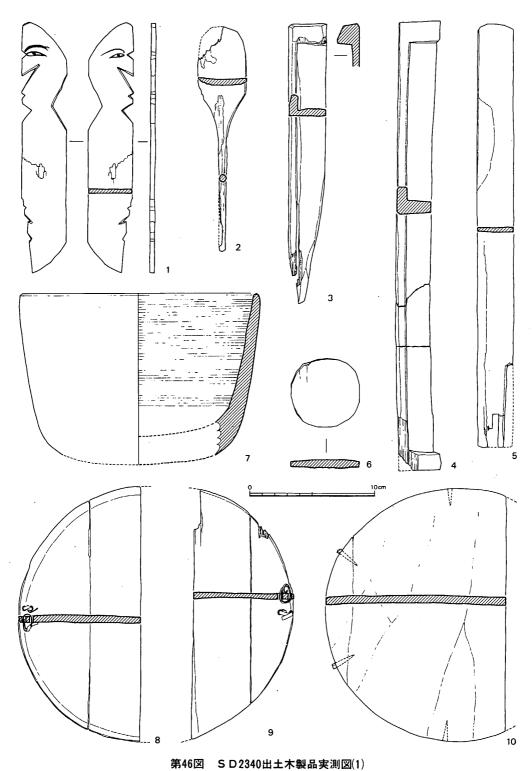
081型式。柾目。各辺の損傷がひどい。現存法量は、長さ13.2cm、幅4.4cm、厚さ0.8cmである。面はかなり黒ずんでおり、判読は容易でない。2字が見えるが、かなり左に片寄っている。現状から一応「鳥鳥」と判断したが、左辺が原状を保つかどうか確認できないので、「鳥」と旁とする字の可能性も考えられる。しかし、いずれにしても、習書とみなしてよいだろう。

#### (20) □□七

081型式。柾目。左辺は原状を保つようであるが、他辺はいずれも欠損している。現存法量は、長さ5.5cm、幅1.5cm、厚さ0.1cmである。墨がうすく、また欠損部にかかっているため、「七」字以外は判読できない。いわゆる草書風に書かれているようである。断片でもあるので、詳細なことは明らかでない。

# (21)

081型式。柾目。下端は原状をとどめるようであるが、他辺は損傷が著しい。現存法量は、長さ19.5cm、幅4.9cm、厚さ0.6cmである。腐蝕が著しいため、肉眼ではほとんど判別できない



が、赤外線テレビでは2行にわたって墨痕を確認できる。しかしそれらはいずれも断片的であり、具体的には判読できない。

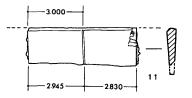
木製品 (第46・47図 図版83・84・92)

木製品は主に調査区東側で検出した南北溝SD2340から出土した。特に下層腐植土および中層青灰色砂質土から多く出土しいる。

人形(1) 厚さ0.3cmの柾目の板材に両側から切込みを加えて人形にしたもの。顔面は真直な側面に「V」字形の切込みを入れ口と鼻を表現している。特に鼻は斜め上方に向って大きく切込みをいれており、いわゆる大鼻になっている。両面に眉と目を墨描きする。後頭部は小刻み

に削り、丸く作り出す。頭頂部から約3分の1のところで両側から「V」字形の大きな切込みを入れ、頸部を表現している。脚部は斜め下方に向って3個の切込みを入れているが、何を表現したものか定かではない。ただ脚部下端の後方を丸く削っているところから、仮りにこの人形を天地逆にすると顔面の表現と同じであり、あるい

は顔面を作る場合の仕損じとも考えられる。高さ20cm、幅3.5cm。



第47図 S D 2340出土木製品実測図(2)

匙(2) 桧の板目材を加工したもの。身は先端を半円形にする。表裏の別があり、表は平滑に仕上げ、裏は荒い削りで甲高にしている。身の側縁から頸部にかけてはゆるく内彎して柄に続く。柄は面取りし、断面は円に近い。先端に向ってしだいに細くしている。長さ18cm、身の最大幅4.0cm。

方形盤(3・4) 3 は板目材を加工したもの、側縁は木目に平行する方は幅が狭く、直交する側は幅広にしている。高さ $1.3\,\mathrm{cm}$ 、底部と側縁に2 次加工の痕跡がある。4 は柾目材を加工したもので、3 と同様に木目に平行する方がやや幅が狭い。高さ $1.0\,\mathrm{cm}$ 。

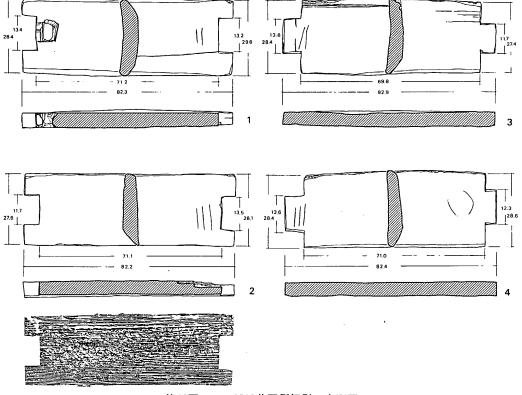
短冊形木製品(5)板目材の両面を丁寧に削り整えている。上端は丸くし、下端は直に切り落す。両面とも墨痕等は認められない。長さ34cm、幅2.8cm、厚さ0.3cm。

小円板(6) 柾目材を削り円形につくる。片面は丁寧な削りを加工しているが一方の片面は割載のままである。直径5.4cm。厚さ0.5cm。

木鉢(7)挽物鉢の破片である。木目のつまった材を縦木取りしている。割面からみて底部はかなり厚い。口縁端部は丸く仕上げている。一部に磨滅しているところがある。外面は平滑に仕上げているが内面にはロクロ挽きの痕跡が残る。残存している円弧から直径19.2cm、器高13.8cm位に想定できる。

曲物蓋(8・9) いずれも2分の1を欠失している。板目材を加工したものである。8は縁端部からやや内寄りに周縁にとって刻線がある。それぞれ1個ずつの樺皮が残る。

曲物底板(10) 3分の1を欠失している。木目のつまった柾目板を加工したもの。両面とも



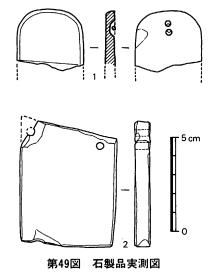
第48図 SE2510井戸側拓影・実測図

丁寧な削りで仕上げている。側面は直に削る。4個の木釘孔があるが、うち2個には断面方形の木釘が残る。直径20.3cm、厚さ0.6cm

木尺(11) 2寸分を残すのみで両端を欠失している。目盛は1寸刻みに刄物で「V」字形に刻んでいる。1 目盛の実測値は第47図に示したとおりで多少のばらつきがある。

### 井戸側 (第48図、図版84)

SE2510 溝SD2340 (天平六、八年銘木簡出土) 埋没後に構築された井戸SE2510の最下段には井籠 組の井戸側が1段組まれていた。この井戸は十世紀 後半代に考えられるもので、日吉、不丁の官衙域に おける建物に伴う井戸の可能性が強い唯一の資料で ある。



井戸側の残存状態はきわめて良好であった。部材全長は82.2cm~82.9cm、幅27.4cm~29.6cm、厚さ5.5cm~6.0cmで、4枚ともほぼ同じ法量の材である。隅の仕口は3枚組とし、東・西面の井戸側を出枘とする。各部材とも片面に樹木表面の自然面を一部残しているので、木取りは木裏が内面にくるようにしている。木口面は鋸挽の痕跡がみられる。部材両面は手斧で削っている。部材の1つには入枘の近くにノミで穿った穴がある。また組合せの番付と考えられる刻線がみられる。組んだ時の内法は69.8cm~71.2cmの正方形となり、平均数値は70.8cm(2.4尺)である。

草履 溝SD2340の下層から出土した。裏向きの状態で出土し、保存状況が悪かったため動かすことができず表は確認できなかった。上端部を欠失しているが、他は完存する。残存長15.5cm、幅9.8cmである。二本撚りした縄を周縁部近くに巡らし、その間に藁を一本ずつ並べた状態で挟みこんでいる。

#### 石製品 (第49図、図版92)

石帯(1)帯の先端を飾る鉈尾である。下半分は欠失しているが、先端のかがり穴1個がみられる。残存部では幅 $3.5 \, \mathrm{cm}$ 、厚さ $0.5 \, \mathrm{cm}$ である。本来は濃緑色を呈し光沢があったと思われるが現状では風化のため表面が大部白色化している。蛇紋岩か。

砥石(2) 一部欠失しているがほぼ完形に近い。上端近くの両側に径 4 mmの孔を穿っている。幅 5 cm、厚さ0.8 cmである。灰黒色を呈する砂岩系のものである。

#### 小結

これまで不丁地区で実施した過去6個所の調査地と今回の第87・90次調査を含めて、合計27棟の掘立柱建物等を検出した。今回の調査地域は昨年度実施した第83・84次調査および昭和45年度の第17次調査地域と隣接しており、今回でこの一帯の遺構状況の概略をほぼ把握することができた。前年度までの分については昭和58年度の調査概報に詳細にまとめ報告しているので、ここでは新たに検出した掘立柱建物と「天平八年」銘の木簡などを共伴した溝SD2340出土の遺物について若干の検討を行い結びとする。

建物 まず建物について検討すると、今回検出した掘立柱建物は 7 棟で、それに付属する柵 3 条がある。これらの建物は方位と重複関係から少なくとも 4 期に大別される。方位関係では S B 2355・2525・2530・2540は N 1°5′W で同一方位をとる。また S B 2525・2530・2540はほぼ同位置で重複する南北棟である。これら 3 棟の建物は柱掘形の切り合い関係もなく、また柱 掘形から出土した遺物もわずかであり、しかもいずれも八世紀後半代のものを含むことなどの 点からみてその先後関係は明らかにし得ない。建物規模からみると、 S B 2525と S B 2530はほぼ同じ柱間規模であり、建て替えの可能性が強い。また S B 2540は先の 2 棟に比較して柱掘形がやや小さく、深さも浅い。次に S B 2355と S B 2530には柱穴中に鴻臚館系の瓦が混入すると

いう似かよった状況がみられる。

以上のことからSB2355・2525・2530・2540の同一方位をもつ建物については、SB2355とSB2530が同一時期に存在していた可能性が強く、次の2案が考えられる。

①  $\begin{cases} S B 2355 \\ S B 2530 \rightarrow S B 2525 \rightarrow S B 2540 \\ \end{cases}$ ②  $\begin{cases} S B 2525 \rightarrow S B 2530 \rightarrow S B 2540 \\ S B 2355 \end{cases}$ 

次にSB2535については方位はN2°10′Wで先述の4棟よりさらに東偏している。SB2355他3棟の建物との先後関係は不明であるが、政庁第II期の軸線(N0°17′12″W)から考慮するとSB2535が後出すると考えられる。

SB2520とSB2515は重複しているが、柱掘形の切り合いはなく先後関係は不明である。しかしながらいずれも柱掘形は先述の建物よりひとまわり小さく、また不規則である点から、それらよりも後出する(SB2355柱掘形を切っている)と考えられる。方位関係からSB2515が後出する。

最後に出	トをす	上める	上次のト	うな変遷に	たろう
BY 1/2 / L L/	1 7/2	$\alpha$	( ( ( ) ) )	ニノム ク 恰に	- (2 ) / 2

	I 期	Ⅱ 期	Ⅲ期	IV 期	
1)	S B 2355 S B 2530→S B 2525→S B 2540	C D gene	C D 9590	S B 2515	
2	S B 2525→S B 2530→S B 2540 S B 2355	S B 2535	S B 2520		

年代については必ずしも明確でないが第Ⅰ期の上限を八世紀後半代と考え、第Ⅳ期はSB 2515柱掘形から出土した「大国」銘の平瓦から九世紀代と考えておきたい。昨年の調査結果では、礎石建物への移行時期を九世紀前半代に考えており、この地域においてもSB2525の柱掘形を切って落し込まれた礎石様のものがあり、また十世紀後半代の井戸SB2510が存在することなどから、礎石建物が存した可能性は十分あり得る。今一つSB2515から出土した「大国」銘瓦が年代的に明らかではなく九世紀代という大きな年代幅をとった。

因みに、発掘区北端で検出した南北棟建物SB2540は更に北方へ延びており、SB2525・2530と同じく9間ないし11間の桁行を有したとすれば、日吉地区官衙建物群の最北端に位置する掘立柱建物SB2000北側柱列とほぼ同一線上に位置することになる(9間と11間の場合では南北に各2.0mずれる)。そして蔵司前面築地SA1410との距離は約26mである。

また、日吉地区官衙建物にみられた梁行 3 間の建物が不丁地区においても今回の87・90次調査地域に集中している(年代的な相違がみられる)ことは注意されるが、ここでは指摘するに止める。

		須			計	土師器		計	総計	比 率 (%)	
		上層	中層	下層		上層	中層	下層		110 11	(%)
	蓋A	4	3	15	22					22	
	В	29	153	39	221	8	20	5	33	254	
食	杯A	0	3	0	3	2	2	0	4	7	
	В	33	112	11	156	10	10	2	22	178	
	Ш	2	7	0	9	0	4	0	4	13	
	盤A	1	1	0	2	3	4	1	8	10	79.5
器	В	1	2	0	3	1	0	0	1.	4	
	鉢	1	10	2	13					13	
	鉄鉢	0	4	0.	4					4	
	高杯	2	3	0	5					5	
n-t-	壺蓋	3	6	0	9					9	
貯	壺	1	1	.1	3					. 3	
蔵	小壺	0	1	0	1					1	5.6
具	甕	5	13	1	19			·		19	
	平瓶	1	2	1	4					4	
煮炊具	甕	83	321			18	74	4	96	96	14.9
	計		321	70	474	42	114	12	168	642	1100
比	比 率(%)		73	.8			26	.2			

SD2340 出土土器点数表

土器 表で示した数字は口縁部だけを数えたものである。須恵器と土師器の割合は昨年度報告の総点数を数えた表Aと大差ない。口縁部や底部片を数えた表Bを参照すると須恵器の割合は減じ、土師器が増えている。また貯蔵具と煮炊具の割合も逆転する。

出土土器のなかでは特に顕著な傾向は杯の蓋や身にみられる。出土土器の項で述べたように、蓋では口縁部が退化し、小さくなったもの、身では体部と底部の境が明瞭になるものなどが少数ではあるが出土している。S D 2340から紀年銘のある木簡が 4 点出土している。もっとも新しいものは天平八年(736)であるが、新出土の須恵器をみると、溝の埋没年代は736年よりも降り、八世紀中頃とする方が妥当ではないかと考えられる。

瓦類 次に瓦類についてみると、SD2340出土瓦をのぞいた以外は特にきわだった出土傾向は認められなかった。しかしながら第44図 $-2 \cdot 3$ および第45図-3は遺構面を覆う暗褐色土、茶褐色土層から出土し、その出土量は軒丸瓦、軒平瓦ともに鴻臚館式瓦に次いでいる。第44図-2、第45図-3はすでに前年度報告しているごとく、出土点数などからセット関係の可能性が考えられる。この軒先瓦は第14次調査で検出したSD320でも比較的高い出土率を占めており、不丁地区においてのかなりまとまった出土は、建物との関連性からみて、貴重な資料と言える。

S D2340出土瓦は第85次調査で出土した木簡にみえる天平六年に近い時期に投棄されとみられ、鴻臚館式軒平瓦の年代を八世紀第1四半期終末頃に推定できた。さらに鴻臚館式瓦、老司系瓦(別表1-1、5)は柱穴および掘形の切合い関係などから、老司系瓦が先行することが

明らかになっている。従来鴻臚館式瓦の年代観を大宰府政庁II期の開始時期に想定されていたが、今回新たに「天平 $\Box$ 年」、「天平八年十一月」の紀年銘の木簡が出土し、それとともに鴻臚館式軒丸瓦(第44図-1)が出土した。この出土によって老司II式、鴻臚館式はセット関係で検出したことになり、昨年報告した絶対年代にさらに確実な手掛りを与えたこととなる。

木簡 前述のように、本年度はSD2340から2度にわたって合計98点の木簡を検出し、昨年度に検出した62点を合わせれば、総計160点になった。98点のうち、代表的なもの52点については概要を報告し、若干の所見を述べたが、ここではそれらについてまとめてみたい。

まず、昨年度検出の木簡では紫草関係のものが大きな特徴の一つをなしていたが、本年度の木簡でもそれが目立ち、内容的にいくつかの新知見をえた。すなわち、第87次調査出土の木簡 (2) (以下では87-(2)というように記す)を含め、新たに8点を検出したが、さらに87-(5)・(6)の2点も関連性を想定できるので、その合計は15点となった。また、その貢納郡も、筑前国の糟屋、岡賀、加麻の3郡に加えて、筑前国怡土郡、肥後国の合志・山鹿・託麻の3郡、そして豊後国海部郡の5郡が判明し、豊後国はその正税帳から知られていたが、紫草がかなり広範な地域から貢納されていたことを示している。

一方、断片的な87-(9)はともかくとして、その書式はほぼ共通しているが、その中で90-(6)だけは大きく異なっている。前述のように、これが染料としての紫草の荷札であったとすれば、紫草の植物から染料への精製は、大宰府だけではなく、各国さらには各郡においても行われていた可能性が考えられ、その場合、在地にはかなりの技術が存したことにもなる。しかしわずか一例にすぎないので、豊後国ないし海部郡だけの特例かもしれないし、さらにはこの木簡は欠損のため原形も明らかでなく、荷札に不可欠と考えられる年紀の有無も確認できないので、ここではその可能性を指摘するにとどめ、後考を俟つことにしたい。

ところで、87-(11)に見られるように、紫草を数える単位として「編」も用いられており、この点から $87-(5)\cdot(6)$ も紫草に関連するものと推定したのであるが、とすれば、新たな問題が派生する。すなわち、一方では20根を標準的な一単位とする数え方が用いられているにもかかわらず、他方では10根を1編とする数え方が存したことになり、それではなぜ20根を2 編と称しなかったのかという疑問が生ずるからである。すでに昨年度概報でも述べたように、これらの本簡は大宰府において紫草を保管整理するために用いられた付札と考えられるが、その際に異なる2つの単位を用いることがありえないことではないにしても、作業などを煩雑ならしめる一因となるのではないだろうか。しかし現実に「根」と「編」の二単位が用いられていたことは事実であり、そこには何らかの政策的な意図が作用していたと考えざるをえない。そこで注目されるのが、「根」を用いているのは単に「紫草」とされているものであるのに対し、「編」が用いられている87-(11)では「紫草大根」とされていることである。「大根」は90-(14)にも見えるが、これは断片的であるので、これを別にすれば、87-(11)ではことさらに「紫草大根」と

されていることに意味があるように思われる。 あくまでも1つの推測にすぎないが、整理保 管に際して「紫草」と「紫草大根」とは区別 され、それぞれ用いられている単位も異なっ ていたのではないだろうか。「紫草」と「紫 草大根」の差異が単なる根の大きさによるの か、それ以外にも存するのかをはじめ、いま だ明らかでない点もあるが、今はこの程度に とどめておく。

次に、特徴の第2点としては多くの国郡名 および地名が見られる点を指摘できるだろう。 便宜的に第85次調査で検出したものを含め、 SD2340出土木簡に見えるそれらを示すと、 右掲の一覧表のようになる。これには推読し たものを一部加えているが、その個々につい ては前述しているので、ここではとくに注記 しなかった。また、必ずしも「国」字は付さ れていないが、明らかに国名と判断できるも のは国名の部に分類した。郡名の部のうち、 4と5および6~8の2組はいずれも同一郡 であるが、郡名表記の相異に意味があると考 えられるので、一応区別した。その他のうち 1・32・33の3点以外はいずれも郡名と考え られるが、「郡」字が付されていないので、 とりあえず区別した。

これらの中には習書と推定されるものも含まれているが、87—(19)を和銅六年(713)四月の大隅国建置以後のものとすれば、これらは西海道9国のうち日向国を除く8国におよんでいる。しかもその多くは付札類であり、それ以外のもので何らかの物品との関連性を推定させるものが少なくなく、大宰府における管内諸国島からの物資の集積状況の一端を

	<u>=</u>	名	郡	名	70	他	· 木 簡 番 号
1					筑	紫	90—(13)
2	筑	前					85—(1)
3			怡	土:			87—(2)·(3)·(22)
4			糟	屋			85—(4),87—(1)-(21)
5			滓	屋			90—(13)
6			Į3	<b>6</b> ]			87—(5)·(6)
7			図	賀			85-(5)~(7)
8			遠	賀			(85)—(19)
9			加	麻			85—(8)
10			夜	須			85—(12), 87—(4)
11	筑	後					85—(1)
12			Ξ.	井			87—(7)
13	肥	前					85—(14)
14			松	浦			85—(14)
15					合	志	87—(12), 90—(2)
16			合	志			87 —(11) ·(25)
17					(託)	麻	90—(9)-(14)
18			山	鹿			87—(13), 90—(14)
19	豊	前					85 —(17), 87 —(23) ·(28), 90 —(15)
20			京	都			87—(23)
21	豊	後					90—(6)
22			大	野			85 —(21), 87 —(14) ·(15)
23			海	部			87—(14), 90—(6)
24					大	分	87—(16)
25	薩	麻					87(17)-(18)
26					額	姓	87—(18)
27					麑	嶋	87—(27)
28			大	隅			87—(19)
29			桑	原			87—(20)
30			П	毛			87—(8)
31			口				87—(24)
32					権争	(嶋	90—(7)
33					伊重	望鳥	(90)—(8)

示している。もちろん、大宰府の機能や性格などからすれば、これらの木簡の出土はむしろ当然のことであり、ことさらに特記すべきほどのことではないかもしれないが、大宰府の管内諸国島に対する総管機能の一端を示す物証が得られたという点で評価できるだろう。なかでも、養老四年(720)までは在地の抵抗が続いた薩摩・大隅両国関係のものが見られることは、木簡の具体的な時期を特定できないにしても、両国に対する律令制支配の浸透を考える上で一つの手がかりになるように考えられる。

同じことは90—(7)・(8)についても言える。古代国家といわゆる南島との交渉については『日本書紀』以下に散見されるし、大宰府とそれとの関係にしても、『続日本紀』によれば、慶雲四年(707)七月には大宰府に来た南島人に位階と物を授けたこと、天平七年(735)には大宰大弐小野老が高橋牛養を南島に派遣して航路標式を建てさせたことなどが知られる。このほか、明記されていない場合でも、南島との交渉において大宰府が一定の役割を果たしただろうことは推察にかたくない。南島人は「化外民」ないし「夷人」とみなされていたが、彼らがもたらした「方物」にかかる木簡が付けられたことは注目される。ここで南島人との交渉などの問題について考える余裕はないが、この木簡はその交渉を示す物証というにとどまらず、来貢のあり方を考える上において重要な意味をもつと言えるだろう。

このほか、昨年度概報でも述べたような付札類が全体の約三分の一強を占めていること、85 一(1)や90—(1)などの軍制に関連するものが見られること、なども特徴の一つとしてあげうるし、さらには90—(3)のような工人などの上番に関するものも注目される。しかしこれらについては今後の検討に委ねなければならない点が少なくないので、ここでは指摘するにとどめる。

最後に、これらの木簡の時期について若干述べておこう。第85次調査出土の木簡からは養老から天平前半代にかけての時期が考えられたが、当然のことながら、今回も同じような傾向をうかがうことができる。すなわち、具体的な年紀としては、87—(4)の天平六年と87—(3)および90—(3)の天平八年の二種のみであるが、このほかにある程度までを推定させるものがいくつか見られる。その第1は90—(2)で、「合志評」と判読できるとすれば、これは少なくとも大宝元年(701)前後までさかのぼることになる。共伴遺物などから見たSD2340の時期ともとくに矛盾はしないが、「評」字と断定するにはいまだ疑問が残るので、この点についての検討は今後の課題である。また90—(13)は原形も全文意も明らかでなく、下半部からは一種の習書である可能性も考えられるが、これでは「□□屋□」に対して、「筑紫」と記されている点が注目される。筑紫が滓屋郡に対する国名を意識したものとすれば、この木簡は筑紫国が前後に分割された七世紀末ないしそれからさほど経ていない頃を下限とする時期のものということになる。しかし他に傍証史料は見られないので、いまだ1つの推測にすぎず、これについてもさらに検討を要する。これに対して、87—(5)・(6)の下限時期は和銅六年前後に比定でき、共伴遺物にこの時期のものが多いこともこれを傍証しており、その確実性は上記の二者よりも高いと考えら

れる。そこで、木簡に墨書された年代と廃棄された年代との関係などの問題もあるが、ここでは木簡のおおまかな年代として和銅年間から天平年間の前半代までの時期を考えておこう。

### 4 第88次調査

大宰府政庁南門の前面を走る県道関屋―山家線の南側に政庁域の張出し部があり、広場と考えられる中央の空間地をはさんだ東西に官衙域の存在することは、これまでの発掘調査の成果として明らかにされている。その西を限ると考えられる溝SD320の西側、すなわち政庁域に隣接する一帯にどのような内容の遺構が所在するのか、期待を持たれるものがある。しかしながら、この付近ではSD320に伴う一連の調査区や、昭和48年度に第29次調査として実施された広丸地区など過去にわずかの調査例しかなく、そのいずれでも顕著な遺構は検出されていない。今回の調査は土地区画整理事業に伴う事前調査であるが、そうした問題の解明を主な目的とした。

調査区はSD320に関する第76次調査区の西に接する水田地1200㎡で、大宰府条坊復原案の 右郭六条三坊に相当する。地番は太宰府市大字観世音寺字大楠323番地である。

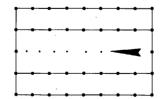
調査は昭和59年3月6日に開始した。耕土は事前に区画整理事業に伴い削平されており、床土の除去から始めた。調査区の東半では床土直下に遺構面があり、3月8日には東から遺構検出にはいり、掘立柱建物・井戸などを確認した。西に向かうにしたがって床土と遺構面の間に黒褐色土層をはさむようになり、多少時間を要したが、4月17日に遺構検出を終了した。以後、写真撮影、実測および補足調査を行い、5月8日に調査を完了した。

#### 検出遺構

検出した主な遺構は掘立柱建物10棟、柵1条、溝7条、井戸11基、土壙・柱穴などである。 遺構面は調査区の東半では床土の直下で検出されたが、西半では北辺を除いて20cm~30cmほど の厚さの黒褐色土層に覆われていた。この部分においても遺構は黒褐色土層を除去した後に確 認されており、遺構の層位的な区分はできなかった。

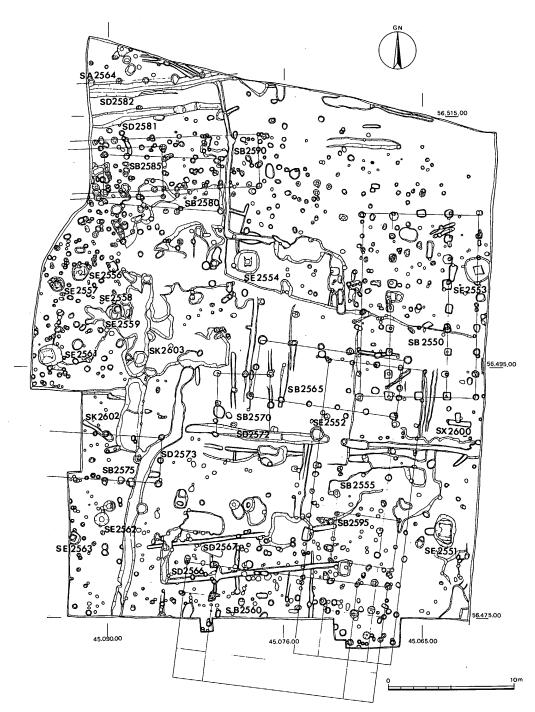
#### 掘立柱建物

SB2550 調査区の東辺で検出したN1°Wに方位をとる掘立柱建物である。梁行4間



(9.2m)×桁行8間(14.6m)の南北棟で、東西の両面に廂がつく。身舎部分の柱掘形は柱位置の明らかな例が多い。柱掘形はおおむね一辺60cm前後の方形プランを呈するが、円形状のプランの例が6ヵ所みられる。遺存状態の良い柱穴で径約22cmをはかるが、全体に柱穴は小さい。柱穴にはスサ入りの炉壁片

(第51図)・焼土・炭などが埋め込まれていた。身舎中央の桁方向北から5間分には床束の柱穴6個がある。桁行は1.8m前後に配された柱位置の間隔からみて6尺等間である。梁行は2.3m前後をはかり、8尺をやや下回っている。東・西につけられた廂の柱掘形は方形状をな



第50図 第88次調査遺構配置図

す西南隅の1例を除いていずれも円形をなす。大きさも身舎のそ れにくらべ径30cm~50cm前後となり、小形化している。東側柱列 は身舎と2.3mの間隔で配される。これに対し西側柱列は直線を なさず、柱筋をはずれる例もあるなど乱れているが、おおむね身 舎と2.3m~2.4mの間隔をもつ。平均して梁行は2.3mの等間と 第51図 SB2550柱掘形出土 なるが、おそらくは8尺等間で企図されたのであろう。したがっ

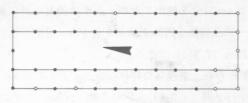




スサ入り炉壁片

て梁行4間(8尺等間)×桁行8間(6尺等間)の東西に廂が取り付く南北棟建物に復原しう る。SD2555・SE2553によって切られている。

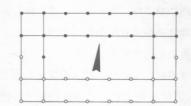
SB2555 SB2550の南に位置し、それに後出する梁行4間×桁行10間以上(おそらくは他例



。 からみて11間)の南北棟建物で、やはり東西の両 面に廂がつく。南端は調査区外に延びている。方 位をN7°15′Wにとり、SB2550よりもかなり 東に振れている。柱掘形はいずれも円形で、身舎 では50cm~60cm前後をはかるが、廂のそれは約

30cmの小形の例が多い。柱間の間隔は乱れていて、廂は必ずしも直線に並ばず、梁方向に柱筋の 通らないものもある。また西側柱列には柱掘形を欠く例すら認められる。ともあれ、梁行の柱間 は比較的まとまっていて1.95 m (6.5 R)等間をなす。桁行の柱間は $1.9 \text{ m} \sim 2.3 \text{ m}$ の間にあるが、 北端の1間(おそらくは南端の1間も)を8尺、他を7尺ととれば一応のおさまりがつく。SB 2550に後出する。またSE2552埋土中に廂の柱掘形が認められたので、それにも後出する。

SB2560 調査区の南端にその東半をSB2555と重複させて位置する東西棟建物で、大部分



は区外に延びる。方位をN7°Wにとる。柱掘形の配置か らみて梁行2間以上(おそらく4間)×桁行7間の四面廂 建物であろう。柱掘形は形状・大きさともにSB2555に通 じ、身舎にくらべて廂は一回り小さい。身舎の柱間は梁 行・桁行ともに2.2m~2.35mをはかる。桁行(5間)の

総長は11.3mとなり、平均2.26m(7.5尺)等間となる。また廂は梁行・桁行ともに約2.4m (8尺)をはかる。したがって7.5尺等間に企図された身舎の四面に、梁行・桁行ともに8尺 の廂が取り付く四面廂建物である可能性が強い。

SB2565 SB2550・SB2555および中央付近のSB2570と重複して位置する。梁行2間



(4.6m)×桁行5間(11.6m)の東西棟建物である。柱掘形は円 形プランを呈し、径40cm~70cm前後をはかる。柱間寸法は梁行・桁 行ともに2.32m前後の等間となり、8尺をやや下回ることになる。

この付近には建物としてまとまる例を除いて柱穴はほとんど存在しない。その点や等間の配置

からみて、これが 1 棟をなすことは疑いないが、正確にみれば梁と桁とは直交せず、西南隅が約85°に交叉する菱形とみる時にもっともおさまりがよい。N 7°30′Wに方位をとる。

SB2570 調査区のほぼ中央に位置する。建物の北半では明瞭な径50cm~60cm前後の円形の



柱掘形が認められたが、南半は溝SD2572で削平され不明瞭であった。それより南へは延びず、 $2 \times 2 \times 2 \times 100$   $\times 100$   $\times$ 

る。やや西側の間隔が広いが、約2.1 m (7 P) 等間を企図したものであろう。したがって梁行2間(14 P) ×桁行2間(16 P) の南北棟建物と考えられる。

SB2575 調査区の西辺に位置する掘立柱建物で、N3°20′Wに方位をとる。梁行2間(3.6m)



の東西棟で、桁行は3間(5.4m)分を検出したが、西半は調査区外に延びている。柱掘形は径40cm~50cm前後の円形プランを呈する。柱間寸法は梁行1.8m(6尺)、桁行2.25m(7.5尺)である。

SB2580 調査区の北西に多数の柱穴の集中がみられ、重複した建物の存在が認められる。



SB2580はその1棟で、梁行2間(3.9m)×桁行5間(9.3m)の東西棟に復原しうる。方位をN2°Wにとる。柱掘形は径40cm前後の円形プランを呈する。柱位置は不規則で、西側の妻が1.95m(6.5尺)等間で

あるのに対し東側妻は4.2 m (1.95 m + 2.25 m) となり、全体を台形状にしている。桁方向にしても同様で北側柱列が5間であるのに対し、南側柱列は4間である。すなわち北側では東から3間分の柱間を2.0 m (7尺弱)等間にとるのに対し、南側では2間分3.0 m (10尺)等間にとっている。残りの2間分は1.65 m (5.5尺)等間となり、東側3間分との間に間仕切りの柱穴が認められる。なお南側柱列と約2 mの間隔をおいて東西に並ぶ柱穴列があり、これを一連と考えれば梁行3間×桁行5間の東西棟建物になるが、柱間寸法がより以上に不規則となる。ここでは梁行2間の建物として復原し、3間となる可能性を指摘しておく。

SB2585 SB2580と重複する東西棟建物で、梁行2間(4.0m)×桁行3間(約5m)以上



となり、その西半は調査区外に延びる。方位を $N~2^{\circ}E$  にとる。柱掘形は径40cm前後の円形プランを呈する。柱間寸法は梁行で2.0m~(7 尺弱) 等間であるが、桁行は東から $1.65m\cdot 1.8m\cdot 1.5m$ となり不規則である。東端の1

間は1.5mとみられないこともなく、そうであれば1.5m(5尺)+1.8m(6尺)+1.5m(5尺)の柱間となり、桁行 3間の建物となる可能性もある。しかし妻柱に相当する位置に柱穴を欠いている。柱穴の1つがSB2580のそれと接するが先後関係は不明。

SB2590 SB2585の側柱列に平行してそれぞれ0.5m、0.7mの間隔で2条の柱穴列が走る。



妻柱の位置が南に片寄りすぎる点や柱間間隔がやや不規則である点など疑問もあるが、一応掘立柱建物として復原しておく。

第52図 掘立柱建物柱掘形断面図

SB 2560

梁行 2間(4.2m) ×桁行 6間(12.5m) 以上の東西棟建物で、方位を N2°30′E にとる。梁行の柱間寸法は北側の1間が2.4m(8尺)、南のそれが1.8m(6尺)となる。また桁行は東から1.8m(6尺)、2.4m(8尺)、以下は2.1m(7尺)となる。

SB2595 SB2555と完全に重複して位置する建物で、方位をN8°20′Wにとる。梁行2間



 $(3.9 \, \mathrm{m})$  ×桁行 3 間 $(4.95 \, \mathrm{m})$  の東西棟に復原される。柱掘形は径 $35 \, \mathrm{cm}$ 前後の小形のもので円形プランを呈する。柱間寸法は梁行 $2.1 \, \mathrm{m}$ (7尺) +  $1.8 \, \mathrm{m}$ (6尺)、桁行 $1.65 \, \mathrm{m}$ (5.5尺) 等間である。SB  $2555 \, \mathrm{c}$ の先後関係は不明。

柵

SA2564 調査区の西北隅をほぼ東西に走る溝SD2582の北岸に沿って1条の柵が認められた。その位置からみて溝と関連すると思われる。4間分(9m)を検出したが、さらに東西に延びると思われる。柱間寸法は2.25m(7.5尺)である。

#### 濭

 $SD2566 \cdot 2567$  調査区の南端近く、SB2560付近に位置する。 2 条の溝はいずれも幅  $0.35\,m\sim0.45\,m$  前後をはかり、東から西へと流れている。深さは $0.1\,m$ 未満と浅く、削平されたのであろう。両溝は溝岸端で $2.5\,m$ の間隔をもち、流れの方向、溝底の高さを等しくする。道路の側溝などとして同時に存在したと考えられる。

S D 2571・2572 調査区中央のやや南をほぼ東西に走る溝で、S B 2555・S E 2552を切っている。両溝は中間の陸橋部で切られているが、同一溝であろう。東側のS D 2571は幅 $0.45\,\mathrm{m}$ 前後、深さ $0.1\,\mathrm{m}$ をはかるが、その両端はやや深くなっている。溝底は水平である。S D 2572は長さ $11.4\,\mathrm{m}$ 、幅 $0.75\,\mathrm{m}$   $\sim 0.85\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.1\,\mathrm{m}$  をはかる。ゆるやかに西から東へ流れ、東側の 3分の1は一段深くなっている。両溝は地山に削り込まれているが、その間に約 $1\,\mathrm{m}$  幅の陸橋部が削り残されている。位置と方位からみてS B 2565に関連する溝であろう。

**SD2573** 調査区の西辺付近を南北に流れる溝である。幅 $1.0 \,\mathrm{m}$  前後、深さ $0.2 \,\mathrm{m}$  をはかり、北から南へゆるやかに流れる。北端から約 $5.7 \,\mathrm{m}$  で流れの方向を変えるが、その変換部に $0.3 \,\mathrm{m}$  の間隔をおいて  $SD2572 \,\mathrm{o}$  西端がくる。 $SD2572 \,\mathrm{c}$  はほぼ直角の位置にあり、やはり SB2565 に関連する溝であろう。 $SB2575 \,\mathrm{e}$  切っている。

SD2581・2582 調査区の北西隅付近をほぼ東西に走る。SD2581は幅 $0.7\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.2\,\mathrm{m}$ ほどで、西に向かって幅広となっている。ゆるやかに西へと傾斜しているが、東端付近はやや深まっている。溝肩が平均して $1.1\,\mathrm{m}$ ほどの間隔をもってその北を走るSD2582は、幅 $0.85\,\mathrm{m}\sim1.0\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.35\,\mathrm{m}$ をはかる。両端ともに調査区外に延びているが、流れはゆるやかに西へと向かっている。両溝の間の平坦地にはその延長部を含めてほとんど柱穴がみられない。またSD2582の北岸に接して柵SA2564が配され、SD2581の南に柱穴が集中している。これからみてこの地区の建物群の北を限る施設に伴う溝であろう。溝SD2566・2567と方向を等しくし、その関連がうかがえる。

#### 井戸

SE2551 SB2555の東で検出した。長軸2.6 m、短軸1.7 m の楕円形プランの掘形を上面で認めたが、下部では方形をなしており、本来は一辺1.7 m ほどの隅丸長方形掘形であったと思われる。底面までの深さ1.03 m。井戸側は方形縦板であるが、残りは良くない。底面に隅柱として径10 cm~15 cmの丸太材を打ち込み、内法長95 cmの方形に縦板を配している。縦板は2重に配している。縦板を支える横桟と両側の隅柱2本は残存していない。縦板の残存高は約30 cmである。隅柱・縦板からみて主軸の方位をN7°15′Wにとっている。大宰府検出井戸分類のII — A類に属する。

**SE2552** SB2565の南側に位置し、SD2572によって切られている。またSB2555の廂の柱掘形が掘り込まれていたので、先行していることが知られる。井戸掘形は径 $1.1_m$ の円形で

0.7mの深さに掘られている。井戸側はわずかに破片を残すが、それによって大要を知りうる。掘形の下面は径約75cmの円筒状をなすが、その壁面に貼付くようにして縦板がみられ、その内側に接するように曲物が置かれていた。したがって井戸側に径70cmくらいの曲物を置き、その外側に補強材として縦板を置いたものに復原できる。すなわちⅣ—B—b 類ではなく、Ⅲ類に分類される井戸であろう。底面には50cm前後の礫を厚く敷き詰めている。なお上面に炭の堆積が認められた。

S E 2553 調査区の東辺で検出した井戸で、S B 2550を切っている。掘形は径2.0 m のやや角張った円形プランを呈する。井戸側は深さ0.65 m で検出された。横板を使用した方形井戸側で、内法長55cm~60cm、深さ90cmをはかる。横板の端部に合欠きをつくり組み合わせる嵌板のものであった。主軸の方位をN  $10^{\circ}$ E にとる。 I 類に分類される。

SE2554 SB2565の北西で検出した。掘形は長軸2.0 m、短軸1.9 mの隅丸方形プランを呈する。井戸側は方形縦板で主軸を南北に組み、底部に曲物を置いている。まず基部に一辺7 cm ほどの角材で横桟を組む。南北方向の角材の両端に枘をつくり、東西方向の角材の両端の枘穴と組み合わせている。内法長で79 cm×71 cmをはかり、南北にやや長い。その20 cm上にもう1組の横桟がみられる。まず板材で横桟を組み、その上に角材の横桟を重ねている。各辺ともに幅広の縦板を3枚使用している。土圧によって側板は著しく歪んでいる。底に径40 cm、深さ12 cm の大きさの曲物を置く。掘形上面からの深さは1.36 mである。主軸をほぼ南北にとる。 $\Pi$ —A 類に分類される。

SE2556 調査区西辺の中央付辺には井戸 5 基が集中している。SE2556はそのうちもっとも北に位置する。一辺1.35 mの隅丸長方形の掘形に、方形井戸側が組まれているが、残存状態は良くない。四隅に径10 cm ほどの丸太材を隅柱として打ち込み、その3 本が残っている。心々で東西75 cm、南北56 cm をはかる。横桟はすでに失われている。東辺を除いて縦板は内側に倒れ込んでいるが、東西約70 cm×南北約65 cmの内法長に復原される。底面には径37 cmの曲物が置かれているが、深さなどについては不明である。掘形上面から底面まで0.7 mの深さをはかる。 $\Pi$  一 A 類に分類される井戸である。掘形の周囲の四方に2.0 m の間隔で柱穴が配されており、上屋を架したことを知りうる。主軸を南北にとる。

SE2557 SE2556の西南に位置する。掘形は径 $1.15\,\mathrm{m}$ ほどの円形プランを呈する。井戸側は四隅に径  $4\,\mathrm{cm}$ の丸太材を隅柱として打ち込み、横板をわたして組んでいる。内法長 $50\,\mathrm{cm}$ 、板材の深さ $25\,\mathrm{cm}$ をはかる。井戸側上面の周囲には瓦を敷き詰めていた。主軸の方位を $N\,13^\circ30^\circ$ Wにとる。底部には径 $20\,\mathrm{cm}$ ほどの曲物容器が置かれていた。

SE2558 SE2556の東南に位置する井戸で、SE2559から切られている。そのため掘形の大部分が破壊されているが、残部からみて軸長  $1 \, \mathrm{m}$  ほどの隅丸方形と思われる。井戸側の上部は不明であるが、下部に曲物  $2 \, \mathrm{QE}$ を据えている。上段は内径 $52 \, \mathrm{cm}$ 、深さ $40 \, \mathrm{cm}$ 、下段は内径 $44 \, \mathrm{cm}$ 、

深さ31cmをはかる。掘形上面から底面までの深さは1.4mである。現状ではⅢ類であるが、Ⅱ -B-b類の可能性ももっている。

SE2559 SE2558の西南に接し、それを切っているが、残存状態はきわめて悪かった。掘形は隅丸方形プランを呈し、上端の軸長 $1.25\,\mathrm{m}$ 、下端で $0.85\,\mathrm{m}$ をはかる。井戸側は $2.25\,\mathrm{m}$ 0丸太材を打ち込んだ隅木  $3.4\,\mathrm{m}$ 0、および縦板材  $1.4\,\mathrm{m}$ 0、大形縦板の井戸側であることを示していた。隅木・横桟の間隔からして、内法長は約60cmに復原される。底面には長径 $2.4\,\mathrm{m}$ 6、短径 $2.4\,\mathrm{m}$ 5、は変化を記される。底面には長径 $2.4\,\mathrm{m}$ 6、大力に変化を記される。底面には長年をはで南北にとっている。  $1.4\,\mathrm{m}$ 7、大力にある。

SE2561 SE2558・2559の西南に位置する。掘形は長軸 $1.85\,\mathrm{m}$ 、短軸 $1.7\,\mathrm{m}$ の不整円形である。井戸側は方形縦板で組まれていたが土圧によって大きく歪んでいた。四隅に $4\,\mathrm{cm}\sim7\,\mathrm{cm}$ 大の角材を打ち込んで隅柱とし、その間に横桟を $3\,\mathrm{RC}$ に組み、幅 $7\,\mathrm{cm}$ 前後、残存長約 $145\,\mathrm{cm}$ の縦板を並べていた。底面で内法長 $94\,\mathrm{cm}$ をはかる。主軸の方位を $N\,10^\circ$ Eにとる。 II-A類に分類される。今回の調査で検出された11基の井戸中もっとも深く掘り込まれた例である。

S E 2562 調査区の西南隅近く、S B 2575の南で検出した。掘形は上面で長径 $1.21\,\mathrm{m}$ 、短径  $1.06\,\mathrm{m}$  のほぼ円形プランを呈し、 $1.47\,\mathrm{m}$  の深さをはかる。井戸側は存在しなかったが、底面が径 $42\,\mathrm{cm}$  の円形をなし、下底から $10\,\mathrm{cm}$  ほど壁面が直立することなどからみて、曲物が裾えられていたものと思われる。

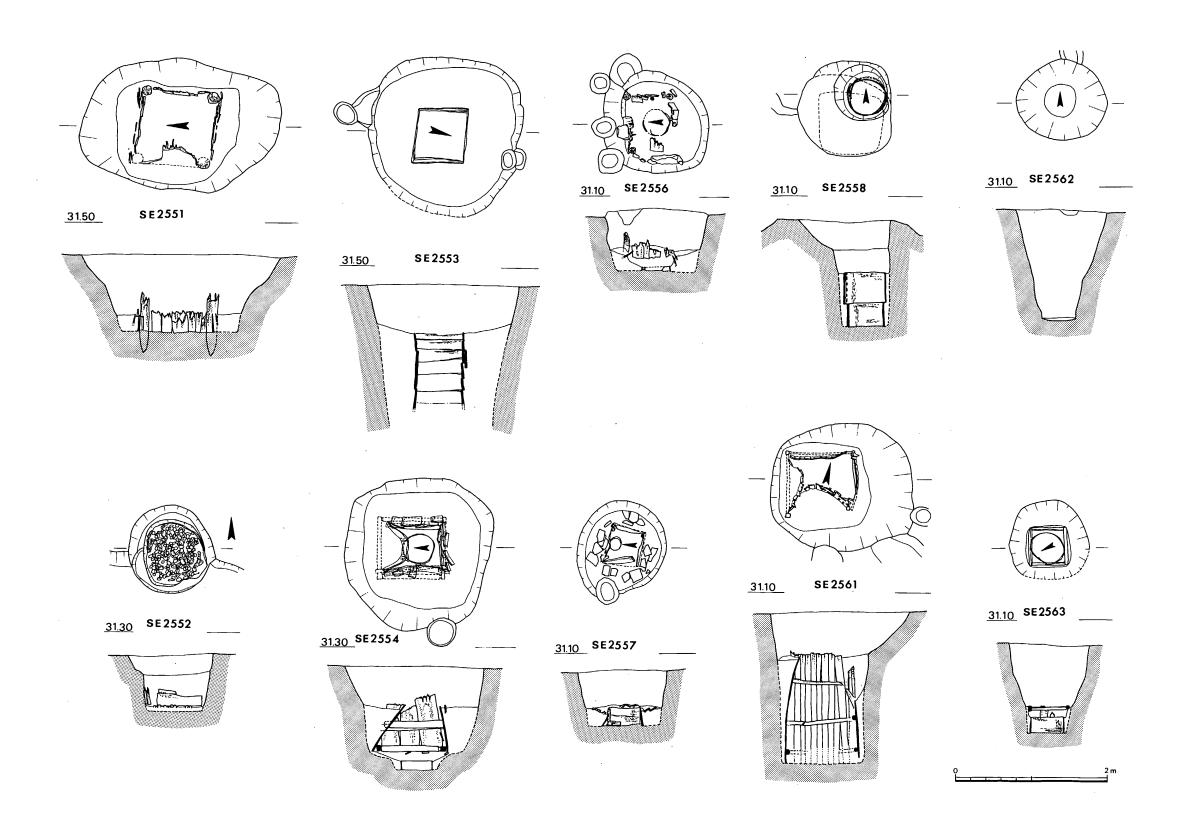
S E 2563 S E 2562の西南に位置する。長径 $1.05\,\mathrm{m}$  ほどの角張った不整円形の掘形に、II-A 類に分類される井戸側が据えられている。方形縦板側は最下段の横桟のみを完全に残すが、縦板は抜き取られたためかほとんど残っていない。横桟の内法長 $45\,\mathrm{cm}$ 。底には内径 $41\,\mathrm{cm}$ 、深さ $20\,\mathrm{cm}$ の曲物が据えられていた。 $N25\,\mathrm{cm}$  以に方位をとる。

#### 土壙

SK2602・2603 調査区の西辺に所在する大土壙で、南北方向に並ぶ。SK2602は長さ約6 m、幅1.7m~2.0m、深さ0.2m~0.3mをはかる土壙で、北にむかって傾斜している。SK2603はその北に位置し、長さ約8 m、幅約2 m、深さ約0.3mをはかり、南北両端が深くなっている。両土壙ともに長方形の両端を半円形にしたような形状をし、幅・深さをほぼ共通にしている。ただ上端幅5 cmほどのわずかな堤部をもって南北に分けられている。おそらく両土壙は相互に関連するものであろう。調査区の北辺・西辺・南辺に数多く分布する柱穴群が両土壙の東側では疎になる点はことに注目される。

#### 墓

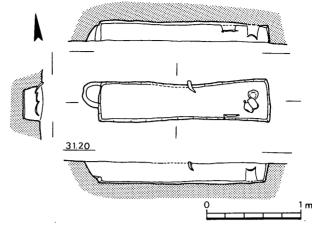
 $S \times 2600 S B 2550$ の南で木棺墓 1 基を検出した。墓壙は上端で長さ1.80 m、幅は中央でやや狭くなるが平均0.45 m、深さ0.22 mをはかり、細長く掘り込まれていた。墓壙内から鉄釘が検出され、釘留めの木棺を埋置していたことがうかがえるが、棺材は遺存しなかった。人骨の



遺存もなかったが、遺物が東端に 集中しており、頭位を東にしたこ とが知られる。主軸をN95°30W にとる。

遺物は土師器(小皿・杯)・鉄 刀子・鉄鎌・鉛玉各1が出土した。 鉛玉を除いていずれも墓壙底より もかなり浮いた状態にあり、棺蓋 上に副葬されていたと判断される。

同様の掘り込みはSB2550の北 半で2基認められた。東側の1基



第54図 S X 2600実測図

は浅く墓とは考え難い。西側のそれは長さ1.4m、幅0.5m、深さ0.3mをはかるが、墓を裏付ける遺物の出土はなかった。

# 出土遺物

# SB2550出土土器 (第56図)

# 須恵器

- 皿(1) 小形の皿で、柱掘形から検出した。口径14.8cm、器高2.6cm、底径11.2cmをはかる。 体部はヘラ切り離しされた底部から直線的に立ち上がる。口縁外端には凹部が沈線状にめぐっている。
- **甕**(3) 柱掘形柱穴中から検出した小形の甕の口縁部片である。口縁端部外側には2条の沈線をめぐらし、頸部から上をヨコナデで仕上げ、胴部に叩き目を施している。

# 土師器

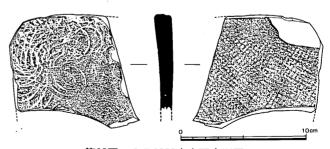
皿(2) 口径19.5cm、器高1.8cm、底径14.9cmをはかる。底部は回転へラ削りし、体部・内底部をヨコナデ、ナデで調整している。柱掘形柱穴から検出。

## SB2555出土土器・硯(第

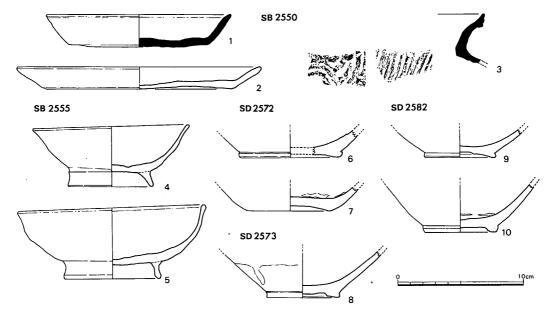
55・56図、図版58・93)

# 土師器

椀(4・5) SB2555の身舎 柱掘形内の柱穴(西列北から6 番目)から出土した。4は口径 12.4cm、器高4.7cm~5.0cm、高 台径6.7cmをはかる。器形はや



第55図 SB2555出土硯実測図



第56図 SB2550・2555、SD2572・2573・2582出土土器・陶磁器実測図

やいびつで、軟質の焼成のためか器面が磨滅し調整を不明にしている。 5 も器面の磨滅した椀で、 4 にくらべていっそう体部に丸味が加わり、新しい要素をもたらしている。口径15.0cm、器高5.4cm $\sim 5.9$ cm、高台径7.8cmをはかる。

## 硯

猿面硯 須恵器甕の胴部片を利用した硯で、打ち欠いた端部を擦って整形している。硯面には弧状の当て具痕が残るが、過度の使用で擦り減り、平滑になっている。背面には細い格子の叩き目がみられる。柱掘形から出土。

# S D 2572出土陶磁器 (第56図)

#### 青磁

- 椀(6)底径8.3cmに復原される椀底部の小片で、内面には黄緑色の釉がかけられるが、外面 および外底部は露胎で赤茶色を呈する。内底の見込み部に目跡が認められる。越州窯系。
- 杯(7) 2分の1を残す底部の破片で、底径6.5cmをはかる。胎土は灰白色を呈する。内面には全面に黄色味をおびた緑色の釉が施され、部分的に褐釉もみられる。内底見込み部には目跡が残る。外面はほとんど露胎であるが、部分的に黄褐色の釉の流れがみられる。

# S D 2573出土陶磁器 (第56図)

# 青磁

椀(8)胎土が淡赤茶色をなす越州窯系青磁椀の底部片で、内面および外面の中位から上に は黄茶色気味の緑色の釉がかけられている。外面は削りで調整され、下位は露胎のままである。 内底の見込み部と高台下面に目跡を残している。底径5.8cm。

#### SD2582出土陶磁器(第56図)

# 青磁

椀(9・10) いずれも全面に施釉された越州窯系青磁椀の底部片である。9 は蛇の目高台で、径5.8cmに復原される。茶灰色気味の黄緑色の釉をかけている。高台畳付部に目跡が残るが、削り取られている。10は高台径6.0cmに復原される。黄緑色の釉がかけられ、細かい貫入がみられる。内底見込み部および高台下面に目跡が残るが、後者は削り取られている。

# **S E 2551出土土器・陶磁器**(第57図、図版58)

# 須恵器

蓋(2)無返りの蓋で、天井部はヘラ切り離しのままである。内面はやや平滑になっている。

杯(2・3) いずれも有高台の杯で、底部から立ち上がる体部は口縁部近くでわずかに外方に曲がる。高台は底部と体部の境に付けられ、やや外開きになっている。3の高台下底部には板状の圧痕が認められる。3は井戸側中からの出土。

#### 土師器

皿(4・5) 4 は外底部を回転へう削りしているが、体部の調整は風化のため明らかでない。井戸埋土かの出土。5 は体部をヨコナデ、内底部をナデで仕上げている。井戸側中からの出土。

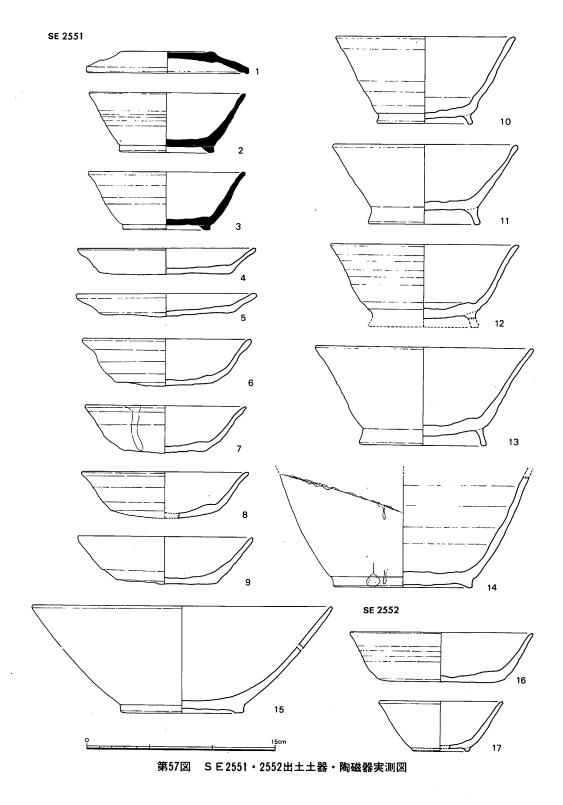
SE 2551 · 2552

	口径	器高	底径·高台径
1	13.0	1.7	
2	12.6	4.8	7.7
3	12.5	4.6	7.0
4	14.2	2.1	10.4
5	14.4	1.9	11.0
6	13.5	3.7	7.7
7	13.0	3.8	6.6
8	13.3	3.8	8.6
9	14.0	3.8	8.0~8.2
10	14.4	7.0	7.6
11	14.9	6.4	9.0
12	15.0	8.0	10.0
13	17.4		
14			11.1
15	(24.1)	(8.6)	9.9
16	14.6	4.0	10.1
17	9.9	4.0	4.6

杯(6~9) へラ切り離しされた底部からヨコナデ調整された体部が立ち上がる。体部は内 彎気味に立ち上がるが、古期の特徴を残す9がそのまま端部にいたるのに対し、6~8 は上位 でやや外反する。7 は内面の中位まで墨様の付着物がみられ、一部下面に垂れ下がっている。 9 の外底部には板状圧痕が認められる。6~8 は井戸側中からの出土。

椀( $10\sim13$ ) いずれもヘラで切り離された底部から直線的に立ち上がる深めの体部の椀である。体部および内底はヨコナデ、ナデで調整されている。底部と体部との境に付けられた高台は外方に開き安定している。 $10\cdot12$ は井戸側中からの出土。12は煤が付着し、内外面ともに黒褐色になっている。

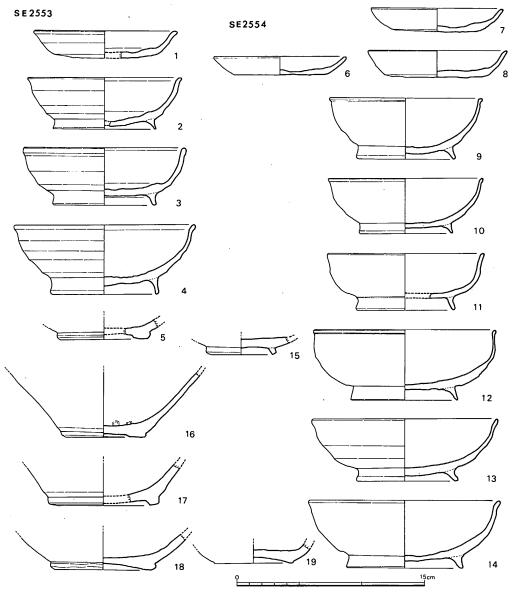
壺(14) 壺の下半部で、井戸中から出土した。内面の全面および外面の一部に漆が付着している。胴部の破損面にも漆が付着しており、壺下半部を漆容器として転用したものであろう。 外底部および胴部外面はヘラ削りで形をととのえている。胴部はその後にヘラミガキで調整しているようである。低い高台が付けられている。



- 98 -

# 青磁

椀(15) 口径24.1cmに復原される越州窯系の大形の椀である。高台をヘラ削りでつくり出し、 畳付部は露胎となって赤褐色を呈する。14個に復原される目跡がみられる。他の部分は灰色の 緻密な胎土に淡黄緑色の非常に良好な釉がかけられ、光沢をもって発色している。井戸側内か らの出土。



第58図 SE2553・2554出土土器・陶磁器実測図

#### S E 2552出土土器 (第57図)

#### 須恵器

杯(16) やや軟質の焼成の杯で、内彎気味に立ち上がる体部は先端がやや外反する。外底は ヘラで切り離され、体部・内底部をヨコナデ・ナデで仕上げている。井戸側中からの出土。

## 土師器

椀(17) 口径9.9cmに復原される小形の椀で、回転ヘラ削りされた底部と大きく開く体部からなる。よくえらばれた胎土を比較的硬質に焼成している。赤茶色を呈する。井戸側中からの出土。

# S E 2553出土土器・陶磁器 (第58図)

## 土師器

皿(1) 口径11.4cm、器高2.2cmをはかる。底部はヘラ切り離しされ、体部をヨコナデ・ナデでていねいに調整している。井戸側中からの出土。

椀(2~4) 口縁部付近で外反する丸味の強い体部に、外方に開く高台を付けた椀である。外底部はヘラ切り離しされ、2には板状圧痕が認められる。体部、内底部はヨコナデ、ナデで調整を加えている。2は体部の内外面に煤状の付着物がみられる。いずれも井戸側中からの出土。

#### 青磁

椀(5)越州窯系青磁椀の底部片。残部外面は 露胎で、赤茶色を呈する。内面には黄色味をおび た緑色の釉がかけられている。内底の見込み部に 目跡が残されている。井戸側中からの出土。

## S E 2554出土土器・陶磁器(第58図、図版59)

# 土師器

SE 2553 · 2554

	口径	器高	底径·高台径
1	11.4	2.2	8.3
2	12.3	4.1	8.2
3	13.0	4.6	8.3
4	14.6	5.6	8.7
5			7.6
6	10.6	1.5	7.4
7	10.5	1.9	7.1
8.	11.2	2.2	8.2
9	12.2	4.9	7.8
10	12.4	4.4	7.4
11	12.6	4.6	8.0
12	14.6	5.7	8.4
13	14.9	5.0	8.0
14	15.2	5.4	9.2
15			5.7
16			6.8
17			8.8
18			8.4
19			6.3

皿(6~8) 口径10.5cm~11.2cmほどの皿で、6は他にくらべやや器高が低い。底部はヘラ切り離しされ、体部・内底部をヨコナデ・ナデで調整している。7・8の外底には板状圧痕がみられる。

椀(9~15) いずれも底部から体部にかけて丸味の強い線を描くが、口縁端近くで軽く外方に口を開いている。ことに12はそれが顕著で、反転した口縁の外側下端に段差をつけるため、いわば小さい玉縁状をなしている。ヘラで切り離された外底部には外に開く高台が付けられている。9 を除いて器高がやや低い。器表の荒れている11、外底をていねいにナデで再調整した

13を除いて、板状圧痕がみられる。

## 灰釉陶器

椀(15) 灰白色の胎土を用いた椀の底部のみが残る。淡い灰緑色の釉が内面にうすくかけられている。

#### 青磁

椀(16~18) いずれも椀の底部片で、越州窯系のものである。16は全面に釉がかけられ、内底の見込み部と高台畳付部に目跡が残るが、畳付のそれは削り取られている。17は風化が著しいが、高台畳付部を除いて全面に釉がかけられている。畳付部には目跡がみられる。内底見込み部のそれは不明瞭。18は内面のみに施釉され、風化しているが、やや白っぽい黄灰色をなす。内底見込み部に目跡がみられる。外面は露胎で、赤茶色を呈する。

杯(19) 底部のみ完存する。内面には黄茶色気味のあわい緑色の釉をかけている。見込み部に4個の目跡がみられる。外面は露胎をなし、赤茶色を呈する。長沙窯系の製品であろう。

S E 2556出土土器・陶磁器 (第59図・図版59)

## 須恵器

杯(1・2) いずれも5分の1ほどの破片で、 へうで切り離されたやや不安定な底部と直線気味 に立ち上がり口縁部が外反する。

#### 土師器

皿(3~5) ほぼ同大の皿で、ヘラ切り離しされた底部に直線状に立ち上がる体部がつく。いずれも器表が磨滅し、調整不明。他にくらべ薄手につくられた7は、体部上位が大きく外反している。赤茶色を呈し、淡茶白色の他の杯・椀と色調を異にする。10は凸状の不安定な底部をなす。

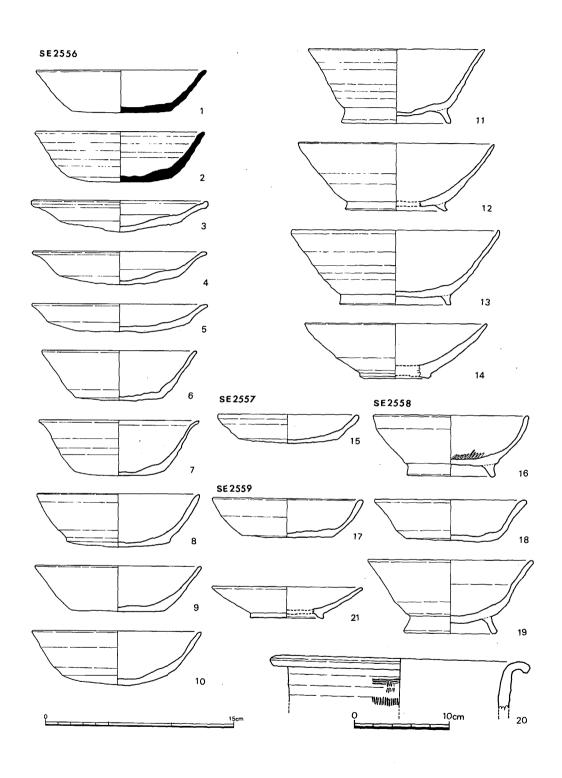
椀 $(11\sim13)$  11は杯よりも深めにつくられた体部に、外に強く開く高台が付けられている。これに対し、 $12\cdot13$ は丸味をもって内湾する体部に低い高台を付けている。いずれも器表の磨滅がいちじるしい。

SE 2556 · 2557 · 2558 · 2559

J_ 2	.550 2557 25	,50 <u>2</u> 555	
	口径	器高	底径·高台径
1	13.8	3.4	8.0
2	13.5	4.1	8.3
3	14.0	2.5	9.8
4	14.0	2.7	9.5
5	14.2	2.25	11.4
6	12.3	4.0	7.0
7	12.7	4.5	7.1
8	13.0	4.3	8.2
9	13.4	3.7	7.5
10	13.6	4.4	8.5
11	(14.2)	5.9	8.7
12	15.6	5.4	8.1
13	16.6	6.0	8.8
14	14.6	4.4	5.8
15	11.4	2.3	8.0
16	12.4	4.9	7.1
17	12.0	3.1	7.2
18	12.2	3.2	7.4
19	13.2~13.4	5.9	7.5
20	27.4		
21	12.1	2.5	5.9

# 青磁

椀(14) 越州窯系椀の6分の1ほどの破片である。淡茶灰色の胎土でつくられた器表の全面 にやや黄茶色気味の緑色の釉が施されている。蛇の目高台の外端は斜めに削られ、そこに目跡 が残されている。



第59図 SE2556・2557・2558・2559出土土器・陶磁器実測図

## S E 2557出土土器 (第59図)

# 土師器

皿(15) 口径11.4cmをはかる皿で、ヘラ切り離しされた底部とヨコナデで調整された体部とからなる。

S E 2558出土土器 (第59図・図版59)

# 黒色土器

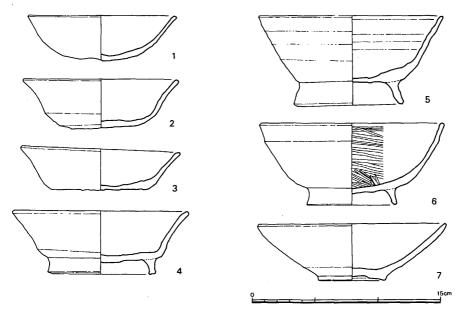
椀(16) 内面を黒く燻した黒色土器A類の椀で、体部の3分の1を欠く。内彎しつつ立ち上がる体部の外面は磨滅が著しい。内面は漆黒色を呈している。内底には粗く施されたヘラミガキが明瞭に認められる。外底部には板状圧痕がみられる。

S E 2559出土土器・陶磁器 (第59図・図版59)

# 土師器

杯(17・18) ほぼ同大の杯であるが、18の体部上位は大きく外反している。いずれもヘラ切り離しされた外底部に板状圧痕が認められる。灰白色を呈するが、部分的には黒灰色をなす。 井戸側内の下層から出土している。

椀(19) ほぼ完形で、杯と同じく灰白色を呈する。ややいびつで、底部から立ち上がる体部 は凹凸が著しく、大粒の砂粒が器表に目立つなど、杯とともにつくりの荒さが目立つ。高台は ていねいにつくられ、外方への開き具合と厚さから、安定感をもたらしている。ヘラ切り離し



第60図 SE2561出土土器·陶磁器実測図

された外底部はていねいにヨコナデされている。井戸側内の下層からの出土。

**甕(20) 復原口径27.4cm、器肉の厚さ1.0cmをはかる甕の破片が出土している。外面はヨコナ** デで調整し、口縁部上面や頸部以下にはさらにハケ目調整を加えている。内面の調整は不明。

#### 緑釉陶器

皿(21) 須恵質につくられた有高台の皿の小片で、全面に施釉されている。釉は濃緑色のも ので、部分的に銀化している。口縁端部に1個所輪花がみられる。

S E 2561出土土器・陶磁器 (第60図・図版60) SE 2561

## 土師器

杯(1~3) ヘラで切り離された底部から体部 が立ち上がるが、1は底部が丸底状になっている。 いずれも板状圧痕が認められる。器表の磨滅した 1・2に対し、井戸側内出土の3は残りがよく、 ヨコナデによる体部・内底の調整を示している。

	口径	器高	底径·高台径
1	11.9	3.55	5.8
2	12.3	3.5	6.7
3	12.8	3.3	7.75
4	13.6~14.2	5.1	8.5
5	14.7	7.2	8.7
. 6	14.7	6.5	7.1
7	15.0	4.55	5.3

3 は製作途中で体部に生じたヒビ割れと、その内外に無造作に粘土を貼り付けての補修がみら れる。

椀(4・5) 4は2のような形状の外反する体部に高台を付けている。整形は雑で、いびつ な器形をなす。内面のほぼ全体に煤が付着する。井戸側内下層からの出土。5 は高い高台の付 いた安定感のある椀で、体部の立ち上がりを直線的につくっている。

#### 黒色土器

椀(6)体部は半円形状に丸味をもってつくられ、それに外に開く高台を付ける。灰白色を 呈するが、内面を黒色に燻している。黒色土器A類の椀である。外面はヘラ切り離しされた外 底部を含めヨコナデ調整を加えている。内面はヘラミガキで仕上げている。

#### 青磁

椀(7) 越州窯系青磁で、5分の2ほどの破片である。暗灰色の胎土にくすんだ黄緑色の釉 をかけている。施釉は全面におよぶが、くすんだ色調で発色は良くない。高台畳付部は部分的 に露胎となる。

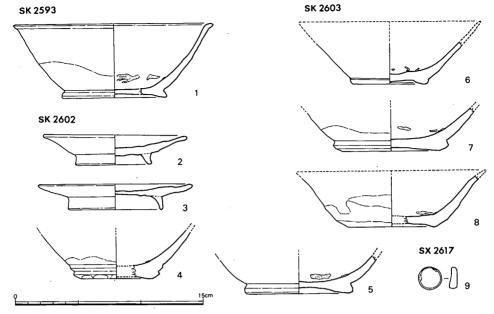
#### SK2593出土陶磁器 (第61図)

#### 青磁

椀(1) SB2575の東南に接する長円形土壙か ら出土。越州窯系青磁片で、黒色の斑点を含む暗 灰色の胎土に、淡黄緑色の釉をかけている。内外 ともに細かい貫入がみられ、内底見込み部には目 跡がみられる。外面下位から上げ底気味の外底部 □

SK 2593 · 2602 · 2603

	口径	器高	底径·高台径
1	16.0	5.9	8.4
2	11.6	2.4	6.0
3	12.4	2.1	7.6
4			6.9
5			8.6
6	(14.6)	(5.0)	6.3
7			9.3
8	(15.2)	(4.5)	7.2



第61図 SK2593・2602・2603、SX2617出土土器・陶磁器実測図

にかけては露胎をなす。

SK2602出土土器・陶磁器(第61図、図版61)

#### 土師器

高台付皿( $2 \cdot 3$ ) 口径 $11.6 \sim 12.4 \text{cm}$ の有高台の皿である。いずれも器表は磨滅し、わずかに 2 の内底にヨコナデ調整を認めるにすぎない。

# 青磁

椀( $4\cdot 5$ ) いずれも越州窯系青磁椀の底部小片である。4 は内外面に灰緑色の釉をかけるが、体部下位から上げ底気味の外底は露胎で小豆色を呈している。内底見込み部と高台畳付部に目跡がみられるが、後者のそれは削り取られている。5 は内面に黄色味の強い緑色の釉をかけている。細かい貫入がみられる。外面は露胎をなす。いずれも胎土は淡灰色を呈している。

# SK2603出土陶磁器(第61図、図版61)

## 青磁

椀( $6\cdot7$ ) 底部の完存する 6 は全面に黄色味をおびた茶色の釉がほどこされている。釉の発色は良い。内底の見込み部にはうず巻き(巴)状に中心に向かう 7 個の目跡がみられる。高台畳付部の 7 個の目跡は削り取られている。 7 は体部下位から外底部にかけて露胎をなすが、他には淡黄緑色がの釉がかけられている。内底の釉はうすい。見込み部に目跡 3 個が残り、本来12 個前後であったことをうかがわせている。いずれも越州窯系。

杯(8) 口径15.2cm、器高4.5cmに復原できる杯で、胎土は淡い茶灰色を呈する。下地に化粧土をかけ、黄緑色の釉を施している。外面下位から底部にかけては露胎をなす。内底見込み部に目跡がみられる。

## 褐釉陶器

壺(A) 四耳壺の破片で、肩部に逆U字形の耳が付けられている。赤褐色を呈する胎土には 黒砂・白砂を含む。外面には緑褐色の釉がかけらられているが、耳の3cm下位くらいまでしか およんでおらず、それ以下は露胎で灰色をなす。内面にはうすく灰色の釉がかけられている。

# S X 2617出土陶磁器 (第61図)

#### 白磁

円板(9) 椀などの白磁の再加工品で、体部を擦って径1.8cm~1.9cmの円形に仕上げている。 両面には黄色味をおびた白色の釉がかけられている。S K 2603西側の小ピットから出土した。 形状・大きさには碁石を思わせるものがある。

S X 2600出土土器・金属器 (第62図、図版60)

#### 土師器

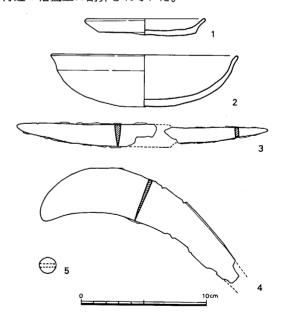
皿(1) 口径9.8cm、器高1.3cm、底径7.8cmをはかる。棺蓋上副葬品。

丸底の杯(2) 口径15.0cm、器高4.2cmをはかる。底部はヘラで切り離されているが、磨滅のため他の部分の調整は不明。1 とともに頭部付近の棺蓋上に副葬されていた。

# 金属器

刀子(3) 長20cmほどに復原される刀子で、関部を欠損していた。身幅1.8cm、鋒厚0.5cmをはかる。鞘の痕跡はなかった。東に頭位をとると推測される遺骸の左肩部付近で検出されたが、墓壙底よりも8cmほど浮いており、土師器とともに棺蓋上に副葬されたものであろう。

鎌(4) 曲刄鎌で柄着装部を欠く。残存長16.8cm。丸くおさめられた切先から大きく身幅を広げ、茎部に向かって細くなる。身の最大幅3.6cm、鋒厚0.3cm。墓壙の北側中央付近で棺内に落ち込むような状態で検出されており、棺蓋上の副葬品である。鉛玉(5) 口径1.3cmの鉛製丸玉で、真中に径3mmの円形孔が通じる。基壙底の頭部と



第62図 S X 2600出土土器・鉄器・鉛玉実測図

## 黒褐土層

推定される部分から検出されており、棺内副葬品 と思われる

黒褐色土層出土土器・陶磁器・硯(第63・64図、 図版61)

#### 土師器

m(2-7) 口径 $10.1 cm \sim 11.2 cm$ をはかるmc ある。底部はすべてヘラで切り離され、 $2\cdot 4\cdot 5\cdot 7$  には板状圧痕がみられる。

高台付皿(8) 口径11.6cm、器高2.2cmの皿で、 1.2cmの高さの高台を付けている。きわめて軟質 に焼成されている。

椀(9~14) 口径11.9cm~13.1cmの椀で、9・10には高台が付かない。9は口縁端部をわずかに外反させるもので底部から体部にかけて丸味が強い。11~14はこのような無高台の椀に、1.1cm前後の高さの高台を付けたものである。いずれも底部をヘラで切り離され、 $12\cdot13$ を除いて板状圧痕がみられる。

甕(15・18~20・A) 15は小形の甕で、口径 16.1cm、器高10.2cmほどに復原される。口縁内面 をヨコナデで仕上げているが、内面は磨滅、外面 には煤が著しく付着し、調整は不明瞭である。18 は大甕片で口径を28.6cmに復原しうる。胴部外面

2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18	10.1 10.2 10.4 10.8 11.2 11.2 11.6 12.4 12.6 11.9 12.2 12.8	1.5 1.8 1.8 2.4 2.0 2.0 2.2 3.6 3.4 4.5 4.6	6.9 7.7 7.7 7.4 7.8 8.1 7.8 7.8 6.6 7.2
4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	10.4 10.8 11.2 11.2 11.6 12.4 12.6 11.9	1.8 2.4 2.0 2.0 2.2 3.6 3.4 4.5	7.7 7.4 7.8 8.1 7.8 7.8 6.6
5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	10.8 11.2 11.2 11.6 12.4 12.6 11.9	2.4 2.0 2.0 2.2 3.6 3.4 4.5	7.4 7.8 8.1 7.8 7.8 6.6
6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	11.2 11.6 12.4 12.6 11.9	2.0 2.0 2.2 3.6 3.4 4.5	7.8 8.1 7.8 7.8 6.6
7 8 9 10 11 12 13 14 15 16	11.2 11.6 12.4 12.6 11.9	2.0 2.2 3.6 3.4 4.5	8.1 7.8 7.8 6.6
8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	11.6 12.4 12.6 11.9 12.2	2.2 3.6 3.4 4.5	7.8 7.8 6.6
9 10 11 12 13 14 15 16	12.4 12.6 11.9 12.2	3.6 3.4 4.5	7.8 6.6
10 11 12 13 14 15 16 17	12.6 11.9 12.2	3.4 4.5	6.6
11 12 13 14 15 16 17	11.9 12.2	4.5	
12 13 14 15 16 17	12.2		7.2
13 14 15 16 17		16	L
14 15 16 17	12.8		7.2
15 16 17		4.7	7.7
16 17	13.1	4.6	8.0
17	16.1		
	16.2		
18	2.6	2.3	2.7
	28.6		
19			
20			
21			4.1
22	12.5		
23			5.6
24			
25			6.4
26	17.3		
27			9.5
28			5.3
29			9.3
30	14.9	5.1	6.9
31			5.1
32			9.1
33	15.2	(4.5)	(7.7)

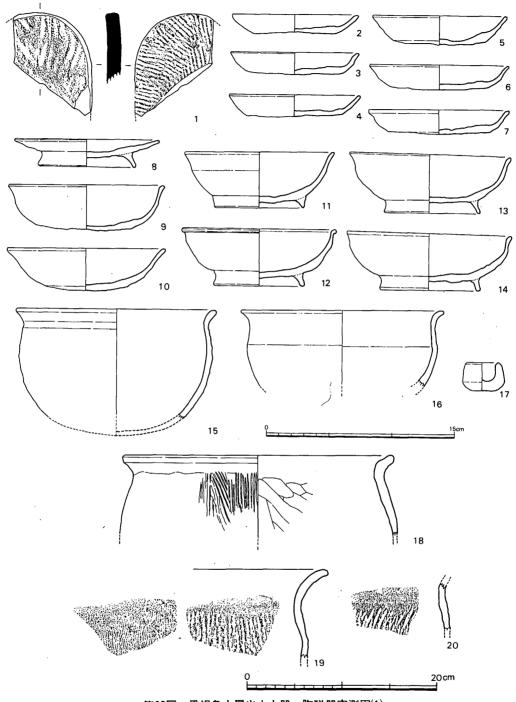
をハケ目で調整し、内面はヘラ削りしている。口縁部はヨコナデで調整している。19・20・A は玄界灘式土器として分類されている製塩用の甕で、胴部外面に縦方向の粗く凹凸の激しい平行叩き目を施している。19・A には内面にも縦方向の細かい平行叩き目がみられるが、20は磨滅して確認できない。20の外面には煤が付着している。

手捏土器(7) 比較的精選された胎土を用いた手捏ねの容器で、器面もていねいに調整している。黒灰色を呈する。

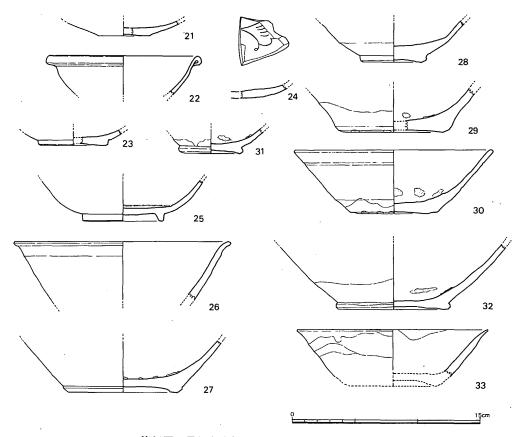
# 黒色土器

甕(6) 口径16.2cmに復原される小形の甕で、内面を黒色に燻した黒色土器 A 類のものである。磨滅ため調整は不明。外面は全体に煤が付着している。

# 灰釉陶器



第63図 黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)



第64回 黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(2)

椀(21) 糸切りされた底部の破片で、内面に薄く灰色の釉がかけられている。体部外面はヨコナデで調整されている。

# 白磁

椀(22・23) 22は体部の破片で、体部の端をつまみ出し外側に折り曲げて玉縁を形成している。内外面にわずかに空色味をおびた白色の釉を施している。23は蛇の目高台の底部片で、高台畳付部・外底部は露胎であるが、他にはやや黄色味をおびた白色の釉をかけている。

# 青磁

椀(25~32) いずれも越州窯系の椀である。25・27・28は高台畳付部を除いて残部のほぼ全面にうすい灰緑色~黄緑色の釉がかけられるが、他は体部下位から底部が露胎である。32の露胎部分は赤茶色をする。また25・28には目跡がみられないが、他の底部片にはすべて内底見込み部に目跡を残している。27・29・30には畳付部にも目跡がみられ、削り取った部分の周囲が赤く発色している。30は比較的破片が大きく全形を知りうる。灰色味の強い灰緑色の釉がうす

くかけられるが、体部下端から底部にかけて露胎となる。目跡は内外に12個ずつみられる。

杯(24・33) 24は越州窯系で、杯の底部破片と思われる。外底に目跡が残り、その部分だけ 露胎で赤褐色をなす。黄緑色の釉がかけられ、内底に草葉文が線彫りされている。大宰府では 初出である。33は口径15.2cm、器高4.5cmの大きさの杯で胎土は灰白色を呈する。内面および体 部外面上半にうすい黄緑色の釉を施し、口縁部にはさらに褐色の釉をかけている。外面下半は 露胎をなす。内底見込み部に目跡を残している。

水注(B)長沙窯系の水注の注口部片である。注口は八角形に面取りされている。灰白色の胎土に白味の強い黄灰色の釉がかけられ、さらに、褐釉をかけている。細かい貫入がみられる。釉は内面にもおよび、注口よりも上位にみられる。外面にかけられた褐釉は注口を通じて内面にも流れ、茶色味をおびた黒褐色の釉が注口の内面の下位に垂れ下がっている。

#### 硯

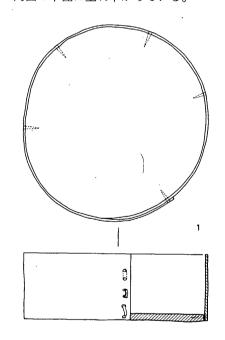
装面硯(1)砂粒をあまり含まない胎土を堅緻に焼成した須恵器甕の胴部片を利用した硯で、破面端部をていねいに擦って形を整えている。 硯面は平行叩き文、背面は細かい平行叩き文である。

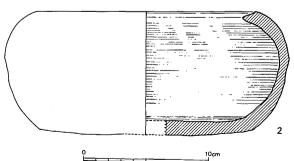
#### 瓦類

この調査で出土した瓦類は丸・平 瓦のほかに軒丸瓦3点、軒平瓦11点、 文字瓦31点がある。これらは主に遺 構面を覆う黒褐色土層から出土した が、特にSE2554からは多量の丸・ 平瓦とともに別表—4・6・7と文 字瓦が出土した。

軒丸瓦・軒平瓦は別表に示すとおりであるが、特にきわだった出土傾向は認められない。このことは軒先瓦の出土が少ないこととともに、検出された建物の性格を考える上で、1つの要素となろう。

文字瓦は「平井瓦」「佐瓦」「賀茂瓦」「小人瓦」「八年」「四王」など





第65図 SE2557·2561出土木製品実測図

があり、6型式12種類に分類できる。SE2554出土の文字瓦は「平井瓦」「平井」「佐」「賀茂瓦」である。

# 木製品 (第65図・図版85)

曲物容器(1) 底板は長径15cm、短径14cmのややいびつな円形を呈する。両面は丁寧な削りで整え、側面はやや法をつける。周縁側面には5個の木釘孔が穿たれているが、間隔は不揃いである。柾目材を使用している。側板は分離している。厚さ0.2cmの柾目材で、綴じ合せ部の内面にのみ幅約0.5cm間隔で刻み目を入れている。縫いは3段分が残っている。SE2557出土。

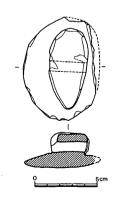
挽物容器(2) ロクロ挽きの鉢。口縁部は大きく内彎し、いわゆる鉄鉢形を呈する。また口 縁端部は幅0.5cm位を1段低く削り、蓋受けとしている体部外面は滑らかに仕上げているが、

内面には粗いロクロ挽きの痕跡が明瞭に残っている。底は平底で内面には灰白色の石灰質状のものが付着している。直径22.6cm、高さ9.8cm、横木取り、材は広葉樹と思われる。SE2561出土。

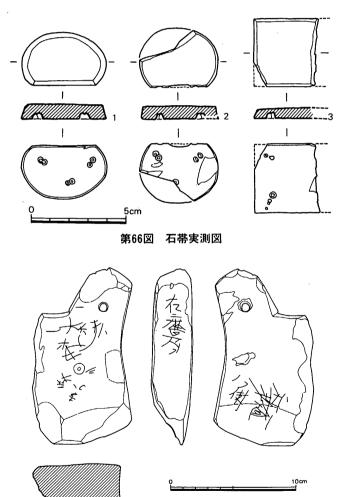
#### 石製品

(第66~68図、図版93)

第66図は石帯である。1 は丸 鞆で、S E 2557の北にある小 ピットから出土した。縦幅 2.8cm、横幅4.5cm、厚さ0.8cm をはかる。表面・側面は研磨さ



第67図 滑石製品実測図



第68図 滑石製品実測図

れ、濃緑色の光沢を放っている。斜めの方向の縞文様がみられる。裏面は研磨されておらず、3ヵ所に帯への装着のためのかがり穴を穿っている。蛇紋岩製と思われる。2も丸鞆で一部を欠く。SE2561の東に隣り合う円形土壙から出土した。縦幅3.1cm、横幅4.1cm、厚さ0.7cm。表面・側面は研磨され、真黒色を呈し光沢を放っている。裏面は未研磨で、やはり帯装着用のかがり穴が3ヵ所に穿たれている。頁岩製と思われる。3は巡方で、片側を欠く。縦幅3.6cm、残存する横幅3.2cm、厚さ0.6cm。蛇紋岩製と思われ、研磨された表面・側面は1と同様に濃緑色のの光沢を放ち、淡緑色の縞文様がはいっている。裏面は研磨されていない。残部の2ヵ所にかがり穴が穿たれており、裏面には鉄錆がみられ、針金痕跡と思われる。SE2553の井戸側中から出土。

第67図は上面観が楕円形を呈する断面凸形の蓋状滑石製品であるが、本来の用途は不明である。長径8.3cm、短径(復原)6.1cm、厚さ1.3cmの台部に、長径6.5cm、短径3.1cm、高さ1.5cmの突起が付く。突起のほぼ中央には径0.8cmの断面円形の孔が穿たれている。全面がノミで整形されている。黒褐色土層から出土。

第68図もやはり。石鍋再利用の滑石製品である。長さ14.0cm、最大幅7.5cm、厚さ3.2cmをはかる不整形の製品で、上が茎状に幅4cm前後と一段細くなるが、そこに孔が穿たれている。中央にも一孔が穿たれているが、貫通していない。器面にはノミ調整痕を多く残すが、平面および側面の一方はよく削られている。そこに細い線の刻文があり、「右磨」などの文字が認められるが、解読にはいたらない。黒褐色土層からの出土。

# 小結

推定大宰府政庁域の前面張出部の西域外で初めてのまとまった面積の発掘調査となった第88次調査区では、掘立柱建物10棟、井戸11基ほか多数の遺構を検出することができた。過去のトレンチ調査などでさほど遺構の存在が認められていなかっただけに、その成果は大きい。

遺構は調査区の東半では床土直下から、西半では床土下の十一世紀前後の土器を包含する黒褐色土層の下から検出された。つまり、層位的な時期区分はできなかったが、建物・柱掘形・井戸・溝などの切り合いや方位などによっておおむね四期に大別できる。その場合、調査区の東半に重複して所在する、他の建物に比較して格段に規模の大きな両面廂建物SB2550、SB2555および四面廂建物SB2560が建物群の中心(主屋)をなすと考えられる。

第 I 期 SB2550を中心とするグループで、主軸を 1  $^{\circ}$   $^{\circ}$   $^{\circ}$   $^{\circ}$   $^{\circ}$   $^{\circ}$   $^{\circ}$   $^{\circ}$   $^{\circ}$  がり東に振っている。 SB2570  $^{\circ}$   $^{\circ}$ 

八世紀後半代の段階に相当する。なお、SB2550の柱掘形の身舎のそれはおおむね方形であったが一部に円形をまじえ、廂はほとんどが円形であった。他の建物は時期を問わずことごとく円形掘形であり、第I期の後半に柱掘形の円形化のあったことを示唆していた。

第  $\blacksquare$  期 SB2560を中心とするグループで、主軸を 7 ° ~ 8 ° ほど東に振る。 SB2555・SB2560・SB2565・SB2595があるが重複し、すべてが併存するわけではない。切り合いや柱掘形出土土器などからみて、 SB2560を中心とする九世紀前半の段階の建物群である。 SB2560 とSB2565とは柱筋を通さないが、併存すると思われる。 45尺の間隔をもっている。 SB2565 は南側に掘られた溝 SD2571・SD2572(おそらくは SD2573も)はそれに伴うと考えられる。 この場合、 SB2560と SB2565とが区画されることになるが、 その意味はわからない。 ともあれ南面して併行する配置をとっている。 SE2571はこの段階の建物に伴う井戸であろう。

第Ⅲ期 第Ⅲ期と主軸を等しくするSB2555を中心とするグループである。SB2555はSE2552に後出し、柱掘形の上部から十世紀初頭前後に考えられる完形の土師器の出土がみられる。各柱掘形から相当量の土師器が出土しており、それらを参考にすると九世紀後半の段階に考えられる。この時期の建物はほかには認められていない。方位を等しくするSB2595は重複し、併存しない。土壙SK2602・SK2603は次段階の土器を出土しているが、それの西側に所在するSE2556・SE2558・SE2559・SE2561などが併存すると思われる。

第IV期 建物の主軸を西へ 2 °ほど振るグループで、 $SB2585 \cdot SB2590$ が属するが、両者は重複し時間幅をもっている。これらと方位を同じくする遺構に側溝 $SD2581 \cdot SD2582$ と柵 SA2564からなるこの地区の遺構の北を限ると思われる施設がある。同様に心々で約 $37\,m$ の間隔をもって南に側溝 $SD2566 \cdot SD2567$ をもつ施設がある。 $SE2553 \cdot SE2554 \cdot SE2557$ などもこの時期の井戸であろう。出土遺物からみて十世紀代の段階に相当する。

これらの遺構が黒褐土層で覆われた後、十一世紀中頃以降にいたって、墓SX2600が営まれている。

ともあれ、今回の調査では建物と井戸とが組合わされて存在していた。それは官衙域ではほとんど調査例を欠く現象である。また方形柱掘形をもつSB2550をとっても桁行の間隔が6尺等間と狭く、また両面廂とはいえ柱掘形、推定される柱自体が小さくなっている。ことに廂の柱掘形は格段に小さい。こうしたことも溝SD320以東の官衙域で検出され掘立柱建物との大きな相違となっている。こうした点からみて、SD320以西の建物は官衙とはみなし難い。官衙域に隣接する立地や石帯の出土などからみて官人宅等の性格を考えうる一画といえる。

# 5 第92次調査

第92次調査地域は大楠地区南北大溝(SD320)の西側にあり、1,915㎡を調査した。これまで、SD320を境として東側を官衙域として考え、西側にはそれ以外の性格を有する施設、たとえば官人の居宅などの存在が予想されていた。これを裏付けるように、本次調査域から南方約100mの地を第88次調査として発掘調査を実施し、奈良時代から平安時代にかけての官人の居宅かと思われる建物跡や井戸跡などが発見調査された。そこで、今回の調査における主たる目的を第88次調査と同様に建物跡の検出、また、建物配置などの解明におくこととした。調査の結果、数棟の建物が規則正しく配置されていることなどが判明すると同時に、発掘区西端において、西側を限ると考えられる南北溝の東肩部分を検出し、予想を上回る成果を得ることとなった。

地番は太宰府市大字観世音寺字大楠328・331・335-1である。なお、鏡山猛氏条坊復原案によると右郭五条三坊の地にあたる。

調査は排土置き場の都合上、南半部と北半部とにわけて実施することとした。

南半部は昭和59年7月2日から調査を開始し、同月24日にいたって表土・床土の除去作業が終了し、直ちに遺構面を覆う暗褐色土層の発掘を開始した。遺構面が東北から南西へ傾斜しているため、暗褐色土層は東北部は薄く、南西部がもっとも厚く堆積していた。暗褐色土層除去後8月18日から南半部西北隅から遺構の検出作業に入る。9月6日地鎮と考えられるSX2670を発見し直ちに清掃、翌日写真撮影・実測後取りあげた。9月17日にいたり、遺構検出を終了し、9月21日軽気球による空中写真撮影、翌日遺構毎の撮影、9月26日から実測を開始し、10月8日全ての調査を終了し、埋め戻し作業に入る。

10月19日から引続き北半部の調査を開始した。北半部東側では表土下が遺構面となっているため直ちに遺構検出することができた。西半部では比較的厚く遺構面を覆う層があったが順調に作業は進んだ。調査途中に別作業が2週間程入ってきたため遺構検出が終了したのは11月19日になった。写真撮影・実測などが終了したのは11月29日である。南半部・北半部の表土埋め戻し作業が終了し、調査が完了したのは12月9日である。

# 検出遺構

検出した主要な遺構は、建物 9 棟、柵 3 条、井戸 4 基、溝・土壙・ピット多数である。前節で述べたように遺構面(地山面)が東北から南西へ傾斜しているため、東北隅では遺構面が床土の役割を果たし、南下するに従い暗褐色土層が徐々に厚くなる。この暗褐色土層中位から切り込む遺構もみられ、その代表例として柱筋が不揃いな S B 2665をあげることができる。次に遺構の在り方をみると、西半部に土壙・ピット群が多く、さらに平安時代に属する井戸が西側



第69図 第92次調査遺構配置図

に偏って設けられている特徴を見出すことができる。

以下、主要な遺構について個別に説明をする。

## 掘立柱建物



SB2620 発掘区東南部で検出した5間×3間の東西棟建物で、SK2641から派生し、蛇行しながら西流するSD2627よりも新しい。西側3間分中央には床束穴と考えられる小ピットを伴う。桁行は8.7m(29尺)、

梁行は $4.35\,\mathrm{m}$  ( $14.5\,\mathrm{R}$ ) であるが、桁・梁行ともに等間ではない。柱掘形(最大で約 $0.8\,\mathrm{m}\times 0.8\,\mathrm{m}$ 、最小で $0.5\,\mathrm{m}\times 0.6\,\mathrm{m}$ )のなかに柱根の残片が $5\,\mathrm{a}$ 造存(摩耗が著しいため不明瞭であるが $1\,\mathrm{U}12\,\mathrm{cm}$ の角柱風)し、また柱痕跡が多く観察できる。それらから各柱間を測ると、桁行では東から $1.75\,\mathrm{m}\cdot 1.75\,\mathrm{m}\cdot 1.85\,\mathrm{m}\cdot 1.63\,\mathrm{m}\cdot 1.72\,\mathrm{m}$ 、梁行は南 $1\,\mathrm{ll}$ 分が $1.23\,\mathrm{m}$ 、他は不明である。このように各柱間には多少の出入が認められるが、総長を重視して復原すると、桁行は $5.8\,\mathrm{R}$ 等間、梁行は $4.8\,\mathrm{R}$ 等間となる。方位は $1.2\,\mathrm{m}$ 0 $1.2\,\mathrm{m}$ 0

SB2625 SB2660の東北方に位置し、棟方向をほぼ同一とする。4間×2間の東西棟建物



で、SK2642によって西妻柱が切られている。柱掘形 (0.6m-0.8m) 内には柱根それ自体は残存していないが、その痕跡が多く発見された。その痕跡から柱の径を測ると、15cm-20cmで、さほど大きくはない。桁行

 $7.15\,\mathrm{m}$  (24尺)、梁行 $4.27\,\mathrm{m}$  (14尺) であるがSB2660と同様に各柱間にはばらつきがあり、桁行は東から $1.99\,\mathrm{m}\cdot 1.68\,\mathrm{m}\cdot 1.74\,\mathrm{m}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$ 、梁行は不明である。総合してみると桁行は  $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$ 、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$ 、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$ 、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$ 、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$ 、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、梁行は $6\,\mathrm{km}\cdot 1.74\,\mathrm{m}$  、《公本社》 $6\,\mathrm{km}$ 

**SB2630** SB2620の真北で検出した2間×2間の小建物である。柱掘形は浅く、また不揃いである。南北に長く6.7尺等間、東西は6.4尺等間に復原可能である。建物方位はN2°40′Eである。

S B 2635 発掘区南半中央部に位置し、S B 2640・2645から切られる 2 間× 2 間の総柱建物 である。柱掘形 (0.8 m ~ 1.0 m) は大きい。柱痕跡を精査したが不明瞭で明らか にしえなかった。復原すると南北に長く6.7尺、東西は6.4尺等間になる。建物方位は N 1 °50′ E である。

SB2640 柱掘形の相互関係からSB2645よりも新しい。5間×2間の東西棟建物である。



柱掘形((40.7 m) は円形である。桁行・梁行ともに (8.7 F) 間に復原可能である。(8.8 B) 2660とほぼ棟方向を一にし、(8.8 N) (8.8 F) である。桁行が同一であることから同時併存の可能性はきわめて大きい。

SB2645 SB2340から切られ、北側梁間が北半部におよぶ 5 間 $\times$  2 間の南北棟建物である。柱掘形は 1 辺1.2mを測り、官衙域建物と何等遜色はない。しかし、東南隅から 2 番目の柱掘形のように柱筋に合わないようなものもある。柱痕跡は不明瞭で正確さを欠くが、桁行8.3尺、



梁行9尺等間に復原できる。建物方位はN2°35′Wで、北接するSB2660と同一であること、また柱掘形は他の建物に比すと、SB2660とともに大きく、柱掘形出土遺物も同一時期を示している

ことなどから同時期併存の可能性は十分に考えられ、「L」字型配置になると思われる。

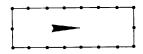
SB2650 南半域と北半域に桁行がまたがっている6間以上×2間の東西棟建物である。南



半部の柱掘形は大きく削平され、約10cmほどの深さしか残っていなかった。このため、西南隅柱掘形は検出できなかった。また、側柱も境界コンクリート壁のため破壊され確認できなかった。柱

痕跡(約20cm)から桁行 6 尺、梁行6.4尺等間に復原できる。S B 2655 と同一方位(N 0 °25′ W)であると共に、S B 2650 の桁行とS B 2655 の梁行とが同一線上に配置されていることから同時に計画され配置されたことがわかる。出土遺物はほとんどなく、時期は明らかでないが、遺物をほとんど含まない点を重視するとこの調査地発見建物のなかでは、S B 2655 と共に最初期に属すると思われる。

SB2655 発掘区中央西端に位置する7間×2間の南北棟建物である。柱掘形(約0.6m~



0.8m) 中の柱痕跡(約20cm) から桁行43尺、染行14尺に復原できる。桁行柱間は両脇がもっとも狭くそれぞれ5.8尺、中央3間分は6尺等間、それに両脇2間目の柱間はそれぞれ6.7尺ともっ

とも広い。建物方位はSB2650と同一でN0°25′Wである。

SB2660 発掘区北端で発見され、SB2645と棟方位が直角となる5間×2間の東西棟建物



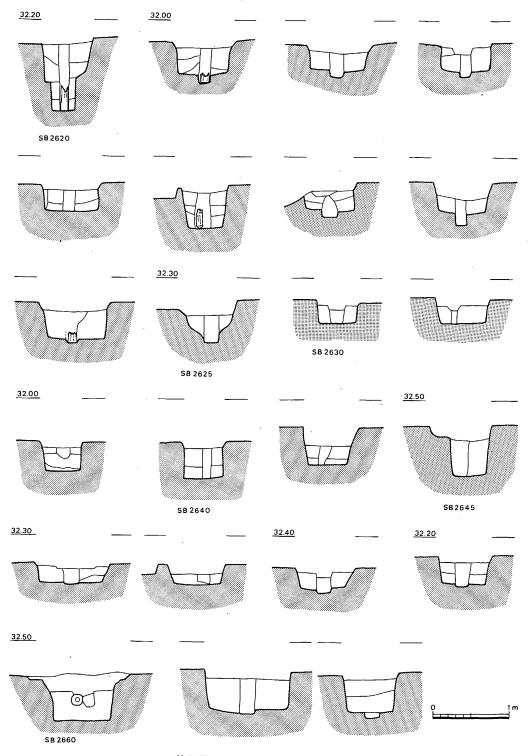
で、SD2350A・Bによって切られる。柱掘形(約1.0m)中の柱 痕跡(約20cm)の残りは悪く、かろうじて4個確認したにとどまっ た。東梁部分の柱根跡が不明なため桁行を測ることは困難であるが、

SB2665 発掘区西北隅で検出した3間以上×2間の南北棟建物である。柱掘形(0.4m内外)には平石を礎板として使用している。暗褐色土層中位から掘り込まれていることから平安時代、おそらくは十世紀後半頃と考えられ、検出建物中もっとも新期に属する。

#### 柵

SA2675 SB2655の西側柱の東に接するように走る南北 (3間以上)の柵列である。若干西へ振れ各柱間は7.5尺等間に復原できる。南半部の調査時にはSA2676と共に掘立柱建物として考えていたが、北半部の調査で、建物にはならないことがわかり、柵列として考えた。

**SA2675** SA2675の東側に位置する南北方向(3間)の柵列で、西へ大きく約8°振っている。どの建物に伴うかは明らかでない。



第70図 掘立柱建物柱掘形断面図

S A 2685 発掘区東北部で検出した東西方向の柵列(5間分)である。柵列の南側に柱穴があり、建物の一部かと精査したが、柱筋がうまく合致せず、柵列とした。あるいは、東から2~4番目の柱穴は南へ延びて、2間×2間の小建物になるかもしれない。

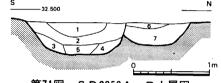
#### 溝

SD2627 SK2641から派生し、西へ蛇行しながら西流する小溝で、発掘区西側の第94次調査地域まで延びていく、その途中に存する南北溝SD2680の上層埋土よりも古い。また、発掘域内検出遺構の全てから切られていることから古期に属することは確実である。

SD2350 一昨年度報告の第83次調査域から延びている東西溝である。第83次調査の溝には

新・旧はなかったが、今回調査分にはA(旧)B (新)が認められた。SD 2350 A は幅約 $1.5\,\mathrm{m}$ 深 さ約 $0.8\,\mathrm{m}$  を測り、第83次調査でみられたように、部分的に途切れているため排水機能は有していない。この途切れ部分は約 $7.2\,\mathrm{m}$ (24尺)ある。SD 2350 B は幅約 $1.5\,\mathrm{m}$ 、深さ約 $0.1\,\mathrm{m}$  とAに比して非常に浅い、出土遺物にはA・Bともに型式差は少なく、あまり隔たることなく埋ったと思われる。

S D2680 南半部西端で検出した南北溝である、



第71図 SD2350A・B土層図

- 1. 黑褐色土
- 2. 黒灰褐色砂質土
- 3. 茶褐色砂 4. 果根色+/苯
- 4. 黒褐色土(黄色粘土を混じえる)
- 5. 暗灰色粘質土
- 6. 茶灰褐色土(黄色粘土塊を混じえる)
- 7. 黒灰色土

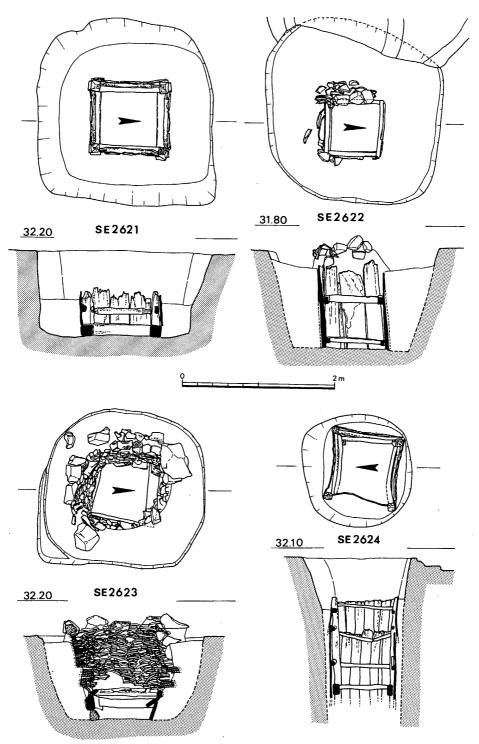
東肩部分の一部であり、また第84次調査として現在調査中であるため、その詳細は次年度に報告する。

## 井戸

SE2621 SB2650の南に設けられた方形縦板組(Ⅱ—A・a 類)の井戸である。約2.4 m(8尺)の隅丸方形の掘形(残存深さ約1.1 m)を有し、最下部に1辺約1.2 mの井籠組の木製台を置く。木製台の四隅に径9 cm程の枘穴を穿ち、それに円形の出枘を造り出した方形の隅柱を立て、外側に縦板の側板を配している。横桟も角材を用い、両端の出枘と隅柱の枘穴とを組み合わせている。部材の詳細は、出土遺物の項で述べる。SB2650・SB2655と共に検出遺構中最古で、八世紀代に属する。

SE2622 発掘区西南部に位置し、SK2649を切る方形縦板組( $II-2 \cdot a$  類)の井戸である。隅丸方形の掘形(II 辺 $2.3 \, m$  、深さ $1.4 \, m$ )のほぼ中央部に内法 $77 \, cm$ を測る正方形の井戸側を配している。隅柱を用いることなく、横桟( $6 \, cm \times 10 \, cm$ )だけで側板を支えている。井戸掘形上部で検出しした石群は、井戸側の裏込めである。九世紀後半頃。

S E 2123 土壙群 S K 2652の埋土上から掘り込まれた方形の累積井戸である。下位の三面には板材を 3 枚積み、南側は石組の上端に狭い板材をわたしている。この下位の高さは約52cmである。上位は漏斗状に瓦を積み上げている。裏込めには大きな石(約45cm)から挙大の石まで



第72図 SE2621・2622・2623・2624実測図

を用いている。瓦積みの井戸としては第65次調査(蔵司前面域)に次いで、大宰府では2例目である。十世紀後半頃。

SE2624 北半域西側で検出した方形縦板組(II類)の井戸である。一辺 $1.4m\sim1.5m$ のほぼ隅丸方形の平面形を有する掘形で、内法約95cmの井戸側を配している。 2段分(1.8m)まで調査したが崩壊し始めたため、これ以下の調査は断念した。隅柱は約10cm程で比較的大きいが、上から 3番目までの横桟は細い。 4番目の横桟(南・北)はしっかりした角材( $8cm\times13cm$ )を用いている。横桟は隅柱に穿たれた穴にさし込んで固定している。十世紀代。

#### 十塘

SK2641 発掘区西南部で検出した径約2.0m、深さ約1.2mの円形土壙で、SD2627を伴う。

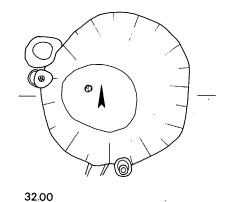
壁・床面ともに粘土層のため、水が湧出することはない。床面から完形の土師器小壺1個が発見された。溝を伴うため、水溜穴かとも考えられるが、周囲の砂層を掘削すれば、容易に水を得ることが可能であり、また、穴蔵とすれば、溝を伴うことの理解が困難である。いずれにしても判断が容易でない遺構である。

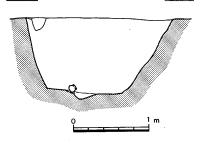
**SK2642** SB2625の西側柱を切る。東西に細長く (約11.5 m) 大小 7個の土壙が連なる。もっとも大きいもので1.75 m  $\times$  3.5 m、深さ0.25 m である。埋土からみると、7個の土壙には明確な新旧はなく、同一時期に埋没したと考えられる。

**SK2643** SK2642の東に位置する、径1.15m、深さ0.5mの小土壙で、東半部だけを調査した。

S K 2644 発掘区南端中央部で検出した。径約1.0 m、深さ0.4 m程の小円形土壙である。

SK2646・2647 ともにSD2627を切る。SK2646 は不整形の小土壙、SK2647は径1.1m、深さ0.6mで ある。両土壙とも、出土遺物は少ない。





第73図 SK2641実測図

**SK2649** SE2622によって切られる長円形の土壙で、約2.4m×3.0m、深さ0.8mを測る。 8世紀代の須恵器や土師器と共に横櫛2個を検出した。

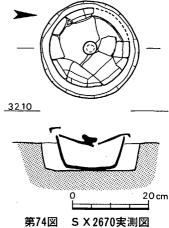
SK2652 SE2623によって切られる、南北に長く連なる土壙群で、長さ約20m分検出したが、上部に井戸や土壙などがあるため完掘はしなかった。発掘した部分のうちもっとも深いところで、約0.6mである。出土遺物は豊富で、それからみると、八世紀後半頃に埋没したと考えられる。

**SK2656** SB2655とSK2652の間に位置する。約1.8m×約3.5m、深さ0.3mの浅い土壙である。

**SK2664** SB2645の北に接するように位置し、東西に 細長い(約1.5m×約7.0m、深さ0.15m)土壙である。

#### 地鎮遺構

S X 2670 発掘区南半西北部で検出した。円形(径 0.25 m、深さ0.08 m)の掘形の中に土師器無高台椀を据え、これに土師器蓋を被せている。蓋・身ともに丁寧なヘラミがキを施した良質な土器であり、ことに椀形の身はこれまでにみられない例であり、特別の役割のもとにつくられた可能性がある。このような状況から、S X 2670を地鎮のための遺構として判断した。



# 出土遺物

遺構を覆う暗褐色土層や各種の遺構から多く遺物が出土したが、ここでは一括資料や重要な 資料について報告する。なお、特記しない限りヘラ切りである。

SB2620出土土器 (第75図、図版)

## 須恵器

杯(1) 口径16.2cm、器高6.1cm、高台径9.4cmである。外底部はヘラ切り未調整である。体部と底部との境は明瞭である。床束と考えた柱穴の上層から出土した。

#### SB2645出土土器 (第75図)

#### 須恵器

蓋(2) 口径15.1cm、器高2.2cmである。外天井部は回転ヘラ削り調整を行う。特徴から八世紀前半代と考えられる。また、SB2645柱掘形から八世紀中頃から後半代の土器も出土している。

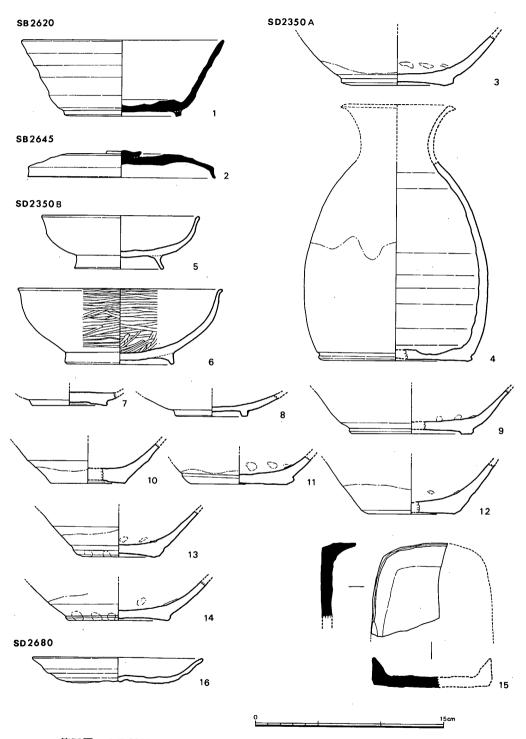
S D 2350 A 出土陶磁器 (第75図、図版62)

#### 青磁

椀(3)越州窯系青磁の底部片である。淡灰色の胎土に暗緑色を呈する釉をうすく体部下位までかけている。白色の目跡は6個残っているが、復原すると14個程になると思われる。

# 灰釉陶器

壺(4)全体の約½程が残存している。胎土は精良で砂粒はほとんどなく灰白色を呈する。 体部中位以上に灰釉がうすくかけられている。体部外面は回転へラ削り、内面はロクロ跡が著 しい。残存部には把手の痕跡はなく、その有無については明らかでない。



第75図 SB2620・2645、SD2350A・B、SD2680出土土器・陶磁器実測図

S D 2350 B 出土土器、陶磁器 (第75図、図版62)

#### 土師器

椀(5) 口径12.6cm、器高4.3cm、高台径7.2cmである。胎土は精良で砂粒は少ない、遺存状態は悪く、内外面とも磨滅のため明らかでない。桃色味をおびた白茶色を呈する。

#### 里色十器

椀(6) 口径16.4cm、器高6.0cm、高台径8.7cmである。体部中位以上はヨコ方向、以下はジグザグ(山形状)状の丁寧なヘラミガキをする。また、体部下位から外底にかけて回転ヘラ削り調整を行っている。胎土は精良で、ほとんど砂粒は含まず、焼成も良好で内外ともに真黒色を呈する。

#### 緑釉陶器

椀(7)幅1.8cmの蛇ノ目高台を有する椀の底部残片である。焼成は堅緻で淡灰色を呈し、黄緑色のうすい釉が全面にかけられている。

## 白磁

皿(8) 体部中位で屈曲するタイプの皿に復原できる。高台畳付部は釉を取り、外底見込み部は部分的に釉がかかる。他は若干黄色味をおびた白色の釉がうすくかけられる。胎土は緻密で乳白色を呈する。第70次(観世音寺小子房地区)調査で同種の皿(図上完形)が出土している。

#### 青磁

椀(9~14)幅広の輪高台(9)と平底(10~14)とがある。10は平底の底部中央を回転へラ削りで削り取り擬高台風に仕上げている。全てに目跡を伴い、 $8~15\cdot16$ 個を数えることができる。

#### 稩

風字硯(15) 陶質の風字硯残片である。縁部はヨコナデ、外底との境はヘラ削り調整をしている。内面は使用のため、平滑となっている。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土は砂粒が若干入り、器面は若干ザラザラしている。

S D 2680出土土器 (第75図)

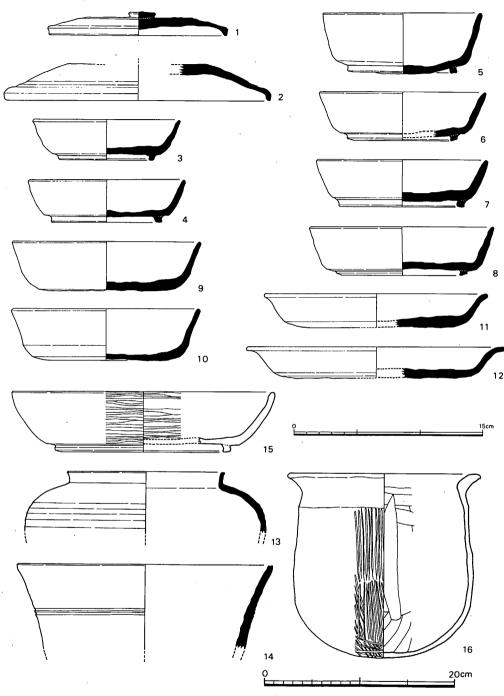
## 土師器

皿(16) 口径13.6cm、器高2.0cm、底径8.3cmである。内面は磨滅のため調整は明らかでない。 体部外面はヨコナデ、底部はヘラ切り離しのままで未調整である。胎土中に少量の砂粒を含む が比較的精良で、淡茶色を呈する。SD2680は現在第94次調査として調査を実施しているので 詳しくはそれに譲る。

S E 2621出土土器 (第76図、図版62)

## 須恵器

 $\Xi(1\cdot 2)$  1  $\cdot$  2 ともに外天井部は回転へラ削り調整をしている。 1 の外天井部には「 $\times$ 」のヘラ記号がある。



第76図 SE2621出土土器実測図

杯(3~10) 8の外底部は回転ヘラ削り、7の SE 2621

外底部はナデ調整をしている他は全てヘラ切り離しのままである。5の外底には4~5本の棒状圧痕がある。3には油煙が付着していることから灯火器として使用されたと思われる。高台付杯・無高台杯ともに体部と底部との境は不明瞭である。

皿(11・12) 両者ともに口縁部を大きく外反させる特徴を有している。12の外底部の回転ヘラ削りは明瞭であるが、11は不明瞭である。

壺(13) 薬壺形の壺の残片である。体部は肩部以下を回転へラ削りしている。胴部最大径は25cmを測り、下位にある。また、SD2340出土例よりも大きいが型式的には何等差はない。

	口径	器高	底径·高台径
1	14.2	1.9	
2	21.1		
3	11.7	3.2	7.1
4	12.5	3.4	8.9
5	12.7	4.9	8.1
6	13.2	3.9	8.2
7	13.6	3.8	10.0
8	14.2	3.9	10.4
9	15.0	3.8	10.8
10	15.1	4.2	11.7
11	17.7	2.7	12.4
12	20.6	2.5	15.2
13	16.5		
14	26.9		
15	21.0	4.8	14.0
16	20.4	19.5	

鉢(14) 平底の鉢に復原できる残片で、体部上位に2条の沈線を伴う。口縁端部は若干凹む。 胎土中に砂礫を多く含む。焼成は堅緻で、灰黒色を呈する。

# 出師器

杯(15) 口径21.0cmを測る大形品で、外底部は回転へラ削り調整、体部内外および内底部にはヨコ方向の丁寧なヘラミガキをする。器壁は厚く、若干SX2670の椀に類似する。胎土は精良で、淡黄茶色に焼成されている。

甕(16) 体部最大径(19.0cm)が下位にある下張形の甕で、口縁部は短く肥厚している。内面の削りは下位・中位・上位と3段、外面の刷毛目は底部、中位2段計3段にわかれる。

以上の土器群の特徴から八世紀前半代遅くとも中頃にはSE2621は埋没していたと思われる。

S E 2622出土土器 (第77図、図版63・90)

#### 土師器

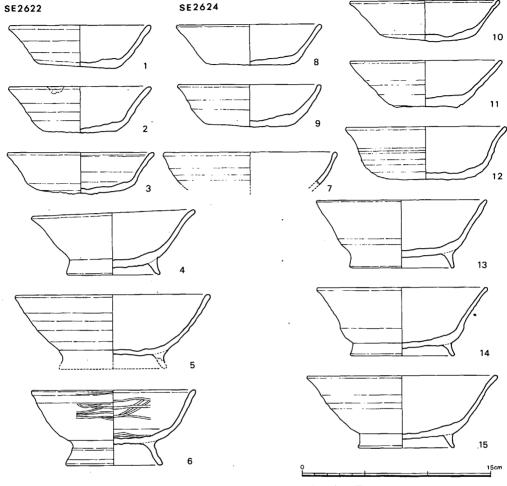
杯(1~3) 2の外底部には板状圧痕がある他はヘラ切り離しのままである。また、2の口縁部の一部には油煙が付着し、灯火器としての使用を窺うことができる。

椀(4・5) 4の体部は内彎しながら立ち上り、 口縁部を外反させる。5の体部は若干内彎するも、 ほとんど外方上へ延びていく。ヨコナデ・ナデ調 整で他の調整はない。

## 黒色土器

SE 2622 · 2624

	口径	器高	底径·高台径
1	11.4	3.2	6.2
2	11.4	3.7	5.6
3	11.8	3.3	6.7
4	13.1	5.0	7.5
5	15.6		
6	13.2	6.0	7.2
7	13.9		
8	11.4	3.2	7.5
9	11.4	3.4	7.1
10	12.0	3.2	7.7
11	12.2	3.7	5.5
12	12.8	4.2	7.7
13	13.6	5.4	8.2
14	13.6	5.5	8.0
15	15,2	5.8	7.7



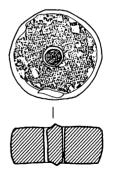
第77図 SE2622·2624出土土器実測図

椀(6) 内面だけを燻した黒色土器 A 類である。若干丸味を有する体部と高さ2.0cmを測る高い高台からなる。外面中位以上と内面はヘラミガキされているが、ミガキ自体は粗い。焼成は良好で、内面の燻しは漆黒色を呈する。

# 緑釉陶器

椀(7)灰白色軟質の胎土に淡黄緑色の鮮やかな釉をかけている。口 縁部下1.4cm以下は回転ヘラ削り調整をしている。

**紡錘車**(第78図) 老司系の瓦を使用し径4.8cm×4.9cm、厚さ1.9cmの紡輪をつくる。器面の正格子を研ってほとんど消すと共に、側面も研磨し



第78図 S E 2622 出土紡錘車実測図

平滑にしている。自然木を使用した紡茎の一部が紡輪の孔中に遺存している。

以上の土器は九世紀後半代の特徴を有している。

S E 2624出十十器 (第77図、図版63)

# 土師器

杯(10~14) 3点とも異なった特徴を有している。10はSE2622出土品と同種で、11は底径 が小さく、体部は外上方へ直線的に延びる。類例は乏しく外来土器か、越州窒青磁を模した器 形かもしれない。12は本来高台を有する器形であり、無高台椀とすべきかもしれない。

椀(13~15) 14は12の器形に高台を貼付けした形を有する。13・15はSE2622と何ら変わる ことはない。

SE2622と同様に九世紀後半代に埋没したとい SK 2641~2646 えよう。

# SK2641出土土器 (第79図、図版64)

#### 土師器

壺(1)底面に密着して出土した唯一の土器で あり。かつ完形品である。口縁部内面に浅い凹線 を巡らし、球形の胴部と丸底の底部を有する。体 部中位以下は手持ヘラ削りを行う。細砂粒を含む が、よく精選された胎土を用い、淡茶色に焼成さ れている。

## SK2642出土土器 (第79図、図版64)

# 土師器

杯(2~4) 2·3のように口径11cm前後、器 高2.5cm前後と、4のように口径12cm、器高3cm の両タイプがある。底部はヘラ切り離しのままで、 板状圧痕などはない。

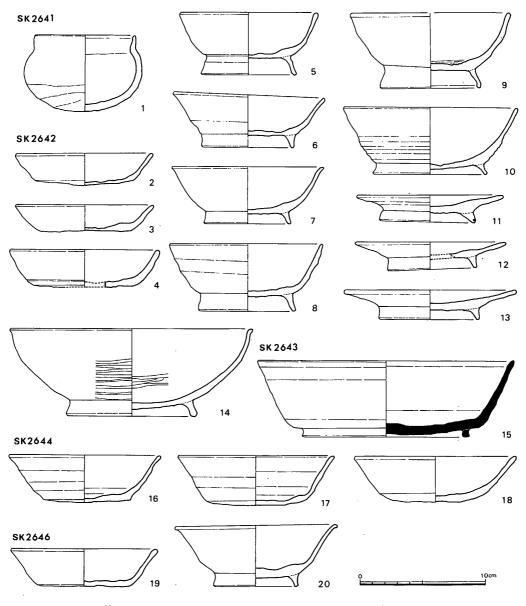
SK 2041~2046				
	口径	器高	底径·高台径	
1	8.5	6.1		
2	10.9	2.6	7.8	
3	11.1	2.2	7.1	
4	12.0	3.0	8.2	
5	11.1	5.0	7.1	
6	12.1	4.2	7.3	
7	12.1	4.5	6.9	
8	12.2	5.4	7.7	
9	12.8	6.1	8.0	
10	13.9	5.4	9.1	
11	11.7	2.1	7.2	
12	12.1	2.2	7.1	
13	13.8	2.4	8.0	
14	19.4	7.0	10.5	
15	20.4	6.0	13.4	
16	12.0	3.8	7.4	
17	12.4	4.0	7.8	
18	12.6	3.7	6.7	
19	11.7	3.0	7.4	
20	13.0	4.9	6.8	

椀(5~10) 杯と同様に2タイプある。杯2・3とセットになるのは口縁部を外反させる7 や14、4とセットになるのは他の椀類である。しかし、体部下位が内彎する特徴は全てにみら れ、それ程時期差は認められない。5の内面には炭化物が付着、9の内底には螺旋状の沈線、 10の体部下位には4本の沈線が認められる。

高台付皿(11~13) 口径12cm前後の11・12と口径14cm弱の13との2種が出土したが、時期的 な差を指摘し難いが、13の方が古期に属することは十分首肯できるであろう。

## 黒色十器

椀(14) 口径19.4㎝を測る大型の椀で、内外面を黒色に燻したB類に属する。器面全体の磨



第79図 SK2641・2642・2643・2644・2646出土土器実測図

滅が著しいためヘラミガキの詳細は不明瞭であり、かろうじて体部下位にヨコ方向のミガキの一部を観察できるに過ぎない。胎土中少量砂粒を含むが比較的精選された胎土を用い、内外ともに真黒色に焼成されている。

SK2643出土土器 (第79図、図版64)

### 須恵器

杯(15) 口径20.4cmを測る大形の杯である。外底部はヘラ切り後ナデ仕上げされている。

SK2644出土土器 (第79図)

#### 土師器

杯(16~18) 体部と底部との境が明瞭な16と不明瞭な17・18がある。16は九世紀初頭頃の特徴を残すが、17・18は九世紀中頃に考えられる。

SK2646出十十器(第79図、図版64)

#### 土師器

- 杯(19) 口径11.7cm、器高3.0cmを測り、底部はヘラ切り離しのままである。
- 椀(20) 口縁部を水平近くに折り曲げ端部を丸く仕上げている。

SK2649出土土器(第80図、図版65)

#### 須恵器

皿(1) 口径8.0cmの小皿で、底部はヘラ切り離しのままである。灯火器として使用されたのであろう、内面に油煙の痕が付着している。

杯(2~6)体部と底部の境は6を除いて明瞭である。外底部はヘラ切り後部分的にナデる2・4を除いて、全て未調整である。3の内面には煤が付着していることから灯火器として使用されたことが窺える。

# とが窺っ

#### SK 2649

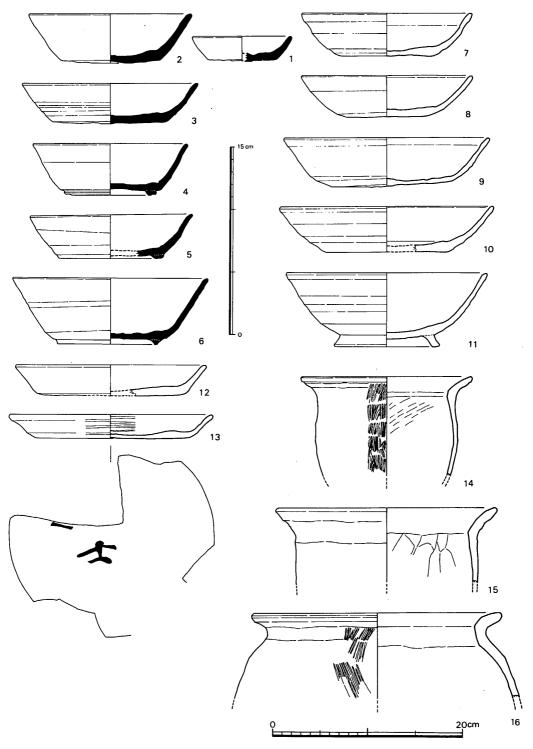
	口径	器高	底径·高台径
1	8.0	2.0	5.5
2	13.0	4.0	8.0
3	14.0	3.2	9.0
4	12.4	4.1	7.4
5	13.0	3.5	8.3
6	15.6	5.4	8.0
7	13.6	3.5	7.2
8	13.6	3.4	6.6
9	16.5	3.7	9.5
10	17.0	3.7	9.1
11	16.0	6.0	8.4
12	15,3	2.4	11.9
13	16.2	1.9	11.9

杯 $(7\sim10)$  8 · 9 は底部切り離し後体部下位から底部にかけて回転へラ削り調整、10は底部をナデ仕上げ、7は体部と底部との境を1条回転へラ削り調整をしている。

椀(11) 断面長方形の高台と若干内彎する体部とからなり、一見黒色土器の器形を想起させる。体部下位から外底部にかけて回転へラ削り調整を行う。

皿(12・13) 12は外底部だけを回転へラ削り調整、13は体部下位から外底部にかけて回転へ ラ削り調整をし、さらに体部内外および内底部をヘラミガキしている。13の外底部には「士」 銘の墨書があり、左上に字の一画が見られるが大部分が欠失しているため判読できない。

甕(14~16) 14・15は口縁部を外上方へ均一につくるが、16は一端屈曲し、しかも肥厚する。



第80図 SK2649出土土器実測図

16は八世紀前半代と考えられ、14・15が他の土器群に伴うと考えられる。

SK2649出土品は八世紀中頃から後半頃に位置付けられる良好な資料といえよう。

S K 2652出土土器・陶磁器 (第81図、図版65)

#### 須恵器

杯 $(1 \sim 3)$  1の外底はヘラ切り後ナデ調整し他はヘラ切り離しのままである。 3 はこの種 の土器としては体部が大きく開くなど新しい様相 SK 2652~SX 2686

を示している。2の外底に「居」銘の墨書がある が意味は明らかでない。

壺(4) 球形に近い体部に口頸部を接合する二 段構成の壺である。体部最大径(15.2cm)の位置 を求めると上から2:3の割り合いになる。この 最大径の位置から回転へラ削り調整が始まるが、 外底部まではおよばない。また、この回転ヘラ削 りは乾燥が進んだ段階で行われたためかヘラミガ キ状を呈している。胎土中砂粒を少量含むが、比 較的精良である。焼成は堅緻で灰色を呈する。

#### 土師器

杯(5) 体部中位から底部全体まで回転ヘラ削 り調整をしている。内面は平滑に仕上げているこ

	口径	器高	底径·高台径
1	12.2	3.9	8.6
2	13.0	4.9	8.1
3	17.0	4.7	9.9
4	8.2	20.1	8.5
5	16.2	3.8	7.8
6	17.2	2.1	13.2
9	16.5		
10	13.0	9.1	
11	16.2		
12	11.3	2.3	8.2
13	11.9	2.8	7.9
14	10.9	2.5	6.6
15	11.9	2.0	6.7
16	12.6	2.5	8.3
17	11.8	3.5	6.0
18	13.5	4.3	5.4
19	(16.5)	(5.2)	7.5

とからヘラミガキしていると思われるが、ミガキの単位などは明らかでない。内面に炭化物、 外面に煤が付着している。二次的に鍋として使用したのであろう。

- 皿(6)体部下位から底部全体に丁寧な回転へラ削り調整を行い、体部内外面と内底部をへ ラミガキしている。しかし、内底部は磨滅のためヘラミガキは不明瞭である。
- 甕(7) 口径26.4cmを測る。体部に比して口縁部の器肉は厚く、また外上方へ直線的に延び る。外面は刷毛目、内面は斜上方へ削る。

# 緑釉陶器

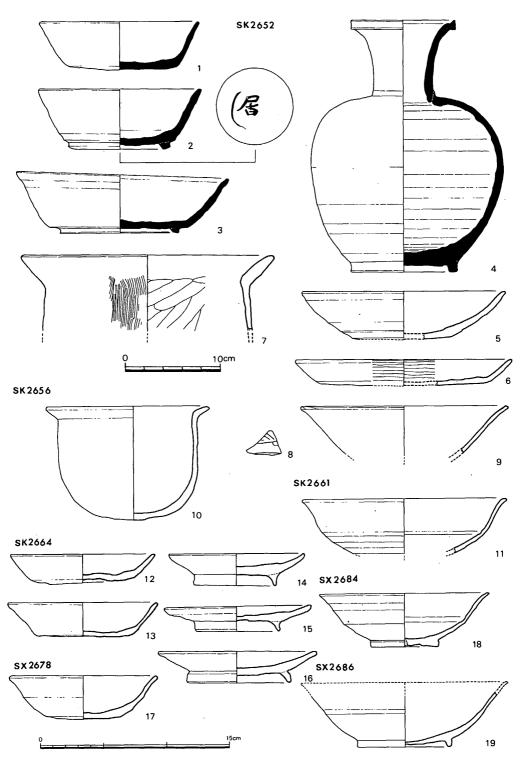
皿(8)体部下位の残片で、内底部との境に段を有する。体部側面に毛彫による花文を描い ている。灰色の胎に黄緑色の釉がかかる。高台付皿の残片か。

#### 白磁

椀(9) 淡灰白色の胎土に、貫入を伴う黄色味をおびた白色の釉をかけている。口縁部に輪 花の刻みが1個残っているが、総数は小片のため不明である。

#### 青磁

香炉(図版65-A) 口径12.8 cmを測り天井部に透文様がある。灰白色の緻密な胎土に淡黄緑



第81図 SK2652・2656・2661・2664、SX2678・2684・2686出土土器・陶磁器実測図

色の釉が身受け部を除いて全面にかけられている。器壁もうすく作りのよいものである。

SK2656出土土器 (第81図、図版66)

# 土師器

**甕**(10) 体部中位以下には指頭痕が多く残っているが、上位はヨコナデにより消している。 外面には煤、内面下位には白色化した付着物が残っている。

S K 2661出土土器 (第81図)

#### 緑釉陶器

椀(11) 体部中位で屈曲、内面屈曲部に1条の沈線を巡らし、口縁部を外反させる。外面屈曲部以下は回転へラ削り調整である。焼成は堅緻で灰色を呈し、黄緑色の釉がうすくかけられている。

SK2664出土土器 (第81図、図版66)

# 土師器

杯(12・13) 両者とも外底部に板状圧痕がある。

高台付皿(14~16) 14は口縁部を若干内彎させるが、15・16は体部と共に外上方へ引き出している。15の外底には板状圧痕がある。

S X 2678出土土器 (第81図、図版66)

# 土師器

杯(17) SB2655を切るピットから出土した。特徴や法量から九世紀後半代に求めることができる。

S X 2684出土土器 (第81図、図版66)

# 緑釉陶器

椀(18) 蛇ノ目高台を有し、体部中位で大きく屈曲する。体部外面屈曲部以下は回転ヘラ削り調整をしている。内外面の釉は全くといってよい程剝落し、淡黄茶色の素地が露出している。 小ピット出土。

S X 2686出土土器 (第81図)

# 緑釉陶器

椀(19) 残片は小さく、図示した法量はあまり正確でない。土師質の焼成で赤茶色を呈する。 緑色の釉は全面施釉されているが、剝落部分が多い。

S X 2670出土土器 (第82図、図版66)

# 土師器

蓋(1) 口径19.4cm、器高3.5cmを測り、幅3.5cm、高さ1.3cmの大きな撮を有する。外天井部は丁寧な回転へラ削り、内外面は密なヘラミガキをしている。胎土中の砂粒は少なく、また焼成は良好で赤茶色を呈する。遺構面上に露出していたため、遺存状態は良好とは言えない。

椀(2) 口径17.6cm、器高5.8cm、底径11.4cmで、器肉は厚く0.7cm~0.9cmを測る。口縁部下1cm程から回転へラ削りが始まり、外底部全体におよぶ。体部内外面および内底面はヨコ方向のヘラミガキをするが、内面の方が丁寧で、密に行っている。胎土は精良でほとんど砂粒を含まず、赤茶色を呈する。

地鎮具とすれば、発掘調査域検出遺構のなかの古期に伴うと考えられる。

# S X 2690出土土器 (第83図、図版67·68)

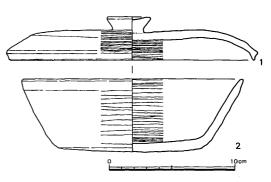
発掘区西南隅で多量に出土した土器群であるが、 明確な遺構は把握できなかったので、不明遺構出 土資料として報告する。

# 須器器

皿(1) 外底部はヘラ切り後若干ナデ仕上げしている。また、内底のナデに対応する位置に細い板状圧痕がみられる。

#### 土師器

杯(2~7) 2は体部下半から外底部を回転へ ラ削りし、さらに体部中位以下をヘラミガキして いる。 3~7 のうち 5 は外底部を回転へラ削り調整をするが、他はヘラ切り離しのままである。



第82図 S X 2670出土土器実測図

#### SX 2690

	口 径	器高	底径·高台径
1	16.0	1.3	11.9
2	14.1	3.6	7.0
3	13.2	3.2	8.9
4	13.8	3.5	8.5
_ 5	13.8	3.6	8.2
6	13.9	4.0	7.2
7	15.1	4.1	8.2
8	12.8	2.0	7.6
9	13.3	1.8	10.6
10	14.4	2.1	10.7
11	14.9	1.9	12.0
12	15.0	1.3	11.9
13	15.5	4.0	7.8
14	13.0	4.6	5.8
15	14.9	5.4	7.4
16	9.4	4.4	6.0

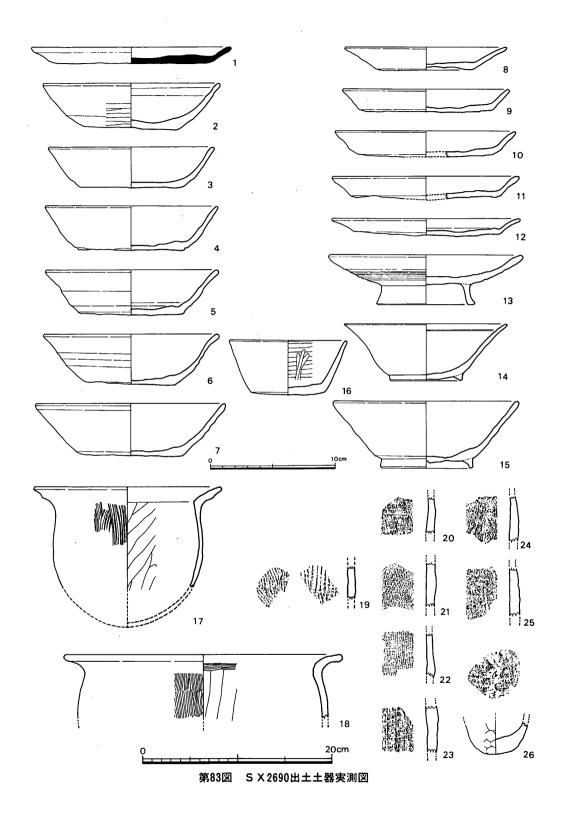
皿( $8\sim12$ ) 8 のように口径に比して底径が極端に小さい例と  $4\sim12$ の例とが出土し、後者が圧例的に多い。9 の外底には板状圧痕がある。

高台付皿(13) 1.5cmの高い高台を有し、外上方へ大きく延びるため比較的深い皿部となるもので、体部下半に5条の沈線が巡る。

椀(14~15) 14は外彎させながら立ち上がる特異な体部を有し、しかも、口縁部下内面に1 条の沈線を巡らしている。外底部に板状圧痕あり。15は体部を外上方へ直線的に引き上げているが、体部と内底の境は不明瞭となっている。

#### 黒色土器

杯(16) 内面だけをヘラミガキし、黒色に燻した黒色土器A類である。外底部は回転ヘラ削り調整をしている。大宰府ではこの種の形態の黒色土器の出土は初めてである。また、形態上



からも八世紀後半代として誤りないと考えられるので、黒色土器としては最古期に位置付けら れる。

甕(17~19) 17は口径19.8cmを測り、胴部はあまり膨まない。内面は斜上方へへラ削り、外 面は刷毛目調整をしている。外面には煤が厚く付着している。18は口径29.2cmを測り、口縁部 を外彎させる古い特徴を残している。内面のヘラ削り調整の上端を横刷毛目によって調整して

いる。18は玄界灘式土器と呼称されている製塩土 器の胴部小片である。外面の叩打具の刻目は木目 と直交する。

塩壺(20~26) 内面に布目、外面に指頭圧痕を 多く残す、いわゆる「型造り」による円筒形の壺 である。23・24の胎土中に金雲母を少量含む。

暗褐色土層出土土器・陶磁器(第84~86、図版 69 - 71

### 須恵器

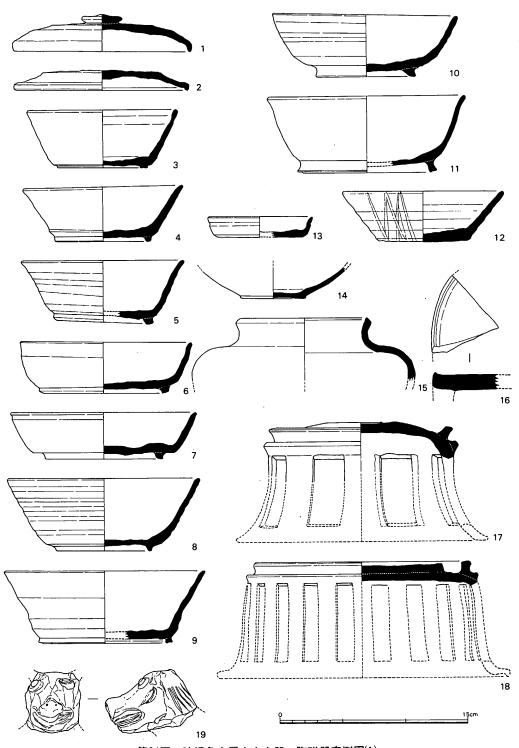
蓋(1・2) 1は3.2cmの幅広の撮を有し、天井 部を回転ヘラ削り調整するが、2は撮はなく、ま た天井部はヘラ切り離しのままである。

杯(3~12) 高台付では10・11と6および3~ 5・7~9の3つのタイプにわけられる。10・11 は高台を外方へは、体部の丸味は顕著である。ま た10は体部下位を回転ヘラ削り調整をしている。 6 は体部の丸味が10・11に比してそれほどではな く、SD2340からもっとも多く出土するタイプに 属する。3~5・7~9は高台が脆弱な4・8や 体部と内底部の境が明瞭な3・5・8・9などを 含み、八世紀中頃以降の特徴がみられる。12は平 底で体部を上方へ直線的につくる通例の杯である。 底部から体部にかけて火襷の跡が顕著である。

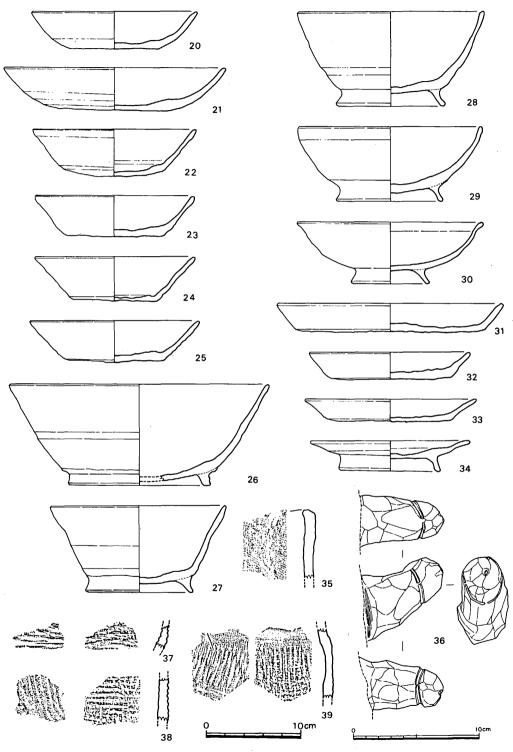
皿(13) 口径8.3cmの小形の皿で、外底部を回転 ヘラ削り調整している。

椀(14) 径5.2cmを測り、若干段をなす底部は糸 切り離しのままである。胎土は精良でほとんど砂 粒を含まず、焼成は堅緻で淡灰色を呈する。在地

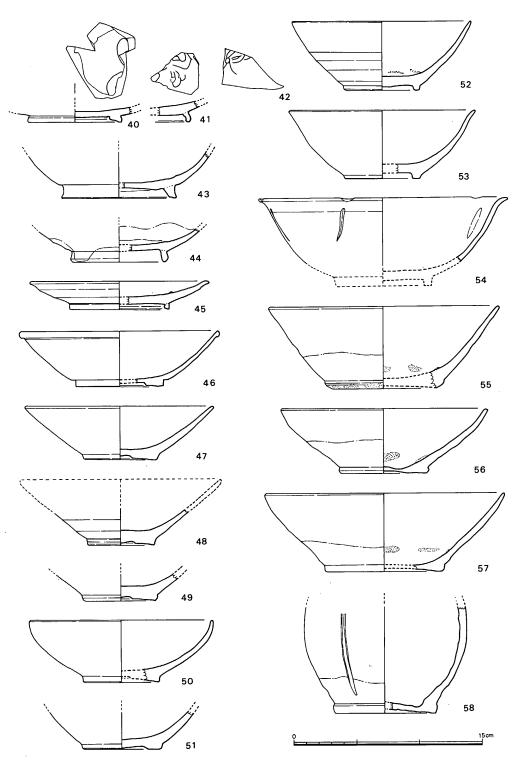
	口径	器高	底径·高台径
1	14.1	3.0	
2	14.0	1.6	
3	12.5	4.6	7.2
4	12.8	4.4	7.1
5	13.0	5.0	8.0
6	13.7	4.1	10.3
7	14.9	3.7	9.4
8	15.4	5.8	7.6
9	16.0	5.8	10.7
10	14.8	5.0	8.0
11	15.8	6.1	11.1
12	12.8	4.0	9.0
13	8.3	1.7	6.8
15	10.2	1	
20	13.3	3.0	7.1
21	17.7	3.4	8.6
22	12.6	3.9	7.9
23	12.8	3.3	8.0
24	12.8	3.5	6.7
25	13.5	3.4	7.8
26	20.8	8.1	11.3
27	14.1	6.9	8.8
28	14.9	7.6	8.2
29	13.7	5.6	8.4
30	14.8	5.0	6.2
31	18.0	2.2	15.1
32	12.8	2.2	10.1
33	13.7	1.8	10.0
34	12.7	2.4	8.1
45	14.3	2.3	7.9
46	16.0	4.4	7.0
47	15.0	4.2	5.9
50	14.2	5.0	6.1
52	14.3	5.6	6.0
53	14.9	5.5	6.0
55	18.4	6.6	9.5
56	16.5	5.2	7.2
57	19.1	6.3	9.5



第84図 暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)



第85図 暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図(2)



第86図 暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図(3)

にはみられない土器であり、搬入されたものと思われる。

壺(15) 口縁端部を斜めに仕上げ、一見三角形口縁にみえる壺である。小片からの復原のため法量などについては正確さを欠く。類例の乏しい資料である。

硯(16~18) 16は風字硯の残片である。縁部は0.2cmと低い。裏面には突帯状の剝離痕があり、ここが脚となる。十分に使用されたためであろう、硯部は平滑である。17・18は透しを有する円面硯である。17は硯部と脚部を同時に造り、内外堤を貼付けし、台形状の透しを入れる。18は17と基本的には同じような造り方をするが、硯部陸部は円盤を貼付けし、その周囲を海部としている。

獣形陶製品(19) 横からみた姿は犬を思わせるが、正面からみた鼻の形状や牙の表現などから猪とも考えられる。耳の上位は欠失している。全体の調整はナデによるが、口や耳それに体毛などはヘラ状工具を用いて成形している。顔面の一部に赤色顔料がみられる。胎土は精良で砂粒は少ない。焼成は良好で、淡灰色を呈する。

#### 土師器

杯(20~25)体部下位から底部全体を回転ヘラ削りする20・21と調整をしない22~25とがある。前者は胎土も精選され砂粒をほとんど含まない。23の外底部には板状圧痕を伴う。

椀(26~30)体部は外上方へ直線的に延び、体部中位から底部にかけて回転へラ削り調整を する26、同じく体部を直線的につくるが、高台はやや弱々しくなり、調整をしない27・28、体 部が丸味を有する29、それに内部にミガキが認められる30がある。それぞれは時期を異にする。

皿(31~33) 大形の31と小形の32・33とがある。33は板状圧痕を伴う。31は八世紀、32・33は九世紀代に位置付けられよう。

高台付皿(34) 口径12.7cm比較的大きな口径を有する。外底部には板状圧痕がある

塩壺(35) 内面に細い布目を有し、外面に指頭痕がある円筒形の塩壺である。細砂粒を多く 含み焼成は良好で赤茶色を呈する。

**甕**(36~39) 36は把手を陽物形に仕上げたもので、亀頭や尿道口など実にリアルに表現している。全体を指成形、ナデ調整し、ヘラ状工具によって形を造り出している。この種の陽物形 把手は学校院跡(第38次調査)出土例に次いで2例目である。37~39は玄界灘式土器として命名されている製塩土器である。いずれも大形品と考えられるが小片のため復原は困難である。外面の平行叩き目は木目に直交する。38は少量金雲母を含む。

#### 緑釉陶器

椀(40~43) 40は小蛇ノ目高台、41は半月状の高台を有し、42は体部片である。いずれも灰白色の精選された胎土を用い、淡黄緑色の釉がうすくかけられている。43は暗灰色硬質に焼成され、濃緑色の釉が全面にかけられている。外底部見込み部分には糸切り痕が未調整のまま残っている。

#### 灰釉陶器

椀(44) 外底部を回転へラ削り調整をする他はヨコナデである。淡黄緑色の釉は体部外面下位まで、内面は重ね焼きする部分を環状に露胎としている。内面には重ね焼きの目跡が残存している。灰色に焼成された胎土は精良である。

皿(45) 内面だけに緑色のナマコ釉がかけられている。体部外面中位以下は回転ヘラ削り調整をしている。内面には重ね焼きの目跡が残っている。胎土は精良で淡灰色を呈する。

#### 白磁

椀(46) 小さな玉縁口縁は折り曲げてつくっている。高台畳付以内は露胎、他は若干黄色味をおびた淡白色の釉がかかる。高台付近および円底部に若干貫入を伴う。胎土は精良で、白色を呈する。高台脇には焼成時か、それ以前に付着した粘土が焼き付いている。

#### 青磁

椀(47~57) 47~51は蛇ノ目高台を有し全面施釉後高台畳付部分の釉をカキ取っている。この種の陶磁器は例外がほとんどないといってよい程重ね焼きしないが、例にもれずいずれも内部見込み部分には重ね焼きの痕跡はない。52~54は輪高台を有し、全面施釉後畳付部分の釉をカキ取っている。内面の見込み部分には白色の目跡が52では9個、53では7個ある。55は体部下半を露胎とし、底部外面から内側にかけて回転へラ削りしている。回転へラ削りし、面を成す底部脇部分を重ね焼きの接点とする。内面には白色の目跡が残る。55・56は円盤状の底部、釉下に白化粧土を有する。外底の切り離し痕(糸切り)をヘラ削りにより消し去っている。内面には重ね焼きの白色の目跡がある。

水注(58) 細貫入を伴う淡黄緑色の釉を体部下位付近までかけている。体部を工具により押え、瓜胴状にしている。外底部には焼台上の粘土が薄く付着し、淡黄灰色となっている。

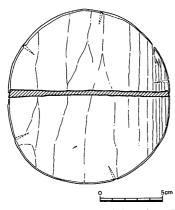
#### **瓦類**(第87図、図版90)

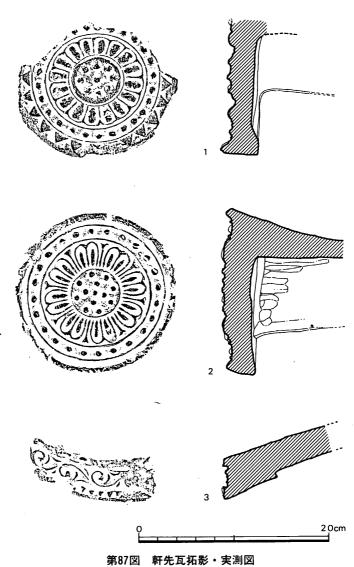
今回の調査で出土した瓦類は丸・平瓦の他軒丸瓦25点、軒平瓦28点および無文塼、文字瓦である。これらは主に遺構面直上を覆う暗褐色土層から出土した。出土した軒先瓦の内訳については巻末の一覧表に示すとおりである。第87図はSB2660、SE2621から出土した軒先瓦である。

軒丸瓦は11種類出土し、なかでも鴻臚館式が総数の28%、老司 II 式が20%を占めている。第87図1はSB2660の北西隅の柱穴から出土したもので、老司式の流れをくむ。中房に1+8の蓮子を配し、弁区との間は彫りが深く圏線が巡る。弁は単弁十六弁蓮華文で、外区内縁に珠文26個、外縁は斜縁で外向凸鋸歯文が配されている。凸鋸歯文は完存する例から24個になる。瓦当と丸瓦との接合位置は珠文帯付近にあるが、内側の支持土が厚くあてがわれているのが一つの特徴である。さらに瓦当裏面下端に凸帯が認められるがこれらは現在、大宰府出土の軒丸瓦の中では老司式の流れをくむものに限られている。焼成は黒色である。

2・3は鴻臚館式で、SE 2621の井戸中から丸・平瓦片 と共に出土した。2は中房に 1+4+8を配する複弁八弁 蓮華文軒丸瓦である。瓦当と 丸瓦の接合位置は弁区付近に あり、いわゆるサシコミ式に よる技法である。鴻臚館式の 場合は瓦当と丸瓦の内面に支 持土が極めて少なく、そのほ とんどは丸瓦凸面の方にあて がわれており、2もそれに 従っている。裏面は丁寧なナ デ調整を行っている。3は左 半部が欠損し明らかでないが、 完存する例から左右に4回反 転する均整唐草文である。外 面は黒色に焼成されている。

文字瓦は総数58点出土し7 型式14種類に分類できる。こ のうち「平井」銘瓦が圧倒的 に多く、総数の約70%を占め





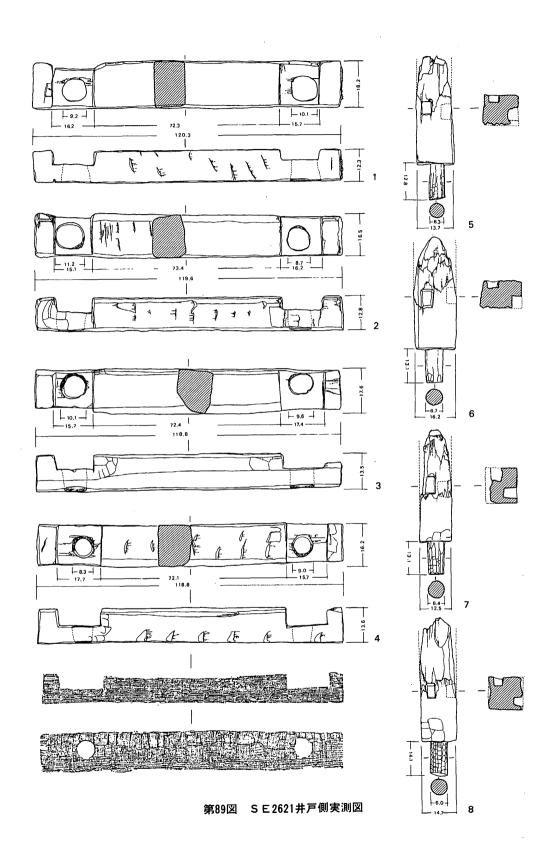
る。なかでも「平井瓦」と陰刻された文字瓦が29%を占めてい

る。この他「佐瓦」、「大国」、「小イ瓦」、「八年」、「筑前瓦」銘 などがあり、SE2623の井戸中から比較的多く出土した。

木製品 (第88図、図版85)

井戸や土壙から出土した。

曲物底板 長径14cm、短径13cmでやや長円形を呈する完形の 第88図 S E 2622出土木製品実測図 底板。両面は鉇により丁寧な削りで整え、側面はやや法をつけ



る。周縁側面には側板を固定するための木釘孔が、ほぼ等間隔で5ヶ所に穿たれている。いずれも木釘は残っていない。柾目材。

櫛 井戸S E 2622から 4 点、S K 2649から 2 点出土している。S E 2622出土のものは、いずれも平面形が長方形の横櫛で、肩部は角張らせている。断面は楔形で棟部を丸くする。幅は不明であるが高さは $4.2 \text{cm} \sim 4.4 \text{cm}$ で 4 点ともほぼ同大と思われる。歯長は $3.3 \text{cm} \sim 3.4 \text{cm}$ 、歯数は 3 cmあたり $29 \sim 36$ 本で若干の精粗がある。S K 2649出土の 2 点も同型式の横櫛で一点は完形である。幅10.9 cm、高さ4.2 cm、歯長3.0 cm、歯数は 3 cmあたり25本である。

S E 2621井戸側(第89図、図版86) 方形縦板組の井戸で、井戸掘形の底部に組まれた台と隅木4本が残存していた。この井戸は八世紀代に属し、その構造を知る上で貴重な資料であった。

木製台は全長118.8cm~120.3cmで、約13cm×約17cmの角材である。仕口は角材の両端を合欠きにし、組合わせる。仕口の部分には隅柱を立てるための径8.0cm~11.2cmの枘穴をノミで穿っている。木口は鋸挽きで、側面は手斧で削っている。隅柱は4本が残っていたが、残存状態は悪く、下部のみである。12.5cm~16.2cmのほぼ正方形の角部材で、径6.0cm~6.7cmの断面円形の出枘がある。出枘はノミで細かく丁寧に削られており、木口には鋸挽きの痕跡がある。また出枘を除いた位置から約17.0cmの所の相対する2面に横桟を入れる3.0cm×5.5cm、深さ約10.0cmの枘穴がある。器面は腐蝕しているので、工具痕については明瞭でない。木製台の組合わせ内法は72.1cm~73.4cm(約2.4尺)のほぼ正方形となる。

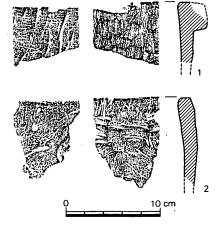
### S X 2679出土鉄製品

鉄(図版90-A) 先端部を若干欠失し、現存長5.8cm、身幅は1.6cmを測る平根式の鉄鏃である。SK2647の東北方に近いピットSX2679から出土した。

#### 石製品(第90図、図版90)

石鍋(1・2) 2点とも縦耳付の鍋である。外面は横方向、内面は縦方向に平ノミを用いて削るが、この内面は仕上げのため顕著なノミ痕は消されている。1 は若干鉄分を含み淡赤灰色、2は白灰色を呈する。1 は暗褐色土層、2はSE2623出土。

勾玉(B) 長さ2.8cm。方頭に近い頭部からゆるやかに内彎し、尾部は細くなる。腹部のC字形刳込みは著しい。床土出土。



# 小結

第90図 暗褐色土層·SE2623出土石鍋実測図

本次調査により当該地において数次にわたる建物の

変遷の一部が明らかになったので、このことについて述べまとめとしたい。

第 I 期  $SB2620 \cdot 2625 \cdot 2650 \cdot 2655$ 、SE2621、SX2670で構成される。SB2650の北側 桁方向を延長するとSB2655の北梁行と同一線上になり棟方向が直交することから、同時に建造されたものと思われる。SB2620とSB2625は棟方向を略一にする。この二棟をI 期と考えたのはSB2655の梁間と $SB2620 \cdot 2625$ の梁間が同一であり、柱掘形中にほとんど遺物を含まず、しかも含んでも全て八世紀前半代の特徴を有するものだけであったためである。しかし、

棟方向が違うため西北方に位置するSB2635 を伴って、I期のなかである時期を形成した 可能性は否定できない。

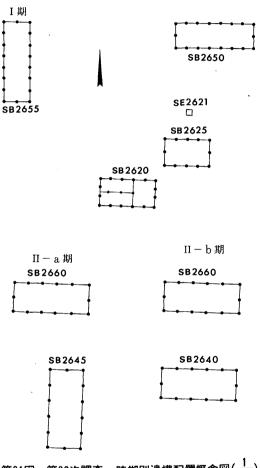
第Ⅲ期 この期は建物配置により a・bの 2 小期に分かれる。

第Ⅱ-a期を形成する遺構はSB2660とSB2645の建物である。SB2660の梁行の延長線よりもSB2645の東側桁行は若干西側へずれているが検出遺構中両者とももっとも大きな柱掘形を有し、棟筋が直交し、柱掘形中出土遺物も同一時期を示す。Ⅱ-b期との関係でSB2660が主屋になると考えられる。

第Ⅱ-b期はSB2660とSB2640からなる。 SB2645廃絶後SB2660の桁行および棟方向 をあわせてつくっている。

第Ⅱ期に伴う井戸は未検出である。

第Ⅲ期 暗褐色土層除去後検出した円形の小掘形を有する建物群および I・Ⅱ期に属さない井戸からなる。柱間を問題にしなければ、5間×2間の建物に復原できるものが、SB 2620と重複する位置にあり、これがこの期に相当する。



第91図 第92次調査 時期別遺構配置概念図(<del>1</del>600)

第Ⅳ期 暗褐色土層中位 (暗褐色土層は2面にわかれるが、調査時に精査したが分離するのが困難であった) につくられたSB2665がこの期になる。

第Ⅰ期は八世紀中頃、第Ⅱ期は八世紀後半から九世紀初頭、第Ⅲ期は九世紀から十世紀、第Ⅳ期は十二世紀を下限とする。

大宰府史跡の発掘調査については、これまで竹内理三氏を委員長とする「大宰府史跡発掘調査指導委員会」の指導のもとに進めてきたが、今年度その改組を行い名称も「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改称した。その構成については下記に示したとおりである。

大宰府史跡調査研究指導委員会名簿

	氏	名	所 属	部門
委 員 長	岡 峪	新 敬	九州大学教授	考 古
副委員長	平 里	邦雄	東京女子大学教授	国 史
委 員	浅町	清	爱知工業大学教授	建築史
	小 田	富士雄	北九州市立考古博物館長	考 古
	狩 里	5 久	奈良国立文化財研究所 飛鳥・藤原宮跡発掘調査部長	国 史
	岸	俊 男	奈良県立 橿原考古学研究所長	国 史
	笹山	」 晴 生	東京大学助教授	国 史
	澤木	t 仁	九州芸術工科大学教授	建築史
	杉本	正美	九州芸術工科大学教授	造 園
	坪・井	清 足	奈良国立文化財研究所長	考 古
	中木	t -	京都大学教授	造園
	横山	」 浩 一	九州大学教授	考古
	渡道	〕 定 男	東京大学教授	都市工学

# 別 表

別表 1

ניכ	表 1					1.4	1				97.00				88	1		92		
番号	軒	丸	瓦	点数	%	<b>14</b> 出土)		層位	点数	%	87.90 出土遺構	· 層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	.,,,,,	貴構・	層位
				9	6			黑色粘土 荒砂土 砂土	奴				***			5	20	SE 2622 SX 2679	暗茶灰暗褐色	色土
		VVVV				SD 320	下層	砂土											B	音褐色土 表土
				1	0.7									:		5	20			X.L
				1	0.7	SD 320														
				12	8	SD 320		砂土 料質土 黒色粘土 荒砂土 咳植土 砂土 灰褐色土	4	7	SD 2335(砂)	灰褐色土 茶褐色土				1	4		1	暗褐色土
·				21	14	SD 320	中層下層	黒色粘土 荒砂土 腐植土 砂土	,3	5		灰褐色土茶褐色土								
6				3	2	SD 320	上層所屬	砂土 荒砂土 砂土								1	4	SE 2622		
7	A STATE OF THE STA			3	2	SD 320	中層下層	腐植土 砂土								1	4	SB 2660		
8				54	36	SD 320	中層	粘質土 質土 料色砂 生 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	10	18	SD 2340(暗灰 SD 2340(中層 SD 2340(上層	粘土) 灰色粘土) 茶灰色土) 茶褐色土	1	33. 5	床土	7	28	SE 2621 SX 2683		暗褐色
9		Company of the Compan							1	1.8		茶褐色土								
10				11	7	SD 320	上層中層下層	砂土 黒色粘土 砂土	13	23	SD 2340(上層 SD 2335(砂)	茶灰色土) 茶褐色土 灰褐色土 茶褐色砂土 床土				1	4	SD 2350	-В	
11				3	2	SD 320	中層	荒砂土 暗茶灰色土												
12	2			2	1.		中層	黒色粘土	7	12.		灰暗 為色土 福褐色土 茶褐色砂土 木土								
1:	3			1	0.		)中層	<b>,</b> 荒砂土								1	4			
1	4												1	33. 3	SD 2582	1	4	SD 2350	0-В	

別表2

<u>//`</u>	表 2													_			_	_	<u> </u>	
番号	軒	丸	瓦	点数	%		<b>4</b> :遺構	・層位	点数	%	87.90	<u>-</u> - ・層位	点数	%	出土遺構	・層位	点数	%	92 出土遺構・	層位
15					0.7		上層	粘質土	3			灰褐色土茶褐色土	900			·	***			
16				2	1.3	SD 320	上層中層	砂土荒砂土												
17				4	2.7		中層	黑色粘土 荒砂土 暗茶色土 茶褐色土	7	12. 5		暗褐色土 茶褐色土								-
18									1	1.8		茶褐色土								
19				2	1.3			荒砂土	1	1.8		灰褐色土								
20				1	0.7	SD 320	上僧	砂土				at: I								
21									1	1.8		床土					1	4	SK 2651	
22		Nr.		1	0.7	SD 320			1	1.8		暗褐色土								
23									1	1.8		灰褐色土								
24									1	1.8		灰褐色土								
25				1	0.7	SD 320	中層	荒砂土				rt.								
26									1	1.8		床土								
27											·									
	不		明	16	11				1	1.8			1	33. 3						
	合		<del>21</del>	149	99. 5				56	99. 2			3	99.9		2	24	100		

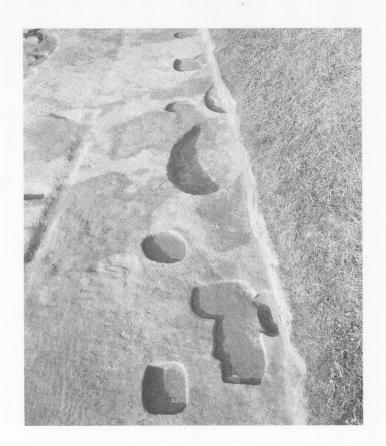
別表3

<u>ה</u>	<b>退表3</b>		•																
番号	   軒 <sup>-</sup>	平 瓦	بر	<u> </u>		14			뵨	I	87. 90		占	.	88	占	· T	92	
号	<del>+</del> 1	1 <i>P</i> u	<b>.</b>	数	%			・層位	点数	%	出土遺構		点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構	・層位 
1			3/2 4	1	26	SD 320	上中層下層	砂黒荒腐砂腐 大生 生 生 生 生 柱 生 植 生 植 程 植 程 植 程 植 程 植 表 複 複 表 表 。 表 。 表 。 表 表 。 表 是 去 上 去 上 去 上 去 上 去 上 去 上 去 上 去 上 去 上 去	10	12.2	SD 2340(茶褐色 SD 2340(黒色料 SD 2340(腐植二	5土)	-3	27	SX 2616 床土	7	25	SX 2678 SX 2683	暗褐色土
2			. 1	1	0.6		- 下辰				3D 2333	茶褐色土					P C		
3			1	1	0. 6	SD 320													
4	\$ 6.00 mg		7	'4	4.6	SD 320	上層中層下層	腐植土 灰褐色土	43	52. 4	SD 2340(上層) SD 2340(暗灰株 SD 2340(最上所 SD 2340(中層) SD 2340(中層 SD 2340(上層 SD 2335	占質土) (受料土) (受料土) (受料土) (で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、	3	27	SE 2554 黒褐色土	.9	32	SE 2621 SE 2622 SK 2652(上層	暗褐色土 暗灰色土 床土
5			1	4	9	SD 320	下層		2	2.4	SK 2522 SX 2523 SB 2355 SX 2537 SX 2529	茶灰色土 灰褐色土 茶褐色土 茶褐色土				2	7		暗褐色土暗灰色土
6		- 000 O		1	0.6	SD 320			1	1. 2			1	9. 1	SE 2554	3	11	·	暗褐色土
7			1	.0	6	SD 320	中層下層	床土	20	24	SD 2335 SK 2522 茶複	茶灰色土 灰褐色土 茶褐色土 色土(下層)	1	9. 1	SE 2554	3	11	İ	暗褐色土
8				1	0. 6	SD 320										3	11	SE 266	暗茶灰色土 暗褐色土
9				1	0.6	SD 320												i	
10				2	1.2	SD 320	上層中層	砂土 荒砂土											
11							,		5	6. 1	SE 2510	灰褐色土茶褐色土	2	18. 2	SK 2603 SX 2612				
12		C/ACAN JAN	元										1	9. 1	黒褐色土				
13			The state of the s	2	1. 2	SD 320	中層	荒砂土											
14		0000 E														1	3	SE 2623	•
15	Ď		14-402 2	4	2. 5	SD 320	上層中層	粘質土 黒色粘土 腐植土											
16						-			1	1.2	SX 2529								
	不	明	8	8	5														
	合	ā†	16	60	99. 9				82	99. 5			11	99. 5		28	100		

# 図 版



(上)第14次調査区全景(南から) (下)柵SA2505(南から)



図版 2



井戸SE2502(北から)



井戸2503(南から)



井戸SE2504(東から)



瓦組遺構 S X 2501(北から)



同上



第87次調査区全景(東から)



第87次調査区全景(西から)



第90次調査区全景(南から)



第90次調査区全景(東から)



掘立柱建物SB2355(東から)



掘立柱建物SB2515(北から)



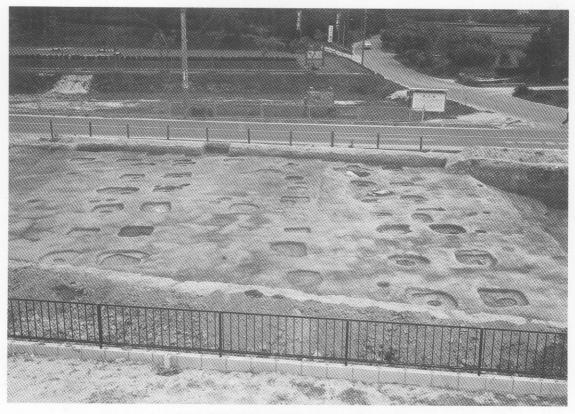
掘立柱建物2520・柵SA2522(北から)



同上(東から)



掘立柱建物SB2525・2530南妻(南から)

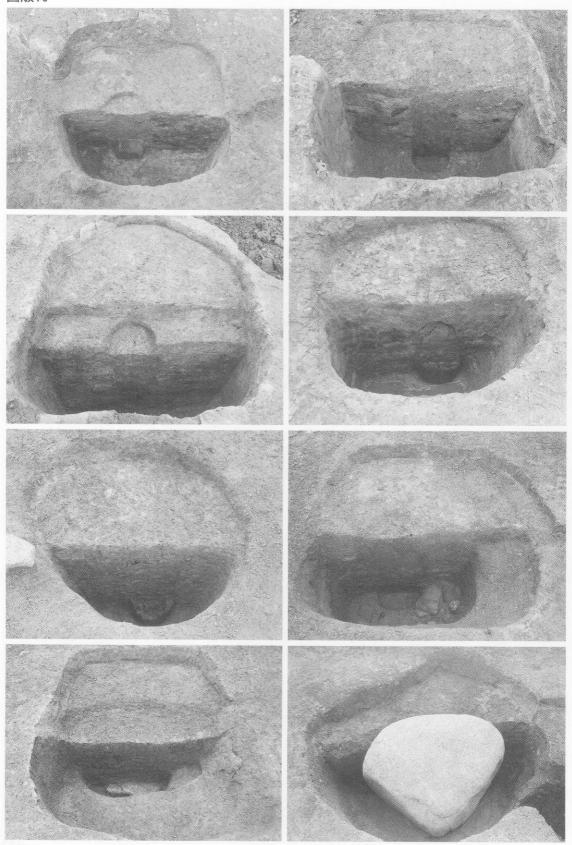


掘立柱建物SB2525・2530(南から)

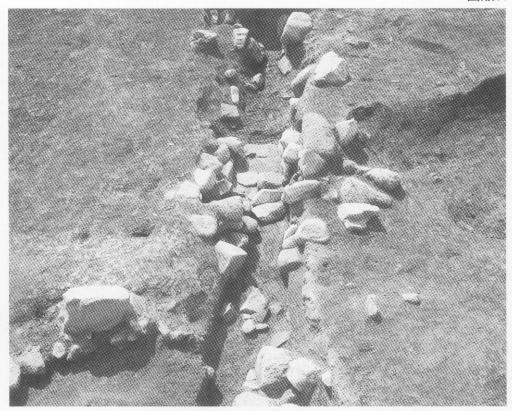


(上)掘立柱建物SB2535(南から) (下)掘立柱建物SB2540(南から)





掘立柱建物SB2355・2525・2530・2535柱掘形



溝SD2335(北から)



溝SD2335・瓦敷SX2523(北から)



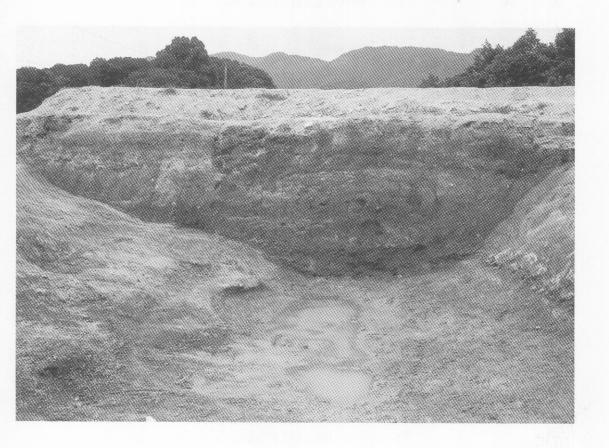
第87次調査 溝SD2340(南から)



第87次調査 溝SD2340土層(南から)



- (上)第90次調査 溝SD2340(南から) (下)第90次調査
- (下)第90次調査 溝SD2340土層(南から)

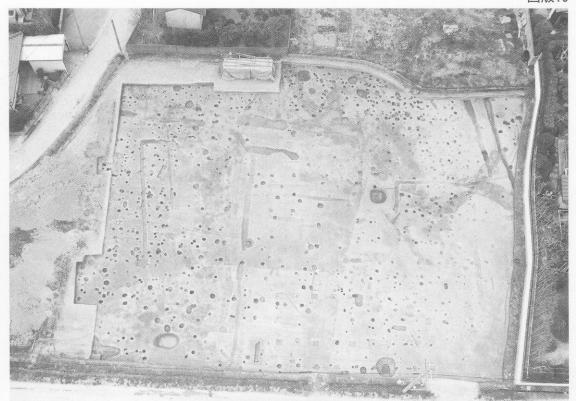




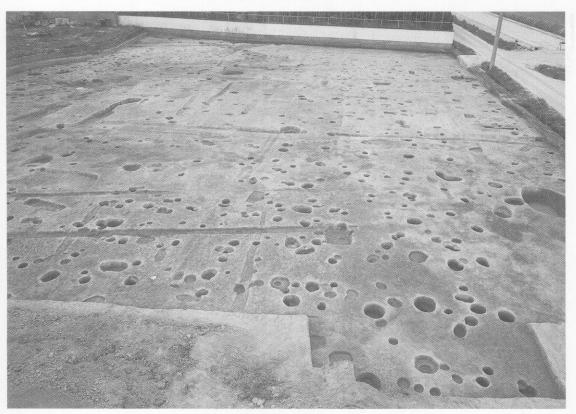
井戸SE2510(東から)



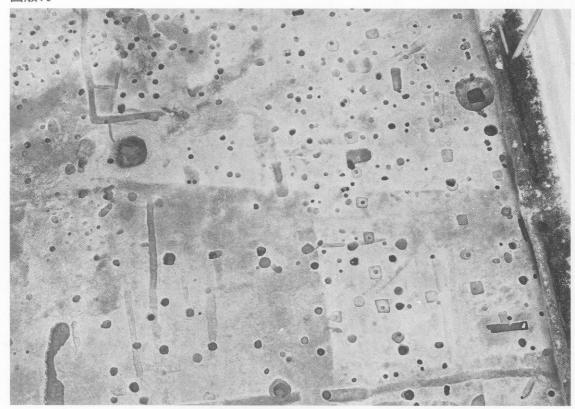
同上(東から)



第88次調査区全景(空中写真)



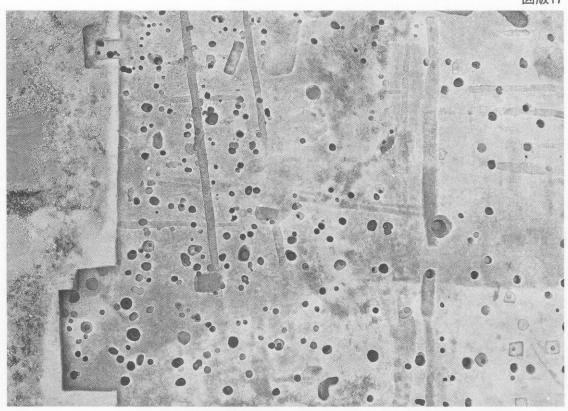
第88次調査区全景(南から)



掘立柱建物 S B 2550 · 2565(空中写真)



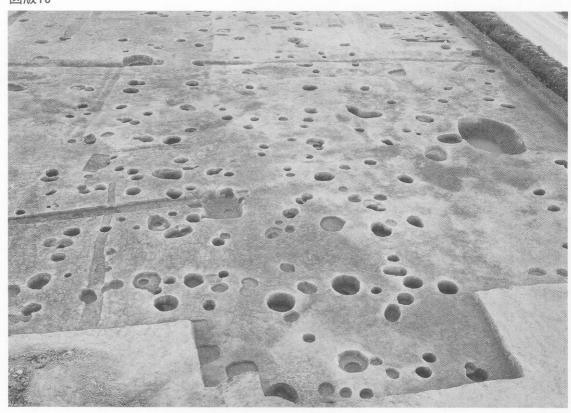
掘立柱建物SB2550·2565(空中写真)



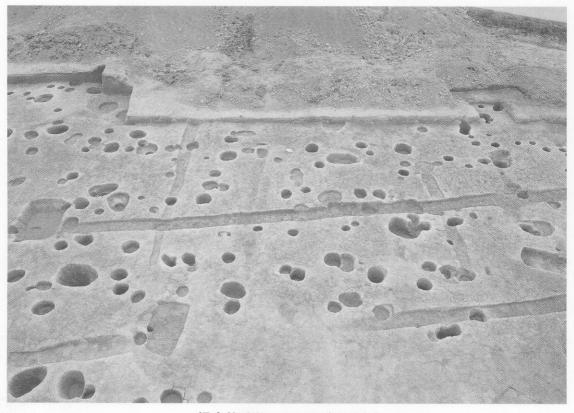
掘立柱建物SB2555 · 2560 · 2595(空中写真)



掘立柱建物SB2550(南から)



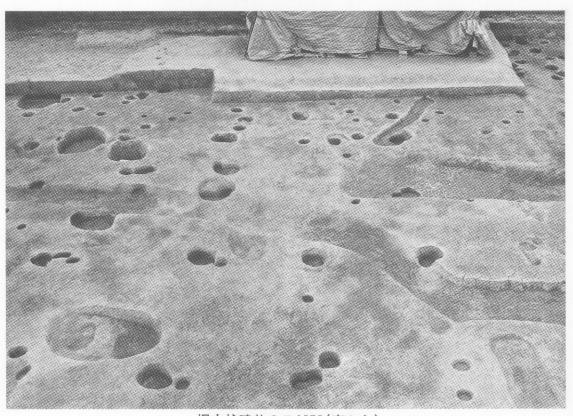
掘立柱建物SB2555・2595(南から)



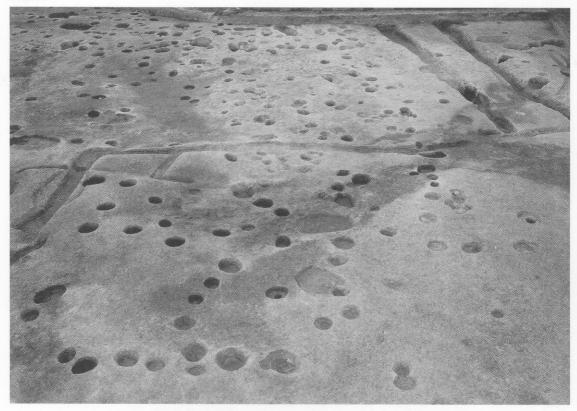
掘立柱建物SB2560(北から)



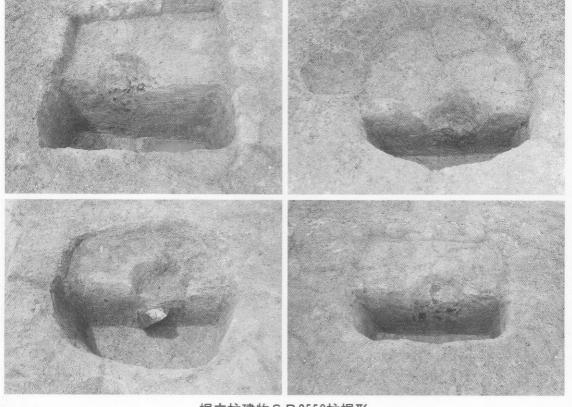
掘立柱建物SB2565(南から)



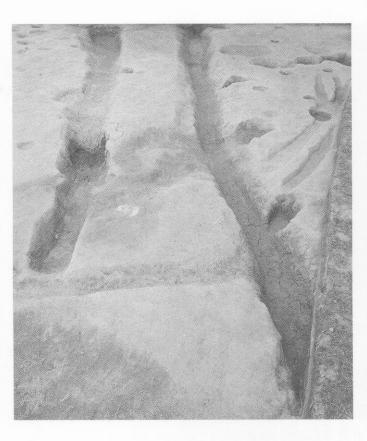
掘立柱建物SB2575(東から)



掘立柱建物SB2580・2585・2590(東から)



掘立柱建物SB2550柱掘形



(上)溝SD2581・2582(東から) (下)井戸SE2551(西から)





井戸SE2552(南から)



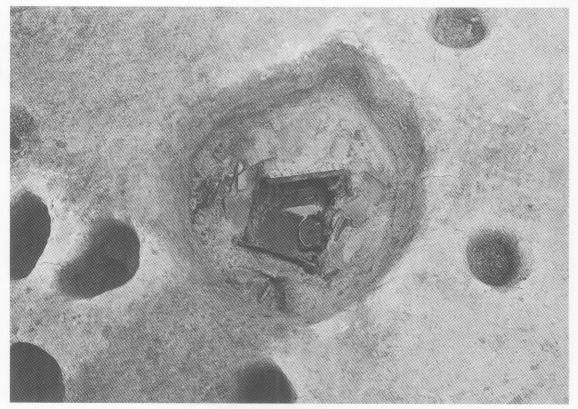
井戸SE2553(東から)



井戸SE2554(南から)



井戸SE2556(東から)



井戸SE2557(東から)



井戸SE2558(南から)

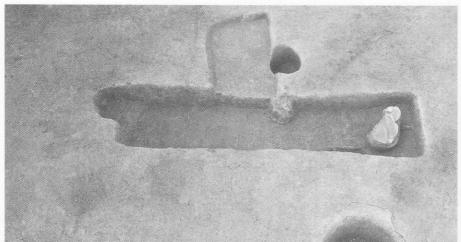


井戸SE2561(南から)

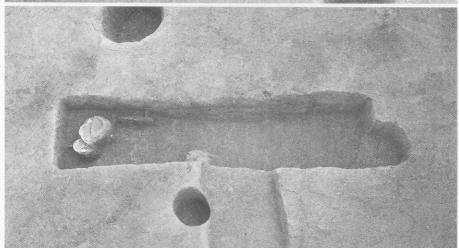


井戸SE2563(東から)

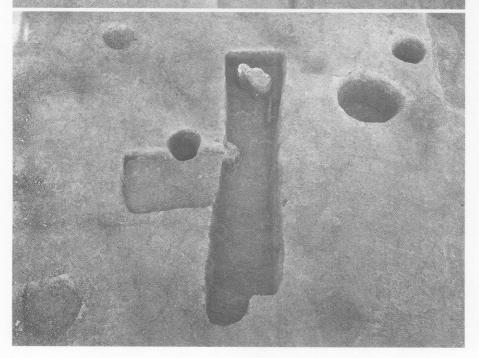
図版26



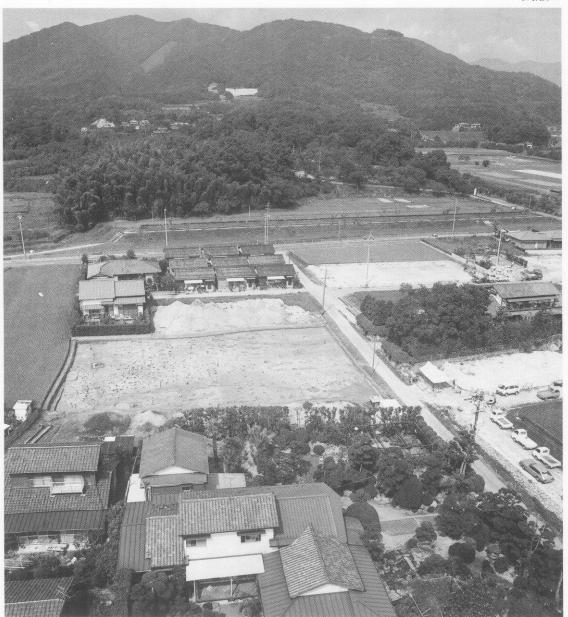
木棺墓S×2600 (南から)



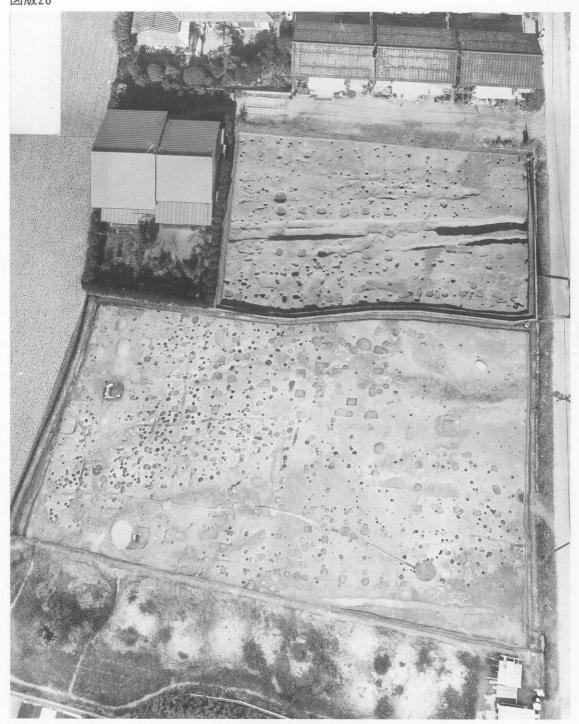
同(北から)



同(西から)



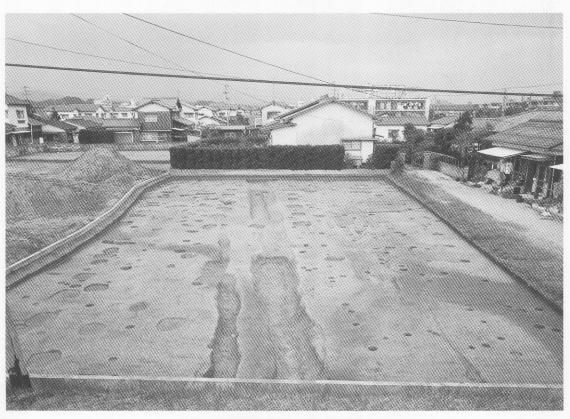
第92次調査区と大宰府政庁(空中写真)



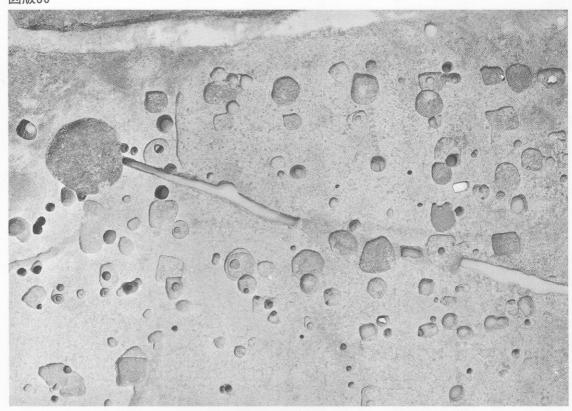
第92次調査区全景(空中写真)



第92次調査区南半部全景(東から)



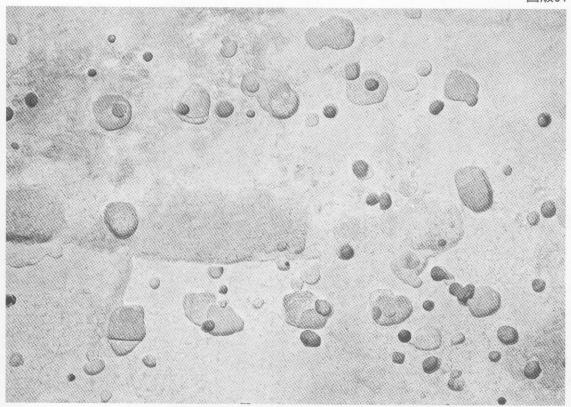
第92次調査区北半部全景(東から)



掘立柱建物SB2620·土壙SK2641·溝SD2627(空中写真)



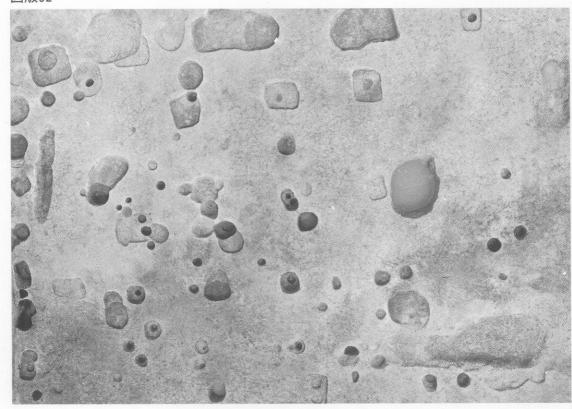
掘立柱建物SB2620(北から)



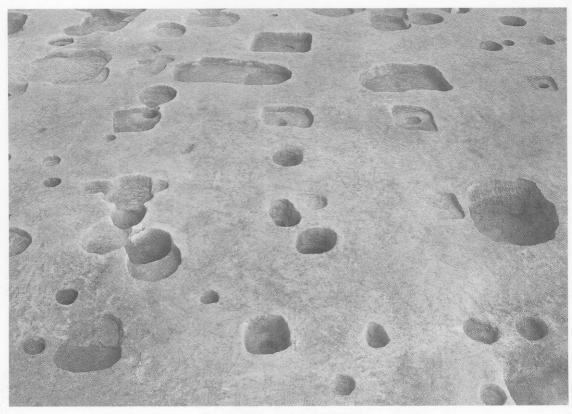
掘立柱建物SB2625(空中写真)



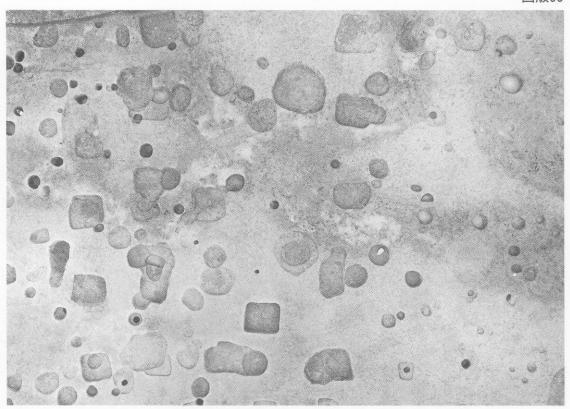
掘立柱建物SB2625(南から)



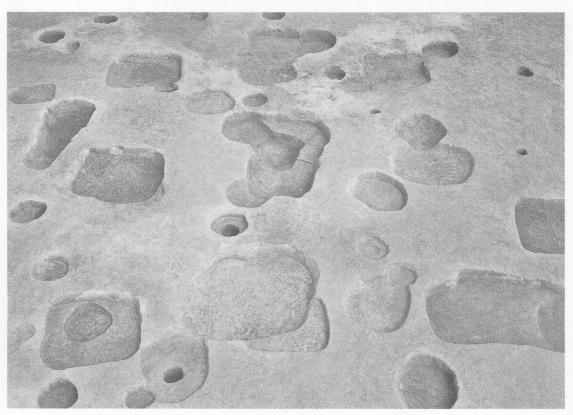
掘立柱建物SB2630(空中写真)



掘立柱建物SB2630(南から)



掘立柱建物 S B 2635 · 2640(空中写真)



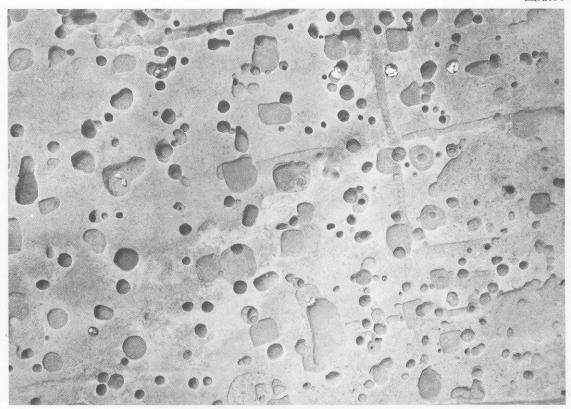
掘立柱建物SB2535(南から)



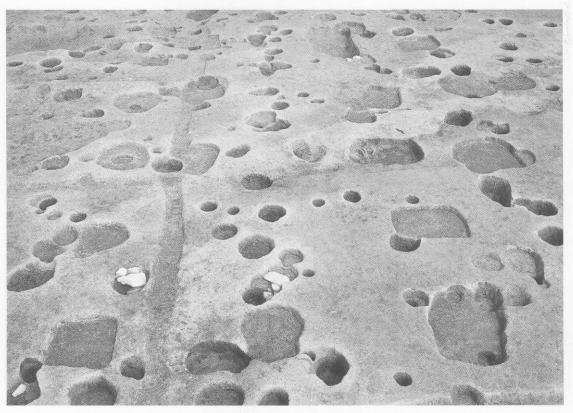
掘立柱建物SB2645(東から)



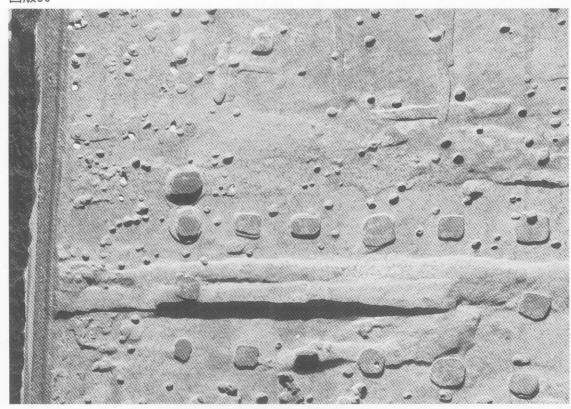
掘立柱建物SB2650(東から)



掘立柱建物SB2655(空中写真)



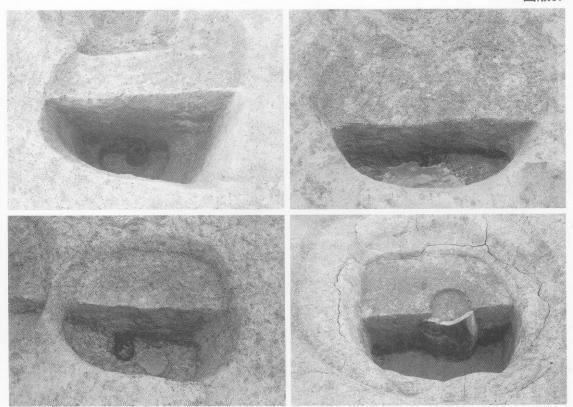
掘立柱建物SB2655(南から)



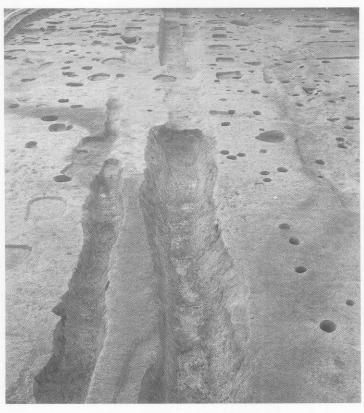
掘立柱建物 S B 2660 · 2665(空中写真)



掘立柱建物SB2660(東から)



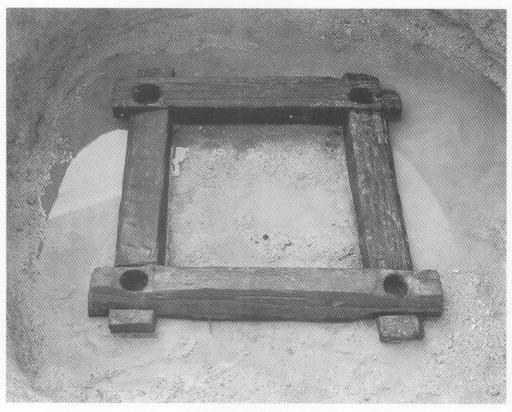
掘立柱建物 S B 2620 · 2660柱掘形



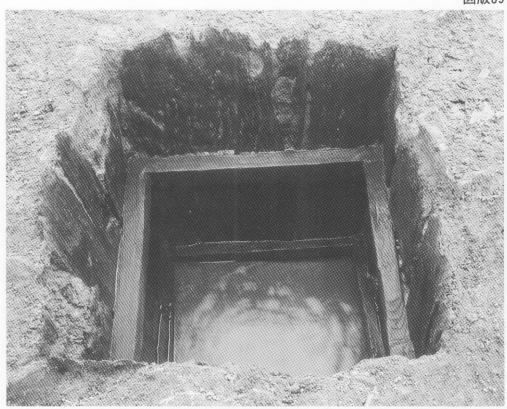
溝SD2350・2632(東から)



井戸SE2621(東から)



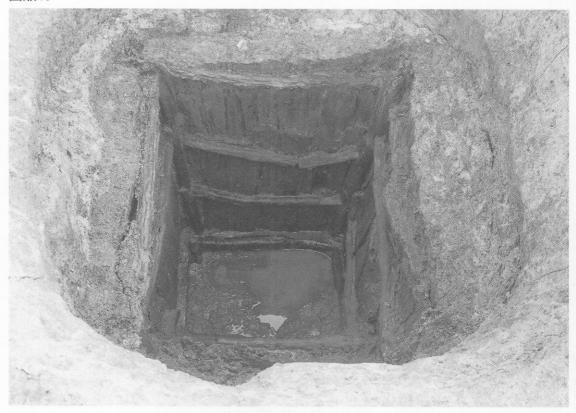
井戸SE2621(東から)



井戸SE2622(東から)



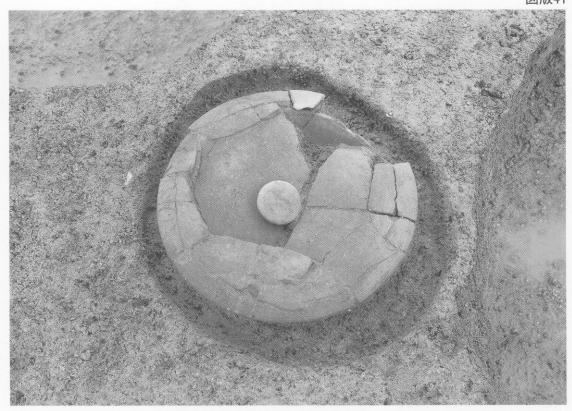
井戸SE2623(東から)



井戸SE2624(西から)



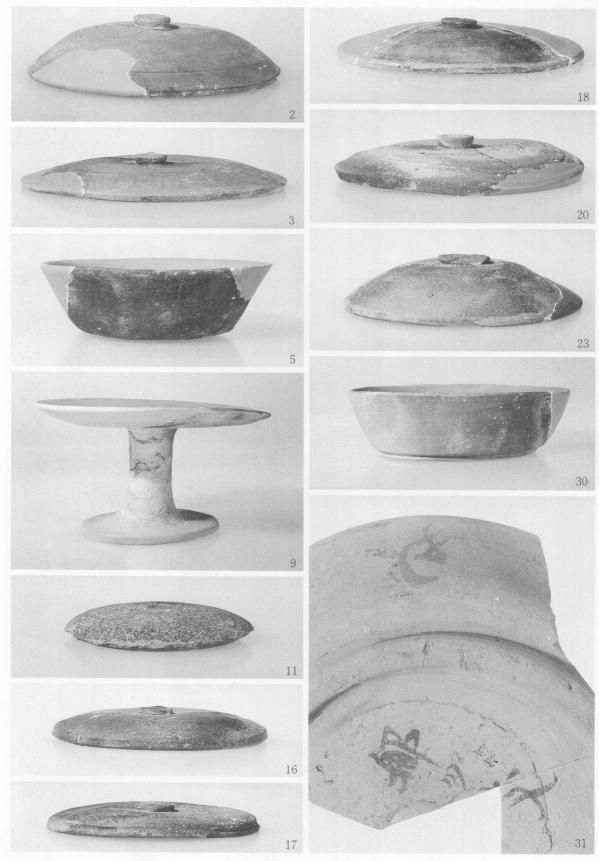
土壙SK2641(東から)



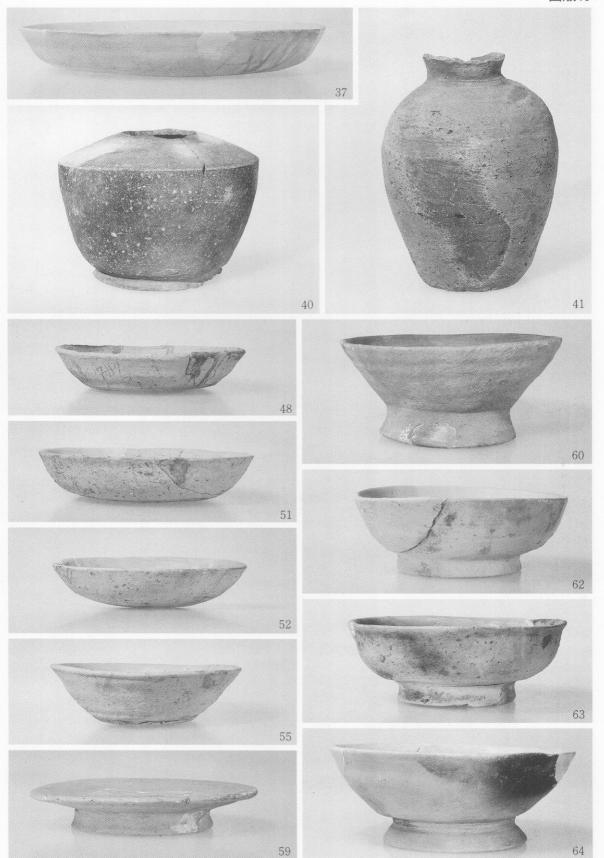
地鎮遺構SX2670(東から)



地鎮遺構 S X 2670蓋除去後(東から)



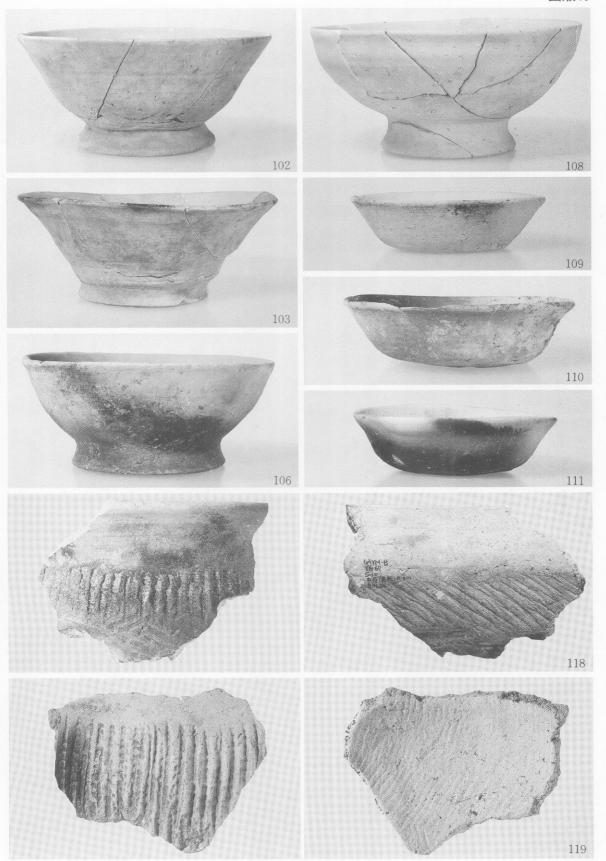
第14次調査 SD320出土土器



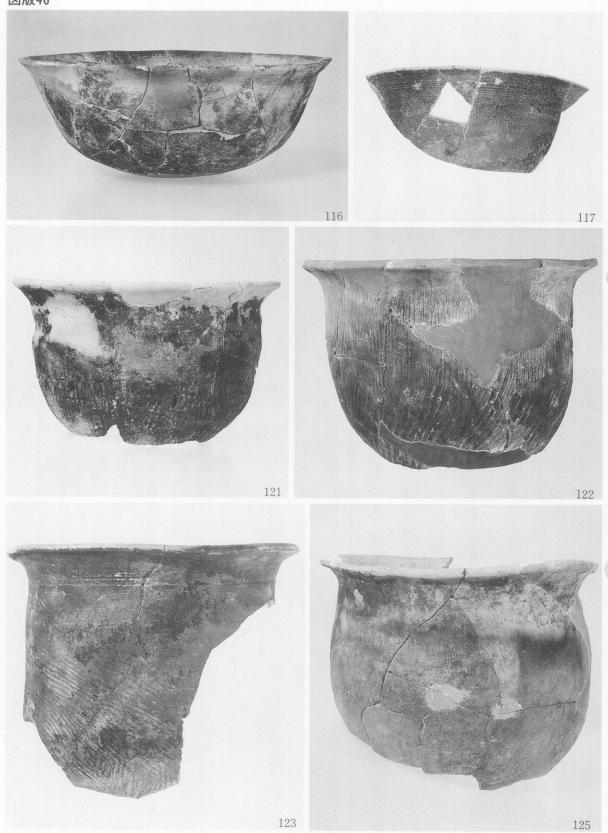
第14次調査 SD320出土土器



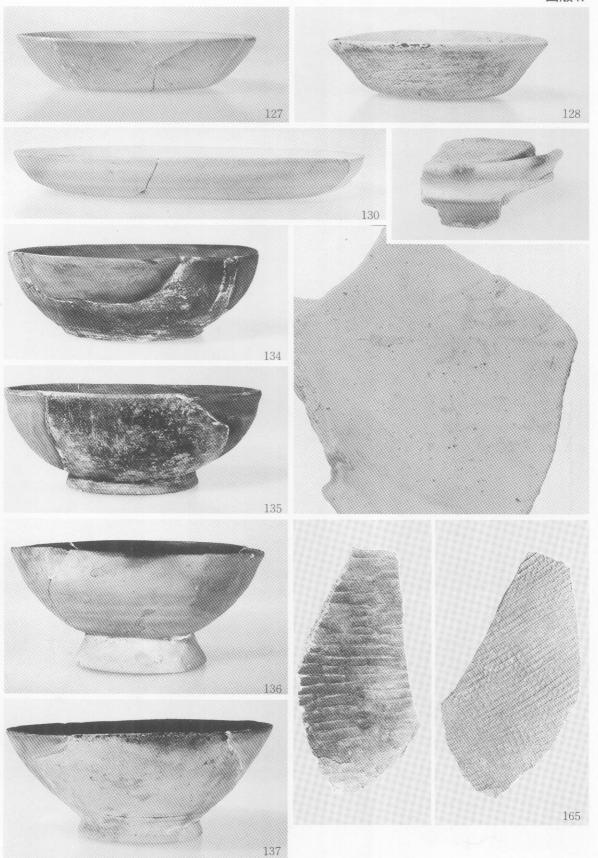
第14次調查 SD320出土土器



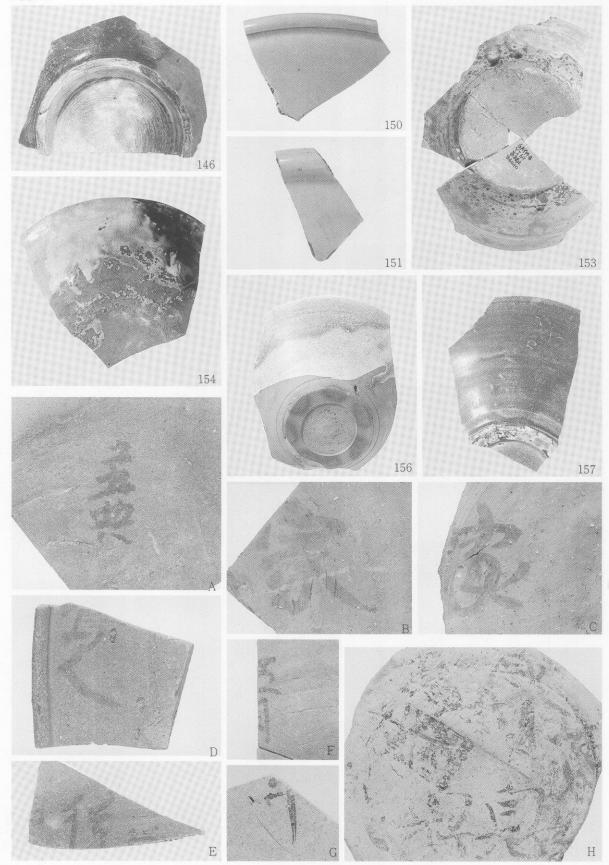
第14次調査 SD320出土土器



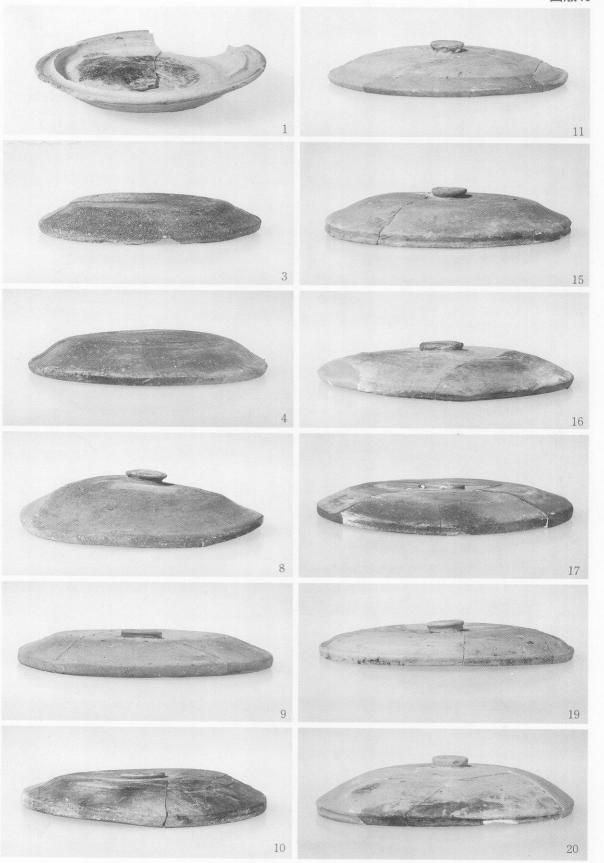
第14次調査 SD320出土土器



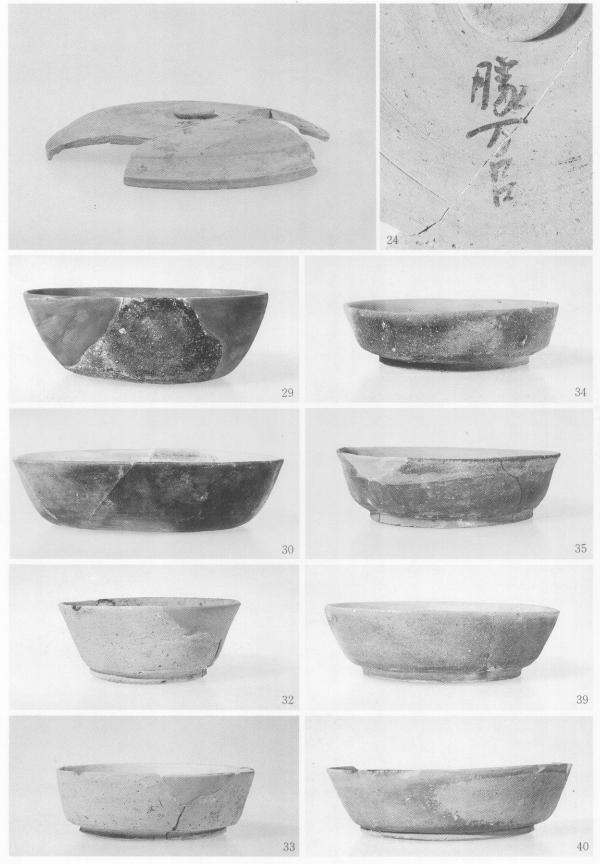
第14次調查 SD320出土土器・硯



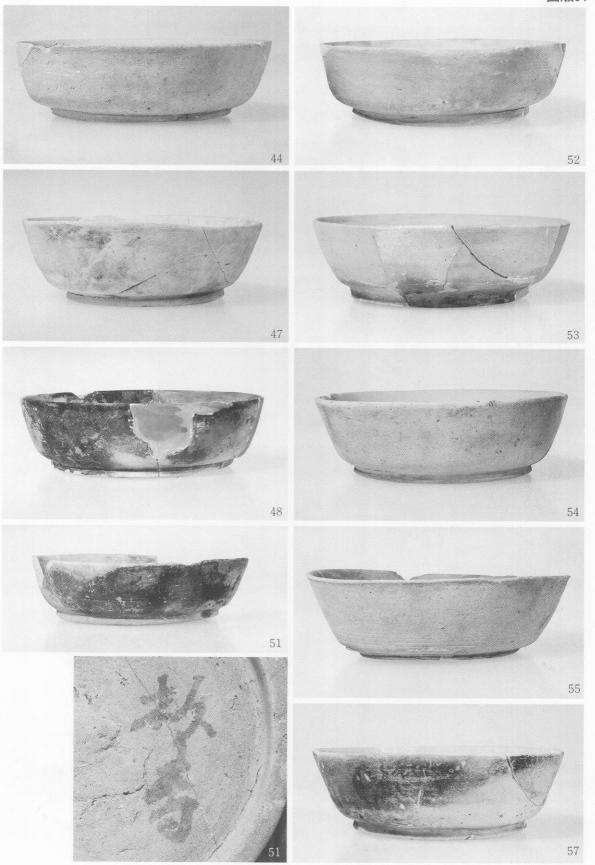
第14次調查 SD320出土陶磁器·墨書土器



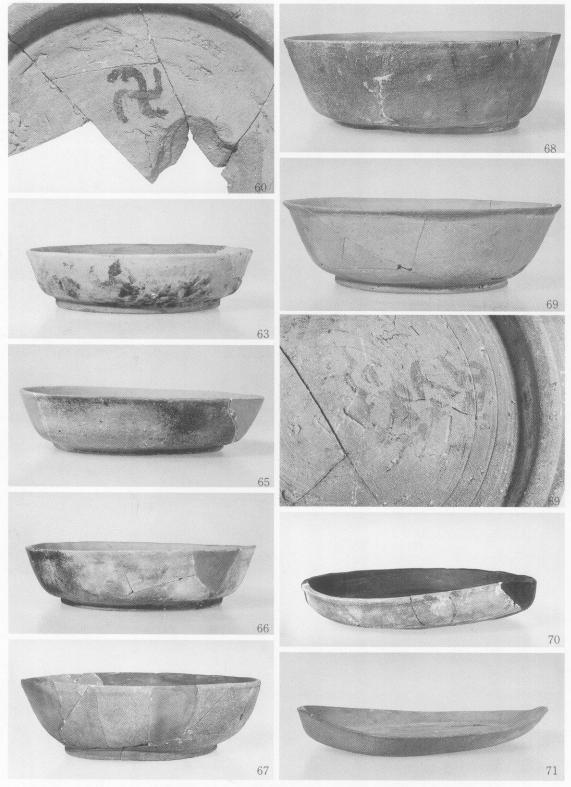
第87·90次調查 S D 2340出土土器



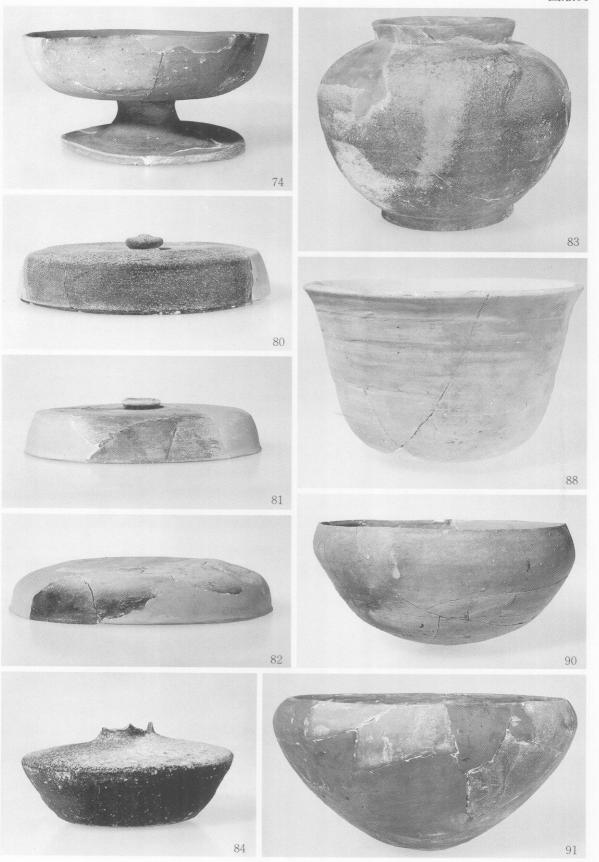
第87 · 90次調査 S D 2340出土土器



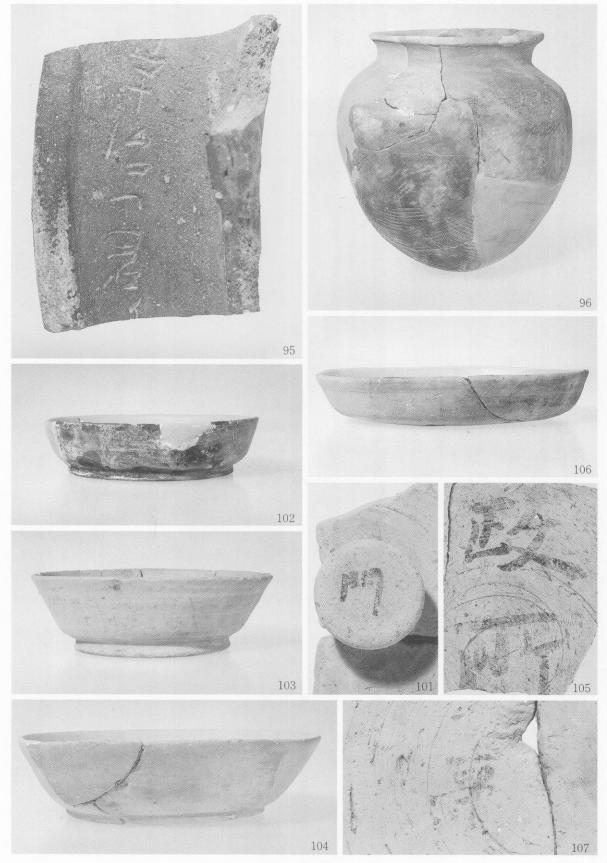
第87·90次調査 S D 2340出土土器



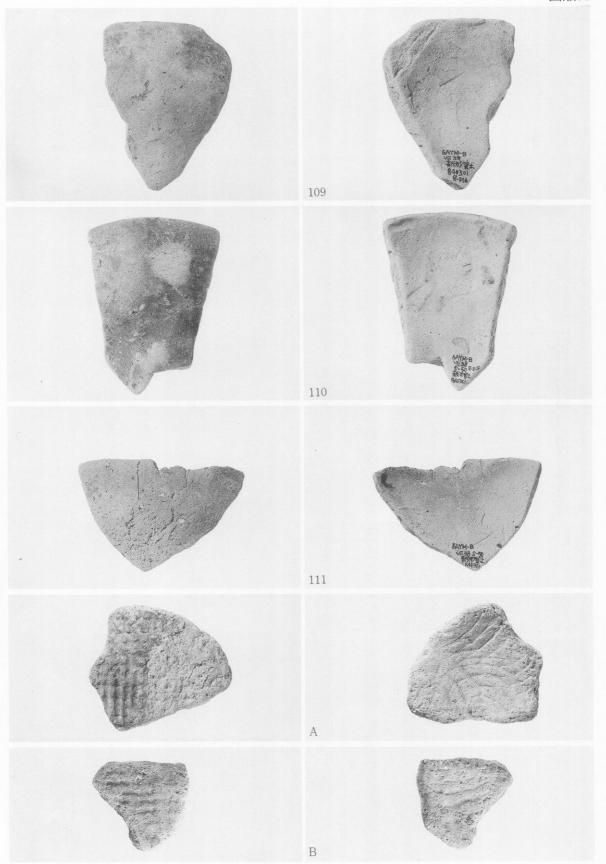
第87·90次調查 S D 2340出土土器



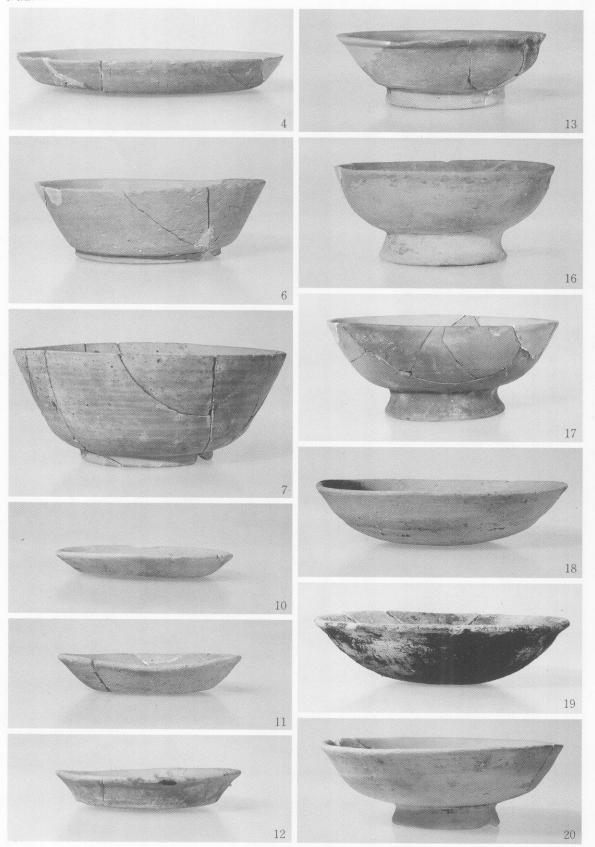
第87·90次調查 SD2340出土土器



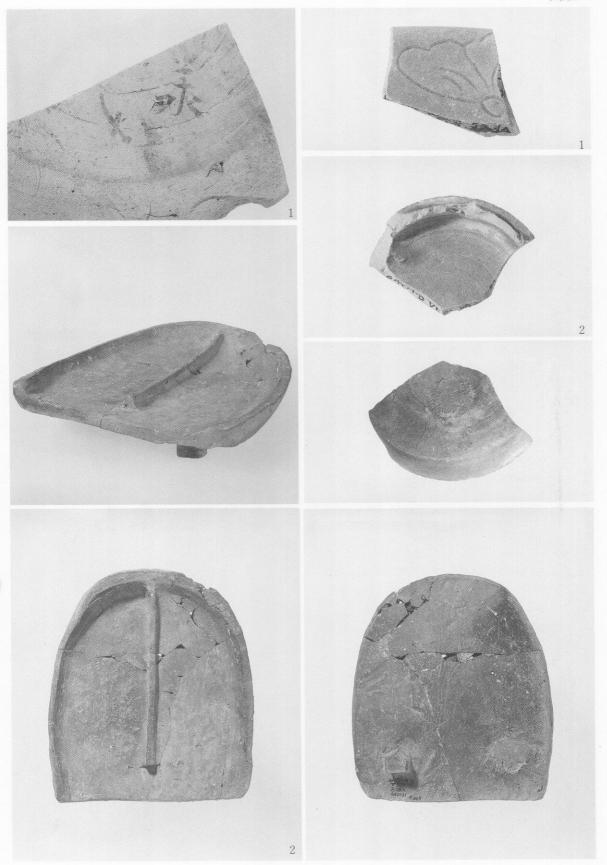
第87·90次調查 S D 2340出土土器



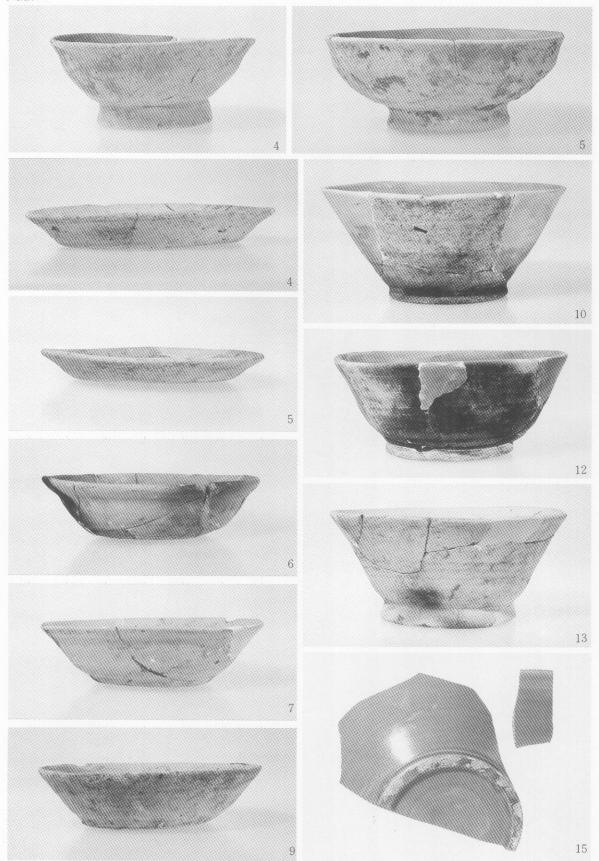
第87·90次調查 S D 2340出土土器



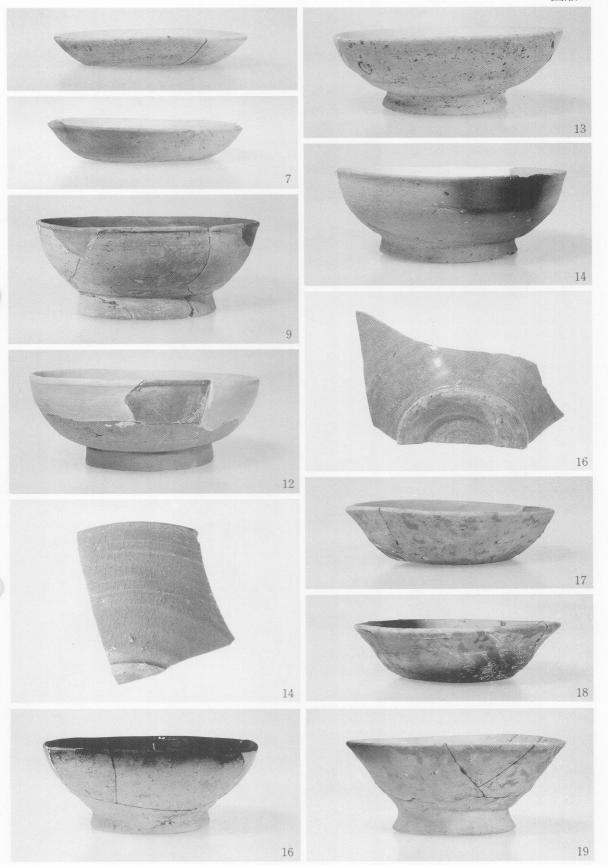
第87 · 90次調査 SD2335 · SE2510 · SK2524 · 出土土器



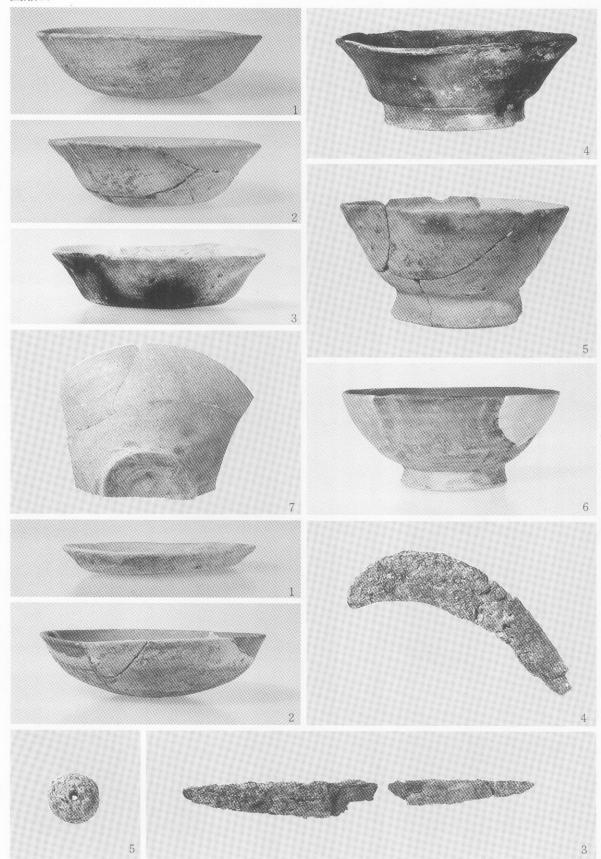
第87·90次調査 S X 2514·2529·2532·茶褐色土層出土土器陶磁器·硯



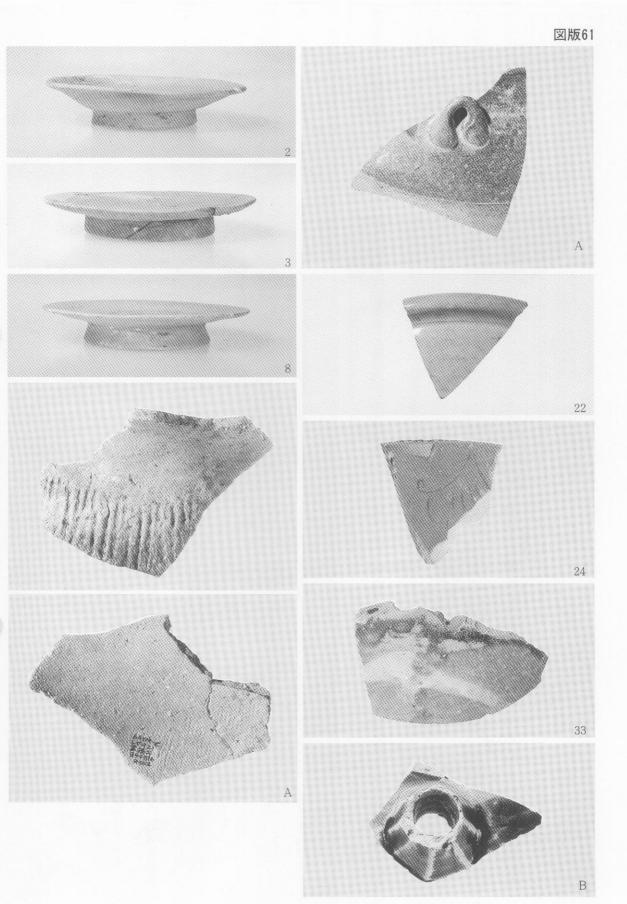
第88次調査 SB2555 · SE2551出土土器 · 陶磁器



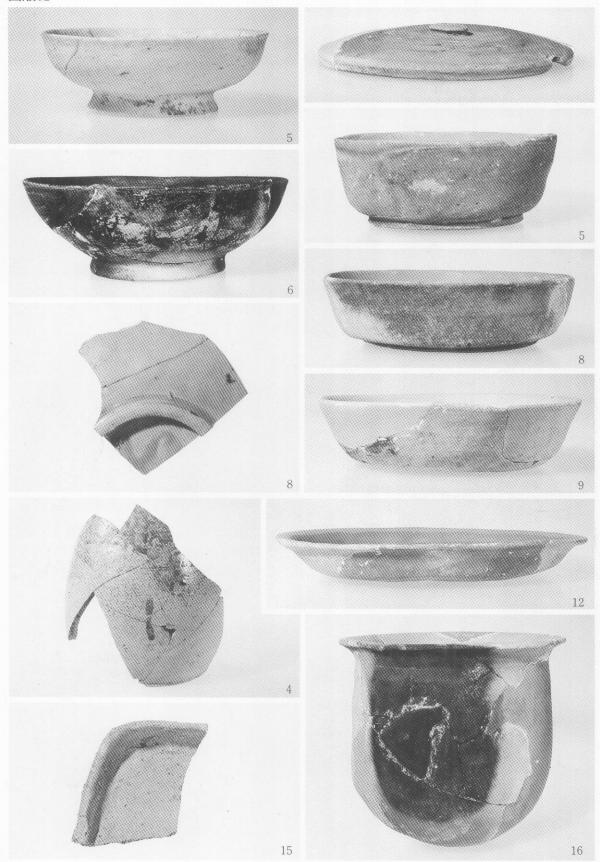
第88次調査 S E 2554 · 2556 · 2558 · 2559出土土器 · 陶磁器



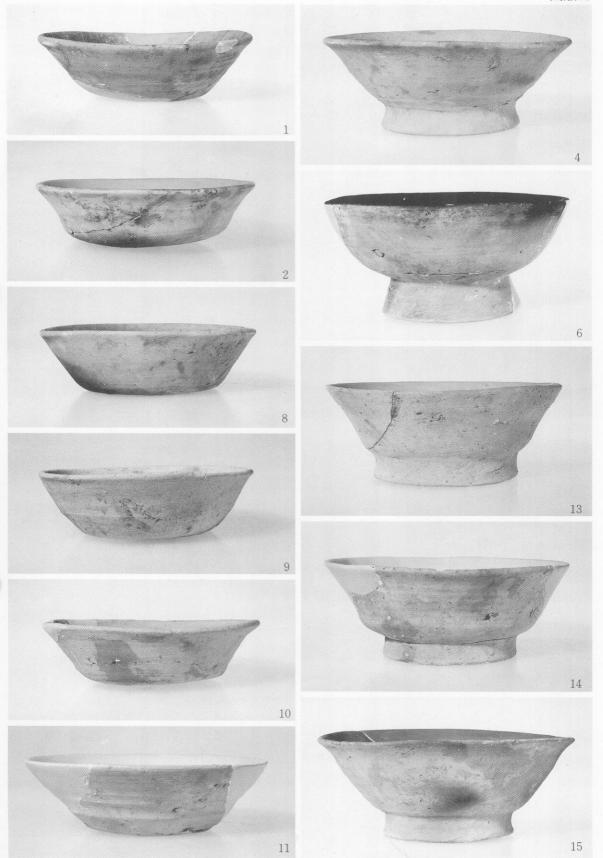
第88次調査 SE2561・SX2600出土土器・陶磁器・金属器



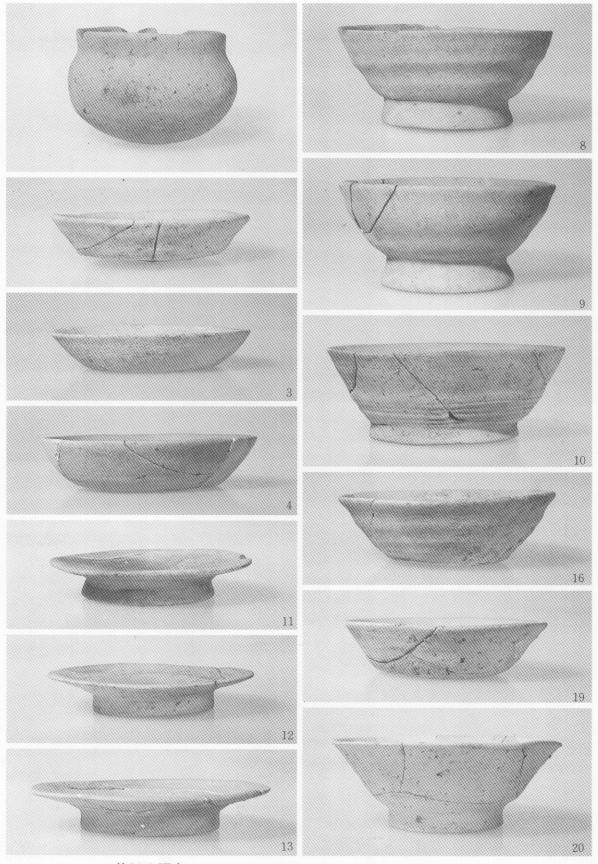
第88次調査 SK2602・2603・黒褐色土層出土土器・陶磁器



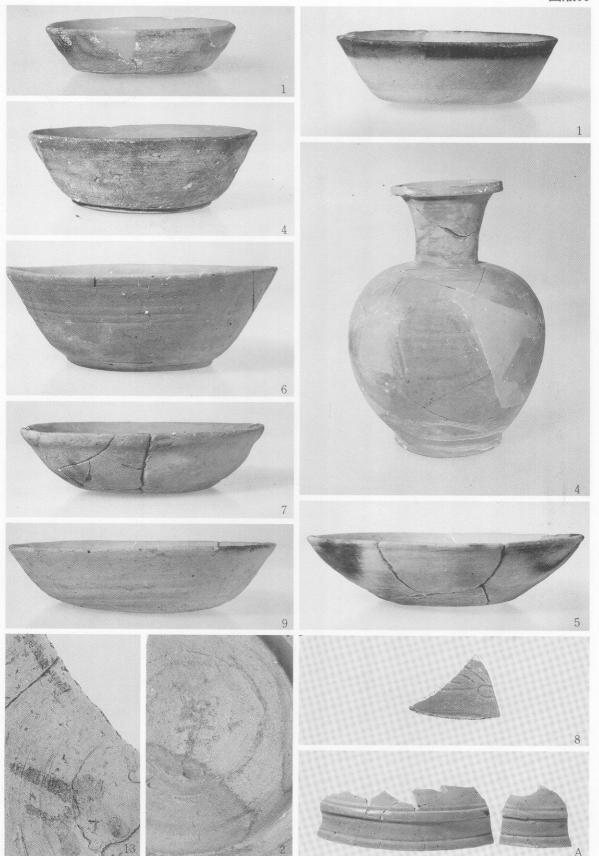
第92次調査 SD2350A・B、SE2621出土土器・陶磁器



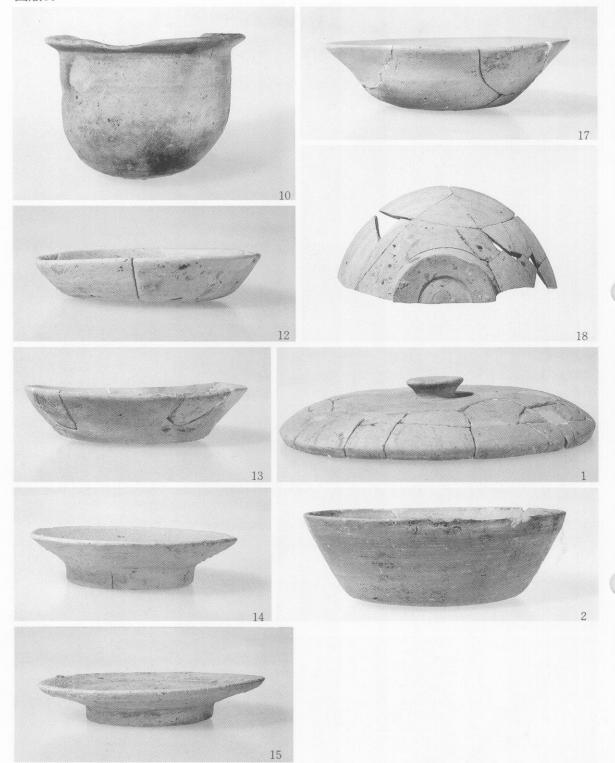
第92次調査 S E 2622 · 2624出土土器



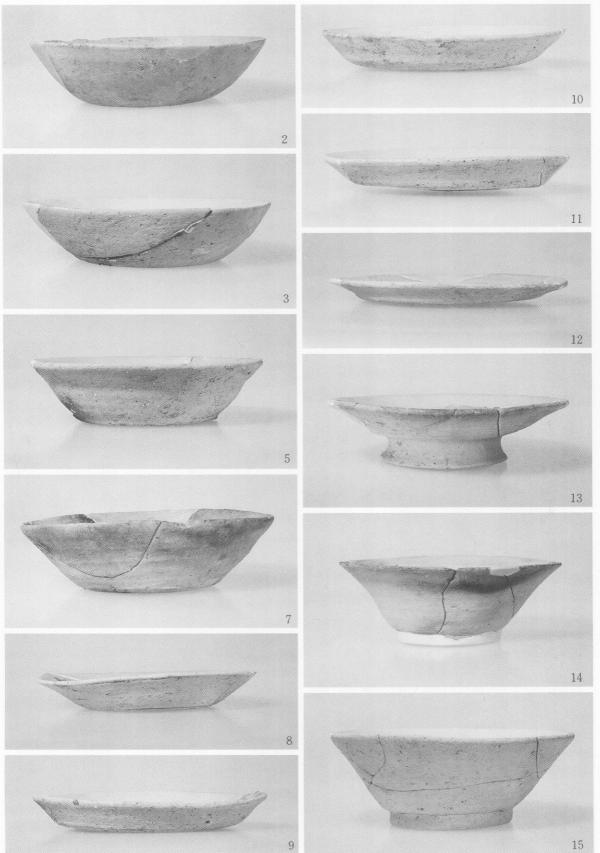
第92次調査 SK2641・2642・2643・2644・2646出土土器



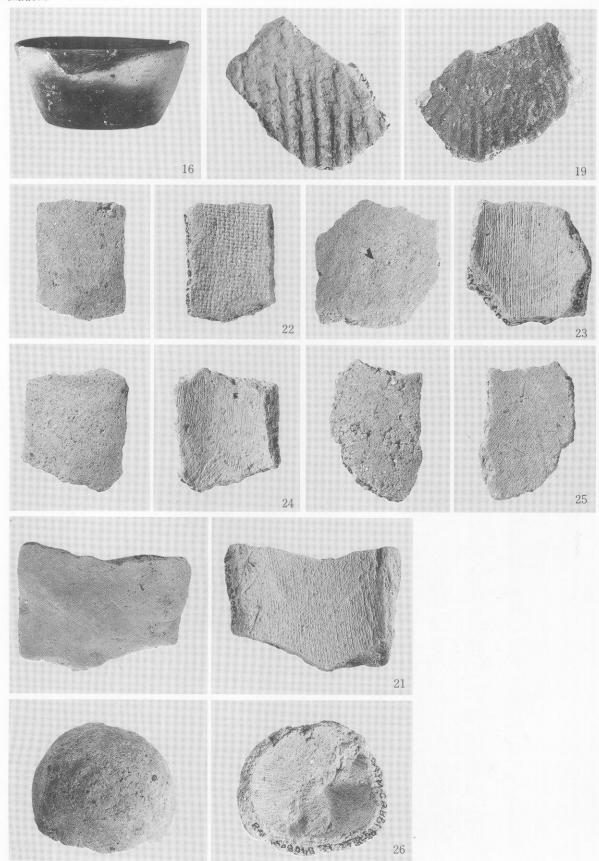
第92次調査 S K 2649 · 2652出土土器 · 陶磁器



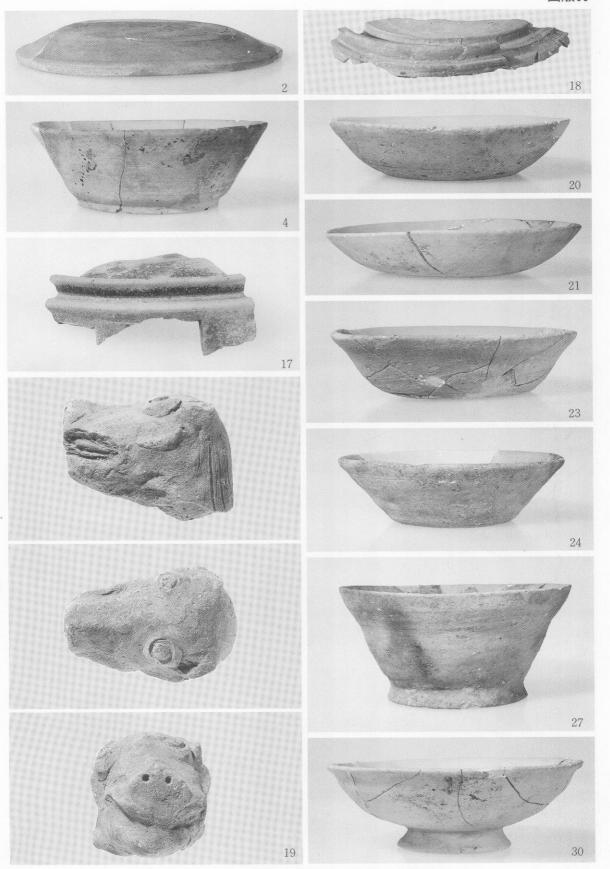
第92次調査 SK2656・2664、SX2678・2684・2670出土土器



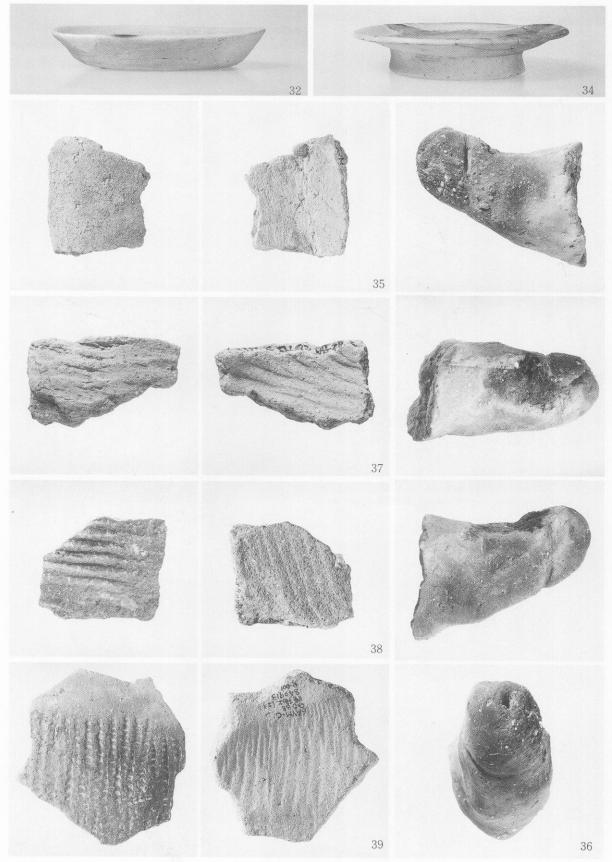
第92次調査 S X 2690出土土器



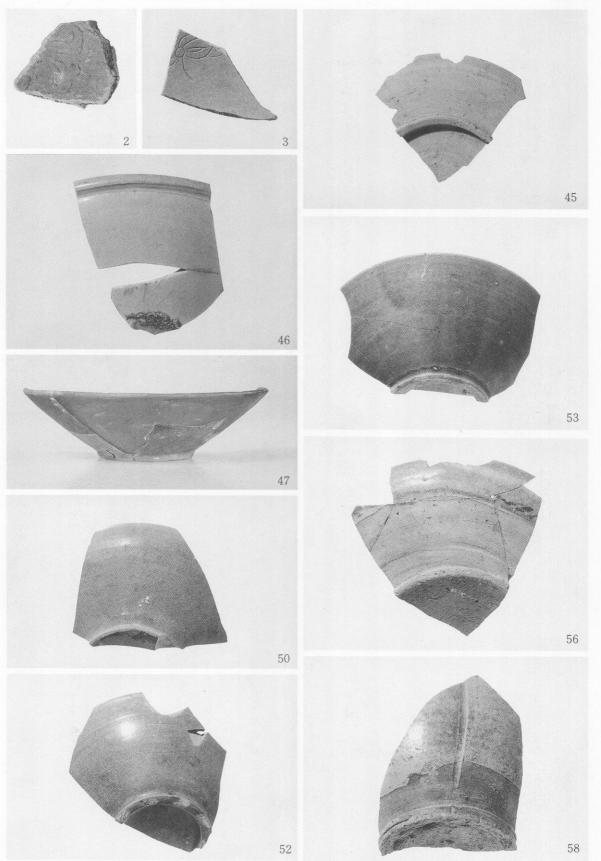
第92次調査 S X 2690出土土器



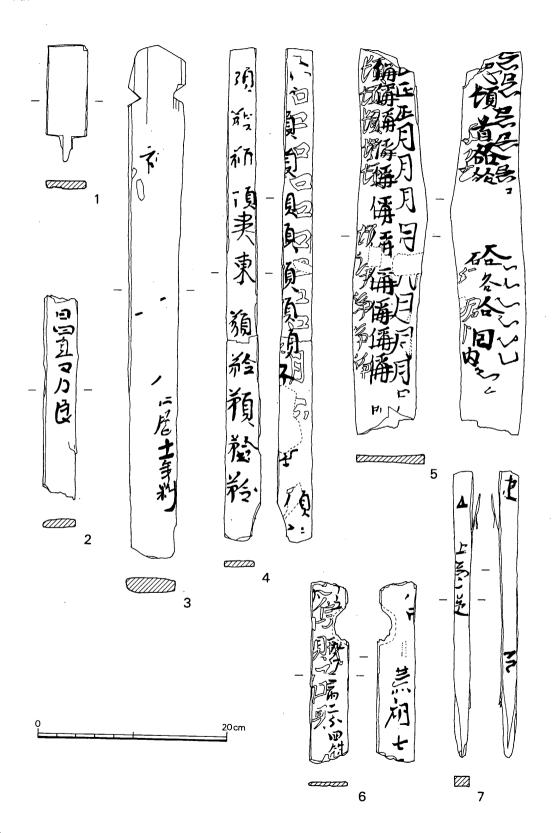
第92次調査 暗褐色土層出土土器・土製品



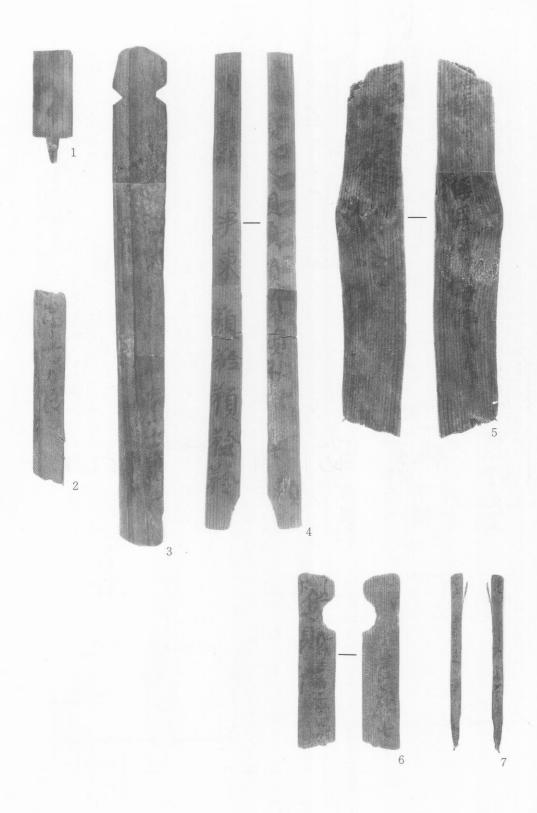
第92次調查 暗褐色土層出土土器



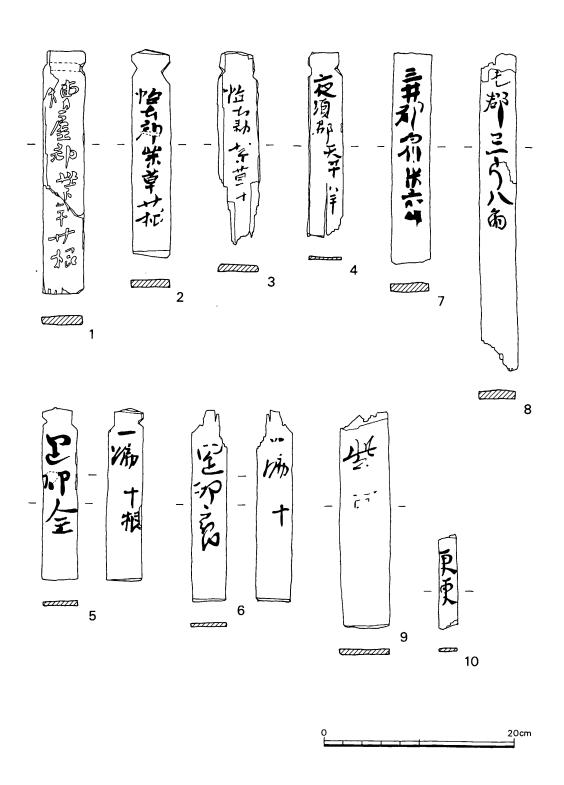
第92次調查 暗褐色土層出土陶磁器



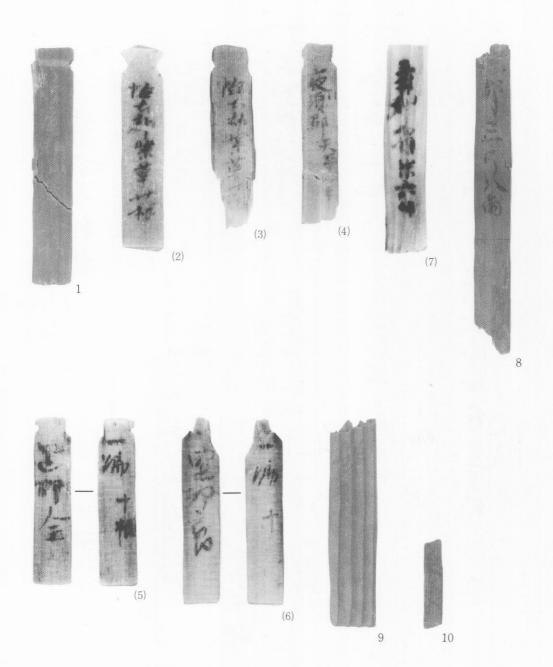
第14次調査 SD320出土木簡実測図



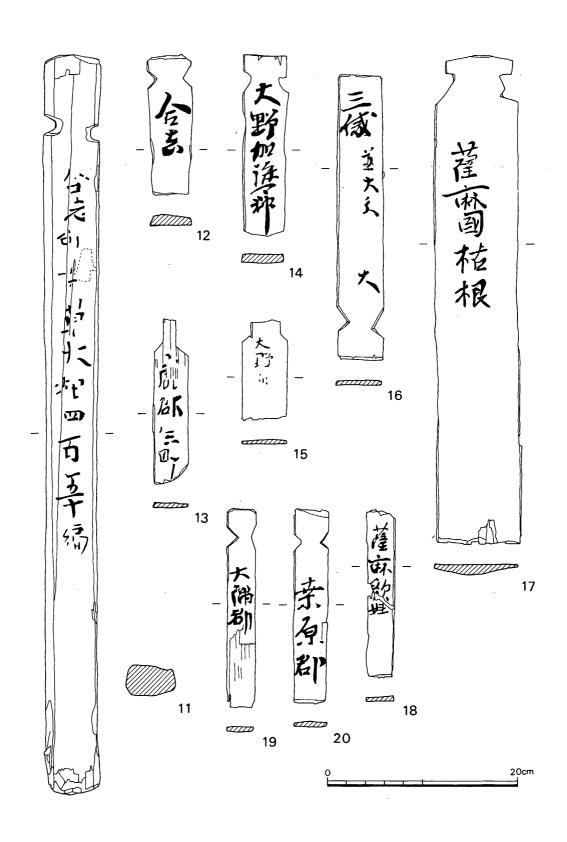
第14次調査 S D 320 出土木簡



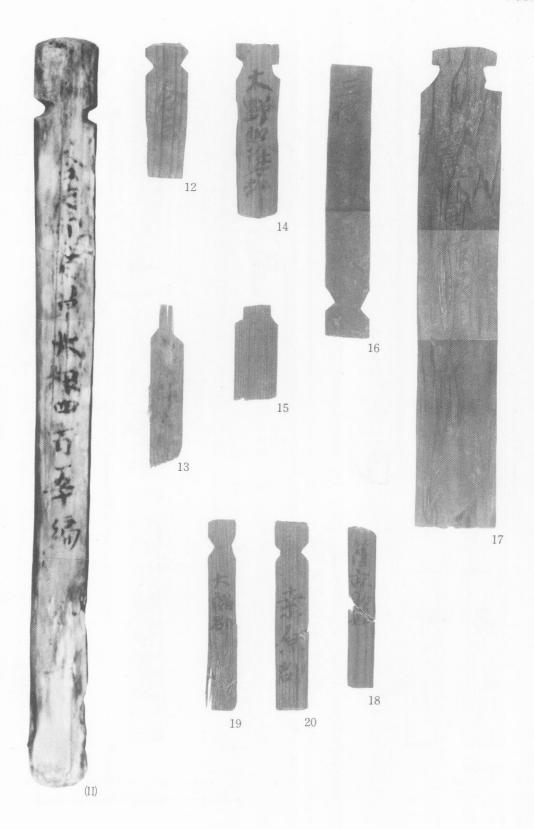
第87次調査 S D 2340出土木簡実測図



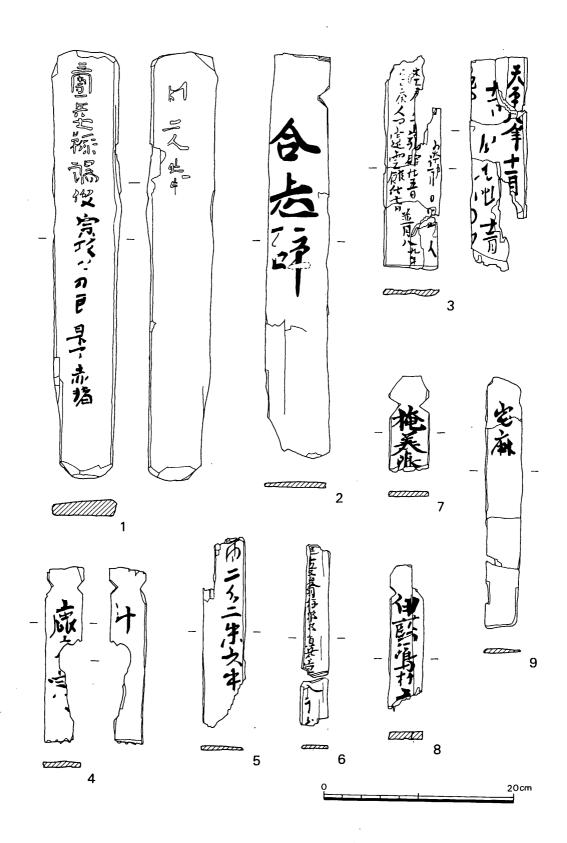
第87次調査 S D 2340出土木簡



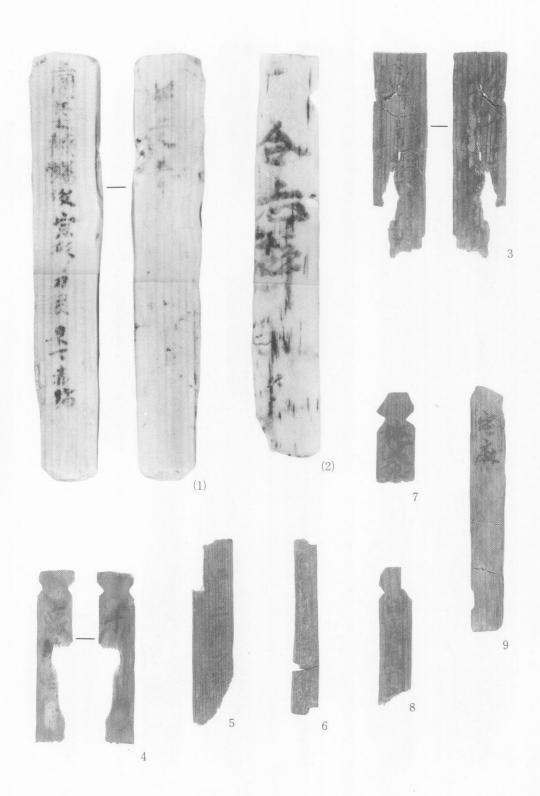
第87次調査 S D 2340出土木簡実測図



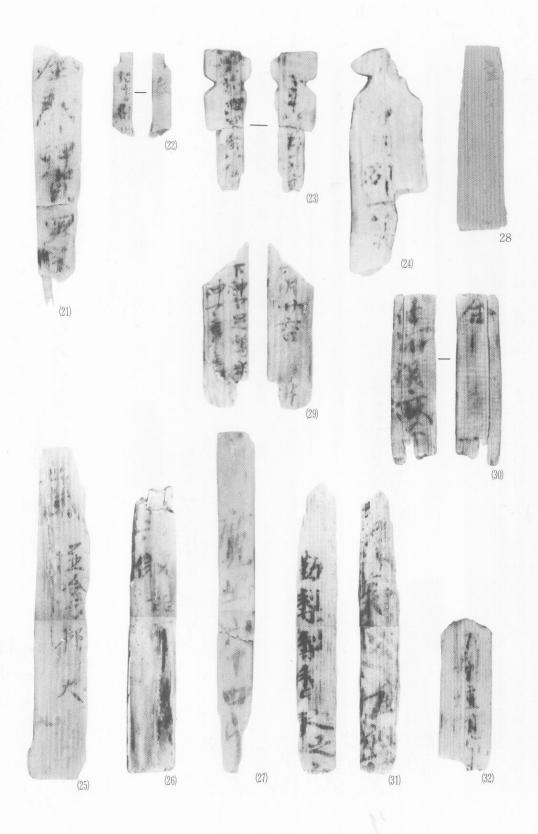
第87次調査 S D 2340 出土木簡



第90次調査 S D 2340出土木簡実測図



第90次調査 S D 2340出土木簡



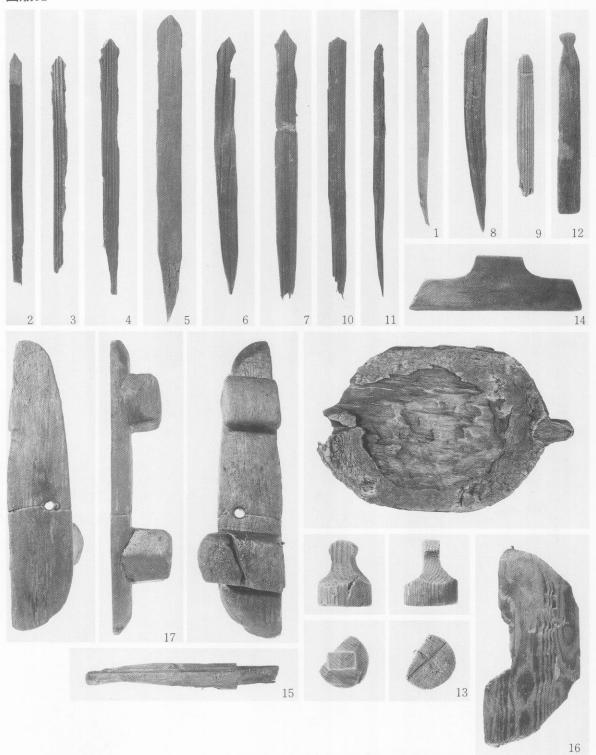
第87次調查 S D 2340出土木簡

第90次調査 S D 2340出土木簡

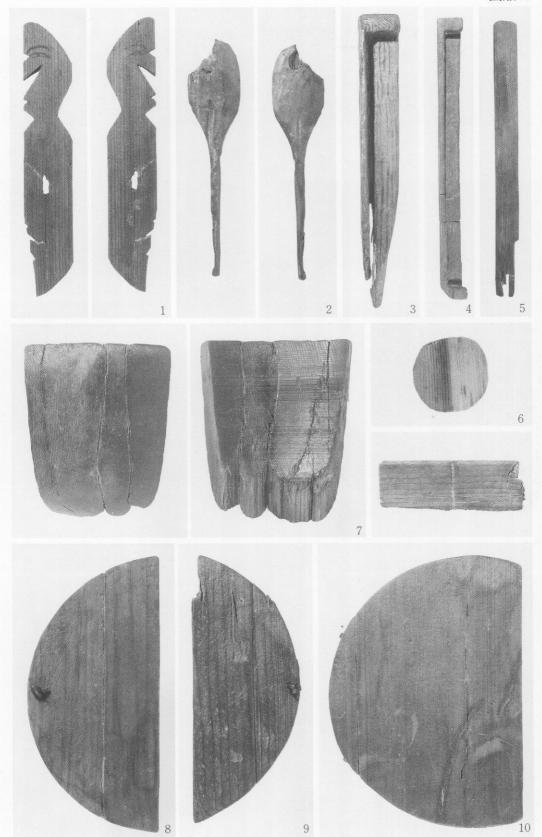
17

(21)

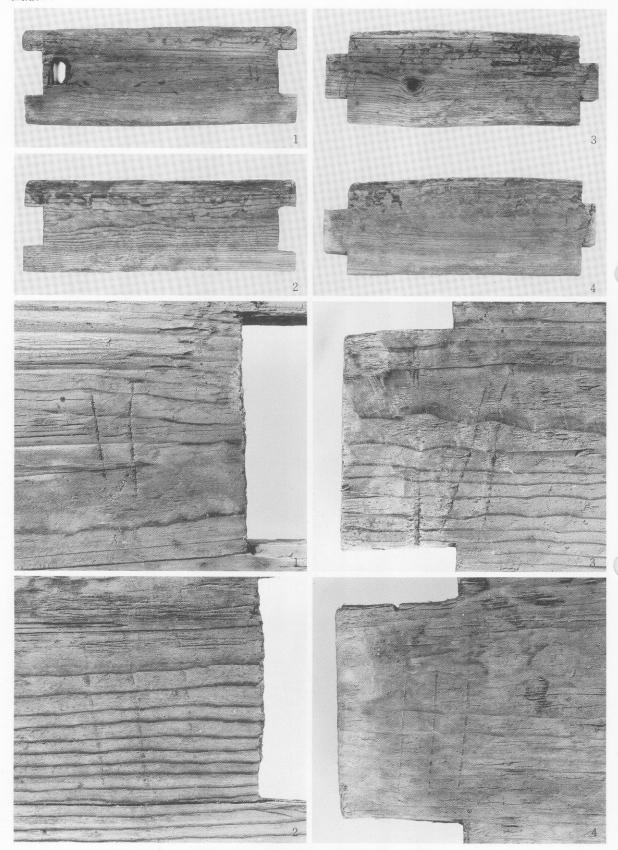
15



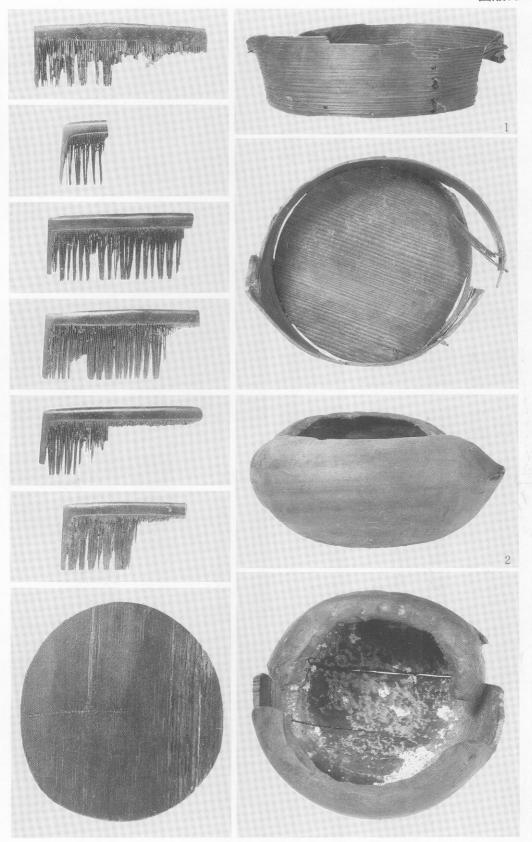
第14次調査 SD320出土木製品



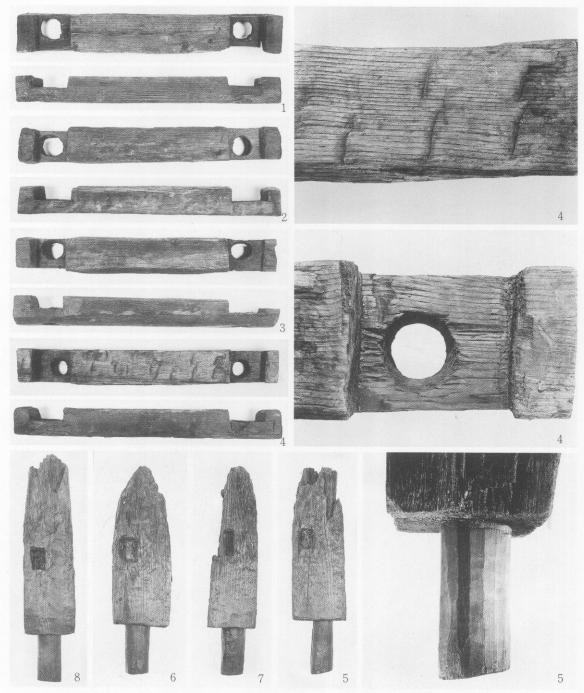
第87·90次調査 S D 2340出土木製品



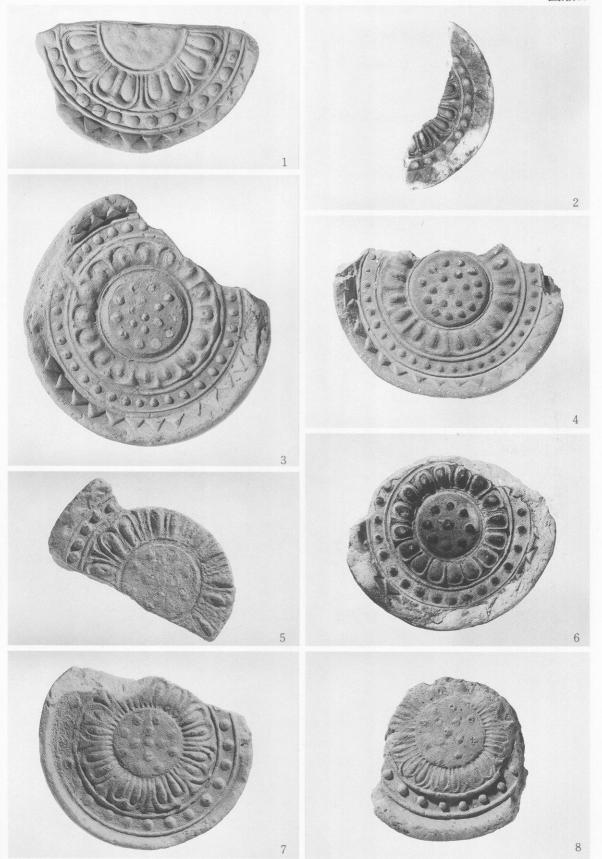
第87・90次調査 S E 2510井戸側



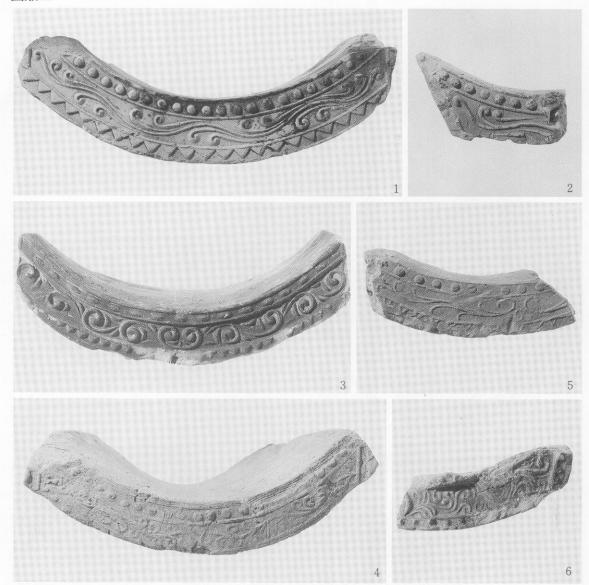
第88次調査 SE2557・2561、第92次調査SE2622・SK2649出土木製品



第92次調査 S E 2621井戸側



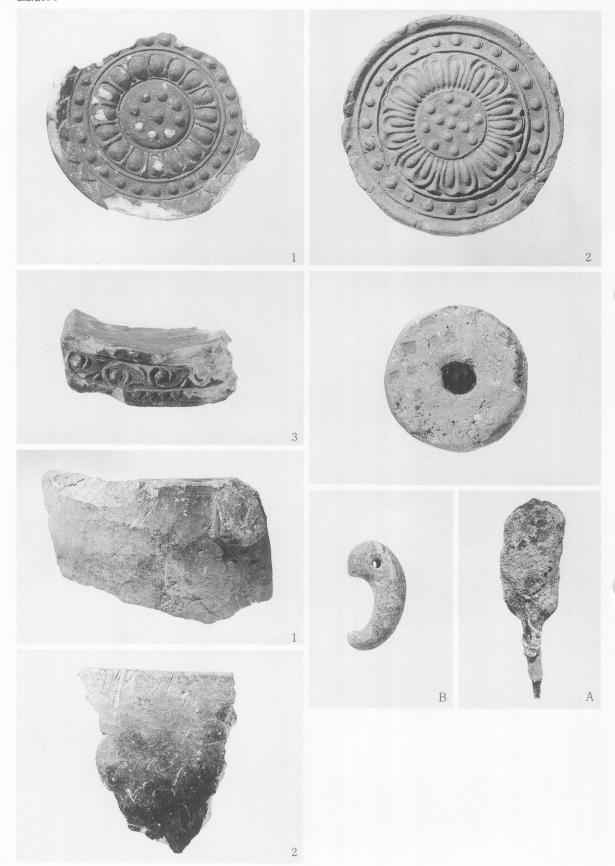
第14次調查 SD320出土軒丸瓦



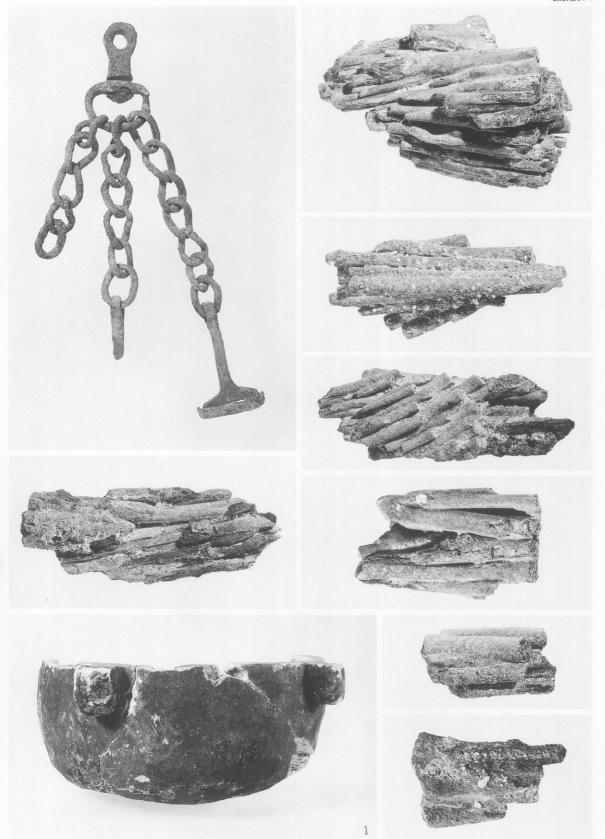
第14次調查 SD320出土軒平瓦



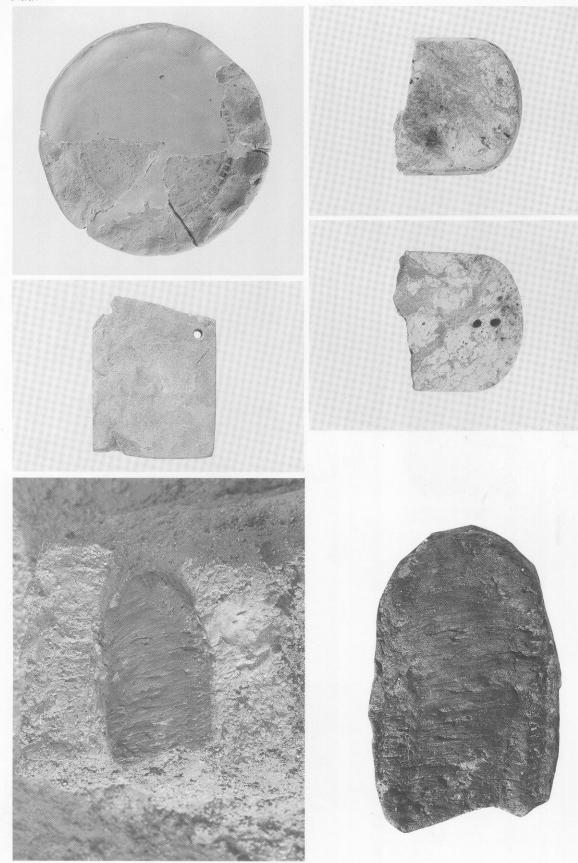
第87·90次調査 S D 2340·S E 2510·茶褐色土層出土軒先瓦



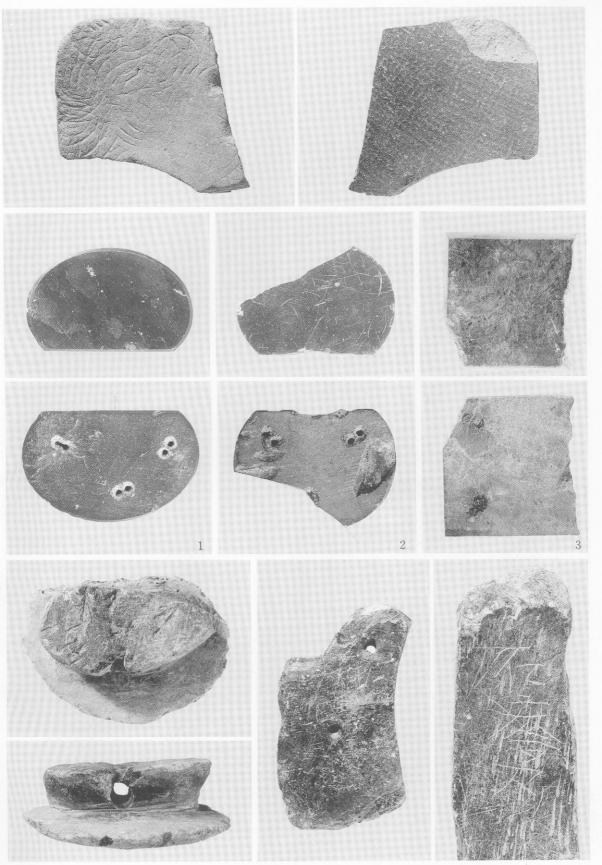
第92次調査 出土軒先瓦・石製品・鉄鏃



第14次調査 SD320·SE2503出土鉄製品·石製品



第87・90次調査 SD2340・茶褐色土層出土土製品・石製品・草履



第88次調査 出土硯・石帯・石製品

## 大 宰府 史 跡

昭和59年度発掘調査概報

昭和60年3月

九州歷史資料館資料普及会太率府市大字太率府亨太縣左近1025 発 行

印刷 瞬報社写真印刷株式会社 福岡市中央区天神5丁目4番16号 城戸ビル